

よく分かんけど…とりあえず生きよ？

羊のような。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんやかんやあって不死になったりして色々あった主人公が遊びに来た所で色々巻き込まれて周りの疲労を増やしながら笑っていく思考回路のよく分からない主人公の話です（ざっくり説明）

## 目次

キャラぷろいーる、その他諸々 (NEW)	1
今更！一周年!!裏話く その1 (作者同士のコラボもあるよ)	7
今更だよ！一周年記念!!裏話く その2 (多分終わり)	13
茶番&番外	
レユニオンの休日 突撃馬鹿部隊と仮面の不思議	20
レユニオンの休日 (なお、休日ではない模様)	27
レユニオンの休日 (釣り) 2	33
クリスマスー…なんですかね… (前)	41
クリスマス…なんでした (後)	48
悲しいけどこれ、クリスマスなのよね!その1	56
D「男達の!」C「男達による!」D&C 「遊び!」S「うるせえよお前ら」	61
D「知ってたか?」C「知らないっすね」D&C 「スーさんは?」	
S「主語を入れるよ」2	68
D「実はだな…」C「全く関係ない事しかしてないけど…」D&C	
「実はバレンタインの話があったりするんだ」S「マジかよ」3	76
ドクター、現実逃避するってよ	84
ドクター、現実逃避してるってよ	90
ドクター、現実逃避してたってよ	96
ドクター達、森の主に会うってよ (おまけのような何か)	102
ドクター達、森の主人にあってるってよ	108

熊の娘見ていた…ファイ!!

114

熊の娘見ていた…ラウンド2! K. O!!

120

シエーヴルの逃走く探さないでください

126

イベント系

ウルサスの子供たちつてめつちや書きにく、メタい? ごめんなさい

ウルサスの… (2)

ウルサスの… 3

137

ウルサスの子供たち? 4

144

「青い海! 照りつける太陽! あゝちゝいゝ!」なら脱げよ! ※夏イ

151

ベントです

166

「青い海! …照り焼きチキン」 「腹減ったんだな?」 ※夏イベ2

157

ベ3

「青い海! 青い空!、やっぱり海はいいねえ…」 「そうだな」 ※夏イ

帰還! 密林の長! + a

173

「かなりの異物混ざってるが大丈夫か

?」 C 「異物って私の事?」

181

帰還! 密林の長! + a 2 D 「そろそろタイトルの在庫ないな…」 C

「元からないよ」

188

帰還! 密林の長! + a 3 C 「私無事にロドスに帰れたら…」 D 「フ

ラグ立ったな」

196

カジミエーシュ観光のすゝめ 1 ページ目

204

本編

1 話

210

2 話

213

2 7 話	2 6 話	2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話 (?)	1 6 話	1 5 話	1 4 話	1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話
355	349	342	336	328	321	314	308	302	295	289	283	277	273	268	263	256	249	243	237	232	227	222	218	215

4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話
447	440	432	426	420	414	408	401	395	388	382	375	367	361

キャラぶろいーる、その他諸々（NEW）

「何故に今なの？」

キャラ増えたからじゃないかな  
「なるほど？」

【コードネーム】 シェーヴル

【性別】 男性

【戦闘経験】 なし（自己申告）

【出身地】 極東（自己申告）

【誕生日】 いつー？ 「多分9月16日です」ありがとー

【種族】 今の所不明

【身長】 167cm

【鉱石病感染状況】

感染者に認定（自己申告の為変更の可能性あり）

【個人履歴】

年齢不明、というかなんもかんも不明書くことがないんだよこの人  
いやちゃんと書いて下さい 上司より

ちよつと不死身で仮面付けて全身隙間なく服キツチリ着てるぐら  
いですかね？

あ、お茶こぼ（この先は滲んで見えない）

【コードネーム】 アネモス

【性別】 女性

【戦闘経験】 7年

【出身地】 カジミエーシュ

【誕生日】 4月6日

【種族】 クラント

【身長】 189cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果 感染者に認定

【個人履歴】

カジミエーシュ出身の剣とか槍より蹴りが得意の克蘭タの女の子

15歳まで騎士団いたけど周りの見る目やらが気に食わず、自分がいる場所ここじゃないなーと思つてたら感染者に、意気揚々と自分の主人探しに外へ何年か経ち、とある場所にて「あ、こっち」と思つて壁ぶつ壊したら目的地が居た。

【コードネーム】 グーニーズ

【性別】 男性

【戦闘経験】 15年

【出身地】 ボリバル

【誕生日】 7月3日

【種族】 ペッロー

【身長】 170cm

【鉱石病感染状況】

メデイカルチェックの結果、感染者に認定

【個人履歴】

レユニオンのCを隊長とする部隊の副隊長、ボリバル元軍人、色々ありそこを退職その後感染者になり成り行きでレユニオンに所属強い人がいて、それで戦えたらいいあまり全力で戦ってくれる人か居なかつたが部隊で色々満足した、最近は干し肉が旨い

【コードネーム】 マジャレ

【性別】 女性

【戦闘経験】 4年

【出身地】 リターニア王国

【誕生日】 1月8日

【種族】 キャプリニー

【身長】 160cm

【鉱石病感染状況】



略 感染者に認定

【個人履歴】

周りから色々言われ出身地を出てきた、最初は恨みを持っていたが、ご飯食べれたらなんでもいいやと落ち着いたそれでいいのかあった、飯があればもうなにがどうなってもいいやと即答できるやべー奴(失礼)

【コードネーム】 マルー

【性別】 男性

【戦闘経験】 17年

【出身地】 ヴイーヴル

【誕生日】 3月24日

【種族】 ヴイーヴル

【身長】 167cm

【鉱石病感染状況】

感染者に認定

【個人履歴】

ちよつと不幸体質でドジっ子のバーサーカー(なんかちよつとパワワード)

斧持って！敵に向かって一直線！相手は身体が縦に割れる！みたいな戦闘スタイル、嫌いじゃない、グリーンーズとは友達誘われて部隊に所属今後レユニオン内でマルー・グーニーズ・シェーヴルで凸トリオと呼ばれる(予想)

【コードネーム】 アディア

【性別】 男性

【戦闘経験】 4年

【出身地】 不明

【誕生日】 10月10日

【種族】 リーベリ

【身長】 168cm

【鉍石病感染状況】

以下同文

【個人履歴】

いつの間にか居たらしい、ナイフめっちゃ投げてきたり畏仕掛けたりする以外はいつか空を飛びたい夢持つ純粋なお兄さん、部隊の常識人粹らしい笑い方が変らしいが部隊全体が変だから別に問題ないな！

【コードネーム】グー

【性別】男性

【戦闘経験】1年

【出身地】 ヴイクトリア

【誕生日】 6月6日

【種族】サルカズ

【身長】 154cm

【鉍石病感染状況】

同文

【個人履歴】

二人は兄弟の弟の方順風満帆元気いっぱい殴り合い上等(!?)文句があるなら武器なんて捨ててかかってこいよ! って感じが素のやべー13歳先生ーこの子どこで間違ったんですかー? 知らないよって感じの元気な子

【コードネーム】キー

【性別】男性

【戦闘経験】1年

【出身地】 ヴイクトリア

【誕生日】 5月5日

【種族】サルカズ

【身長】 158cm

【鉍石病感染状況】

同じく

【個人履歴】

二人は兄弟！の兄の方冷静沈着物静かけれどノリのいい気に食わないなら武器なんて捨てて机の下で蹴りあおうって感じの15歳なんだこの兄弟正反対に見えてほぼ同じだった流石兄弟だ愛を感じる(?)

【コードネーム】 シュヴロー

【性別】 男性

【戦闘経験】 不明

【出身地】 ラテラーノ

【誕生日】 6月3日

【種族】 サンクタ

【身長】 145cm

【鉱石病感染状況】

めっちゃ健康 非感染者

【個人履歴】

とりあえずシェーヴル研究させろ、(色々な意味で)好きだあ！一緒に住もう！とよく叫ぶサンクタ族の少年、側からみれば少女なのでよく間違われる、家族ぐるみでシェーヴルの事を気に入れており研究とは言うが一緒に暮らしたいだけのちよつとやばい奴なだけである。

アレをちよつとやばい奴なだけ？少し健康診断をする後から来るようにー医療部より

その他部隊の皆様やCの知り合いの皆様

インサニア

色々やべー奴動けなくなった人見るの大好き監禁したい(ド直球)最近達磨になったCをみてまたあの状態にして部屋に飾りたいと思ってる(怖とずまりしとこ)

その他隊員

もれなく皆様楽しければそれでいいじゃないやらレユニオンにんでいるの？って感じの人の集まり他のレユニオン兵入ったら多分めっちゃ疲れるけど色々どーでも良くなって部隊から抜け出すのが

惜しくなってくる謎の沼を持つ部隊なにがどうしてそうなったこいつら

去る者追わず来る者拒まず自由に行きましよう

物資運んでくる人達&社長

現社長のお爺ちゃんのお爺ちゃんぐらいから知り合いの所の人達レユニオンの食の事とか話聞いて「じゃ！物資持って行くわ！お金？いらないですよ代わりに子供と遊んでやって下さい！」って感じの人達ちゃんとお支払いはしました

ウルサス学生自治団

この世界線の自治団は学校の風紀を守ったり、外に出た際怪我人を保護する中高一貫の学生の集まった団、簡単に言えば風紀委員（ざつくりしすぎでは？）

ペテル Heim 高等学校

ズイマー達学生が居た場所、所々に様々な傷、跡があるがとても綺麗にされた場所天災がやってきた際全くの無傷であり何人かの生徒は屋上に何かを見たらしいが何もわかっていない、だけれどここはきつと忘れられない。

ペテル Heim クッキー

よく保存されているペテル Heim 高等学校オリジナルクッキー、逆に割れているものを探するのが難しいかもしれない、美味しさは変わらないのに少しいつもより美味しい気がする。

以上こんな感じ

多分まただれか名前出たら追加するかもかもですでは、

今更！一周年!!裏話く その1 (作者同士のコラボもあるよ)

くとある日く

「…まだか?」

「ちよつと待て、ラジオの調子が…」

…ジジツ…ジュー♪…

「お、きたきた」

『あくハロー?えーロドスの艦内から支部へそして一部地域に垂れ流しておりますC・Rラジオ、ですが今回相方のロザリンさんがいないんで私だけです花がないっすね、終わりましたよ?』

『早くない?来たのに俺出番なし?』

『よーし、解散!』ガタツ

ゴツ!…キイーン…イタイ…

「……………誰?」

「いや本当誰?」

くロドス放送室く

「馬鹿だろ」

「馬鹿だよ」

「えー…今回ゲストに…作者、そしてその親友の」

「どうもおく、自他と共に認める人類悪!猪のようなです」

「人類悪だ、狩れ、あ、羊のようなです」

「もう何が何だか分からないよ」

「流石のCにもお手上げかあい?テンションあげてきましょうお?」

「ハイヘーイ!ピッチャービビってる!!」

「殴ってやろうかあんたら」

「あらあ、言葉が悪い」

「お?いいの?そんな事言ったら重い話ここに持ってくるぞ?…シリアスマシマシにするよ?」

「やめて下さる」

「私書けないから！」

「そうだそうだ！」

話をかえましょう

「さて、裏話ですよ」

「何から話す？グガラランナの元の話ぐらいしか俺話せないけど」

「私は…なんか私Cと被るねなんか変えようかね」

羊「よし」

「なんか変わったんです？」

羊「かぎ括弧の前に羊が付いた」

「成る程(?)」

「シエールヴル誕生の話」

羊「あ、そういえば猪さん」

「何？」

羊「新作が大人気みたいで、おめでどう御座います」

「おめでどう御座います」

「うん、…まさかあそこまで見てくれる人が居るとは思わなかった…前に書いてたのが凄い不憫に思えて…」

羊「まあ後輩が育ってるって事で(?)いい事じゃないかさせて、話が最初から脱線してるけどシエールヴル誕生の話ですよ」

「もしかして私の不死の秘密が「明かされません」なん…だと？」

羊「だって……………」

「だって？」

羊「…さ、誕生についてだけど実はと言うとガワは二、三年前から…と言うか猪と言う友に会ってから出来てたんすよ」

「(はぐらかしたな)元々学校の休み時間とかに小説だったり色々話したり考えたりしながら設定練って…大抵俺の方から能力の意見あったりなんだったり」

羊「そんでまあ猪の話聞きながらそんな事してたらあ、なら自分も作ってやろって事で色々考えた訳なんですけど……………」

「？」

羊「その頃は本当にちよい設定考えただけで性格も性別も決まっ

なかつたんよね、とりあえず仮面してる誕生日決まったぐらいで」

「名前も無かつたんすか…」

羊「あ、ただね、一つ昔の記憶からまたここに出したやついるよお前じゃないけど」

「え、誰です？もしかしてアネモツサンとかですか？」

羊「毛玉」

『え？』

「お前…私より先輩やったんか…」

羊「一番簡単に作ったけど…想像的にはあの、妖怪に名前返したりする例のあのアニメに出てくるあの斑様みたいなのが本当の姿だね…」

「はえー…」

羊「んでCの外枠的なのではきたんだけどまだ全くもって中身がない状態が長く続いたんやけどある日携帯で猪とチャットで会話してるときにふと思いついた事があって言ったんだよ」

「ああ…あの時か、あれは衝撃的だったなあ…」

「して、その行った事とは？」

羊「私の性格少し混ぜて作ってみようぜ☆」

「ええ…普通じゃないです？」

「いや…それがだよC君、こいつの性格は何されようが怒らないむしろ大笑いするわ、唐突に行動するわ、色々と飛んでる性格で…ついていけるような奴があんまないような性格で、そんな奴の性格が少しでも混ぜってしまったら…」

羊「まあ止められた時にはすでに半分はできてほんの少し入れただけではまあ適当にさらに陽気な性格でも入れて作っていつてたらよ…：…うん、心が折れる姿とかが想像できず、シリアスとかが全くもって似合わないシリアスブレイカーの化け物ができたんだよ（この頃には不死が付与されてた）」

「ええ…（二回目の困惑）」

「その数ヶ月後ぐらいに俺(猪)のがハーメルンで投稿するって話が出て、その時も名前とかの見直しとかして投稿し始めたんだよ、でそれ

で羊も投稿するんだよな？って聞いたたら…

『え、私は読専だからハーメルンに登録はするけど投稿はしないよ。』

…と、戯言を言い出しまして、思わずは？って言いましたよ」

羊「とても恐怖を感じました。」

「その後電話だったりで言ってるうちにようやく分かったと言って一年以内には投稿する！と言って……重大な事に気づきやがりました」

羊「うん、名前決めてなかったんだよ」

「それって、一番大事な所なんじゃないです？ええ？作者さん？」

羊「本当にね、うん、んで名前どうしようどうしようと考えてたらTVで山羊のミルクとか肉の番組やって「あ、美味しそう」ってなってるからそうだ！少し私（羊）混ぜたんなら山つけて山羊にしよう！って事で名前を普通に山羊だとつまらないから他の言葉で探したらシェーヴルって言うピンとくる名前があったからこれにしたんだよ」

「その後もどう書けばいいとかタイトルどうするとかでまた色々あって……しかもタイトルも適当に決めようとして、ちやうど今麻婆豆腐作ってるから麻婆とか……本当こいつ……」

「大変つすねハートレスさん」

「なんだハートレスさんって俺は猪のようなんだ」

「いやあ…作者から渡された資料見たら……うん、猪さん、邪悪（ど直球）で

すよ」

「言い過ぎじゃない？前から話して急な作者の初コラボなのにそんな言う？」

羊「シェーヴル、一応あれでも人の心があぁ……—あるかも知れないからそんないぞもつとやれ」（本音）

「……本気で重い話持ってきてやろうか」

「すいません」

くなんでアークナイツにしたのか

羊「なんでだろー、なんで？」

「知らん」



「ハートレスさんに同じく」

羊「いや…うん…少し前から思い始めてもうぶっちゃけるけど、シエーヴル本当ここ（アークナイツ）に合っていないですよ、確かにうちは適当で猪さん所の人達みたいに念入りに作ったりしてないですけど…本当に合わない」

「テーマソングがお○ヤ魔女カー○バルの主人公だからな…」  
「ぶっちゃけますね」

羊「かと言って、合うやつも考え付かない、最初はあの…某弹幕ゲとかで有名だったり楽園の素敵な巫女いる所と考えましたけど…だんだんなんかこじやないと少ししつくりこなくなってきたり…」  
「おう、なら早く本編投稿しろよ」

羊「ごめんなさいごめんなさい、ネタも話も思いつかないんですごめんなさい…」

「私がこんな式神やら鏡を使ったりする技が多い理由が少し分かった気がする（小並）」

羊「あ、あのCが率いてる部隊も一応原型があったりする、名前は…：…ちよつと言えないけど大体今とおんなじ感じのメンバーで、逃げようとするのを捕まえてた」

「そうなんすか…アネモツサンは原型があったり？」

羊「んや、完全オリジナル、従者っぽいもの付けるかルーレットして決めて後は容姿やら決めて…：…身長は診断のサイトのやつで決めて、後はなんとなく速さを求めたかったから風を意味するアネモスってつけて…後蹴りに全ステータスを振った」

「何故…？（ステータス）」

「その頃アネモスとその仲間たち」

「主人よりかなり適当でパツパ決められてませんかね私」

「大丈夫ですよアネモスさん、自分なんて牧羊犬の名前を少しいじつてやったら全く意図せずに映画とおんなじ名前になった制作時間15分の私に比べたら」

「そうそう、自分は名前はそのままマルー（不幸・不運）なってつけられて変形斧持ったら完成だもん、グーニーズより早いよ」

「僕も拳で戦うからグーです！」

「僕も足で戦うからキーですね…」

~~~~~

「はえ〜…こんな作者に作られてたんか…」

羊「こんな作者に作られてんだよ、あ、画面の前の読者さん、自分そのうちにでるその2はガラランナと言うキャラクターの事について話します、良ければまた見てください」

「あとがきを此処で済ませようとしてるな？」

羊「あ、やっぱり分かる？」

「では、一旦此処で休憩入りまーす」

次回も裏話 ※この話は実際の会話などをつかっています

今更だよ！一周年記念!!裏話く その2 (多分終わり)

前回のあらすじ

羊「シエーヴルは実は昔からできていたんだッ!!」

猪&C「な、なんだって〜」

そして作者の適当さがあまりにひどい事が分かった前回

羊「最近書くのが凄く遅くなってしまうって…ネタも構想も全く浮かばないんです…どうしたらいいでしょうか猪先生」

猪「知らんな」

羊「そんな酷い!!救いは無いんですか!!」

猪「あると思ったか?」

羊「うん」

猪「ええ…」困惑

「これが私の性格の一部にあるのか…嫌だなあ」

羊「残酷ながらシエーヴル、完全にお前は私の作った…息子みたいなものだ、諦めろ、さ、今回はうちの小説でまだ数話しか出てないけどエクリ…グガランナ君の話です」

猪「今グガランナの元の名前言おうとしただろ」

羊「猪より先には言わんよ…(この言葉を覚えておいて下さい)、はい、グガランナ君ですが実は元は猪がアークナイツを始めて…2人目?ぐらい人が元になってまして」

猪「俺が提供しました」(コロンビア)

羊「しかもまたよく色々作り込んであるキャラでして…設定の資料全部とってあるけど載せる許可取ってなかったから載せれません、クツソウ!猪のエクリプセルナル君の絵載せたかったなあ!!」

猪「やめとけ?それは絶対にやめとけ?と言うか言ったな、名前ガツツリ言ったな?」

羊「正直言つて良かったか色々悩みながら書いてる」現在深夜に執筆中

猪「お前…本当…馬鹿だろ」

羊「馬鹿だよ、何言ってるんだ、んでエツ君の話やけど…」

猪「ああ…うん、…とある日羊と俺こと猪が小説投稿もしていない時代…LONEで話してる時に…」

二人はのんびりと携帯のメモなどに小説を書いていた時代…

羊「話浮かばん」

猪「知らん」

羊「酷い！（省略）」

そんな会話が あった次の日

猪「色々作業終わったぜヒヤッハー!!」

羊「乙カレー」

猪「さて、小説の進捗はどうですか」

羊「主人公（名前なかった）がロドスに一人で遠足に行きましたね」

猪「あら、なんでなん？」

羊「…？雑談しにだけど」

猪「ええ…雑談で、なんの雑談に？」

ここで少し小説の中身などを送る（その後ロドス雑談会は本編で投稿された）

←実際にしたやりとり、

C（仮）「たのもー…遊びきましたー!!」

ロドスの方々『!?!』

エツ君（グガランナ）「いらっしやいませ、応接室にご案内いたします」

C仮「あ、親切にどーも…これつまらない物ですがオリジンシの甘露煮です」

エツ君「ありがとうございます」

羊「今更だけど、さっさとエツ君ロドス側に出てきたけどどうするの？」

猪「知らん」

羊「ワイワイ…、あ、次なんか模擬戦みたいなのでしょうか」

猪「まさかエツ君居ないよね？」

羊「出すう？私は別にウエルカムやけど」（冗談混じり）

猪「だったら設定とか考えるから待ちな」

羊「え、（驚愕）いいんすか？（混乱）待ちます（大混乱）」

〜40分後〜

猪「できた…かな？」

羊「はつやいなあ…」（エツ君一人で四千文字以上はある設定資料）

猪「書くのが進んでもうエツ君が居る森とかまで作っちゃったぜ」

羊「エツ君の周りには全ての攻撃効かない獅子とかおるんか…」（みてる）

猪「ちなみに森の名前はアルカディアだ」

羊「我が青春の…」

〜回想終わり〜

羊「このやりとりは一年前ぐらいですね」

猪「この時はまだエク립セルナルって名前だったな、そして最近突然電話をしながらC○Dをしている時に羊がこんな事を言い出したのです…『あの時書いてもらったエツ君、ドクターの現実逃避編で書いていい？』と」

羊「本編とかで出てくる森もかなり魔改造されてるけど始まりにはアルカディアという猪から借りた物があるから…そしてせっかく猪が作ってくれたから使いたいと思いきまして…そしてそれはOK貰えたんですけど、次は…」

猪「あの魔境になった森にそのままエツ君を入れてもなんか影薄いだろうと言う話になり、もうあの森全体を管理するような奴に変えようぜ！って事でまた二人で話して決めていって…」

「確かに…ゴ○ラもガ○ラも居たりする様な所だと…」

羊「そうそう…だから元々エツ君を守ってる守護獣みたいな六匹も居ただけどリストラされて…もうエツ君本人がもう神話級の存在

で強くしましてね、その後ビクビクしながら書いて、でもその書いている時に絶対に譲れない部分があつて……」

「イツタイソレハナンデス？」（棒読み）

羊「呼び名」

猪「ずつとエツ君エツ君言つてたから変えたくなかつたそうで…グガランナに名前変わつてエの文字も無いのにエツ君と呼ばせると言つて…」

羊「いやあ本当にね、ここだけは譲れなかつた、そしてなんだつたらもうCとも仲良くなつてしまえと言う事で色々吹っ切つて書き上がったのがアレで……うん、またいつかエツ君のやつ書くかな、いつかいずれ」

猪「ほんと適当なお前な」

羊「さて、ここまで長々と書いて、最終的に私が思つたのが……：…なんだつたらこのグガランナ君が初コラボじゃ無い？」

猪「他の人は全くこの話知らないから絶対違うな」

羊「と言うかこう言う裏話つて最終回一步手前から辺でやるもんじゃないの？なんで今書いてるんこれ、あ、一周年だからか」

猪「今更!?二千文字ぐらい書いて今更それ言う?」

羊「うん、本当今更だけど書いてる時（深夜3時）本気で思つてしまった、後悔はしていない、反省もしない」

猪「寝ろよ」

羊「まだだ！まだ終わらんよ!」

「すいませんが作者のお二人さん？」

猪&羊「何?（ヲ?）」

「そろそろ終わりの時間です」

羊「あらあ…時間が過ぎるのは早いのねえ…」

猪「そうだなあ…」

「正直テラの住人の皆さんが多分色々情報が追いついていないと思いますよ?いきなり作つた書いたなんだから…私も訳わかりませんよお?」

羊「ハツハツハ!分からなくていいよ、今回の事は全部無かつた事

にするから!」

「うーんいきなり過ぎる」

猪「まあ普通だよな、こんな話聞いてたら、自分達が作られた存在だとか疑問でどんどん壊れていたりするからな」

羊「今回色々迷走した結果やし話したかっただけやし、こんな文字の中でも自分の息子みたいな奴の事色々言いたかったし、投稿遅かったけど」

猪「なんだかんだCが好きなの羊であった」

羊「さてと、じゃー! シェーヴル! 私頑張って本編書くよ! でも今のコラボのやつも書きたいな! じゃあね!」

猪「作者コラボとか言ってる俺あんまり喋ってない気がする…」

羊「ごめん…またいずれやろうぜ、画面の前の猪、お前に言っているぞ」

「いきなりだあ

バツンツ!!

——…いき………よ……—起き………起きろってなあ」

「誰だお前は!」

「うおあ!?! 起き抜け元気だなおい! ったく、ラジオ中に寝やがって、私だけで繋ぐの大変だったんだぞ?」

「あゝあゝ…すいませんねえ夏將軍…なんか色々と裏側の話を聞いていた気がして…」

「またお前変な事言いやがって…ほら、早く食堂行くぞ、腹減った今回の詫びでおかずなんかよこせよ?」

「なら私が頼もうと思ってる熱々のボルシチを流し込みましょうかね」

「お前それただの拷問じゃねえかよ!!」

「グムさんの作るスープ系は美味しいよねえ…カレーも美味しいけど………」

「…毎日張り切って作ってるからな」

「あの明るさは癒される………私が言うとおれだね、不審者だね」

「本人に言ったらどうだ?」

「私に刑務所に行けと？夏將軍」

「なんでそうなるんだよお前はよお!？」

「これが私だ諦めろ!」

ガチャ……ガヤガヤ……ザワザワ……

「………一体誰が?」

「分からない……ここにいる誰もわたしていないと言っている……本人も誰にも渡されたか分かっていないからな……」

「どうしました?………なんですか?グムさん、その花束」

「お兄ちゃん!それがね、分かんないの!」

「………犯人はお前かC」

「ああなら納得しますね」

ソウダナ

ジケンカイケツ!!

ツマンナイノー

「いきなり犯人と言われて納得されると私でも傷つきますよ?ガラスのハートですよ私、ほら割れるぞすぐ割れるぞ今にも割れますよお?」

「違うのか?本当に?………突然こんな大きな花束誰が渡したんだ?そんな姿を見せずに」

ドクターの目線の先には大きな花束を抱えるグムがおりその花束に付いている札には『祝 一周年 』と書かれていた

「………あー………なんの祝い?」

「それが……グムさんがキッチンからご飯を食べる為に出てきた時に出てきた際に突然呼びかけられたそうなんです……そしてその声に振り返った所、花束を押し付けられたそうで……」

「それでね、グム、その人の顔見ようとしたんだけど誰もいなくてね、………でも!グム、あの人は悪い人じゃないと思う!だってグム聞いたよ!『シエーヴルをよろしくお願ひする』って!」

「うーん……私の知り合い……でもこんな花束送って……いや持ってくる様な奴いないしなあ………とりあえず持ちますよ」

「二体なんの一周年だったんでしよう……」



「さあ…」

その後花はキッチンと手入れなどをしながら食堂の前にとりあえず飾っておく事になった、そしてロドスの不思議がまた一つ増えた、次ははずれ…また…

## 茶番&番外

### レユニオンの休日 突撃馬鹿部隊と仮面の不思議

とある放棄された都市で

「我々ハ突撃ス！我々ハ突撃ス!!」

「進め！進めええええ!!足が無くなるうと、手で這ってでも進め！胸を貫かれようと進め！一人でも狩れ！」

二つの部隊が訓練していた（ほんとお？）

片方は腕に両刃の剣と刀、レユニオンのシンボルの腕章を巻いたC率いる部隊

「だが死ぬ事は許されない!!行け！行け！」

『狩れ！狩れ！突撃せよ!!!』

片方は築いた砦にて防衛線を張るスカルシユレッダー率いる部隊

「ぐっ、押し切られ——うわああ!!」

「報告！最終防衛線、突破されました！」

「……降参だ、降伏するぞ」

「……分かりました」

『——そこまで、模擬戦終了、勝者C部隊、戦闘終了』

「勝鬨は？」

「あげましょうか」

「さあご一緒に！」

『おおおおお!!!』

「あんな戦い方もあるのか、……いやあれは戦術と言うのか？」

「あれしか知らないからね、あとあれが一番うちに合ってる」

「良い子の戦士は絶対に真似しないでね☆」キラツ☆

「私達との約束ですよ☆」ビシツ

「いつも以上にテンション高くないか？」  
「久しぶりに大暴れましたからねー」  
「声がとても良く出るようになった気がする」  
「マルー君のあれ凄かったからなあ、這ってでも進めって」  
「グーニーズの突撃の声も勢いがあつて心が躍りましたよ」  
「隊長もかなりの無茶振り言っていましたけど、かなり身が引き締まりましたよ」  
「あれくらいは無茶振りの方が好きでしょう？」  
「H A H A、よく分かっていらっしやる」  
「主人、汚れが」  
「え？、ああ仮面に…じゃシャワー浴びてくる」  
「ああ、行ってこい、後から自分も行く」  
「はーい、じゃスーさんまた後で」  
「…ちなみにあそこで降参しなかったら？」  
「別で動いていたアディア達が首獲ってました、よかったですね次の瞬間には首飛んでましたよ」  
「冗談でもやめてくれ…いつ入り込んでたんだ…」  
「最初ら辺に煙の中で神隠しい作戦あったじゃないですかあ？」  
「そんな名前だったのかあの作戦!? 突然仲間が煙の中で消えていったな…それで？」  
「その時に服奪ってえ一緒について行っていましたあよ」  
「は？ 気づかなかったぞ？」  
「気づいたら駄目ですよお？」  
「それもそ「アハハハ!!」(ドスツ)「グフツ…」バタツ」  
「惜しい人を亡くした…」  
「どうか安らかに…」  
「穴掘ってきますわあ」  
「かっ…て…殺すな…お前は孤児院の子か、ちゃんと前見て走れよ」  
「ごめんなさーい…あ！ 見て見てー！ これ！」バツ  
「…主人の仮面ですねこれ」  
「どっから取って来たんだ？」

「んー？あのねあつちの所に落ちてたのそれでね…」  
「それで？」

「獲ってきました(ドヤア)」ムツフーン

「可愛らしい、私は許します」

「ああ可愛い、ミーシャさんにも見せたい」

「写真、誰か写真撮れないか」

撮影中

「撮った撮った、…で、例の仮面だが、せっかくだ色々見てみるか」

「スーさんも悪いお人…まあ見ますが、」

そう言つて触れると

『おう！できてんぞーなに？デカすぎる？ま、まあちよつとした誤差  
ー待てつて！俺で試し切りしようとするなつて！なんでお前片手で  
持てるんだよそれ！』

『え？不死がどしたんだよお？喋つて飯食つてるんだ、何にもおい達  
と変わらん、そんな事よりはよ、飲むぞ飲むぞー酒を飲むぞー』

『いつか…いつか、あなたに旅の終わりが来るのなら…それがきつと  
幸せであるよう…私は願います…本当は…いえ、なんでも、長らくあ  
りがとう、不思議な旅人そして私の——』

「ちよつと、この今にも告白しそうな上の人何よ、名前教えなさい」  
「またか、本当にいつの間に来たW、いきなり現れて何言つてる、それ  
よりこれ…」

「隊長の昔ですかね…いやーなかなか楽しい宴会をしたようで」

「え？こちらの主人はなんか巨大な狼？犬？と戦つて首斬り落とした  
り、人と殴り合つてましたけど」

「それぞれ見たのが違うのか…こっちは宿か何かで手伝つてたりして  
たな、あと何故か天災の中松明持つて謎の動きしてた、何やつてたん  
だあれ…」

「再現しましょうか？」ポンツ

「いやしなくていい…あ、C、い、いやこれはだな？」

「シャワー浴びてですよ、少し久しぶりにのんびり浴びて、服取ろうと  
するわけですよ、そしたらびっくり仮面がない、いやーびっくり久し

ぶりにですよ」

「(という事は今仮面をしていない…よし!)」バツ

「残念！グツ君予備があります！」ガスマスク

「スーさんとキヤラ被ってますよ！主人！」

「そうなんですよ、だから早く返して下さいよ、」

「…：そう言われて私が返した事は？」

「うーん、一番渡したらめんどくさい一位Wさんが持つてるぞーよし返せ」

「イヤ よ、取れるなら取ってみなさいへタレ変人キヤラ不明男」

「だーれがキヤラ不明じゃ、へタレ変人変態男は認めるが」

「言ってる事違うぞ」

「そうですよ主人はコミュ症変人変態マイペース男ですよ、間違えな  
いでくださいヴァカ」

「どんだん隊長の事が悪い方向に変わっていく…そろそろ返してあげ  
たらどうです？」

「だが断る」

「よろしい、ならば戦争だ」

「捕まえられるものなら捕まえてみなさい！あつはは!!」

「アツハツハ!!待てコラアア!!!」

「…：…：元気だなあいつら」

「多分隊長あれ完全に遊んでますよね、あの叫びちよつと笑い入って  
ますもん」

「最近Wさんも暇そうでしたし、まあ主人が楽しそうなら何より」

——レユニオン 廊下——

「ハア…：…：ハア…：…：」

「ほら、Wさん！ハリーハリーハリーハリー!!」

「うっさいわね…：なんで先走ってるのよ」

「だって途中からペース落ちましたし」

「ムカつく…：はい、もう興味無くなったし返す」

「はい、確かに…：こんな早く返してくれるとは、明日は最後の日が近い

かな」

「ぶん殴っていいかしら？……ねえ辛くないの？」

「暴力反対つす、あと主語言って下さいよ、あ、掴みかかってくるのはやめて下さいね」

「ハア…細かい男ね、その身体よ不死、何されても死なない！姿も変わらず出会った者、親しくなった人は皆過去になる！そして待っているのは自分ただ一人、それを永遠……なんとまあ愉快な事ね、でどうなのよ」

Wは、何故こんな事を聞いているのか自分でも分かっていなかった、ただなんとなく、目の前の男がどう答えるのかが気になり、ただ聞いただけだった

「えー…そんな事聞きます？Wさんがあ？うーん…辛い、辛いんじやない？うん多分」

「曖昧ねえ…自分の事でしょ？」

「いやー確かに一緒にお酒飲んだ人もご飯食べた人も、全部が全部消えていきますよ、けどねえ、その孫達や、その人から聞いた話残したものの、体験経験その他諸々、他の人に言ったり、他の人の助けになったり、その事を懐かしんだりできる、いやー得ですね最近知り合いが作ったお酒が孫達によってさらに旨くなつて嬉しかったわあ多分喜んでるかもね、あ、Wさんも後から飲み来ます？」

「…………話脱線してない？ハア…やっぱり変人ねお気楽マイペース、ハア……」

「そんな奴にハウスキーパーさせてたんですよあなた」

「契約まだ残ってるわよ？」

「申し訳ありません、サービスは終了致しました」

「そう、ならこっちに従業員もらうわね」

「あー困りますお客様！」

「それよりほら、部屋行くんでしょ？早く来なさい？」

「ちなみにどの部屋に？」

「そうねえ……タルラの部屋にでも行ってやろうかしら」

「ターさん所ですか……オレンジジュースか林檎どっちがいいかね

「…」

「あら、ウオツカをラツパでいいんじゃない?」

「これから毎日リーダー焼こうぜ」

「フウー、テンション上がってきた」

「やめてやれ」

「あ、フーさん、一緒に(タルラの部屋に)飲みいきます? パトさんも入れて」

「いや私は「いいじゃない、連行よ」うわ何をする! 離せ!」

「出るオオ!! パトさああん!!」パチイン!

「うるさいぞ、……何故フロストノヴァを捕まえている?」

「そんな事より、ターさんの部屋に飲みい「遠慮しておこう」だが残念、逃げられ無かった」ガシツ

「クツ、力が強い」

「強制連行ですよそれじゃーレッツゴー」

「ヾー」

「……なんで普通に混ざってるの?」

「……ここは廊下だ」

『そうですね(そうね)』

「……」スタスタ

『(それだけだったかあ……)』

「……そういえば」

「どうしましたターさん」

「…林檎の方」

「あ、はい、用意しときます」

「……」スタスタ

「あれがクールの塊ですか」

「無愛想の塊の方が合ってるんじゃない?」

「それ言うなら私とアネモスだって」

「それはない」

「ああ」

「寝言は寝て言うものよ?」

「これは酷い」

### 数時間後

「……………」スウー…スウー…

「リーダー寝ましたね」

「ああ…Wもフロストノヴァも寝てしまった…」

「どうします？サシで飲みます？」

「ウォツカを6本空にしてさらに飲むのか…まあいいだろう」

「(ゴクツ) んー喉がピリツとする」

「…今は楽しいか？」

「え、いきなりお父さんみたいだな…楽しいですよ、こんな集団の所に所属するのは昔の学校以来ですからねー」

「…よく笑うが、それは心から笑っているか？」

「YES！いやー私昔から笑ってるのに笑っていないってよく言われるんですよ、ほら目が笑ってないとか、「グイッ

「確かに笑ってないな、死んでいる」

「はつきり言われると凹むんですけど、酔ってるから言うけどさー昔から私って感情が出にくいんよねー特に怒りの感情、なにされても怒れないの、いきなり「こんにちは！死ね！」ってやられてもなーんにも逆に笑っちゃう」

「いやそれは怒りと言うより、驚きだろう…」

「ウツソーマジですか、まあこんな感じで長らく生きてるから今更そんな感情増やすとかなんとかも面倒なんよねー…目の部分は直したいけど仮面してもあんまり意味ないの」

「そうか」

「さて、そろそろお開きにしますか、そっちはお願いします」

「ああ、いい夢が見れるといいな」

「残念ながら今から私書類仕事…」

「ああ…それは…手伝おう」

「いや、大丈夫っす、ハハハ」

「……………手伝おう」(使命感)



## レユニオンの休日（なお、休日ではない模様）

とある日、レユニオンの愉快的仲間達は、

「…ううううミイイイダアア!!…!!……隊長」

「どしたグツ君」

「寒いですね」

「そろそろよ、この時期だぜ？」（道具準備）

海に来ていた（意味が分からないよ）

「何故？」

「釣りの為」

「ここは何処だ？」

「人の来ない大人数来ても大丈夫な海」

「この短時間でどうやって？体感1時間ほどだったぞ」

「ふしぎなぶあわあー」

「なんだこいつ」

「すげえ…！俺海って初めてかもしれない」

「めっちゃ広いな！」

「楽しそうだなお前ら…」

「楽しそうでなによりじゃまいか、精神すり減らして発狂するよりこっちの方がええじゃろ」

「例えば色々不穏すぎないか」

「ナンノコトカナー、おいアネモっさん、その水着なんすか後その他皆さまはフーさんとクーさんとか連れて行こうとするんじゃない」

「え、海と言ったら…水着では？」

「そうですよ隊長、海と言ったら輝く海、青い空、そして女子の水着じゃないですか」

「なにに影響されたマジヤレさんや、今グツ君が寒い言ったでしょう？後今入ろうとすると色々痛い目みるわ風邪引くわ色々大変じゃぞ」

「隊長ならなんとかできるでしょう？」（人任せ）

「水着は着ないぞ、何故私が着る必要がある、そういうのはWとかにやればいだろう」

「ちよつとこつちに投げないでよ、そもそもいきなりだから持ってきてないの、また次の機会にしてくれる?」

「持ってきてたらやるんすか…いやまあ温度やらはなんとかなるけどさあ、面倒じゃないか」

「ならまたいつかですわねしょうがない」

「そんなー…こうなったらご飯いっぱい食べて忘れましょうしょうしましよう」

「じゃこれはい」ワタシーノ

「なんですこれ…これは…!あの!?」ウツケトリーノ!

「そう…あの!!ただの釣竿です」

「これでご飯をゲットだぜ!しろと」

「YESしたい人は他にも言つてー投げつけるから」

「俺くれー」

「私もお願いしよう」

「……………」(七輪とうちわ準備完了)

「気が早いっすリーダーまだなんも釣れてないっす炭火もまだつけてないっす」

「そうか…待っている」

「釣つてくださいよ…うーむ、分かりました少し待つててくださいねーあ、釣り方やなんやらはこいつかアネモスに聞いてくださいねー」

そう言うときCは海の方まで歩いて行くと、そのまま普通の事のように水面を歩き、ある程度まで進むと引き摺り込まれるように海の中に消えていった。

「……………もう慣れ始めた自分がある、と言うかこいつって誰だ」

「スーさん、慣れつて必要(ポフッ)ですよ、誰で(むあー)しようね……………」

「どうした(ポフッ、ポフッ)……………まさかこれじゃないよな」

「むあー」ゝゝゝ

グーニーズとスカルシュレッダーの足元に居たのは、顔ほどの大きさをしたぴよんぴよんとはねる灰色っぽい色柔らかい毛の丸い生物

だった。

「いや流石にーありそうですね」

「むあー…むあ」もぞもぞ……シヤピン

「誰が呼んだか我が名は毛玉、どうぞよろしくお願いします、あ、釣り方はですねここに看板刺しときますのでどうぞー」シユパ、ザク

「中から看板出てきた…嘘だろ、夢だと言ってくれ」

「ところがどっこいこれが現実、頑張りましょう？ほら釣竿持って色々持ったら出来上がり！、あ、一回モフツとききます？子供達に何故か人気なんですよ？」

「愉快的性格ですねー、飼い主に似たのかな？」

「そうですねーそうなんじゃないですか？まあ自分昔は結構強い奴だったんですよ？…どうです？…凄いでしょう？姿少し変わるんですよ？人の形にもなれちゃいます」

「……最初から人の姿になればよかったじゃないか！」

「いやん、人の形になると裸なんです、これでもメスなんですよ！変態！」

「分かるわけないだろ！、すまなかった」

「おや、意外と良い人…：しようがないですねいいでしょう！少しお待ち下さいませーしやらんらーしやらんらー」ぴよんぴよん

数分後

「どうです！見て下さいこの身体を！ちっこいでしょう？少女感出るでしょう？ほらめっちゃまな板ですよ！まな板！頑張って他の式達にも協力してもらって作ったNEWボデーですよ！」ブンブン

毛玉が消えていった物陰から何やら少女が全力で手を振りながら走ってきていた、髪先が少し灰色の小さな少女だったがテンションの高さや喋り方がさつき毛玉という事がなんとなく確信できた。

「テンション高い…負けられませんね」

「グーニーズ…俺も頑張るか！」

「マルーさんも頑張るんですか、私も負けられませんね！」

「マジヤレさん…僕も頑張るかあ！」

「やる気出しますかあ…」



(!?)

「シェーヴル」

「ヲ?、珍しいどうしましたクラスレさん」

「食えるか」

「そのカニはちよつとなあ…もつといっぱい取ってきたら揚げたり味噌汁できるけど」

「そうか、」

「あ、これどうぞ」バケツ

「……………行ってくる」

「気をつけてー」

「おい!シェーヴル!!なんか黒いの吐いてくる奴ファウストが釣ったんだけどこいつなんだよ!」

「アツハ、アハハハ!!」

「W:!!」

「頭から真つ黒、生臭、」

「釣れた」タコオ:

「タコだー!!いいサイズじゃないかあ!」ガシツ、グサツ  
「うっわあ」

「前出したたこ焼きあるじやろ?」

「ああ、熱かったけどまあ悪くなかったよ」

「あれの中のやつほれ、この足部分」

「そうだったのか…触ってみてもいいか?」

「ファウスト?」

「どうぞ」

「……………おお…美味しいのか?」

「もちろん、ファウスト君とメツファイに作りますよええ」

「楽しみだ」ワクワク

「ねえ、この黒いのとれないんだだけ、どおっ!?」ずるっ

『あ、』

メフィストが一步踏み出すと先程シェーヴルが潜っていた時取ってきたナマコを踏み盛大に、滑った

「つつい!?!?……」ゴツツ!?!?……チーン  
「メツファイいい!!?!?」  
「思いつきり頭打ったな!」  
「見事すぎるよ、見事すぎる」  
「これは…私も悔しいけど負けを認めるわ」  
「心配しようぜ? ほらファウスト君見なよめっちゃ心配してるでとりあえず寝かせときましようかね、」  
「C」  
「どうしました、リーダー」  
「焼けた」  
「食べてどうぞ?」  
「箸……」  
「あ、どうぞ、……箸使えたんか」  
「……使えない」  
「うーん、この人はもう、はいお皿とフォーク、一応ナイフとスプーンも熱いから気をつけ……自分が使うアーツの方が熱いやん」  
「ねえ」  
「なんだW」  
「あれ、なんか色々(ポンコツ化とか)……進んでないかしら?」  
「……なんのことだかさっぱりだな、」  
「スーさんなんか隊長みたいな事言ってますね」モグモグ  
「実は一度言ってみたかった」  
「結構毒されてますね……」  
「そういえば毛玉は?」  
「あつちで釣りしてます」  
「私もなんか釣ってくるー」  
「行ってらっしゃい」  
レユニオンの休日、続きます。

## レユニオンの休日（釣り） 2

前回の事、振り返って……………

レユニオン一同！釣りだ！海だ！休日ダアああ!!

「今日はなんだか風が騒がしいですね」

「なに！言っている！お前！てっ、あぶな！」ガチン！

「でもこれどうしますよ、あんまりこういうの調理した事ないよ？ましてやこんな奴フロストノヴァさんあれ冷凍できます？」

「無駄に強い、アーツが効かなー！ふっ！」

「何か策はあるだろう」

「そもそもこの魚？…なんで普通に活動できてるんだどうなったらそう成長するんだ」

「まだまだ源石関係には不思議な事が沢山…」ガブガブ…

「シェーヴルお前食われてるぞ!？」

レユニオンのスカルシュレットダー、フロストノヴァ、パトリオット、シェーヴルが遊びにきた浜にてある生物と対峙していた、その対峙している生物は

そのグレーのザラザラとした巨体、大きな背ビレを持ち口には鋭い歯が覗く、頭が『二つ』あるサメだった。（意味不明）なぜこうなったかは数分前まで遡る……

——数分前——

「おお？なんだきたんですね〜」

「来ちゃいましたよ毛玉さん、さっきまで潜ってて釣りはできてなかったすからねー、……………また新しい身体作ったん？」

「イエーイ、どうです？興奮します？」

「まーたあれじゃな？ばーさんは新しいジャンルにハマったんだな？」

あと楽にいいぞー今私達しかおらんし」

「バツさん最近はなんか…なんでしたっけ？め、めすう…?…:…我はそういうのはあまり知らないのだ…すまん」

「なんか大体分かった気がする、話変わるけどなんか釣れた？」

「それが全くでなあ、ほれ」パシヤ

「本当だなんも入ってねえ、釣りつてウキ釣りが一番楽しいよな」

「そうじゃなあ、のんびり、見て待つのもよいもつ引いた！よらっせええ!!!」

「勢いよすぎデース！」

「見てみる！サンマジヤ！ひやつほーい！」

「(ここつて釣れたっけなあ…あと時期だっけ…) 美味しいからいいかあ」

「分かれば早い！釣るぞ！」チャポン

「沢山釣らなきや(使命感)」グンツ

「これは…大物ではないか！」グンツ

「そつちもか、」ググググ

「これは…この身体では不利！、じゃが今はこれしかできん…おおお!!」グイッ!!

「よいしよおおおい!!!」グイッ…ザッパツン!!

「おお?!!」

ビツタアン!!

「これつてさ、」

「サメじゃな」

「サメだよな、頭二つあるけ——凶暴な奴だあい！」ガチン！

「主！逃げるぞ！とりあえず！はよう！」ダダダ!!

「めつちやあいつ早い！サメつてなんだよ！毛!!私抱えようか！」  
ダツ!!

「頼む！」

こんな事が数分前、現在

「いきなり全力で抱えて走ってきたと思ったら！次の瞬間にはなんだ！海からこんなサメ来るとか聞いてないぞ！」

「私だつて知りませんよ、運営に言ってくれ」

「運営つてなんだ！」

「さあ…」

「ふぎけるなよお前！」



「申し訳なっーい！」ガシッ

「た、助かった」

「あっち避難しといて、……………グーニーズー」

「はーい!!なんですか!!」

「剣貸して〜」

「あ、はーい、早めに終わらせて下さい、」

「なにをするんだ？」

「いや〜今回は完全にこっちのせいなんで片付けようかと」

「最初からそうしてくれ…」

「面倒くさかった！」

「このクズが!?前みる！」

「本当ごめんなさい、」スツ……………

こちらに向かってきていたサメに向かって剣を振るう……………次に見たのは綺麗に半分になったサメだった。

「まだ生きてるよこのサメ生命力やつべえ」ザンツザンツ

「それを普通にバラバラにしていくお前に恐怖を感じてきている」

「……………食えるのか？」

「どうなるかわからないのでこっちで処理（喰い）します」

「そうか、…鋭い牙だ」

「欲しいならどうぞ、」

「なんかあれだけ苦戦したのに一瞬で終わったな……」

「海というのは……………不思議な場所だな」

「……………微妙な味だなあ、あんまサメ食う機会ないからあんまわからんけど〜」馳走様でした、成仏してくれ」

「早い……」

「隊長ー」

「どうしたマルー」

「メツフィー起きましたよ〜でも色々……………」

「……………行ってみるか」

「自分ちよつとしてから行くー」

——バス内——

「え、えつと貴方…は？」

「誰だこいつ」

「メツファイです」

「……こんな純粹そうな目した奴が？」

「メツファイです」

「……記憶喪失か」

「まあ、そんな感じですね、ファウストさんの事とかは覚えてるみたいで、しかしアーツなどは使えなくなってるみたいで」

「そうか…」

「ご飯持ってきたぞーみんなオタベー」

「あ、兄さんありがとう」

『……………』

「ちよつとメツファイとファウスト君食べていてくれ、」

「……??メツファイ？分かった」

「あ、ああ分かった」

「さて、」

「……頭打って何処がおかしくなったか」

「その可能性しかないわ、なまこあんなとこ置いとくんじやなかった」

「よりにもよってなんでシエーヴル…」

「本当なんでよりにもよって私なんでしょうね、記憶戻った時メツファイ氣絶するぞあれ」

「自分で言うのかそれ……………」

数分後

「あ、ファウスト君、メツファイは？」

「まだ中で食べている、なぜ兄と呼んだか分かったかもしれない」

「マジですか、早い」

「……………最近色々と遊びに連れられて様々な場所に行ったりしただろう」

「ですね、」

「そんな事してたのかお前ら」

「その時の事をメフィストは…住んでいた場所から僕と……：ファウストを連れ出してくれた兄と一緒に見た、経験した事として楽しく言っていた」

「色々おかしくなってますねもつかい衝撃与えて治すか」

「やめろ」

「はい」

「……………これで、いいと自分は思う、」

「……………ほうほう」

「前の、あの、メフィストは…辛かったんだ、だが今は、昔の…昔の!!、確かに、一時的な物かもしれない、何かで、壊れてしまうかもしれない!けど!!」

「はい、シリアスっぽいのはこれまで、ほら水でも飲んで落ち着きな?」

「あ、ああ、すまない…」

「まあ過去になにあつたかとかどんな感じだったかとかは……………まあ知ってるんだけど」

「!?、知ってたのか」

「そりやもちろん勝手に見せられたから知ってる……………アイツ一回全部のコレクション燃やしてやろうか」(虚ろ目)

「なにがあつたんだ……………何かふざけないとお前は」

「いやスーさん私シリアスだの暗い話だのは苦手なんですよ、そもそもシリアスでどうやって作るんだ小麦粉と卵と牛乳でできる?できない?あ、はいわかりました」

「また訳の分からない事を…」

「あーファウスト君よ、」

「……………なんだ?」

「いいって思うならそれでいいんじゃない?私そういうの大好きさ、……………こんなだからクズやら偽善者やら私は言われるんだよ(自虐)まあ本当一時的な物、なんかしたら精神になんか色々異常が出るかもしれない、そんな不安やらなんやらは分かるめっちゃ分かる、と

言うか何回か経験ある、知り合いで、」

「あるのか（困惑）」

「不思議な事周り結構起きるのよね……まあそれは投げ捨てておいて、あれだよ、言いたいのは……あー……未来の事なんて分からないからとりあえず転ぶように転んでぶっ壊そうて事だよ、語彙力とかが欲しい！（切実）」

「なんだそれ……結局無責任に投げてるだけじゃないか」

「そうだねえ……その通り過ぎてなんか罪悪感が、……でも実際分からないだよ、確かに、記憶を戻す事はできなくはない……」

「できるのか……」

「でもだよ記憶やらなんやらって難しいんだよ、細かい作業は嫌いなんだあああ!!」 ああ……ああ……

「………答えになつてないじゃないか」

「私に答えなんて出せるとでも？そういう事は精神系の医師やら専門の先生方に聞いてくれ、私はただの昔から生きるただの馬鹿だ、毎日が適当に生きていて、ふらふらして自分の事すら分かってねえのに分かるわけが！」

「自虐が酷すぎるぞ………そうか、そう……か、無責任だな、答えはないのか……分かった、なにも、分かってはいない気がするんだが、何か、分かった」

「分かったのか……？ただの無責任な他人事のような事を言っているだけのようだったが……」

「ああ、何も分からない、がそれでいいと思う、ああ……いいと思うんだ、アハハ……アハハハハ!!」

「壊れた!? ファウストが壊れたぞ！」

——数時間後——

「はい、というわけで、メツフィーです」

「は、初めまして？メフィスト……です」

「え、嘘」

「あれ本当か……？」

「はいはいとりあえず焼こうぜ、まだ全然足りねえ」

「あ、ああ……分かった！ジャンジャン焼くぞお!!」

「メフィスト」

「ファ・ファウスト？なんだい？」

「行こう、あっちでさっき釣ったタコを使った料理をしてるらしい」

「！うん！行こう！楽しみだね！」

「いや、あんななんも解決しない話しかできない私って……なあ……」

「主人……そんな性格なのになんか気分とか浮き沈み激しいですよね」

「それ言われるとすんごい心に……こころにくるわー」

「あ、気分戻ってきましたね、けど一つ心配事あるんですが主人」

「どうしたよ」

「作戦の事どうするんですか？」

「まああんな状態やから変えるしかない……作戦日明日じゃなかったっけ」

「え？」

「あ、」

「……………」(モツキユモツキユ)

『忘れてた』

レユニオン一同の心が一つになった瞬間である。

「そうだった！完全に忘れてたぞ！」

「不覚にも私もだ……タルラ？」

「(モツモツ……ゴクン)……忘れていた」

「このっポンコツ!!最近色々抜けてるじゃない！ちよつとまた普通に食べるの再開……もういいわよ……」

「アネモスう、ありがとう、完全に忘れてたあ……今度なんか言ってくれーなんでもするー……私が言ってもなあ」

「なんでも……いや、私も今言っと思ひ出しましたし……すぐ帰るんですか？」

「うーむ……」

「まあ」

『もう少ししてから……』

「あ、花火しようぜ、季節外れだけど」

「あ、いいですね、打ち上げとかどうです?」

「流石に「よいぞ!」よつし楽しむかあ!! (思考放棄スーさん)

「海で何か跳ねているな…」

「おお、珍しい、イルカだ」

「綺麗…」

「…………シエーヴル」

「どしましたパトさん」

「…………いいものだな、こう、遊ぶと言うのは」

「結構楽しいもんでしよう?、ところでパトさんここにパトさん達が遊んでる写真が…」

「…………何を要求する」

「いや何も要りませんよ、長生きしてください」

「…歳上からの言葉だ、出来るだけ守ろう」

「違和感がすつごい」

「たーいちよー!!カメラありますよね!!」

「アルヨー」

「全員の集合写真でも…………どうです?」

「OKーじゃ私とるから皆んな寄っ」「はい主は写りにいきましようねー」毛玉やめい、私は写真苦手なん「主人行きますよ」だ「シエーヴル諦めろ」パトさあん?」

「拘束する」

「私を捕獲したみたいの写真になりますね」スルスル…

「普通に解いてるじゃないか…ほら前みる首謀者」

「しゃ、写真撮ると魂抜かれるんで」ごそごそ、ガシツガシツ!!

「はい、いち、に、バアアン! (迫真)」

パシヤ

レユニオンの休日、終わり

クリスマスー…なんですかね…（前）

とある孤児院

「グッ…Cもう、ちよつと、どうにか動けないか…？結構、つら、いんだが…C？どうした…」

「すーお兄ちゃん…お爺ちゃんもう息してないよ…」

「なーむなーむ、」

「……………」

「ツイスターゲームで死ぬなお前！死因がダサすぎるぞお前!」

「遺言 私、この戦いが終わったら…戦いに行くんだ…」

「生きてるじゃないか」

「腰いてえ…」

「湿布やるよ」

「ありがとう…」

「……………そういえば忘れてたが、お前、あっちの仕事は？」

「あー…休みつすよ、はい休みつす」

「……………仕事だろお前、早く帰れ」

「いやあ…それはちよつと」

「なんでだよ…」

「とある事情があ「Cくなんかお客さん来たぞー」…………」（立ち上がり）

「……………」

「……………ガシツ（捕まえる）」

「……………離してくださいスーさん、私は逃げるんです」

「説明しろ、離すのはそれからだ」  
「時間がないんです！早く離し「見つけた、流石アネモスさんね、行く場所がよく分かっているわ…ねえ？そう思うでしょう？C？」生徒会長さあん… ナズエミデルンデイス!!」

「滑舌悪くなってるぞ…ロドスの職員か？やっぱりなんかこいつしたのか？」

「ええ、初めまして、ロドスでCと共に働いているロサと申します…貴方は…」

「…スーさんでいい」

「スーさん…分かりました、捕獲のご協力ありがとうございます」  
「ああ、それはいいんだが…何があった？」

「んー…うーん…うぐうー（訳鎖でぐるぐる巻きは酷いんじゃないですかね）」

「…実は」

数日前ロドス 執務室

「…なあCのお人よ」

「……なんです、ドクターさんよ、書類まだありますよ…」

「…あともう少しで…クリスマスだな」

「そつすねえ…」

「……何か予定あるのか？」

「無いっすね…いつも通りどっかでキャンプでもしようかと」

「…クリスマスパーティー「話は聞いたよ！グムに任せてよ！」バアアン!!」

「ドアはもつと大切に扱いましたようフライパン少女」

「あ、ごめんなさい…それより！ドクター！Cのお兄ちゃん！クリスマスパーティーしよー！」

「…話が唐突過ぎて理解が追いつかないんだが」

「私もですよ、でもパーティーって言いましたも、休みやら、なんやら

…あと人数いた方がた「私も同行しよう」真銀斬どっから湧いた」

「なんだか楽しそうな話をしていますね？ドクター？」

「パーティー？…いいですね」

「俺も参加しようかなあ…」

噂は広まり

「……ロドス全体でクリスマスパーティーする事になったと、仕事休みだー！やったぞ!!」

「なおその次の日」

「おいやめろ、しかし、パーティーか…お前も居るから大変な事になりそうだな」

「え？私参加しないよ？」

「え？」

「え？」



「……………」

「…何故だ？」

「夢を配りに…行ってくる」

「クツ、あんまり否定できなさそうな理由を言うな、もう一度聞く、何故だ？」

「いや、私いない方が楽しめるかなって…」

「…お前が居ないと寂しがる奴もいると思うぞ？」

「ないない」

「…アネモス、シヤマレ、W」

「いや、アネモスはともかく、シヤマレさんとWさんは無いぞ」

「仲良いだろう？」

「そんな事ないっすよ」

「まあどうでもいい、参加しろよ？」

「……………だが断る」ボンツ！

「……………Cが逃走！対C捕獲部隊は速やかに捕獲に取り掛かれ！」

『またかあ…』

—  
—

「と、こんな事が…それ以上は辞めてあげて下さい」

「お前は！なんでそんな！面倒くさい性格なんだ！」ゲシツ

「あー！待って目が回る！回る！そんな転がさないで！」

「ハア…行ってこい、ここに居ても暇だろ」

「イヤア！私はここでゴロゴロするんだ！」

「……………少し待ってて、」

そう言って通信機を片手にどこかに行く口サ

「はああ…本当面倒くさいなお前、」

「えー、だってスーさん達とも遊びたかったですし、フライパン少女には悪いけど」

「……………そうか」

「お爺ちゃんまだぐるぐる巻きだー…ころがそー」

「やめい、あ、待って本当に転がさないであああー…」

### 数時間後

「……よしつ、C、大丈夫よ」

「なにがです?」

『他の人の飛び入り参加もOK』と言っていたわよ」

「……嫌な予感がする、ミーシャ逃げる準備だ」

「え?あ、わ、分かった」

「……それは元々敵対してた人でも大丈夫と?」

「そうね、そういう人達を巻き込むのは得意でしょ?」

「よし、じゃスーさん、ミーシャさん、子供達よ、行きますか」

「クツ!嫌な予感が当たった!逃げるぞ!」

「だが逃げられない!これは負けイベントだ」

「無理矢理勝ってや…る…!身体が動かない!?!お前またなんかしただろー!」

「スーさんよ、卑怯とは言うまいな」

「卑怯だわアホンダラ!」

「…さっ!行くわよ!」

「こっちはこっちで切り替え早いのね…諦めましょう」

「パトさんも連行しようかな」

「…あつちにはフロストノヴァが居るからな」

「メツフィー達は…今旅行ってるからなあ」

「しようがないだろ…こっからどうやってロドスの艦まで行くんだ?」

「明日までには間に合わないだろ」

「大丈夫、ね?C?」

「あ、やっぱり私…まあいいですけど、「フワッ

「………やっぱり慣れん、うげえ…」

「酔い止め飲む?めっちゃや苦いけど」

「いらない…」

「相変わらず凄いわね…ミーシャさん、気絶してるみたいだけど?」

「またあ?」

「…ハッ!、ごめんなさい、前のトラウマが…」

「あれトラウマになっちゃったかあ…帰りは車で送ります」

——ドタドタ…ドタドタ!!

「……………C以外のスーさん達はこちらに」

「……………?分かった」

「え、なんで距離トツ（ドツゴオ…）——ツ!!」ギヤリギヤリ!!

次の瞬間何かが高速でぶつかり目の前からCが消え、消えた方を向くとロドスの床を足で削りながら勢いを止めようとしているCが見えた。

「…なんだあれ」

「グムを心配させた代償よ」

「ええ…」

「……………おかえり!」

「ただいまです…フライパン少女……突進力上がってない?」

「そんな事ないよ?、……………それより、なんで逃げたの?」ニコニコ

「……………」

「なんで?」ニコニコ

「ごめんなさい…」

「ごめんなさいは受け取るよ?でもね、なんで逃げたのかは答えてないよ…」ニコニコ

「本当に私が居たら楽しめないと…」

「そっかあ…」

「許して下さい…なんでもします…」

「なんでも?……………うん!グムは許すよ!」

「……………フライパン少女『は』かあ…ねえ?冬將軍」

「……………なんだ?」ガシツ

「……………やるなら全力でやってくれ」

「…フウウ……大雪山!!おろしツ!!!」

「アハハハハ!!!」

暫くお待ち下さい

「……あの、仲のいい事はとても良い事なんですけど……艦内を破壊するのはやめて下さい、前も言いましたけど……」

「いやー大雪山おろし、また威力上がった？」

「まだ竜巻が起こせてねえ、まだまだやらねえと」

「あれただの投げ技じゃないのか!？」

「スーさん、大雪山おろしはかなり応用が効くぞ」

「初めて聞いたんだがその技名……」

「あの！話を聞いてましたか!？」

「聞いてた」

「……スカ：スーさんミーシャさん：私この人達の上司やっていける自信がありません……」

「：慣れた、慣れが大事だ、いずれ慣れる：自分がそうだった」

「慣れ：ですか……」

「私もそう思う……」

「フロストノヴァさん：スーさん：私頑張ってみます」

「その調子だ」

「準備始めますかー」

「飾りつけの手伝いしてくるわねー」

「あ、モミの木切ってこようかな、冬將軍一緒行きます?」

「アタシに切らせる気だろ、それ」

「その通りでございます」

「……私達はどうしましょうか」

「飾りつけの手伝い……?」

「わー！あのお姉ちゃん尻尾もつふもふ!」タツタツタ

「あの人はムキムキだあ!」指差し

「賑やかだなあ……」

「小さな子が居るだけで賑やかになりますね……」

「隊長くあれ、隊長帰って来てないんですか?」

「Cならズイマーと一緒にモミの木切りに行っただぞ」

「なるほど、今ちようど星が削り終わったので報告に」

「削って作ったのか……」

「あ！久しぶりですスーさん、ほら見てください」ビカアア…

「まぶつ、眩し何使って作ったんだこれ!？」

「さあ…ちなみに食べれるらしいです」

「得体の知れない物を食べる気になれないな…」

パーティーの準備は続く、どんな事になるのかまだはつかない

## クリスマス…なんでした（後）

「最初誰言うの？」

「…ドクターじゃないですかね？」

「え、私か？…こんな時なんて言ったらいいんだ…？」

「あ、前に隊長が言ってた音頭ありますけどそれ言います？」

「…クリスマス関係ないか？」

「今更でしょう、なんなら隊長と共に言います？」

「何故私巻き込まれるんや」

「よし、行くぞC」

「決定しちやったかあ…」

『…杯を乾すと書いて！乾杯と読む！』

「今夜は特別バージョンですつてよ！メリイイ…」

「クリスマスだ!!」

「打ち合わせでもしたんですか…？」

「いや全く」

「なんかどっか似てますねあの二人」

「なんでこんな勢いがある乾杯なのか」

「自分で言ったんやで」

そんなこんなで、パーティー始まります。

「この料理…誰が作った？」

「…ハイビスカスさん…です」

「………」

「どしたのドクターとアーミヤさんよ…ハイビスカス料理じゃないっすか」

「ああ…食うか？」

「いただきます」パクッ

「………」パクッ

「…栄養満点って味がしますね」

「………」だな

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「スツゴイ明日元気に動けそうだな」

「くおーい！C！ロドスのドクター！ちよつとこつち来てくれ！

「スーさんの呼び声っすね」

「その言い方なんだ…」

で、呼ばれた方に行くとおペレーター達が集まっており、その中心にはちよつとした高さのテーブルが置かれており、ノイルホーンとマッターホルンが腕相撲をしていた。

「腕相撲…？」

「ええ、腕相撲よ、単刀直入に言うとお賞品のぬいぐるみが欲しいから行ってきて欲しいの」

「ええ…私弱いんですけど」

「私もだが…？」

「孤児院内に置くと喜ぶと思ってな…負けたが」

「あー…それで呼ばれたと」

「そうだ、頼めるか？」

「出来るだけ頑張ってみます」

「…参加ですか？」

「途中参加で申し訳ない」

「いえ、大丈夫ですよ、勝った際の景品はどうしますか？他にもありませんが…」

「熊のぬいぐるみ…待って予想以上にデカかった」

「これぐらいインパクトある方がいいと…」

「インパクトって大事よね…」

そんなこんなで腕相撲マイクを持ったりエータが出てくる

「さあ飛び入り参加して来た私の相方！Cの登場だ！無事三連勝できるのか！さあ賭けた賭けたあ!!」

「賭け事するんじゃないですよ、ここで司会やってたんすね夏將軍」

「おう！楽しそうだから頑張れよく？あっちでもう一人の將軍も見てるからな」

「それは怖い…頑張ろ」

「さあ気合いの入った所で相手の紹介だ！Cと同時期に入った不幸なやつ！が力はロドス内でかなりの上位！マルーウウウ!!」

「どうもー」

「やっほー」

「さっやりますか」

「久しぶりにやるなあ」

「マイペース過ぎないかお前ら？」

「隊の人達と居る時ずっとこんな感じだぞ？見てると」

「そうなのか…まあいいそれではワン！ツー…スリー!!」

バゴツ!!

「……………テーブル壊れちゃった」

「腕持ってかれるかと思いましたがよこつちは…」

「……………早くねえか？」

「やっっちゃったぜ」

「やっっちゃったぜじゃねえんだよなあ…」

その後二回戦のシエーシャを瞬殺し最後の三回戦となった

「扱い酷くないか…？」

大丈夫シエーシャさん、君は優秀な狙撃オペレーターだよ

「おう…誰だ今の」

「さあ、気を取り直して三回戦…なあお前もう少し手加減出来ないの

かよ、喋る事ねえんだけど」

「逆に考えるんだ…喋らなくてもいいさと」

「ダメだろそれは…最後…相…手は…」

『レダですよろしくお願いします』

ザワザワ…

あれってよく見るだれうさぎだよな…？

二足歩行で普通に動いてるけど…ワケガワカラナイヨ

「アーミヤ…？」

「楽しんで欲しいなど…」

「なああれなんだ…？」

「レダさん」



「いや「レダさんはレダさんだ……何も聞くな」ア、ハイ」

『対戦よろしくお願ひします』ペコッ

「よろしくお願ひします」ペコッ

「なんだこの光景…カウント！ワン！ツー！スリー！！」

「私この戦い終わったら…プレゼント配るんだ…」クグッ…

『この戦いが終わったら…スリープモードに入ります』グッ…

「なんなんだこいつらは…（困惑）」

「強いなあ…」

『…貴方も大概では？』

「探せば私より強い人普通にいっぱい居ますよ」

『怖いですね…』ギリギリッ…

「腕凄い音なってますけど？」

『関節部のパーツが悲鳴をあげています、気になさらず』バツッ！バチバチッ！！

「気にしますよ？」

「レダさん…そこまでです…」

『対戦、ありがとうございますました』

「シュヴロー、シュヴロー呼んで〜」

「勝者！C！色々あったが景品はお前のモンだ！」

「ありがとうございますー、あ、夏將軍、これ」

「？なんだこれ」

「マフラー、クリスマスプレゼント」

「あ、おう、ありがとな！」

「ほらその前衛オペレーター！キャッチしろよお！！」

うおっ!?なんか投げて来た

「その医療の人もだああ!!」

な、なんですか!?!

「プレゼントデース、私がここでの初代サンタになる」

「さっきの本当だったのか…」

「来年は新しいサンタが湧いてくると思うから」

「…年齢関係なく渡してるな」

「私にとつたら…ねえ?」

「そうか…」

「て事でドクターも」

「あ、ああ…デツキケースか」

「耐水対爆…色々付けとききました、地味で申し訳ないあと詳しくなくて申し訳ない…」

「いやいや、嬉しいさ…?中に何か…増殖する○のシークレット!」

「なんとなしに入れとききました、嫌がらせかな?」

「側から見ると嫌がらせしか見えんな…」

「じゃまた」

「…なんだ?」

「毎回私に喧嘩腰つすよね…はいプレゼント、イヤホンだけど」

「いつもの事だ、慣れろ…ありがとな」

「いえいえ、私の精神安定剤ですから」

「?なんだ?」

「なんでも、あ、これ後から將軍から渡しといて下さいオープンミトンと本の葉あとティーセットと掃除用のエプロン」

「多い、自分で渡せ」

「私に死ねと!」

「そうは言っていないよな?あ?」

「はいごめんなさい」

「…やつとけばいいんだろ、分かったただし条件だ」

「なんかこの感じ懐かしい、なんでしょ」

「今度模擬戦手伝え」

「天地轟壊と二重の極みでも教えてやるわ」

「なんだそれ?」

「その時になったら教えますよ」

「忘れんなよ」

数分後

「で、私には?」

「Wさんは悪い人ですかイタダダ：脛蹴らないで」  
「その辺にしてやれW：性格悪いって意味ではあってると思うが（ボソツ）」  
「二人とも縛って爆破するわよ？」  
「酷い！お前それでも爆弾魔か！」  
「爆弾魔の風上にも置けないな」  
「あんたら酔ってんの!？」  
「いや全く」  
「少し飲んだな」  
「楽しそうだな」  
「楽しくないわよ…なんで私がいじられなきゃいけないのよ」  
「？元からいじられ役では？」  
「アンタねえ…」  
「そういえばフリーさん、今日はすいません。パトさん呼べず」  
「いいさ、そう言う人だ…」  
「ただパトさんから…あ、これ秘密だった」  
「なんだ？」  
「いやあ…（写真撮って来いと遠回しに言われたとか本人に言えな  
い）」  
「なんなんだお前は…」  
「コミュ障なんで…はいWとフリーさんとスーさん」  
「…なんで料理本と料理器具セットなの？」  
「料理の練習…」  
「一応！できる！わよ！馬鹿！」ガンツガンツ!!  
「うっせえ！前に作らせたならレーションそのまま出して来やがった  
じゃねえか！」  
「作ったら出来たのよ！」  
「いつから缶詰工場なったキッチン！」  
「…キャンプセットか」  
「最近ハマってるって聞きました」  
「遊びで行った事無かったからな…大事に使う」

「安眠枕…ふかふか…だ…だ…」

「フーサーン…まだ寝ないで…」

「もう…手遅れよ…」

「そんな…」

「いやなんでそんな深刻な雰囲気になってるんだ？」

「ノリがいいんですねWさん達…」

「やあやあドクターとアーミヤさん達…シヤマレさんもどーもはいプレゼント」

「…ありがと、明日執務室行ってもいい？」

「うーん…ドクターと私は多分仕事捌いてるからあんま相手できんかもだけど」

「ああ…二人でやってるのが目に浮かぶ」

「…それでもいい」

「お菓子でも焼いときますか」

「早めに終わらせるぞ」

「ガッテン」

「やる気に満ち溢れてますね二人とも…」

「子供が来てるのにずっと放置できるかあ！」

「親かな？」

「子供は居ないんだが」

「私ですよ」

『……………』

「何その目…」

「いやCだと…子供居なくても育ててそうだなと…」

「赤ん坊から12歳ぐらいまで育てた事と6歳を育てた事はあるぞ」

「やっぱり経験あった」

「未来が溢れてるからね、……………じゃ私行くから」

「え、どこにだ？」

「プレゼント配りに」窓枠掴み

「…行って来い」

「いつてきまーす……………メリークリスマス！」飛び降り

「…………バイクが空飛んでる、ソリじゃないのか」  
その後各地に空飛ぶバイクの噂が広まりある種の都市伝説となつた

悲しいけどこれ、クリスマスなのよね！その1

雪が降り始めた夜 とある家

……………チンツ♪

「……………いい出来だ」

一人の男がクツキーを焼いていた、そこへ扉を叩く音

コンコン…コココココツ

「……………」

ガチャ…

「お久しぶりですこんばんはツ!!サンタになりませんか!!」

扉の前にはそんな事を叫ぶカボチャ頭の変人がいた

こんな時貴方ならどうする？

▶？扉を閉める 通報する

ボタンツ！

くアツ閉めないでください、ふざけてすいませんっした開けてください  
パトさん!!

ガチャ

「……………ハロウインは、もう終わったが？」

「……………めんなさい、ハロウインやりましたけど本編もやってないののに書くのはどうかと思っただのと内容おもとりのいいあえずな  
か入ってもいいでしょうか!」ガタガタ

「……………温かいもの、飲むか？シエーヴル」

「お願いします…まじ寒い、指の感覚ないんやけど、雪ではしやぎすぎ  
ましたよ…久しぶりに雪見たから…」

「自業自得だな」

く変人あつたまり中く

「あつたかいなあ…こたつはいいつすねえ…(ゴツツ)あ、カボチャ  
被ったままだった…」脱ぎ

「…それで、どうした、ここまで来るのは随分と、久しぶりだが」

「(ズズツ)そつすねえ…私も話すの久しぶりで話し方忘れちゃった…  
まあそれは置いて、用件はですね…さっき言ったんですけどサン

夕になりませんか？」

「……………クツキーを焼いた、食べるか？」

「あ、頂きます、でサンタの話なんですけどね」

「ホットミルクのおかわ」パトさんパトさん、その話の畳み掛けで話中断させるのは私の仕事です、とりあえず、聞いてくれませんか？」……………聞くだけ聞こう」

「ありがとうございます…んですよ、突然言い出したのはちよつとした理由があつてですね…」

それは去年のクリスマスまで遡る、ロドスでのパーティーの後颯爽とバイクに跨り空を走り抜け移動都市、集落の家々にプレゼントを配り始めたシェーヴルであつたが配り始めて5〜6時間ほど、やつと八割ほど配り終えた頃にふと思つた。

『これ一人で配るのめっちゃキツイわ』

心の底から本や歌に歌われるサンタクローズという存在を尊敬した、一個一個子供達（Cの場合大人にも渡しに行く所がある）にバレンしながら夢も希望も笑顔を配りに行くのだしかも夜の間

「もう少し空明るくなつちやつたもん…しかも年によつては家、と言うか都市が移動してる場合もあるつてマジ？……………これ一人じゃキツ…ああそんな事より配ろ！ヤベエヤベエ…干し肉食つてる場合じゃねえ！これじゃ朝になるう！」ダツシユ

その後なんとか誰にも気付かれず配り終え、その後どうやってプレゼント配りをより早く配れるか、悩みに悩み、最終的には人に聞いたりした

Q. どうしたらいいと思います？

理性回復剤ジャンキー「乗り物をもつと高速化して死ぬ気で頑張ればいいんじゃないか？」

この案は高速化しすぎると事故つたし（実験した）根性論が入つたので却下された。

爆弾魔「やらなきやいいんじゃないの？」

却下。

ツツコミ役のウルサス「ツツコミ役言うな!!」

「スーさんが捌かなきや誰がああのポケの塊を制御できるんだ!!」

「俺に聞くな馬鹿ドクターが!!」

喧嘩になった。

料理の鉄：グムさん「皆んなで配つたらいんじゃないかな！グムもやるよ!!」

グムさんは（受け取る側なんで）だめです、が、なるほど皆んなで…つまり人数を増やせばいいのか、そういえばそうだんで一人でやる必要があるんや、よっしゃ人増やしたろ!!

「と、なったのが昨日でして」

「…急だな」

「そうなんです、急なんですよ、それで人が集まらないのは当然なんですけど…色々道具も衣装もそんな大量に揃ってなくてならばせめて一人でもみちず、一緒に配ってもらおうと」

「今道連れに、と言いかけたな」

「そんなわけないじゃないですか、ちゃんと道具、移動手段その他諸々こちらで準備します、どうか…」

「……………了解した、手伝おう」

「わーい！、じゃとりあえず朝迎えにきますじゃー！」スツ…

パリンッ！

「……………明日の朝？夜…帰ったか」

そんなこんなで朝になり、9時頃

「おっはようございます」トナカイ

「…何故だ？」サンタ服

現在地 ロドス製薬 本艦

「何故ロドスに居る」

「いや、とりあえず、最終のサンタとしての仕事を…」



「トナカイに、なっているぞ」

「おいC、そろっおお!?パトリオットか!?」

「スカルシュレツダー…何が始まる?」

「何って…おいお前このボケC、説明してないのか?後なんでお前トナカイ衣装なんだよサンタ役だろお前」

「いや説明は…あ、子供達とのイベントの事言っただけだった」

ゴツヂツン!!

「頭からなつちやいけない音しましたが!!」 シュウウ…

「説明してない方が悪い」

「そうだ」

「はい、すみません…まあ時間ないんでバツサリバラバラ説明しますと、ロドスで治療受けている子供達とか孤児院の子たちとお菓子作ったりクリスマスの本読んだり…色々して遊ぶイベントです、子供達の笑顔も見れますし楽しい記憶にもなります、ドクターとか社長に言ってみるもんですね」 着替え

「…そういう事なら、協力しよう」

「よし、パトさん、腰とかやらない様にしましょう、子供の元気は底なしですから」

「……………ああ……」

「二人とも…準備はいいな?1…2の…3!」 バアン!!

『……………サンタだああアア!!』 ドタドタ!!

「ぐ、おとおお!!」 グイグイ…ヨジヨジ…

「アハハハ!!仮面を剥がそうとしているの誰だあ!?きみだな!?毎回来たら剥がそうとするのやめようか!!」 ガツシイイ!メリメリ…

子供達の波に巻き込まれた二人をみるスーさんやフーさん達は…

「…群がられてるな…」

「怖いもの知らずな子供だな…あの人があそこまでタジタジとは…」

「よし登られてるな…あの子のあの体勢は!天蓮…ああCが止めたな」

「それよりあの、Cの仮面は取ろうとしてる子達連携が良すぎないか？確実に取ろうという意思が感じられる」

「未来のエリートですね…」

「おーい！皆んなー!!そろそろお菓子作りをはっじめつるよ!!」

『はーい!』

「つぎはかならずとる！」

「それがしめいだから！」

「しよりりか！しかだ！」

「冬將軍の台詞を奪ったらいけません、私の仮面にそんな拘らないでくれ…ほら折り鶴あげるから…」 パサパサ

「とんでる！」

「ほーれとつてこーい」 パサパサパサ!!

「二わーい」

「……………大丈夫ですか？」

「……………これが、若さか…」

「そんな息絶える寸前みたいな事言う人でしたあ？、いや、本当…元気づすよね…元気づさない？」

「あのように、体をよじ登られたのは、初めてだった、……………途中で命の危険を感じたが」

「若い子って凄いいよね…サンタに技かけるんだもん…何故サンタ服が赤いか知ってる子だなあの子は」

「だが…これくらいの方が…いい、」

「そつすねえ…さつ、お菓子作りに行きましょ、アイシングクッキーの方とマフィンの方どっちに行きます？」

「…アイシングクッキーの方に行こう、」

「了解でつす、適度に休みながらしましょう、夜はもつと忙しいですからね」

「……………了解だ」

その後フーさんと共にクッキー作ったり本を読んだりした。

D 「男達のー！」 C 「男達によるー！」 D & C 「遊びー！」  
S 「うるせえよお前ら」

13日の孤児院にて

AM 3:30

ガチャ…コソ…コソ…

「……ZZ」

……ゴソツ…ゴソゴソ…

「……ん…？」 パチツ

「あ、起きました？スーさん」

「起きたのか？」

「……なんだ、その…丸いやつ…」

「あ、寝ぼけてますねこれ、ドクター君」

「3、…我慢できない！1だ！」 パアン!!

「ツツツ!!?うるさっ!!なんなんだ！」

「おはよう御座いますスーさん、元気？」

「元気か？」

「元気か？じゃねーんだよ！今何時か分かってんのか！馬鹿共！」

「外はまだ暗い3時半だな」

「あ、この部屋に防音貼ったんでさっきの紙風船の音は気にしないで

大丈夫ですよ」

「そうじゃない、そうじゃないだろ？なあ？」

「そんな事より、キャンプしに行こうスーさん」

「そんな事？お前そんな事って言ったのか？……いやもういい、で？

キャンプ？お前ら仕事は？」

「逃げてきたんだ」

「馬鹿だろお前ら」

「いやドクター君、その言い方だと書類とか様々な物が嫌になって逃

げたと思われる、言い方を変えよう」

「そうじゃないのか？」

「ちゃんとケルシー先生に許可貰ったんで：明日の朝までには帰って来いって言われたけど」

「仕事、眠れない、理性、が、溶けて、溶け：て：回復、剤を：」  
「ドクター君あれはもう無いって言ったでしょ？昨日で使い切ったから」

「：だからあんなテンションか、：いやそれにしてもこの時間おかしいだろお前ら」

「スーさん、こんな言葉があるのを知っているか？」

「……………なんだ？ロドスのドクター」

「思い立ったが吉日」

「時と場合を選べ、流石に」

「さ、準備したら行きますよー」

「……………ハア：少し待ってろキャンプセットの確認してくる」

「(なんだかんだ付き合ってくれるのか：)」

ドクターは スカルシュレツダーの 優しさを 学んだ!? てつて  
れー／

数分後

「……………で？どこまで行くんだ？」

「とりあえずチーム名決めるぞ」

「え、チーム名？」

「ああ！あつた方がなんかカッコいいだろ!？」

「顔隠れてるのにドクターの目が輝いているように見える：!？」

「少年心を忘れない所いいと思います」

「そうだなあ：DCS？」

「そのままじゃないですか」

「なんで俺だけスから文字取られてるんだ：」

「「スーさんだし(だからな)」」

「どんな理由？」

「どうしても 壊したい シリアスでDCSだ」

「いい名前っすね」パチパチ

「絶対ふざけてるだろ、後無理矢理すぎる」

「さ、キャンプで作る料理の食材でも買いにいきますか、スーさんバイク出せる?」

「問題ない、ドクターは?」

「Cのサイドカーに乗せて貰っている」

「最近ウルサスで買ったのさー」

「…キツくないか?」

「大丈夫だ、逆に楽しい」

「ならいい」カチツ

24時買い物店到着

「いらっ…しゃいマセ（なにあの怪しい三人組!?強盗!?!）」

ザワザワ…ザワザワ…

「何作ります?」

「うーん…BBQか?」

「タマネギ」

「カボチャあるか見てくる」

「トウモロコシ取ってくるか…」

『（違う…この三人ただBBQの為に買いに来てるだけだった!）』

「…：…：…：なんか野菜多くない?」

只今のカゴの中身 ニンジン タマネギ カボチャ 長ネギ ア  
スパラその他キノコ数種類…

「…肉がないな絶対足りんだろこれ」

「骨つきソーセージに憧れがあるんだが…」

「二採用」

「後鶏肉とかも買おうぜ」

「米買ってないぞ」

「いやあ、買った買った」

「会計全部払ってもらってよかったのか…?」

「私達の方から誘ったし当たり前よ、そんなことより店員さんがなんか申し訳なきそうだったのが気になった…」

「ああ…なんだったんだろうな…話変わるがどこ向かってるんだ?」

「んー?湖近くのキャンプ場く知り合いが管理してるとこあつてね」

「キャンプ場か…ならお手洗いとかもあるのか」

「そうそう、安全だしね、今回ドクター君も居るし安全第一で」

「すまないな…」

「いや、大丈夫だこいつが行く所は大抵何か出る所や危険がある所が多いからな…」

「いやー前にスーさんと行った時は熊に襲われて…」

「その後さらに大きな熊が現れて仲良くなつて…あんな体験は一度でいい」

「そんな事あったのか」

「さ、そろそろ見えてきまつせー」

「……………まさか貸切とは」

「今日来るって言ってないんだけどな……………いくら騒いでもいいつてよ木とか燃やしたりせん限りは」

「そんな事しないさ…」

「とりあえず…テント立てますか」

「そうだなあ…」

く設営中く

くアレドコヤツタツケ

くペグハンマー?

くオノハアルンダケド

くハンマーハ!?

「とりあえずできましたね、ハンマーなんていらねえよ斧あればなんでもできる」

「石使えばよかっただろ……………」

「ブウウウメラン!!」 ブンツ!!

「はあ!？」

「……………カカカカツ!!」

「よし、枝確保」

「普通に集めろ」

「いやこれ実はドクター君に頼まれて…」

「この前とあるオペレーターがやっていてな…多分Cが教えただら  
?」

「遠距離攻撃欲しいって言ったから…あの斧をこうっ…(ガシッ)ブー  
メランみたいに戻ってくる投げ方を教えました」

「それ両刃でもうちよつと小さいのでやるんじゃないか?多分」

「できるんだからいいじゃない」

「私にもできるか?」

「帰ったら練習しようか」

「覚えさせんな、…まだ6時と少しか」

「あちらをご覧下さい」

「おお…夜明けか!」

湖の方を見ると太陽が顔を出し始めており水面に反射しとても綺  
麗な光景になっていた

「……………来てよかったかもな」

「なんだかんだ来てくれるから本当いい人つすよねースーさーゴッ  
フウ…」ザツバアン…

「シイイイイイ!!??」

「フウ……………成敗!!」

「この時期の湖まだ結構寒いですけど」ぷかあ  
「知らん」

「ごめんなさい…そういえばこの怖い話でもしましょうか」

「いきなりすぎないか?とりあえず水から上がって来い」

「その昔ここってうまい魚が獲れてですね、よく漁師がここで漁をし  
てたんです」

「進めるのか…」

「漁が終わった後漁師の人達や村の人達はこの湖に感謝して必要数

だけとって暮らしてたんやけど、時間が経つにつれ人々は感謝を忘れて必要数以上とって食べた後を湖に捨てるようになったりしたんですよ」

「……………ん？なんか聞いた事あるなこれ」

「そうなのか？」

「そしてその事に魚達は悲しんでそして怒り狂い……………そしてとある一匹が復讐に燃え、漁に出る人間達を襲い始めたんです、その際その返り血を浴び「お前それゲームの奴だろポ○モンのネタだろ一瞬分からなかったわ」分かりました？嘘つすよええ」

「あー…あんま知らないな」

「少し前のだからな…」

「よししよつと…寒かった」

「もうほら、火つけといたぞ」

「ありがとー…はああったけ…さっきのは嘘だけどこの湖になんか居るってのは本当ですよ」

「え？」

「小さいけど、まあ凄めのが」

「また冗談だよな？」

「さあどうでしょうね、とりあえずなんか作りますか」

「まだ朝だから…軽めの物つくるか」

「なあスーさんとCなんでそんな切り替え早いんだ？めっちゃ気になるんだが」

「ロドスのドクター、一つ教えてやる、大抵あいつがあんな風に言った時はな、なんか居るんだ、直ぐに切り替えて行った方がいい考え出すと疲れるぞ」

「分かった……………何作るんだ？」

「ホットサンドでも作ります？」

「いいなそれ、チーズ入れよう」

「ハムもいいか？」

「好きなもん入れて焼くのがうまいっすよ、ガンガン入れましょ」

男子三人調理中



「いただきますーす」

「いただきます」

「いただきます…うまい、チーズうまい！」

「うーん…できたてはいいねえ…熱いけど舌やけどしたわ」

「毎回熱い物の時やけどしてるなお前…あつつ」

「スーさんも同類になるんだ…」

「お前とは違う！……ん？ホットサンドって6個焼かなかったか？一個ないんだが」

「まだ一個目だぞ？私は」

「私もっすね」

「………気にせず行くか」

「私の分はええから二つとも二人が食べなー私は燻製機組み立てる」

「じゃあ貰う」

「食べ終わったら手伝いに行く、すまない」

「いっすよ別にごゆっくり」

……♪…♪…

続く

D 「知ってたか？」 C 「知らないっすね」 D & C  
「スーさんは？」 S 「主語を入れろよ」 2

キャンプ場 12:00

「昼だ」

「そうだな」

「どうした？」

「水切りでもしますか」

「平たい石探すか…」

「投げやすくて…平たい石…」

「んー…これでいいや」

「おいおい」

「そんな気持ちで勝てると思ってるのか？」

「怖い、この二人ガチ勢や」

「初めてやるが？」

「前に数回やったな」

「私は…前にやってたの見てたぐらいかね」

「寂しいな…」

「寂しさを糧に…私、投げます!!」

「想いが込められてるな…俺から先に行く方がいいか」

「そんな装備（石）で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」 ヒュ…

パシヤ…パシヤパシヤパシヤ…パシヤ

「五回」

「あんまり飛ばなかったな…次誰が行く？」

「私が行こう」

「やつちやえドクター」

「フツ！」 ヒュ…

パシヤー！

「0回」

「これは酷い」

「くっ、殺せ！」

「誰得だよ」

「さ、次何」

「おいおい」

「まだお前がのこってるよなあ!？」

「チツ、バレたか」

「バレない方がおかしいわ」

「子供なら騙せる」

「最低だなお前」

「もちろんです、クズですから………それ」ヒュゴツ……

パツ……シャシャシャシャシャシャ！パシャ………パシャ………

「あ、向こう側着いた」

「音が違う、風吹いたぞ」

「平べったいやつより、強度あるほうが欠けたりしないでいい」

「脳筋じゃねえか」

「あの威力で投げられたら無事じゃ済まないだろうな……」

「これでも抑えてます」

「化け物め……」

「なんとも言う方がいいフハハ」

「もつかい、もつかいやろう次こそは2回は……！」

〜数十分後〜

「2回目は0、次は1、その次は3」

「いい感じじゃ無いつすか」

「……スーさんの回数にも届いていない……!!」

「これが経験差……いや多分筋力の差だなこれ」

「ドクター君は指揮官で戦闘はしないからねえ……バリツバリの戦闘型のスーさんとは色々身体の動かし方違うから……まあ練習あるのみ？」

「くっ、時間ある時に訓練室で鍛えるか…次はトランプでもするか」

「お、いつものババ抜きするかい？」

「いや…トランプタワーつくるか」

「マジで？」

「クツソむずいぞ」

「だからこそ作るんだよ、」

「やりますかあ…」

「……………ところでCとんでもなく今更なんだが」

「待つて待つて、この時に言う？四段目の最後立ててる時に？手震えてるの分かる？」

「どうしたんだ？ロドスのドクター」

「あ、スーさん楽しんでるな？お？次スーさんですからね？分かってます？…ねえ」

「……………なんで名前シェーヴルなのにCなんだ？今更だが」

「…本当今更ですね（だな）」

「え、分かってて言うてたんじゃ無いの？」

「いや、Cと呼ばれていたから呼んでいたり…そう呼べって言われたりしたからな」

「えー…一応先生とかには説明したんやけど…はい五段目スーさん頑張ってる」

「クツソ…」

「確かに普通シはSからだけど私の名前のやつはとある所の言葉の綴りでははCから始まる書き出すと… c h ・ v r e こうなるOK？めっちゃ簡単な理由でしょ？」

「OK…特に詳しい理由はなかったんだな」

「そりゃ無いよ難しい事は考えない、それが私だ…さ、ドクター君」

「あつ」

「あっ」

「二………だるまさんがころんだするか、ハモった!?」  
そんなわけで

「だるまさんが………転んだ!」パツ

「………」ビタア…

「………」ビタア…

「…流石幹部二人………だるまさんがころんだ!」パツ

「………」スーさん持ち上げてる

「………」腕を広げて羽ばたいてる

「…ブオフッオ!…」

「あ、ドクター君笑った、」

「アウトだな」

「ゲームが違わな、ブフツ…ちが、違わないか!」

「そうか?」羽ばたき続けてる

「そうですかね?」持ち上げてドクターの周り走ってる

「まわ、周らないでくれシニール、シニール過ぎるから、ま、まけでふ  
ふっ…アツハツハ!!」

「こんなので笑いが取れるとは…」

「びっくりだな」ストツ

15:00

「貴様…私を裏切ったのか!?誰が貴様を「黙れ」ツ!」

「いっお前のようなやつに育てられた?私を育てたのはお前ではなく  
………母だ、お前が…貴様が殺した母だ!」

「迫真の演技すぎる、お題は「母」と「育てた」しか無いのに」

「全力でやらないとな」

「同じくだ、さ、次はお前だ言うお題は……「伝説」と「ルビー」だ、

嫌な予感しかしない」

「ああ！コイツの名前はルビー！」

「へえ伝説って？」

「伝説上の生き物の事さ！」

「ふーん、伝説って？」

「ああ！それってハネ」そこまでだ、お前それ前もやっただろ」ふーん  
…伝説って？」「やめろ」はい」

19:00

「うーん…ダイヤかパール」

「プラチナもいいぞ」

「探せば見つかる…ちよつと高い所もあるが」

「人気あるんだな…」

「一番はゴールドとシルバーだ、軽く4000超えてる場所がある」

「それは凄いな」

「最新のあの剣とか盾のやつもいいけど…やっぱり前のもいい、どれも楽しい」

「じっくり考えてみるとするか…最初の三匹も決めなきやいけないのか」

「私はダイヤだと草のやつ」

「俺はパールで炎のやつだな」

「…流れる的に水か？」

「いや気にしなくていいぞ…？」

「そうそう…私は三つ遊んで三つとも違うのにしたから」

「もし買ったらパトリオットも呼んで交換とか対戦とかしようあの人もまだ初心者だ」

「ゲームするのか…」

「この前三つ目のバッチ取ったって」

「そうか…そろそろ晩飯つくるか」

「よーし、焼く準備するかあ」

「手伝う」

「頼りにしてまつせ」

「……うんまつ！」

「燻製機に入れてたチーズもいい感じだな」

「燻製チーズが美味しいから好きとよねえ……」

「酒は飲まないのか？」

「飲みます？」

「飲むか、飲み過ぎは注意だけだな」

「そう言うと思つてな……冷して置いたぞ」

「流石ドクター」

「サスドク」

「その略の仕方は初めて聞いたな……よし」カシユ

『乾杯!!』

「……美味しい」

「キンツキンに冷えてやがる……」

「……二人ともウオツカをボトルでラツパつて凄いな私は普通に缶ビールなのに」

「あー……多分血だろうな」

「ウルサスの人つてめつちや酒強いイメージある……蜂蜜で酔つ払うけど」

「前にラジオ中に襲われてたな」

「フライパン少女が直ぐ来てくれて助かった……仮面剥がされる所だったからねえ」

「そんな事あったのか……ああ……なんかあつという間だったな」

「そつすねえ……さつき昼つて言つたばつかだった気がする」

「もう周り暗くなつて……今8時か」

「星出てますよ」

「よく見えるなあ……」

「……またいずれ来るか」

「また三人でですかい？」

「三人でもいいし…大勢でもいい」  
「ならロドス全員とターさん達呼びますか」  
「それはかなり多いな…フェスタか何かか？」  
「そうかもしれないっすねえ…」  
「……踊るか」  
「突然!？」  
「カポエイラでもいい？」  
「格闘技じゃねえか……レユニオンのダンスを見せてやる！」ダッ  
「じゃあこっちはロドスのダンスだ！」バツ  
「え、私どっちつけばええと？」  
「知らん！」  
「アイエ〜？」ギユル…  
「本当にカポエイラ出したぞコイツ」  
「負けてられるかツ!!」  
〈ホッホッ…  
〈アア！トマレナイ！  
〈アツチヨ  
ドツサア！  
「二……フハツ、アツハツハツハ!!」  
「なーにばかやってるんだか」  
「酔い回ってなんでも面白く感じる」  
「分かるー周りが酔つてるとなんか自分も酔ってる気分になる」  
「あー…明日の朝には帰るのか……なんか明日ってなんかなかったか？」  
「えー?…なんかありましたっけ」  
「……知らないな」  
「なんだったっけか…バ…バ…」  
「バルサミコ」  
「バツサバツサ」  
「とりあえずバで思いついた物言うなあー…ば…ば……………」  
「…スーさん？」



「……………zzz」

「寝てる、早っや」

「……………スヤア…」

「アカンこっちも……………寝袋詰めとこ、さ、片付け片付け……………おやすみなさーい」

続く

D 「実はだな…」 C 「全く関係ない事しかしてないけど…」 D & C 「実はバレンタインの話があったりするんだ」 S 「マジかよ」 3

AM 6:00

「……………ふあく…こんな心地の良い目覚めは久しぶりだ…2人はどこ行った？」 がさっ

「あーすっごいバキバキ行ってる腕伸ばしたただけなのに」 バキバキ…

「朝の体操あんまないからだぞ」 ぐぐっ

「おはよう、早いな」

「おはよう御座いますドクター君、そっちも早い気がしますけどね、身体硬いなあやっぱ…」 ペたあ

「地面に腕ついてるから硬くはないだろ…ドクターもシャワー浴びてこい、あっちの方に施設がある」

「炎の匂い染み付いてるからよく浴びてきな服は一瞬で洗って乾かすところから」

「炎の匂いとは…まあ行ってくる」

「戻ったら帰る準備するからー」 ギュルギュル

「そこら辺にあった枝振り回して風起こすのやめろ」

数十分後

「忘れ物はないか？」

「多分ない」

「きつとない」

「はつきりしてくれそこは…」

「絶対ないから安心してくれ！」

「私達を信じてくれ！スーさん！」

「それはそれで不安な言い方なんだよ！」

「アツハツハツハ」

「何わろてんねん」

「気にしないでくれ：お世話になりました」ペコッ

「お世話になりました：さ、帰っていくか」

「フルスロットルで行くぜ！」

「かつ飛ばせ！」

「安全運転で行けよ…」

さらに数時間後 孤児院前

「いやースーさん付き合ってくれてありがとう、急に誘ったのに」

「急すぎたんだわ、次は普通に誘ってくれ」

「フツ…：ウ…：??フツウ…フ…フツツ…アアア…」頭抱え

「ツ!!スーさん!安定剤をくれ!Cが普通とはなんなのかを理解できず爆発する!!早くー!」

「速攻で茶番劇すんのやめろ!朝っぱらから施設の前で騒ぐんじやねえー!」

「…：朝から何してるの?おかえりなさい、早かったわね」

「あ、ミーシャさんおはよう御座います」

「おはよう、元気か?」

「おはよう、元気よドクター起きたら姿消えてた弟にびっくりしたけど」

「あれ、置き手紙残したんじゃけど」

「天井に貼ってあったら気づくの遅れるわよ普通」

「お前…」

「天井にビッシリ紙が貼りつけてあって赤い掠れた文字で『スーさんは預かった』って書いてあったら分かるわよええ、別に叫んだりしてない、本当に」

「お前…」

「すませんっした」ドゲザー

「別に気にしてないから、それよりこれあげる」

「…：お菓子?」

「なんかしたか?」

「迷惑しかかけとりませんね」

「お前はともかく俺は巻き込まれた側だ」

「バレンタイン知らないの？」

「ばれんたいん？」

「……あー思い出した、昨日思い出せなかったが」

「聞いた事はあるな……Cその反応は本当に知らないのか？」

「バレンタイン……あー……あの男性が女性に花渡す日？あれ？なんだっけ」

「最近では家族間や友達の間、恋人同士などでプレゼント交換などして感謝やら伝える日だな」

「今ドクター君調べてきたでしょう」

「ああ！」

「うーん……毎年この時期は別の場所に移動したりしてたから全く記憶なかったなあ……ちよいとまっすぐださいね、お返しをば……」

「別にいいわよ、知らなかったんだから用意もしてないでしょう？」

「いや確か後で食べようと思った……あつた！バームクーヘン！」

「ええ……」

「すみません……これみんなで食べて下さい……」

「何層作ったのよ……結構大きいじゃない……」

「いやあ、いっぱい食べようと……作っというてよかった」

「普通作ろうと思わねえよ」

「極東の方じゃ常識だよ（適当）」

「そうなのか……（純粹）」

「さてさて、そろそろ帰りますケルシー先生に怒られる」

「怒ると怖いからな」

「帰ったらドクター君は大変かもですね」

「ああ……大変だな（仕事）」

「自覚ありとはビックリで」

「なんだろう……すれ違いを見た気がする」

「気のせいよ」

「えー、こちらCよりロドスに、Cよりロドスに帰還しました」

『：はい、おかえりなさい』

「無事帰れてよかったな」

「帰る事に関しては安全はピカイチですから」

「さて、一応報告しに行くか」

「何処だっけ：」

「そろそろ覚えろよ：」

　　～二人雑談しながら移動中～

「：帰ったか」

「帰ってきてしまいました」

「なんと帰った」

「そんな言葉遊びしている暇はない、報告が終わったのなら出ていけ」

「私達嫌われてる？」

「だろうな」

「だろうなってあんた：」

「：：：聞こえなかったのか？」

「あ、すみません」ガチャ

「で、ちよつとご飯食べに来たわけだけど：：：ドクター君人気づすね」

「腕に収まらない：後シルバーアツシユから貰った物が怖い」

「箱から高級感あふれてますからね、シルバーアツシユさんって本当すべーいね、お金持ちだね」

「語彙力無くなってるぞ：袋あるか？」

「紙袋ならありますよ」

「便利なな本当：」

「でも一家に一台はいらないでしょう？」

「それは：：：：：どうだろうか」

「その反応、：どっちなの」

「おーいC」

「おはようござまーすりエータさん」

「おう！おはよう！お菓子くれ！」

「ハロウィンじゃないです今日」スツ

「……………いや冗談だったんだけどくれるのな」

「キャラメルだけどネ、今日は友人だったりに感謝を伝える日なんですよ？」

「まあそう…だな?…そうかキャラメルか」  
「?」

「リエータ、多分C意味とか考えてないぞ……………こいつ、バレンタインの事全く知らなかったからな」

「あー…よし、ラジオの準備するか」

「え、今日する日じゃ「だからどうした」最近生意気になったね貴方後で訓練しようか?え?」

「あ!おかえりなさい!ドクター!お兄ちゃん!」

「おー、フライパン少女、おはよう、ただいまっす」

「さて、お兄ちゃん、正座しよっか」ニコニコ

「……………ドクター君、私今日が命「早く」はい」ストツ

「……………グムね、確かにドクターを休ませたりするのに張り切るのはいいと思うんだけど先生にしか言わずに急に消えるのはいけないと思うんだ…それとね……………」

「なんでCってグムに逆らえないんだろうな」

「前に仕事中に聞いた時はなんか本能的に逆らったらいけない気がするらしい、言う事は大抵聞くそしてめっちゃ甘い」

「対C対抗最終兵器グム…」

「語呂悪いな」

「……………分かった?」

「はい…分かりました…ちゃんと他にも言ってから行きます…」

「うん!グムだけでもいいから言っつてね!約束!」

「約束…(多分) ちゃ「お兄ちゃん?」Yes, ma'am」

「よしっ!そういうえば新しく出そうと思ってるデザートがあつてね……………一緒に味見してくれる?」

「え、マジですか?行きます、美味しいから」

「……………上手い」

「ああ、誘い方が上手い、あそこまで誘えるのもあの純粹さなどがあるからだろう」

「あれを見ていると何故かCさんが悪い人に騙されないか心配に……………別にありませんね、その部分に関してはわざと騙されて内側から壊すような…」

そう言うのはさつきバッテリーと会い、無事(?)に手作りを渡す事ができた我らが社長アーミヤである、その言葉に周りは…

「多分振り回して悪い奴がいい奴になったり…」

「全てツツコミ役になる」

「新手的アーツか何かか?」

「その可能性もあり得るかも知れませんね」

「アーミヤが肯定した…!?!」

「もうCさんに対しての色々な事を考えるのをやめました」(遠い目)

「医療部の何人かはまだ身体検査とか諦めてなかったりするからな…確か限界を見てみたいとかで」

「目が少し怖かったです…」

「そんな事を言っている間に……………あれ、なんか問い詰められてないか?」

「説明しましょう」ズウン…

「……………心臓止まるかと思いましたが、急に現れないで下さいアネモスさん」

「すいません、悪戯したくなりました、では映像付きで説明します、レダさん」

『プロジェクターモード』ピカア

そうレダ(小型ぬいぐるみバージョン)の目から光がそして、壁に映像が映し出される

「(何故当たり前のように撮っているのでしょうか)」

『(面白そうだったので)』

「心を読まないで下さい」

『私はアーミヤの一部のような物です、このぐらい手を取るようになります』

「まず、最初にごく普通にのんびりとした会話が繰り広げられていました、ええ最近作った物のアレンジの話やごく普通の雑談です」

『そっかあ…それ入れるとそんな味に…』

『グムもびつくりしたんだ！それでね！』

「楽しそうですね」

「ああ何故あんな事になったのか見当もつかない」

「問題はこの後です」

『キャンプ楽しかった？』

『楽しかったつすよ〜男だけでのんびりゲームの話とか後二人が寝た後のたたか、あつなんでもない、とにかくBBQと…あの、ちよつと…なんですか？』

『……誰かと戦ったの？』

『いや、そんな事あるわけがないじゃないですか平和にその後後片付けして寝ましたよ』パッ

『…………お兄ちゃんつて嘘つく時に右手を左腕を掴む癖があるよね』

『…………戦闘しました、なんか変なのが来たんで相手しました、でも無傷で』それも嘘、無傷の時は言わないもん、無傷なわけもないし』なんでそんな私の事詳しいの…？びつくりだよ…？』

『正直に答えてね、…………どのぐらい怪我したの？』

『いや、あのちよつとだけです』後退り

『それでも答えて』近づくと

『…………』後退り

『…………』近づくと

「その後、後退をし続け壁に到達、その後腕を掴まれ壁に押さえ込まれた主人、そして抑え込むあの光景の出来上がりです」

「え、戦闘してたのか…」

「気付かれないよういつもの隠蔽をしたようです」

「私を狙って来たのか…？」

「主人が戦闘を承諾する程です、余程の理由があったのでしよう」



「…………五感を全て奪われた状態で両腕を4回、片足を6回、多分心臓を26回千切られて、後は数えてません…………(待って強い、動けない、骨ミシミシいつてる、あ、目すっ(い暗い)」現実逃避

「…………すごく強い相手だったんだね、お疲れ様」

「…ありがとうございます」

「どうなったの?」

「適当に相手してたら満足したみたいなんで帰っていきました」

「怪我は残ってないの?辛くない?」

「大丈夫つすよ、慣れてますんで直ぐに治りました」

「そんな事に慣れないでよ、駄目だよ、慣れたら」

「あ、待ってそんな目しな「おい」ああ…よし」

「なに、泣かせてんだあ?覚悟は出来てるよな?」

「思いつきりやってくれ、覚悟はいつでもキマってる」

「…………まあ今はいい、後から説明しろ、じゃあな」

「冬将軍が…優しい…だと?」

「…よしっ、お兄ちゃん!食べに行こう!」

「あ、はい…………今度あの湖のやつにリベンジしに行こ」「駄目だ(です)

(だよ?)」「…………駄目?」

そんなこんなでバレンタインは終わり、Cは Gum と 飴細工を あし  
らった チョコ ケーキ を 食べた 後に 医療部 に 投げ 入れ られた、 ついで に  
事情 聴取 が スーさん を 交えて 次の 朝まで 繰り 広げ られた という。

## ドクター、現実逃避するってよ

ロドス執務室 0:00

カッカッカ…パララツ…カキカキ…カッカ…コトン…………

「あゝあゝ…hey、ゾンビ一号」ギィ…

「なんでしょ薬漬けゾンビ二号」コポポ…

「誰とは言わないが…凄いいもふもふしてそうだよな、あの尻尾」

「えーと今はく丁度0時つすか、やりましたね今ここに籠って仕事し

て3週間目です、合計睡眠時間は一時間、凄いつすね」ゴクツ

「なんでイベント書かないか理由か、時間が色々合わないかららしい」

「おっと、ドクター君今なんの話しました？かなりメタい事さらつと

言いましたよね」

「最近口の中に麺と粉末スープ、お湯を入れて作るのが流行りなんだ、

凄いい早くご飯を済ませられるんだ」

「それ私もやって一緒に口に氷突っ込まれたでしょう」

「と言う訳で、だ一つ提案がある、乗ってくれるか？乗れ」

「凄いい、話聞かねえ」

「この地図を見ろ」ガサツ

「はいはい、館内の地図…色々と書いてありますね、えーと…四時間お

きアーミヤ執務室前巡回…その他オペレーター行動範囲だったりそ

の時の時間……これってドクター君？」

「毎日暇潰しにコツコツ書いている全員の行動ルーティンのメモだ、

この時間ならアーミヤは部屋に戻り今日のまとめに目を通して

時間だ、食堂には明日の仕込み、それか少し小腹の空いている数名が

夜食を作っている可能性が高い…だから今回は食堂、社長室を少し遠

回りするルートで甲板にでる」

「流石指揮官、色々把握してる、で、もしかして脱走しようとしてます

？この前休暇取ったばかりでっせ」

「数ヶ月前の話だ、それからはほぼ睡眠無し、休み無しで色々立て込ん

でそれが片付いてその後、…また部屋に缶詰だ、C、お前頭働いて

ないな？日付変わって今日で一ヶ月と一週間だぞ？」

「ハッハー、私は正常ですよ」

「正常ならいつもココアにミルクと砂糖足すお前が何も入れずに飲む訳ないだろ」

「甘いのだいすき、……………責任は？」

「もちろん、…この私が持つ」

「更に詳しく聞きましょうかね…多分帰ってきたら色々怒られそうだけど」

「あーあー何も聞こえない…この作戦はお前の力が必要不可欠だ、頼むぞ」

「我が指揮官、ドクターが為なら、何なりと」

— ……デダナ……………キケン……………テマス……………ソツ……………タノ…

現時刻 0:30

ガチャ…ソ…

「…作戦開始」

「ワクワクしますね…」

食堂

……………カチャ…

「…お兄ちゃん？」

社長室

ピクツ…

「……………ドクター？……………レダさん、展開準備をお願いします」ガチャ

『了解』

廊下

「……………本当に足音が消えているな」

「そう言う細かい術は苦手なんすけどね…お札で簡単だけど…ちよつと耐久がね……………ドクター君」

「……………バレたか？」

「足音的に…小柄……………ドクター君よ」

「なんだ？」

「走ろうか」

ドツ…ドツドツドツ!!

『ドクター!!』ドツドツ!

「ギャー!!綺麗なフォームで走ってくる!!怖いな!」コンコンコンツ

「社長室から結構離れてるのになあ、感知早くない?」スタコラ

『私からは逃げられませんよ!』

「ああ分かった、愛か」納得

「何故そこでツ!愛!?!」

「なっ!」ピタッ

「よーし今だ階段上がれー」

「何故か知らないけど止まってよかった!」

コツコツコツ!ガチャン!

「……………こんばんは!お兄ちゃん!ドクター!」

「アーウ、こんばんは、ムーさん今日は星が綺麗ですね」

「何故、ここに? (しまった、完全に想定外だ、これではCの動きが完全に停止する可能性がある…警報を鳴らされ、すぐにでもここに捕獲部隊が来るだろう…どうする…)」

「…お兄ちゃん?少し前の約束…覚えてる?」

「外に行く際は誰かに一言言っ出て出ると、言われましたね、はい」

「また、言わずに行こうとしたの?ドクターと一緒に…約束破ったら…」

「いえいえ、ムーさん、ちゃんと私はテープを流すように仕組みましたよ、皆さんが起きるぐらいの時間に放送で……………あれなんかこのやり方前もしたような」ギユ

「……………テープ?まさかお兄ちゃん、また、何処かに消えちやうの?」

「いえいえまさかまさか、ドクター君も居るし今帰る場所はここです  
のでー………ごめんなさい!!」パキッ!

ガシャァン!!

「……………逃げられましたか」

「うん…逃げちゃった」

「……………何処だ？」

「あー……………帰りたくないわあ……………あー……」

「C、しつかりしてくれ、何処なんだ？ここ」

「あー…場所決めずに適当に来たからなあ……………亀の上じゃない？」

「……………亀？苔の生えた岩の上だ…ろ？」グンツ

ドクターとCが大の字寝転んでいる岩が突然動き出し、目の前の岩の下部から何かが出てくる

「…亀か、亀だな、デカすぎないか？」

「まあこんだけデカイのは歳取って歴戦なやつだけだからちよつと珍しい、運いいっすね」

「ここは……………何処なんだ？」

「山」

「山……………山？」

「山です、広さ的には……………ウルサスの倍倍ぐらい？」

「……………疲れてるだろ、そんなのあつたら」

「普通に来れる場所じゃないんでねえ…ほら現実から逃げるにはいい場所でしょう？」

「私が来てもよかつたのか？」

「奥に入らなければ特に、奥の方はヤバいのがいっぱい居ますから一番安全な……………場所つすよ」目逸らし

「……………なら今日の前に居る巨大な鳥はなんだ？…この亀よりでかいぞ？」

「うーんギャ〇スみたいなやつだあ、おつかしいなああんまりここには来ないはずなんだけど……………まあこんな事もあるかあ」

「いや、逃げないのか!？」

「あっち完全にこつちを餌として見て…る…Zz…」

「おい、寝るな!どうし（ゴオオ…）…なんだ？」

ゴオ…ボンツ!!

ギユアアア!??

「火吐いた…？」

「さつき言いましたでしょう？歴戦の個体って、そりゃ火ぐらい吐きますよ」

「私の知る普通の亀は火吐いたりしないんだが……食ってる!？」ガリ、ボリッ

「亀って雑食つすよ？」

「あ、ああ……そうだったか……すまない、少し寝る」

「おやすみなさい」

……そろそろ喋ってもええかい？

「すいませんねえ……これ以上の混乱は逆に疲れるんで」

なんか色々あったようだのお、あん場所でええのか？

「お願いします……すいませんけどその後ちよつと伝言頼めます？ちよつと野暮用で色々必要な物採取したいんで」

はいよ……わざわざ言わんでも取ればよかに

「それでなんか言われてもねえ……後で身体拭きましようか？」

別によかよ、最近ええ感じに苔生えてきた、いいカツコじやろ？

「そつちの目線で言われても、こつちは人の目線なんでいい寝心地としか言えませんよ」

人じゃなかる

「身体と表の考え方は人ですよ」

そうかい、………食うかい？この鳥、硬いが美味しいぞ

「一口貰います」

いや冗談だったんじやがの……ほれ……ももじや食え

「んー……硬いねえ」モグモグ

ハッハ！この硬いのがええんじやろが！

数時間後

「………んんー……はっ！しぐ……違っ……こは……ベッドの上？確か……亀の上に住たような……そうだ、Cは「呼びました？」居たのか」

「ご飯獲ってきました、ほら魚」デーン

「なんかその魚の腹爪痕あるが？」

「熊さんに分けてもらったんであ、肉もありますよ」

「その肉は？」

「亀に」

「まさかさつ「さ、ご飯にしますかシンプルに焼きましょ焼きましょ」肉の方は少し遠慮しておこう」

「ちよつと硬いけど美味いっすよ」

「食ったのか、なら安心だ頂こう」

「私だから安心とは限りませんが大丈夫です?」

「怖い事言わないでくれ…」

「大丈夫っすよ毒はないんで」

「……………いつもより落ち着いてるな、C」

「休みの時は私こんな感じですよいつも、後この家のある上に鳥が巣つくってるんでねえ騒いだら迷惑でしょう」

「ちなみにここは?」

「私を作ったツリーハウスですよ」

「ツリーハウスか…」

「なんかツリーハウスっていいと思いませんか?」

「分かる」

「でしよう?」

「外から見て見てもいいか?後からでいい」

「もちろんですとも、ただ下手くそだから歪だけど」

「それからだな……」

次回に続く

ドクター、現実逃避してるってよ

「笑う門には福来る〜♪」ザクツ、ザクツ

「水汲んで来たぞ〜、そろそろ休もう」

「そつすねえドクター君、：肩にツチノコ乗ってますよ」

「え、：これツチノコって言うのか？小さくてかわいい「美味しいよ」Cお前この可愛いの食ったのか!？」

「!？」↑これにはツチノコもびつくり

「いやなんか食ってみろって言われたから食っただけで：」

「何に食ってみろって言われたんだ：」

「犬」

「犬」

「正確には狼」

「もうCがなんなのか分からなくなってきたよ」

「ただの変人です」

「なんだただの変人か：」納得

シェーヴルとドクターがこの山（森）に来て既に三日経ちその間二人はツリーハウスを拠点に畑を作ったり川で釣りをしたりで全力で羽をのばして遊んでいた。

一日程前の事 拠点

「はーい一日たっぷり寝てご飯食べたドクター君にちよつとここの説明をば」

「よろしく願います」

「って言っても奥の方入っていかなかったら死ぬ事はそんな無いよって言う昨日言った事ぐらいなんだけど後私が山山言ってるけど森って言った方が多分正しいからとりあえず覚えておくように、何か他質問は？」

「来る前に完全に深夜だったのにこっちに来た時太陽が登ってたのは何でだ？」

「昼夜逆転してるから（ぎっくり）他は？」

「奥には何がある？」



「この森の主的なの居る、周りの奴らが容赦ないから行かないでつて理由です」

「大体OKだ、今いるこのあたりが一番安全な領域なのか」

「そうそう、大体は大人しい草食動物だったり居るだけ、肉食な奴らは熊とか狼とか虎諸々しかいない」

「色々居るな…昨日見たのは？」

「あれは結構珍しい方、多分若いのが縄張り争いかなんかに負けてこつちに逃げてきちゃったんでしょ、あ、ちなみこの辺の縄張りはあるの亀がボス格つすね」

「火を吐くあの亀か…それより、ちよつと、聞いていいか？」

「なんでしょ」

「なんで普通に熊か部屋の中居るんだ？後蛇に巻き付かれてるぞ」  
グウ…グウ…

「出入り自由ですから、触ってみて下さいよ、あつたかくていいですよ  
熊」ミシミシ

「いや、大丈夫か？骨がミシミシ言ってる音が聞こえるぞ？」

「なんかここに来ると毎回この蛇に縛り上げられるんですよハッハッハ、慣れたものですよ」ミシミシミシ!!

「締め付ける勢い強まったが!？」

「そろそろ多分離してくれる」

シユル…：チロチロツカプツ

「上の鳥は食べちゃ駄目だぞ」

…シユル…シユル…

「……………噛まれてたが毒は無いのか？」

「ここの森っていろんな種類の動物が住んでてさ、蛇も沢山種類が居るんすよ」

「ああ」

「さっきの蛇は危険を感じると攻撃的なる種類らしいんです」

「それで？」

「ええ、あの蛇の特徴はなんと言つても危険を感じた際見える名前の由来でもある口内の黒さ、そして強い毒」

「…さつき少し噛まれてたよな？ちよつとだから毒は…」

「いやキツチリ入ってますね」

「大丈夫なのか？」

「毎回つて言ったでしょう？」

「……………苦勞してるな」

「でもしかし何故噛むのか…全然威嚇もして来ないのに…」

「あれだ、気まぐれで」

「そんなので毎回殺されるだなんて驚きだあ…」

そんな簡単な場所の説明があり今

「ここぐらいの広さぐらいなら走り回るのに充分かね」

「広い平原だな…こんな場所もあるのか、本当に広い」

「さて、ドクター君の願い事を叶えましょうか、馬に乗りたいとは中々小さい夢で」

「乗る機会が減多にないんだ…他に思いつくものもなかったしな」

「いざなんかつて思うと思いつかないよね〜分かる〜」ピーー

「その笛は？」

「馬呼びの為のやつです、元々アネモツサン呼ぶ為のやつですけどね、あんま使ってないんで久々につかつ——なんだあの大群」

「なんか牛とか色々混ぜてないか？」

「この笛のせいかなあ…よし、ドクター君」トンツ

「え、なんだ？何故肩に手を置いた？」

「頑張つて」クルツ、スタタタ

「おつと、死ぬ時は一緒だ」ガツ

「死ぬのはあんただけだ」

「くそつ！そうだった！」

「アツハツハ…あれこのままだとあの大群森突つ込むなヤベエ、……………うーん……………ドクター君ちよつと耳塞いでてねー」

「何するんだ？」

「うーん…ちよつと誘導？よし、スウー…ハア…スウー…」

息を深く吸い込み、吐くを繰り返す、ドクターを後ろに下がらせた

後少し仮面を上にはずらす仕草をするC、そして次にCが発した言葉は  
……

「カーデイさんの真似でワンツツ!!」

……こちらに向かっていた大群が声の聞こえた場所と違う方向に曲がっていく、その大群から一匹の白い馬がこちらに走ってくる  
「ありがとく来てくれて、大声出してごめん、それでも来るって強い子だなあ」ヨシヨシ

「耳がキーンとする…なんて言ったんだ？」

「とあるオペレーターの本似を…ほら馬さんですよ、ちよつとお待ちを鞍つけます」

「何から何まですまない…大人しいな」

「大人しい子選びましたので、暴れ馬の方が良かったです？牛の方が乗るなら一番暴れますよ、ちよつと撫でてみて下さい」

「あ、ああ…：噛まないか？」

「ご安心を」

「…：温かいな」サラツ：

「そりや生きてますから、さ乗りましょうか」

「ワクワクするな…」

数分後

「お、おお、高いな」ズンツ：ズンツ：

「頭から落ちたら痛いですよ」

「頭のこれつけていて良かった…Cは乗らないのか？」

「乗ってもいいんですけど…乗ったらなんか、アネモツサンが不機嫌に…」

「そうなのか？」

「久しぶりに会った時になんかねえ…特に何もとか言う割にはなんか凄い不機嫌で」

「不思議だな…アネモスはどんな馬だったんだ？」

「えー曖昧な記憶ですけど、とりあえずでかかったです黒い毛並み綺麗な紫目、確かなんて名前かは忘れましたがその種類の馬でもちよつとデカく育ってたって本人から」

「そうなのか…」

「今でも大事な家族ですよ、………走ります?」

「いや…まだ怖いからやめておく」

「そうですかい…ゆつくりおりにてくださーい」

「テーマパークの従業員か何かか…?」

「いつかバイトでいいかも、………それいけ」パシッ

「乗せてくれてありがとう!」

「さてドクター君よ」

「なんだ?」

「ご飯でも取りいくかい?」

「いいとも」

「なら先に川についた方が勝ちで」クラウチング

「え、それは聞いていないんだが「ドン!」話を聞け!………早いな、

もう消えた…(グルルツ…)………終わったな、

ウワアア!??

〜一時間後〜

「いやあ、ドクター君動物に好かれてるねえユキヒョウってこの辺り

いたっけ…」ビチビチッ

「……好かれてるのか?ヒョウに、好かれてるのか?」ペロペロ

お腹を見せて寝転がるヒョウとバイザーを舐めるヒョウの二匹が

今ドクターを囲んでいた

「まさか背に乗ってやってくるとは思わなかったですよ、軽いんすね

ドクター君」

「このモフモフ…たまらない、癒される…」

「あ、駄目だ陥落した、ドクター君の理性が尻尾のモフモフで崩され

た」

「Cもどうだ?…癒されるぞ?…あまり味わえないふわふわだ…」

「うーんごめんけど…こっちはこっちでねえ…」ギョウウ…

4メートルはあるなんとも大きな熊に座った状態で抱かれ、そしてCの腕の中にも小熊が抱えられている、少しシユールな姿がドクターの目の前にあった

「私よく熊系に凄い関わってる気がする」蜂蜜かけられ

「気のせいじゃないか？」もふもふ

「そうかねえ…」ベロオ…

「後から水浴びしてから部屋に上がってくれよ？」

「ちゃんと洗ってから行きますよ、あ、この蜂蜜美味しい」

「落ち着いてるな…」

「……………ちよつと寝ますか…」

「…そうだな…おやすみ…」

「おやすみなさい……………良い悪夢を！」

「やめてくれ…」

「まあ悪夢見てもこつちで食べますから安心してお眠り下さい」

「あ…あ…おやすみ……………」

「……………スヤア……………」

その後起きたら全身涎と毛と羽塗れだった模様、二人から一言

「もう森の中で寝るのはやめとこう（ときましょ）だがもふもふは正

義だ」

ドクター、現実逃避してたってよ

ロドスから脱走して一週間お昼を少し過ぎた頃、ツリーハウスの窓際にて椅子に座りツチノコを撫でるドクター

「いい天気だな…空気もいい、心が休まる…向こうの山が動いてる気がするが気のせいだな、そうに違いない」

大自然の空気を吸い、遊び回り、精神的にも肉体的にも回復してきたドクター、様々な普通では見る事はできない風景を楽しみながら窓を見てのんびり過ごしている、ちなみCはと言うと昨晚ご飯を食べた後

『ちよつと用事で出てきます、ドクター君一人でも大丈夫そうですし、じやいってきまーす』

『唐突〜』

と言い残し木刀を背負って窓から飛び出して行った、なので今ドクターは一人であり、安全も考え家にでのんびりしているのである、太陽の光を浴びて、身体がぽかぽかしてきてこのまま寝てしまおうかと考えるドクター

「……………本当に平和だな…」

最近の自分の生活と云えば、夜遅くまで作戦行動、書類など様々な仕事を捌き……………思えばあの一か月の缶詰は急に始まったその前に休暇を一日とり遊びに行ったりしたが、その次の日などの日はそろそろ限界…となった時にはアーミヤや他オペレーターなどに休むよう言われ、あそこまで部屋に閉じ込められる事は無かった。

「……………そういえば、仕事中にアーミヤ以外の人物に会ったか？」

そうだ、Cが来たのも四週間後急に部屋に来て、人が入ってきた時は飲み物を取りに行くのと姿を消して、私だけになると入ってきた、……………アーミヤが、私を閉じ込めて――

バンツ!!

「ドクター君や、勝ち取ってきましたよ」

「ツ!!……………Cか、勝ち取ってきた？」

「後一週間休めます、ほらアーミヤ社長とケルシー先生のサイン付き」

ガサツ

「……………本当だな、……………なあC、やっぱり何か、おかしかったのか？」  
「そりやおかしいでしょう、いつもはドクター君の限界一步手前ぐらいで休ませたりしてたのにあんな缶詰、……………ドクター君に言つときますが私が行く数日前からドクター君の部屋立ち入り禁止だったんですよ？」

「そうなのか？」

「そうなんです、しかも社長から大事な会談中だとかなんとか理由を説明されて…実はと言うと社長さんとかしか会つてないとか思つてるかもですが、あの白い社長さんとかも色々張つてて入るのめっちゃ難しかったんですよ本当」

「シルバーアツシユもか……………よく入れたな」

「そこはまあゴリ押しで、まあ今回の事社長さん達を責めないであげて下さいね、ドクター君よ、悪いのはそうさせたアレが悪いから」

「アレ？」

「そう『アレ』、ドクター君よ、あんたさんはアーミヤさんとかロドスに必要な人なんですよ」

「……………」

「感情だったり心、色々な気持ちにそれは憑いてそれを増幅させる、不満だったり怒りだったりのやつ、ざっくり説明省いて言えば今回は守るって事について、ちよつと暴走しちゃったんですよ、それだけ大事にされてるって事です、Wさんはドクター君の事なんか嫌ってるけど」

「……………そうか、用事はそれを片付ける事だったのか？まさか木刀で頭殴つたりしてないよな？」

「一応そうです、追っ払う事はできましたんで、ついでにその事を色々と社長さん達に教えたりなんだつたり……………あ、社長さんからごめんなさいとかの謝罪の文きてますよ、休みはケルシー先生達に精神的な安定や様々な休息の為に休みくれて社長とかの援護ありながら勝ち取つてきました、……………疲れた…久々に色々やった…ぐえー」ミシツミシミシ!!

「……………C、一つ我儘いいか？」

「できますよ」

「……………まだ何も言っていないぞ？」

「私、人の心読めるんであ、ごめんなさい嘘です少ししか見れません」  
「少し見るだけでも凄いやと思うが」

数時間

「あー…久しぶりですねこの山」

「レユニオンでの訓練以来ですねこの山」

「それちよつと私の事馬鹿にしてない？」

「そんなそんな」

「ドクター…ごめんなさい、Cさんから聞きました、そ「いや、こちらこそすまなかつた」…え？」

「こつちも、こちらの事だけを考えて行動していた、今度からは少し考えて行動をする、……………ただ仕事の事は少し手加減してもらおうと助かる……………」

「……………ふふつ、分かりました、ドクター……………凄く自然豊かな場所ですね」

「ああ、不思議な場所だ、あつちを見て見てくれ、山が動いてる見間違いないじゃなかつた」遠い目

「隊長こんな場所に家作ってるならあの時言っておきよ、荒らしに来たのに」

「隠れ家とかは普通いわないものでしょう？」

「確かに、この畑は？」

「ドクター君と一緒に作った、ほれ採れたて野菜、土がいいから三日前に植えたトマトがもう育ってる、食わない食わない」

「それ土がいいとかとは全く違う話じゃないですか？」

「土がいいんだ」

「ああ話聞かない感じですね了解です……………美味しい」

「でしょう？……………ほらアネモツサン、にんじん」

「もういただいています」

「流石早い、何本目？」



「4本目ですね」

「遠慮無いなーそういう所いいっすね、さてドクター君とアーミヤさん…プライベートだからアーミヤさんでいいよね？うんいいっすね、遊びますか」

「よろしくお願いします！」

「ああ、自分達は護衛ですか？」

「そうそう、ちよつとは詳しいでしょ？後移動の足に」

「了解です、最初はどこに？」

「私達が遊んでいた順番でいいんじゃないか？」

「そつすね、じゃ、川まで釣り行きましよ、その少し先の滝壺でヌシ釣りもいいかもですよ、あのヌシめっちゃ物知りですからたのしいですし」

「喋るんですか!？」

「喋るし二足歩行、フナの体に足二本生えてるみたいな」

「想像したら気持ち悪いんだが」

「話しやすい魚ですよ？」

「それを釣るってさつきお前言ったが？」

「すんごい元気に飛び出てきますよ、サツいきましよ、アネモス、アーミヤさん背負ってあげて、ドクター君は私とグーニーズどっちがいい？」

「グーニーズ：お願いできるか？Cのは速すぎて酔うんだ…」

「了解しました、隊長、アネモスさん、少しスピード緩めてくださいよ？」

「速さを追い求めているので」

「我が道をゆく、引かぬ媚びぬ、省みぬ、ちなみにアネモスは私より速いですよ」

「グーニーズさん、私もそつ「定員オーバーです」そんな！」

「しつかり掴まって下さい…：…風になります」

「待って下さい！スピード落としくつ…」

「…：…消えたな、三人とも」

「…：…なるべく速く走ります、揺れますよ？」

「ああ…行つてくれ！」

数分後

「木々が、凄い速度で通り過ぎていって、凄い風で、そして、そして」  
カタカタ

「落ち着いて、アーミヤ、手握るか？深呼吸、吸って……吐いて、吸って……大丈夫だ、私も運ばれた時そうだった、気持ち分かる」

「我が生涯に一変の悔いなし」腕掲げ

「私は風…止むことのない風」

「グーニーズ、殴れ、あの二人を全力で」

「自分の上司を殴るなんてそんな事できああ!!腕がかってにー!!」  
ダッソッ!!

ガシッ…バシヤアアン

「投げないでくださいよ隊長」ビシヤア…

「身体が勝手に」

「防衛本能ってやつですね」

「ちよつと違うかね、じゃあはい、釣り竿と餌」

「三本しかないが？」

「グーニーズと私は川に直接入って獲るから」バシヤバシヤ

「つまり勝負ですね？」

「素手で獲れるんですか……?」

「あいつ素手でやる方が獲れてたから大丈夫だろう」

「隊長、素手で獲るコツは」

「まず身体で影を作って、待つ」

「はい」

二人は身体を丸めて影を作る……しばらくすると魚が影に入ってくる

「…魚来ましたよ、次は？」

「……フッ！」シヤパアン!!

…ビチっビチビチッ!!

「こう」

「大体分かりました」

「…………腕が消えてましたね……」

「あんまり見ない方がいい、情報量が多すぎる」

「見て下さい、緑色の人型の何か釣れましたよ……頭に皿があります……」

あ」パリンッ

「……動かなくなりましたね、主人を呼んできます」

「駄目です、こつちも多いですドクター」

「逃げ場がない!?!」

　　なんやかんやありながらその後獲った魚（大体Cが弾いた）を焼いて食べた後様々な動物と触れ合い一週間過ごしてロドスへ戻った全員、帰ってすぐにCは正座させられた、犯人はグ（文章はここで途切れている）

ドクター達、森の主に会うつてよ（おまけのような何か）

くある日の森く

「あーサラ：カツパさん：皿が割れちゃって…」

「死んでしまいましたか？」

「うーん：ちよつと待ってねー…：頑張つて蘇生してみるかあ…」

「あ、駄目だったんですね」

「打ちどころと皿割れたのが駄目だったみたい、アネモスとりあえずそこ真つ直ぐに行つて、水の底にある黒いの掬つてきてく」

「了解、行つてきます」

「ドクター見て下さい、あの雲生きているみたいですよ」

「そうだなアーミヤ、…：あれは本当に雲なのか？」

「何を言っているんですかドクター、あれはただの雲ですよ、…：…：目のようなものがこちらを見ているのは気のせいです…：…：気のせいです」

「…：…：…：空は、青いな」

「…：そうですね」

「あれは雲じゃないね、うん、あれは「そんな情報はいらぬ」あ、はい」サラサラ

「今そちらからの情報を遮断しているんですCさん、これ以上は…」

「一週間ここで暮らすんだつたらこんなほぼ毎日つすよ」マゼマゼ

「そうですよ、不思議な事が沢山起りますから」

「訓練に来てた時も大変でしたからね…」

「私が見てきたあれはこの森のほんの少しにしか過ぎなかつたのか…」

「ここは広いですからねー、色々問題は起こつたりしますけど楽しい所ですよ、この主人も色々凄い方ですし、問題おこつてもそのうち解決しますし旅終わつたらここに住もうかとも」

「確かお前の夢は…静かは森の中でひっそりと一人暮らして死ぬ事だったか?」

「いい…夢?ですね…」

「死ぬ事は無理でも暮らす事はか「なわぬ夢ですね」え、うそん」

「主人、私が居ます」

「なんだったら自分も」

『うちの隊全員住みます』

「待つて幻聴聞こえた、変な物食つ…たな私、変な鳥食つたな」

「何度死のうが隊長に会いに来ますよ」

「えー怖いからやめ…………エツ君!久しぶり!」

突然シエーヴルが森に向かって片手を挙げる…森の奥から人影が此方に歩いてくる

「…………相変わらず、探知が早いのですねシエーヴル」

「そりや分かりますよ、気配だったりなんだったりで」

「そうですね、正直きもちわ…コホツ」

「おっと、少し心に傷がつくよ?」

「そんな傷はあつてないようなものでしょう?…………失礼、ご挨拶が遅れました」

森から出てきたミノスの青年はアーミヤ達の方を向き、綺麗なお辞儀をする

「お初にお目にかかりますロドスのアーミヤ様、ドクター様、私の名はグガランナ、この森の管理者をしております…グーニーズさんとアネモスさんは2度目ですね」

「……………」

ドクターとアーミヤはグガランナと名乗る青年を見て固まって動かない

「エツ君、一つよかでしょうか?」

「?」

「もうちよつとオーラ隠して、さっき来た時にカツパさんが驚いて皿割れちやつたぐらいには出てるから」

「…………大変失礼致しました、ここより奥での生活に慣れてしまい力

の抜き方を忘れていました…」

ドクター達の身体からふつと、力が抜ける

「ふつ、ハア……お見苦しい姿を見せてしまいました、初めましてグガランナさん………」

「……………」

「…？ドクター様、何か？」

「あ、いや…すまない………」

「何故、私が貴方様方の事を知っているのか…疑問なのでしょうか？」

「…それもあるんだが…」

「多分なんで私がグガランナって名前でエツ君って呼んでるのが気になってるんでしょ（適当）」

「そうだな（正直）」

「……………ちよつとシエーヴル、こつちに」

「あーやっぱい…にーげろ！」ダツ

シユルルツ…ザスツ!!

「足に枝先刺して捕まえさせるのは職権の乱用だと思います」プラーン

「シエーヴル、お前が間違えた名前を全力で呼ぶから間違えられているんですよ？、なんですか、別に今ここで起こっている問題を全て手伝わしてもいいんです、ん？」

「ここに来れなくしてもいいって言わないエツ君って優しいつすよね、ちなみにまた問題起きてるみたいですけど最近ここらに奥の生物来てるのと関係が？もしかしてその事も言いに来てたり？」

「ロドスの皆様に挨拶が第一目標でしたが、それもあります、今各地で強者同士の争いが起こってしまってますね、その影響で逃げてきたのが此方にきているんです」

「ほうほう、狩人達は出ているんで？」

「既に狩人達のおかげで沼地と砂漠の二つは抑えられました、……問題は火山と桜山で争っている四体です」

「なんです、もしかしてあの黒いのがか？」

「そちらの方がどちらかと言えば良かったですね、火山で紅蓮と灼零

龍が争っています、その争いで火山の噴火、地形破壊、様々な被害が」  
「待つて待つて、前者はわかるけど後者は塔の上が住処でしょう？前に暇だったから建てたあれの上」

「本人曰く『散歩をしに来たら絡まれた』と片方は『強そうなのが目の前に来たから』と」

「あの猿本当：それで、桜山の方は？」

「凍王と司銀の龍、がお陰で桜の山が雪山に」

「うーん、あの二匹、片方はもういい歳なのに：ならとりあえず火山の方は私が、あの猿エツ君にも殴りかかりにいけますからね」

「殴られる方に行くんですね：まさかそっちの「ないですね」そうですか」

「話が…」

「色々：大変な事が起こっているんですね：？」

「(どれだけ広いんだ：)」

暫く経って

「そして私はこう言ったんだ『名前が分からないから君は謎の管理者Xだ！』これがエツ君誕生ですね」

「なるほど、分かん」

「ドクター、考えるのをやめましたね？」

「その数分後に名前を名乗ったのですが：今も変わらず」

「いいじゃないかエツ君」

「せめて本当の名前の一文字から取って呼んでください、……………一体何千回目です？」

「あれは36万：いや」

「踏み潰しますよ」

「何度でも蘇ってやる：貴様が私を殺すまでな…」

「それは私には無理です：あの方々も、きつと貴方を葬るにはかなりの力が必要になると」

「私なあんてそんな身体になってるの：…」

「二人は知り合って長いのか？」

「そうですね：突然この森に来たシェーヴルとは数百：もしくはそれ

以上の縁でしょうか」

「とてもエツ君には助けて貰っています…もうあっちじや育たない植物とかこっちで育てる事を許してくれたり、居場所の無くなった動物達とかの保護してくれたり、一緒に酒飲んだり」

「シエーヴル、きつと○メラにも言われたでしょうが、いちいち私の許可を得ずとも薬草などを採っても大丈夫ですよ？」

「いやでも今回あの大樹から木刀削り出したし…」

「必要だったのならいいんですよ」

「うーん……ならばまあ、なんかどうしても必要な時にだけ許可を取りに行きます」

「なんででしょう…この感じはスカ…スーさんと話している時のCさんと似ていますね」

「スーさん……あああの苦労人の」

「可哀想なスーさん…隊長と会ったが為に苦労人の二つ名を…」

「きつとそれがスーさんの宿命なんでしょう、………主人に会わなければ苦労人ではなかったでしょうけど…」

「つまりはあれだな」

「二二全てC（隊長（主人）が悪い（んです）二二」

ロドス&管理者ピツタリ同意見の瞬間がここに

ちなみにとある場所でのとある（苦労）人物がこう呟いた

「本当そうだよ馬鹿野郎が」

「いきなりどうしたの？」

「いや…なんでもない」

場所は戻り

「あああ、皆様方仲良くなつてえ、ガラスのハートが塵になりましたが？」

「嘘だな」

「嘘ですね」

「嘘だツ!!」

「この中に一人作品の違う奴がいる！」



「私かな？」

「この森の生物では？」

「それは今更ですね」

「もう手遅れだったのか（驚愕）」

「手遅れです：ドクター：（諦め&疲労）」

「タグを少し増やさないと（使命感）」

「タグってなんですか主人」

「アネモス、あそこに太陽があるだろうか？」

「三つありますがどれを言っていますか？」

「やめろ、これ以上情報量を増やさなくてくれ、テンションが壊れてきたんだ」

「ドクター！見て下さい！フナの体に足が生えている魚ですよ！あは、あははは!!」

「駄目だ！アーミヤが壊れた！誰か、誰か医者を！心の医者を！」

「よければやるけどお？」

「変な魚もどきは黙ってる！」？ヒドイ／

「……………今日もここは賑やかですね」

「メデイイツク！…メデイイツクウ!!」

果たしてドクターの叫びは届くのか次回

「アーミヤ！戦闘不能！」

苦労人は唐突に連れてこられる」続いちやいます。

ドクター達、森の主人にあつてゐるつてよ

「……………スヤア」

「眠ったな……………」

「眠りましたね、社長どうしたんでしようかね（すつとぼけ）」

「情報過多で既にパンクしてるのに更に情報を流し込んできたからな、そりゃアーミヤがこうなるのも分かる、私も倒れそうだ」

「極東の方では升に入れたグラスに溢れる程酒をいれますよ」

「それとはまた違いますよシェーヴル」

「アツハツハ、ですよね」

前回の事をざっくり振り返ると

アーミヤ&ドクター達、森に遊びに↓釣り行こうぜ！↓情報量の多い釣り↓謎の管理者X（グガラナ）登場↓更なる情報量によりアーミヤ戦闘不能

以上である（意味が分からない）

「……………なんで、呼ばれた？」

「スーさん…助けてくれ、もう既にアーミヤが…」

「いや、なんでそれで俺を呼んだ!？」

「ツツコミ役でCを抑えられるのはスーさんなんだ!!身代わりになつてくれ!（本音）」

「本音出ますよ」

「院で草抜きしてたらいきなり地面に穴空いて呼び出される気持ちになれ馬鹿野郎?!ミィシヤがすごい驚いた顔してたぞおい!!」

「タイヘンダー」

「お前の相手の方が大変だわバツカヤロオオ!!!」

バサバサ!!…ザアザア…突然呼び出されたスーさんの叫びは森中には響き渡った

「凄く大きな声ですね、森中の鳥達が飛び立っていきましたよ」

「ハア…ハア…すいません」

「いえいえ、お疲れ様です」

「私の相手ってそんな大変？」

「疲れるんだよ、精神的にも肉体的にも」

「な、なんだって!?!それは本当かい!?!」

「うるせえわ、なんだそのリアクションやめろわざとらしく口に両手持ってくな」

「そんな…酷い…」

「だああ!!だから!いやなんだ!!面倒くさい!!ロドスに行ってもなんも変わってねえじゃないかこの馬鹿!」

「何言ってるんです、人は変われますよ」

「なら変われよ、その性格をかえろよ」

「それはちよつと…」

「なんなんだお前」

「…何故にスーさんが居るだけでこんなに安心するんだろうか」

「ドクター、それは私達の言いたい事やCさんの行動にツツコミを入れてくれるからですよ…」

「流石元とは言えレユニオン幹部」

「主人にあそこまで対応できる人は中々居ませんからね」

「正に天性の苦勞人です」

「聞こえてるからな」

「流石天性の苦(ゴンツ!)イタアイ…」

「こつちも痛いわ馬鹿が、石頭」

暫くして

「おーい、大丈夫?」

「熱い…」

「火山ですからね…しかも火口に近い…」

「隊長登るの早いです」

「この時折ある振動はなんでしょう…」

「登って来たらわかるよ」

「一体何が………は?」

ドクター達は少しCの用事の為鳥に乗り火山へ降り立ち、その後火山を少し登り火口近くの開けた場所へと到着し見たものは…

ヴオオオオオ!!!

巨大な二本の角が生え巨大な岩を投げあたりに火を撒き散らし、太い腕で周りの地形を破壊する勢いで殴りかかる巨大なゴリラと

……………!!

身体が赤と青に分かれ、氷と炎を使いゴリラの攻撃を躲している螺旋状の角を持つ四足の生物が戦っていた。

「なんだあれ…」

「やべー猿とやべー龍」

「なるほど分かん」

「さっき言ってたやつなのか?」

「そうそう、やばいでしょう?あれ周りめっちゃボコボコになってるし炎塗れやし、普通の争いだったら止めないんだけど…戦ってる奴がやつだから…」

「……………なんか、あの半分のやつこつち来てないか?」

「来てるな」

「来ていますね…」

「来てますね」

「多分私の姿見たから押し付けようとしてるね」

「つまり?」

ウヴルオオオ!!!

「あの猿もこつちくる」

「ヤベエじゃねえか」

「落ち着いてますねスーさん」

「なんか慣れたからな」

「……………なんだか私もです…慣れて来ました」

「あらうちの社長さん達はお強い心を持って……………えーと…あれ何処やったつけ…」ガサゴソ

龍がドクター達の真上を通って逃げてゆく……………目の前には猿が凄いい顔で迫ってくる……………拳を振り上げこちらに殴りかかる

ドツ……………オオオン!!

がそれを拳で受け止めるシェーヴル

「あつたあつた、ほれ」  
がちやん

「……………」ぶつぶつ

グオ…オオ!?

猿の頭に金色の輪つかを付けたシエーヴルはその後何かを唱える  
と猿は頭を押さえながらのたうち回る

「……………慣れて来たのもあるが、一番はあれが居るからな…やっぱり  
あれ普通じゃないな」

「衝撃波と音が凄かった…」

「はい…吹き飛びそうになりました」

「アネモスさん、マシユマロ焼けましたよ」

「ではクツキーに挟みましようグーニーズさん」

「お前らはお前らで何してる?」

「近くに溶岩が流れていたの、その熱でマシユマロを焼いていまし  
た」

「スーさんも食べますか?」

「お前らな…」

「……………よし、これくらいいいですかね、あ、マシユマロ焼いてるん?  
くれー」

「どーぞ」

「切り替えが早い…俺もくれ」

「なら私も」

「……………何故こんな場所で食べているんでしょう…?」

目を回して気絶している猿の前でお菓子パーティーが始まった

「ん、やっぱりマシユマロ焼くとおいしいね、熱いけど」

「そのままも美味しいけどな」

「……………スーさん、慣れてますね」

「こんなのはもう日常だったからな、……………戦闘中に作って食べ出す  
のは意味が分からないが」

「ロドスにも居ますよ」

「居るのか(困惑)」

「前にCさんと出た時にはフルコースを作って…」  
「皆で食べましたね」

「誰か止めろよ」

「楽しそうに止めるにも止めれず…」

「他のオペレーターや戦っていた相手も巻き込んで料理していな…」

「ああ…空気に飲まれたのか…可哀想に」

「あれはもう戦場ではありません、宴会でした」

「途中でお酒開けたしねえ…」

「何やってんだ本当に…馬鹿がすみません…」

「そんな事より肉食べようぜ！」

「反省しろよお前本当になあ!!」

「楽しそうですね、シエール今回は火口投げなかったんですね？」

「おかえりエツ君、いつもはジャイアントスイングで投げ入れるけど

…ほら今回はお客さん居るし噴火しても怖いから」

「そんな気遣いのできる人…いえ、生物？でしたか」

「うーん、毒舌、マシユマロクツキー食べます？」

「いただきます」

「あ、そういえばスーさん、最近スーさんの発射機に使える弾作っただけどいります…いると言ってくれ」

「強制じゃねえか…で？どんなのだ？」

「花火と撃つたら紙吹雪とかが舞うやつ」

「パーティ用だろお前それ、花火片手で撃つとか…大丈夫かそれ？」

「大丈夫、試してスーさんとかだったら耐えられるから」

「それそこそこ危ないよな？まあ貰つとくが…」

「ありがとう…：…助けてくれない？」ボキッ！ゴキゴキ!!

「いや無理だろお前、そんな剛腕に掴まれてたらどうしようもねえよ」

「正直いつその事を指摘するか気になっていました」

「まあその…：…頑張れ」

「美味しいですね、アネモスさん」

「そうですね、アーミヤさん」

「うーん……やってやろうじゃねえか！拳で掛かってこい！」

その後の戦いを見ていたとあるドクターは語った。

「あれは…凄かったですね、まさに力と力のぶつかり合い、一切の防衛も作戦もなく殴り殴られての…ですけどそんな戦いよりおかしくて、怖かったのは………笑ってたんです、猿がニンマリとそれを見たもう一人も高笑いして………本当にあれは生物同士の戦いだっただったのか……」

――

「うーん、楽しかったやっぱり強いねあの黄金ゴリラの先祖は」

「おう、よかったな」

「よかったです」

「ああ、よかつ――」ドサツ……

「ドクター!!しつか――」ドサツ……

「あれ、二人とも倒れちゃってまあ」

「……………」

「スーさん？」

「……………」

「隊長……嘘みたいでしょう？………――気絶してるんですよ、これ」

「主人、情報過多で三人ダウンです」

「よーし、ツリーハウスに運んで起きるまで私土下座しようかな！」

その後めっちゃ謝って怒られた。

熊の娘見ていた…ファイ!!

ロドス艦内 訓練室

「トマホーク…ブーメラン!!」ガシツ…ブンツ!

「トマホオオオク!!ブウメラン!!」ガシツ!…ブウン!

ギイイン!!…ガツキイン…

「はえーすっごい強く…腕大丈夫つかい?將軍」ガシツ

「…威力はまだそつちが上か、まだいける」グツ

「頑丈だなあ…時間もあれですから最後にしますか」ポイツ

「…来いよ」

「男より男らしい…ならば近づきます」スタスタ

「……………」

「……………」

……………ゴンツ…イツツ!?

「ツ!!大雪山!!」ガツ!!

「……………」

「おろつ、…チツ!」バツ…ガシツ

「よいせ」グツ…

バアアン!

「…負けだ、山か?全く動かなかったじゃねえか」

「お疲れ様です冬將軍、大雪山つてぐらいですから山も動かせますよ

いつかと言うかニアールさんは多分私より体幹強いと思いますし、鍛

錬あるのみですよ」

「クソツ、いつか超えてやる」

「ニアールさんの小指の先ぐらいの私だったら練習付き合いますよ、

さ、シャワーでも浴びてご飯食べましょ、今日は何食べようかねー」

「…肉だ、肉食べるぞ」

「いいっすねえ…喰らいますしょうか食料庫空にしましょう」

「アタシは知らないふりするからな」

「無理矢理にでも巻き込みますよ?」

「やってみろよ」



ヤベツキタ…

ロドス艦内 とある部屋

「あー…いいなあ…いいなあ！（ゴクツ）シユラもそう思うだろう!」  
「あーあー…また蜂蜜で酔ってる…と言うか私ビーハンターさんじゃありませんし目の前のやつ見て下さいよ夏將軍、ビーハンターさんは私呼び出して逃げましたよ」

「ああ?…何言ってるんだあ?…シユラ、お前そんな顔してたか?、なんか硬いぞ?」ペタペタ

「そりや仮面してますから硬いですよ…それ」口持ち

「んえ?」あー

ザラザラ…

「…んっ!?…うえっほ、にが、からっすっぱい!?うえええ…」

しばらくお待ち下さい

「ドヤっ、最近酔っ払い用に医療の方々と作った酔い覚まし試作品の味はどうです、クソまずいでしよう」

「不味い所の話じゃねえからなこれ!?なんだよ!しかも試作品って言ったか!?また私実験台か!?またかよウガアアア!!」

「おお、將軍がご乱心…んで?さっきからいいなあいいなあ色々と言ってましたけどどうしたんです?正直部屋戻って寝たいんですけど」

「なんか私に対しては遠慮ないよなC…実はな…今日ズイマーと模擬戦やってただろ?それ、隠れて見ててさ…」

「ああずつと見てましたね、無視してたけど」

「ほんと遠慮ないよなあ!!…それで、だな?見てて思ったんだよ」  
「はいはい」

「私も自分の必殺技欲しいってな!…って事だから!頼む!教えてくれ!」

「じゃ私部屋に戻るから…」ちよつと待てよ!なあ話聞いてたよなあ!..  
なあ!え、本気で帰るのか?ちよ——」いじりやすいなあ(本音)「コツコツ」

「…ちよつと待てやああああ!!」 ドタドタ!!

「いやーでーすー」 ダバダバ

数分後

「——分かりましたね? 全く、何時だと思っっているんですかあんな大声を出して走り回るなんて…」

「すいませんっした… (フオリニツク先生)」

「いやあ怒られましたねえハツハツハ」

「お前のせいだかな…! はあ…疲れた、部屋に戻る、おやすみ」

「おやすみなさーい、明日の11時に訓練室集合ねー」

「あーい、分かつ…:…え?、まさか、教えてくれるの…居ない…:…うしっ! さつさと戻って寝るか! 楽しみだなあ!」 タツタ

〜次の日〜

「おはようございます、ちゃんとご飯食べてきました?」 むっしや

「おうっ! で、で!? なに教えてくれるんだ! なあ!」

「それがですねえ…まだ決まってるないんすよねえ」

「そうなのか…?」

「そうなんすよ、大体はパツと思いついたの適当に…」

「確かズイマーの大雪山おろしにあの金髪の…レイズ? って人だったかはサンダーブレークとか…そんなやつを考えてくれてるのか?」

「どうせならかつこいい…もしくは強いのがいいでしょう?」

「分かってるな…流星相棒だぜ」

「いつの間に相棒に…? 気づけば少し長い間二人でラジオとかしてますからねえ…うーん、リエータ、リエータ…ロザリン…ロザリオ、極十字聖拳…いやこれは無理うーん?」

「なんだよその十字なんとかって」

「凄い手刀 (超ざっくり説明) あ、そうだ空気はやつ覚えます?」

「空気はやつ?」

「そう、実はグー君に教えようと思ってたけど…まあちよつと覚えるの大変だけど失敗したら大怪我するし」

「…面白い! やってやろうじゃねえか!」

「まず、こうやって」パツ、パツ…

唐突に手で何か印を結んだ後ボールを掴んでいる時のような空間を両手に作り出す、するとその空間の中に小さな深い青の半透明な球体を作り出し…

「こう握る」ギユ…

片手でその球体を握った

「……………それで、どうなるんだ？」

「うーんそうだなあ…訓練用の盾持ってきてもらっても？」

「分かった」

「よし、その盾投げてく」

「分かったア!!」ブンツ!

…トンツ…ベキベキベキッ…ガシヤン、ガラ…

「…とまあこんな技です、どうしよ壊しちやった、直しとこ」

「捻れてぶっ壊れた…すげえ…」

「あれ、この盾の強度つてどのぐらいだっけ…重さとかデザインどんな…まあいいやとりあえず直そ」

なんやかんやあり次の日

「…なんかやつぱ周りのやつと盾の形違うなああれ、いきなり『これはいい物だ!』ってなんか持った子叫び始めたし、なーに間違ったかなあ…形やろなあ（確信）」

「こうやって…それで…空気を圧縮して集めるイメージで……これつてどれぐらいでできるようになったんだ？」

「凄い時間（脳死中）あー…他にすぐに出来る技なあ…」

「脳死で会話するなよ…とりあえず頑張ってみるか！」

「……………魚…そうやん、魚やん、リエータさん川行きましようか」ガシツ

「…は？魚…川？おい!？」持ち上げられ

「冷た…で？なんだよ、いきなりこんな川に連れてきて」

「熊の漁の仕方って知ってます？、川とかで飛び跳ねたやつを口でキャッチしたり色々あるんですけど…一番有名なのが……………」  
「フツ！」 シュパアン！

…Cの腕が唐突に消え、川から何かが弾き出されるように出てくる……………空中に何処か誇らしげに飛ぶ鮭の姿がリエータの目の前にありその後その弾かれた魚は待機していた虎がキャッチし美味しく頂かれていた

「とまあ今感じで狩るのがよく映像とかでみるやつなんですけど……………ちよつとリエータさんが思ってるような技達とは違うかもですが…これをリエータさんの技にしましょう」

「……………今のを？」

「そうですね、ほらビーハンターさんも蜂蜜取る技を攻撃にも使っていたでしょう？それと同じような感じですが、……………さて、リエータさん、まずこれで大事な事は耐える事、見極める事、そして素早さと威力です」

「耐える事…見極める事？」

「そうですね、何にでも言える事ですけど見極める事は大事です、相手から決して目を背けず、どんな動きも見られる隙ができるその時までずっと、その間相手からの攻撃もそうですけど、自分も勝ちを急がずに待ち続けるんです、待って、待ってそして一瞬でも隙ができたのならその時に全力の一発を打ち込む、…地味で普通の事かもしれませんが、それが一番シンプルで強いんです、まあとりあえず、魚相手ですがやってみましょう、練習相手にはピツタリ」

「…分かった、やってみる」

そう言ってリエータは先程Cがしていた様に川を見つめいつでも腕が振れるよう待つ

「……………ラアツ!!」 バシヤン！

魚が目の前に来て、油断している！と思い川に腕を振り下ろし魚を弾き出そうとするが、水の抵抗があり上手く振れず、しかも、魚は自分が少し動いた瞬間には逃げ出してしまっていた。

「水の抵抗は力が強いほど強くなるので、打ち込めば打ち込むほど拳

に力つきますし一石二鳥、そしてちよつと手出すのが早かったみたいです、もうちよつと油断を誘ってから、素早く、しかし強力に……：まあのおんびりやって行きますよ」

「…おう！」

「ちなみに数日後、ビーハンターさんと殴り合つて貰いますから本気で」

「おい待て今サラツとなに言った!？」

「私でもいいつすよ、ステゴロ好きだしなんだつたら冬將軍でも」

「…いいぜ、やつてやるよ!全員倒してやるからな!見とけよ!……：訓練よろしく頼む」

「その結構礼儀正しい所嫌いじゃない……：まあ私みたいな弱者の教えなんで期待しないで下さい、なんだつたら他の教官連れてきましょうか?」

「い、いやそれは…な?分かるだろ?」

「ロドスで一番厳しい教官連れて来ますね」

「ちよつと待ってくれ!頼む!地獄を意図的に作り出そうとしないでくれ!死んでもいいのかよ!ラジオの相棒が!なあ!？」

「別に」

「冷たいなおい!？」

「アツハツハ、まあ忙しいだろうから私が見ますよ、期待はしてはいけない」

その後川で数時間またやった後帰つたのだが突然失踪した為ロドス内でかなり怒られた。

熊の娘見ていた…ラウンド2! K. O!!

いつもの森く

「とりあえず相手が男で狙えるなら玉蹴り上げて下さい、大半の人なら隙ができます」パチツパチ

「おま、それ言っててよ…なんか思わないのか…?」シヤリシヤリ

「まあ痛そうだなあとは、私も痛いでしょうし…あ、ごめんなさい、セクハラですわねこれごめんなさい…」ボツ

「いや、いいけどよ…服燃えてないか?」

「気のせいだよ」ゴオツ!

「燃え上がってるじゃねえかよ!」

「アツハツハ、で、じやがいも剥けました?」シュウウ…

「いきなりはやめてくれよ、ちよつと待て…よし、ほら!」

「おうけーい、後は切り込みにバター乗つけて焼いてー」

「鮭はどうだ?」

「いい感じかもデース、さ、いただきますしよう」

「いただきます」パンツ

「…うん、美味しいっすね鮭」

「そりやそうだろ! 私が獲ったんだぜ?」

「少し安定してきましたよねー、若いつて素敵読み込み早いもの」

「外側は若いからいいじゃないですか」ヒョイ

「…誰だ今の!?! じやがバター一個無くなってるし!?!」

「きつと野生の森の主人でしょう (適当)」

「なんだ…いやおかしいだろなんで納得したんだ…ああ、やめやめ! 試合あるのになんでこんな事で悩まなきやいけないんだ」

「…こんな事私からは言いたくありませんが夏將軍、現実を見ましょう」

「なんだよ、そんな事より飯冷めるから食おうぜ、ハハハ」目逸らし

「試合は「やめろよ…」今日の昼に「やめてくれ…」スカジさんに一発

KOで終わったんですよ「うわああああ!!! 聞きたくない! 聞きたくない!!」いやあ本当…死ななくてよかった」

「なんでなんだよ！なんでリングにあの人居たんだ！めっちゃ、めっちゃ怖かったんだが!？」

「ビーハンターさんが急に用事出来たらしく…ドクター君に相談してみたら代役を用意してくれたらしいんですけど…：…うーん手加減してあれだったからなあ」

「リングの外に吹き飛ばされるは気絶はしてて起きたら腕のプロテクターにはヒビ入ってるわ…：…ああ…：…まだまだやばい奴が居るんだなあ…」

「怖いよねえ…」

「ヤバい奴の一人にお前が入ってるからな？」

「うそーん、私ただの一般人よ？」

「はいはい、逸般人逸般人…：…あー…：…お？なんだこれ」

リエータの目の前には青と紫の混ざり合った結晶の様な…花の蕾？のようなものが生えていた

「あー、それは確か…何の花だったっけなえつと…」

「綺麗だな…」

リエータがその蕾に手を近づける

「あ、思い出した、それ…：…あ」

「え？」

その蕾が開き中から光が出てくる…：…そしてその光はリエータとシェーヴルを包み

「…？…!?!?なんだ、なんだこれ!?!？」

リエータが目を開けると、空を覆い尽くす大量の化け物の大群が飛び、そして目の前には全身から黒いオーラを放つ巨大な化け物が居た「あー、松ぼっくりが大量発生した時の記録かあ懐かしい」

「松ぼっくり!?!?お前あれが松ぼっくりって…：…この森どうなってるんだ!?!？」

「松ぼっくりはアレの愛称ですよ」

ギシャアアア!!

「ほら、全身の鱗逆立って松ぼっくりみたい」

「気持ち悪っ！、じゃねえよ早く逃げるぞ！襲われるぞ！」

「大丈夫大丈夫、ここは過去の記憶の中ですから、怪我はしませんよ」  
「……本当か？」

「私ウソツキマセーン、さつき將軍が触れたこの花あるでしょ？これ時間の花やら何やらいいましてある特別な力持った人が触るとこの花が記憶している過去が見れるんです」

「特別な力…まさか私に」

「反応したって事はあるってわけです、てなわけで（ギヤア!?）うるさいなあ』

松ぼっくり（化け物）の声が聞こえそつちを見ると、化け物の背中に手に持った身の丈ほどの刃の付いた根を突き立てる人影が…松ぼっくりは痛みの原因を振り払おうと暴れた後その人物を乗せたまま翼を広げ……

『え、飛ぶついやっほおう！（錯乱）』

そんな叫びが聞こえた後映像は消え、二人は元の場所へと戻った。

「…なあ今のつて」

「さ！將軍、波動の訓練しましょうか！習得したら色々役立ちますからね！」

「お、おう…波動って言うのか？」

「YES、凄いななんですよ、アーツみたいな感じなんですけどまた違って目が使えなくなっても物体の輪郭がわかったり動きもわかったり…後こんな風に手に集めて撃てたりします」ドンツ

「スゲエー！」

「ただ一つ注意点、波動は一度に使い過ぎれば死ぬかも知れませんが、そこに気をつけて行きましょう、って事で最初は、目隠ししましょうっか」  
布もーち

「ざらつとやばい事言っでどんどん進めていくな本当…最初はさつき言っただ物体を感じる訓練すんのか？」

「そうっすよ、安心して下さい私も目隠し…いや目ん玉取った私も近く居ますから」

「目隠しだけにしといってくれお願いだから」

「しょうがないなあ…」



く目隠し中く

「さて、どうです？」

「どうでも何も…何にも見えねえ、なんも感じねえ…」

「まあそうっすね、うーんとまずは、精神を安定させます」

「おう…」

「そして自分を中心に円状に波を立ててを広げていくのをイメージして下さい、リーダーとかみたいに」

「自分を中心に…」

「私のやり方で申し訳ないっすね」

リエータは言われた風に広げるイメージをしていく……………ほんの少し、ぼんやりとだが何かが見え始める

「…お？行けたんじやねえっ!?かあ!?!」ドサツ

が、その後少し歩こうとしたリエータは足元の石に躓き転げる

「いってえ…なん(モフツ…)なんだ?これ、柔らかい…なんか赤い…光みたいなのが見えるな…」

「赤いのはあれです敵意向けてる相手とかのやつです、最初にそうやって色々見えるってすごいっすね、ちなみに目の前に居るのは肉食のこの辺にはあんまり居ない化け物です」

「……………て、事はよ？」

「將軍、逃げないとやばいっすよ」

グルウアアアア!!

「う、うおお!?逃げる!!」ダツ

「はーい、集中していきましょー」ダバダバ

く数時間後く

「……………」倒れてる

「よーしよしよし…自分の住処にお帰りく」

グルル…

「大丈夫ですか？」

「そう……………見えるんだ…たら……………お前を、殺してや、るう…ハァー…ハァー…」

「途中でめっちゃ木とかにぶつかってましたからね手当しますよ」

「くつそ…最初から手懐けてたやつなら助けるよ…」

「卵から育てた子ですから、名前はマダナイ君ですよ」

「聞いてないわ…」

そんな事がありながらも数週間、みっちり鍛錬を重ねに重ね…

「おおお!!」ポア…

「おく」

「おんりアア!!」ゴスツ!!

ボオン!!

「いい感じじゃないっすか、波動の玉作れましたね、投げずに直当てですけど」

「やっとか…やっど野球ポールぐらいのが作れた…ああ、疲れた！」

「いやあ、数週間でここまで出来るとは、センスありますねえ」

「使いこなせばかなりカッコいいやつだからな…そりや必死に覚えるぜ」

「リエータさんは女の心より男の心が強いようで…林檎と干し肉どっちがいいっすか？」

「どっちもくれ！」

「かぁー、若いつて本当素敵！」

「いいだろお?…そう言えばよ、なんでこんなに色々こんな技だとか使い方とか知ってた? やっぱり長生きしてれば色々知る事になるのか?」

「うーん、ある目的の為に色々と本やら読んだり聞いたり色々してた時の知識を教えたり、ただ使って欲しいなあって言う自分の欲で知った?」

「ある目的ってなんだ？」

「…………裏表どっち?」コイン

「は?…裏」

キーン…パシツ

「裏、よし、じゃあ夏將軍にだけその目的を教えましょう、やったね口ドスでは將軍だけが知る事になりますよ」

「お、おう」

「ある目的とは至極簡単、死ぬ方法を探してみました」

「……………この、波動ってやつもか？」

「はい、最初に言ったでしょう？使い過ぎれば死ぬ危険性があると、この波動は簡単に言えば生命エネルギーと言ってもいいんです、なのでそれを限界まで使ってやってみましたが結果はちよつと身体動かなくなつたぐらいで終わりでした」

「お前…………」

「他にも何十…………もしかしたら千くらいの方法を試しましたがけど全て惨敗、ゼーんぶ生きてしまいまし「もういい……………もう言わなくていい」あ……………ごめんなさい、私にしたら重い話しましたね」

「お前、…まさか今もやってないよな？」

「大丈夫ですよ、もう数十年前にやり尽くして今は新しい案もありませんし、今は普通にのんびり生きてますよ」

「今は……………そうかよ…もし、死ぬる可能性が見つかったら？」

「私は多分その可能性に喜んで走っていくでしょうね」

「そんな時はぶん殴って止めるからな」

「うわあ……………また言われた、前に私の義理の息子と娘にも言われた」

「私が生きてるうちは死なせねえ、グムだってそう言う」

「アツハツハ、まあ私スーさん達の墓作るまで死ねないので、將軍達とはまだまだ関わりますよ、なんかあったら相談しに来てくださいよ、危機が迫ればなんとかしますから」

「子供かよ私らは」

「どつちかって言うて孫を見てる気分」

「孫かよ!？」

その後全力で組手やろうと言ったが為に本当に全力でCに吹き飛ばされるリエータであった。

シエーヴルの逃走く探さないでくださいく

ロドス艦内のもうすぐお昼になる頃、いつものように執務室にていつものように仕事をこなす人の不審者(失礼)、ドクターは理性回復剤をお供に積み上がる書類を前に爽やかな笑みを浮かべる

「今日もいい天気だな…甲板に出てサンドイッチでも食べれたらさぞ美味しいだろう」爽やかな笑み

「まだ目を通していない書類が沢山ありますよドクター、頑張りますよ」

「そうだなアーミヤ、頑張るよ、私は仕事から逃げない私は書類から逃げないニゲナイニゲナ

カッカッカツ…バゴオ!!

ドア「アバーア!」

「オハヨ!」

「アイエエエ!!?シエーヴル!シエーヴルナンデ!」

「ドアは壊さないで下さい!!」

「タスケ!ドクター!!サン!」

「どうかし「シエエエエヴルヴウル!!!」コワイ!」

ドタドタダンツ…

「待つてよオオ!!」ルパンジャンプ

「イアイジツ! (? )」バンツ!

Cに後ろから青色の何かが跳躍し飛び込んでくる、その飛んできた者に対し地面に転がったドアを蹴り上げガードし…

ゴチンツ☆

敵はしめやかに爆破四散…ハヤワザ!!…そろそろやめよう青色の何か:シエーヴル好きのやべーサンクタ、シュヴローは顔を手で覆い悶えたがすぐに立ち上がった、つよいこだな(思考放棄)

「痛いよーでもCからだから大丈夫だよ!僕まだ戦うよ!!」ジリジリ…

「さっさと諦めるんだよシュヴロー、朝からこんな走り回るのは昨日ぶりだよこの野郎」スツ…

「冤罪でスルトがCにアイス食べられたと追いかけて回した事件だな…  
そんな事より状況を説明してくれないか、アーミヤがそろそろ爆発し  
てしまうそれと私の後ろに隠れないでくれ」

「????」

「ドクターもCって修道服とか女装似合うと思うよね!!」

「なんて？」

「そりゃ（唐突にこんな仮面して言動と行動が不審者な奴にそんな事  
言ってるって知ると）そうなるよ」

「ドクター…軽食を持って甲板で食べませんか…？休む事も大事だ  
と思うんです、今日は休みましょう…」

「大丈夫かアーミヤ!?しつかりしろ!!ケルシーを呼んでくれ!早く  
!!」

ダツシユでシェーヴルが呼びに行った

「いやあ…ケルシー先生冷ややかな目で見てましたねえ…」

「もっと嫌われたな…あれは」

「それで!ドクター、似合うと思うよね!!ね!ね!」

「元気でいいな」(現実逃避)

「元気ですねえ」(通常運転)

「話聞いているかい？」

「どうしてそんな話になったんだ?C」

「それがすねえ…」

「むしい!」

朝 7:00

「……うんにう……シェーヴルはいくらですか…」

「一体なんで私を買おうととしてるんですかねこの子は…」

今日二人は非番で二週間に一度シュヴローがCの部屋かその逆に  
泊まる日であり、シュヴローの部屋で先に起きたCは朝ごはんを作る  
為にキッチンに向かい何故か部屋でつけろと言われた白いエプロン

をしのんびりクツキンしていた所

「……………」ジイ…

「……………」とりあえずベットから起き上がって顔とか洗ってこようか」

「うん」

それから顔などを洗い、椅子に座り朝食を食べ始める二人そして突然

「シエーヴル、仮面外したりして修道服着てみない？」

「うーん、唐突う、朝ごはんなんか変なの入れちゃったかなあ普通の目玉焼きとかな気がするんだけどなあ…」

「ついでに女装とかしてみない？」

「ハッハッハ、君はいつも私を混乱させるね絶対着ないししない誰得ですか」

「僕得、少しだけ…」

「ええ…☒(困惑) 少しって一体…しませんよ」

「なんつでさ!!いいじゃん僕もするから!!写真撮って家族に売りつけて保存して家族から儲けるだけだから!!」

「わーい!少しもいい要素がなあい!するわけないでしょうが!!このヴァカ!シユヴローなら似合うでしょうね!美形だし!小柄だし!と言うか何回か見ましたしね!!だけど私となると話は別ですよ修道服う?女装う?一番私みたいなのが着たら似合わないし駄目な奴じゃないですかヤダー!」

「大丈夫!!大丈夫修道服似合うって!女装もウィッグとかメイクとかで頬骨とか誤魔化したりできるって!!僕に任せたら大丈夫だよ!だって今日夢の中で見たもん!!似合ってたよ!!」

「私そんなキャラじゃないんですって!!お爺ちゃんに無理させたら駄目ですから!と言うか夢と現実がちがうんですよ!」

「うるさい!!着ろ!!」ドンツ!!

「バカヤロオオ!!誰に言ってる!!ふぎけるな!ふぎけるなバカヤロオ!!」

その後ドアを蹴破り逃走したCそしてそれを自身が作ったロー

ラースケート（多機能）をつけ追いかけるシユヴローがいた

※朝です

「なるほど、訳がわからないな」

「分かる〜」

「なんで分かんないのかな…」

「真剣に言ってるからこの子怖いのよね」

「まあ…私からの意見としては一回してみたらいいんじゃないか？」

「おっと？」

「少し私も興味がでてきた、本音はCの本気で困っている姿を見たい」

「私どうやら頼る人間と就職先を間違えたみたいだ…」

「ドクター、僕は今ある程度のドクター頼み事は叶える事を誓ったよ

…：…：さあシエーヴル、やろうよ…：大丈夫だよ…：初めては怖くないよ

…」

「フイフイ…死んだわ私」

「死ねないじゃないかお前」

「そうだった…：と言うか初めてか…：別に初めてじゃないけどね女装」

「…え？」

「と言うか女性そのものになった事がある」

「…ちちちよつとまってね、シエーヴル、家族にれんら…：いやその前に

話聞かせてくれる!!」

「…：…：…」 啞然!

「どういう事です主人？」

「え、なんの話なの？」

ザワ…：ザワザワ…：ザワ…

最初にドアを蹴破りそのまま執務室は中々解放的になっていた、という事は前を通りがかるオペレーターなど職員がいる訳である、つまりは

全ての会話は筒抜けである、そのCの発言はすぐさまロドス中に広がった、これにはシエーヴルはかなりびっくりした、食堂に行くと「Cお前あの話本当なのか？」

「いきなりなんすかガウイルスさんあの話：ああ…一応本当ですね…」

「…………その時鉱石病には感染していたか？」

「ええ？」

「新しい症状かもしれないからな…」

「ええ…（困惑）」

ある時は作戦中

「あ、そういえばCさあ」

「なんですかいレジギ…ウタゲさん」

「女の子ってま「違いますね」そうなの？」

「なあんでそんな風に話変わったんですかね…」

「いやーだつてびっくりでしょ、嘘か本当かも分からないだし色々噂話するのめさ」

「あんな事言わなければよかったと思いはじめました、はい」

そんな日々が数日続きある日……………

「…………Cさんが来ませんね」

「今日の作戦メンバーの中にいるはずなんだが…」

「少し部屋に行つてくる」

ドクターはそう言つてCの部屋へと向かつていく

コンコン

「C、起きてるかももう出発時刻なんだが」

シーン…

「C？…………鍵は…空いてるな…」

部屋の鍵は空いており中へ入る…だが誰もいない、そしてふとテーブルの上を見ると何やら紙が置いてある

『少し噂が無くなるまで消えます、職員全員の記憶を消してやろうかと思いましたが面倒なのでやめておきます色々お騒がせして申し訳ない、明日か明後日には戻るかもしれませんが多分きつとメイビー、ちなみに昔女性になったのはお仕事で男子禁制の場所に潜入したからです、もうあんな仕事受けないと誓いました、まる

by シェーヴル ps 探さないで下さい

次回 シエスタつて本正しい所



## イベント系

ウルサスの子供たちってめっちゃ書きにく、メタい？  
ごめんなさい

『だ、誰だお前は！』

『白い奴らに学生と間違えられて投げ入れられた旅する一般人だわどあっほーう』

これはチエルノボーグのとある場所の一幕…ただお気楽な奴が迷い込んで色々周りの体力を減らしていく話である

「冒頭からふざけてる気がする」

「うるさい、手を動かさせ平民、そこまだ汚れているぞ」雑巾絞り

「すいませんのう…よく見たらこの光景なんかすごいな」

「掃除はいいものだ…他にやらせるのでは到底味わえない楽しさだ」

「なんか色々目覚めたね？パーヴェルさんよ」

「殴られて何処かおかしくなったのかもな」

「致し方ない犠牲だった」

「フツ、そうか」

こうなつたのも少し遡りレユニオンにより学校に閉じ込められた頃から始まる

「なんで私ここ入れられたん？私学生じゃないんですけど」

「知りませんよ、学校の近くにいたからでしょう？」

「道聞いてただけなんだけどなあ…名も知らぬ学生さん干し肉いる？」

「下さい…落ち着いてますね」

「状況分らないだけっすよ」

「そうですか…」（ブチツ）

学校の食糧のある食堂にて仮面をした男と隣に男に気づかず座り、少しため息をついた学生に男が話しかけそのまま会話になった

「結構人増えてきたねえ」

「ですね、……いつまでこんな状況続くんでしょうか」

「終わるまでじゃない？」

「当たり前的事じゃないですか……」

「えーじゃあすぐに助けが来るよ！とか言った方がいいかね？逆に精神的な疲れたまるかもですよ？」

「……………」

「…（怒らせちゃったかなあ）」

「……………スヤア」

「寝てたわ、なんだこのいきなり私も寝よ」

そんな事があり眠り始める男、……………少しして何かに揺らされて目が覚める

「ああ？なんですか？」

「ご飯食べましょう」

「おーありがとうございます…他の人に配ってあげてくれ私は大丈夫」

「いや、食べて下さーいいのいいの、食糧にも限りがある」

「それはそうですけど……………このまま減っていくと…」

「そうっすねー、最終的に戦争でも始まるんじゃない？」

「戦争……………そっか…」

「まあ…とりあえずご飯でも食べなせえ、食糧はまあ私色々頑張るわ」

「え、あっはい、……………頑張る？何を？」

「色々だよ、じゃ他の人にも配ってくる、私が持ってた食糧も多分この学校にいる人に3日ずつぐらい配っても少し残るぐらいはある」  
リュックをその場に置いて

「待って、今そのリュック何処から出てきましたか？後容量どうなってるんです——んぐう?!」

「鳴くのなら 閉じてしまおう その口を」

「んー！んー!!」

「じゃああの一！」スタスタ…

「んっぐっ…なんなんですかもう！」ダツダツ…

「なんかついていったぞあいつ」

「そんな事より…とりあえず食べるか…」

「そうだな」

——廊下——

「喉つめるかと思いましたよ」

「ゆっくり噛んで食べたらよかつたじゃない」

「学校の構造しってるんですか？」

「知るわけない」

「ならダメじゃないですか」

「当てずっぽうで行くんだよ、うーん、とりあえずあの教室行くか」

「適當すぎる…」

「たのもー」ガラツ

「……あ？誰だ、ここはアタシの場所だぞ」

「……!?冬将「ご飯持ってきただけっすよ、肉多めがいいかね？」」

「……いらねえ」

「残念！既に机に置いている！まあ気が向いたら食べたらいいいじゃ、

また会ったらなー」

「え、ん？、え？あ、し、失礼します！」ガラガラ…

「………」モグツ

「ドキドキした…」

「え、何恋でもした？おめでどう」

「違います！知らないんですか！」

「知るわけない」

「あ、え、じゃあ教えてくださいさっきの——

解説聞き中

「へー冬將軍！いい二つ名(?)じゃないかかっこいい、大雪山おろし  
教えない」

「そんな反応するんですか……そういえばあなたの名前知らなかった  
ですねめちゃくちゃ今更ですけど」

「え、本当今更、私はシェーヴルだよ何故か学生の中に入れられた年寄  
りだよ」

「年寄り……??何歳です?」

「知らないよ」

「なんでですか!?!自分の歳ですよ!?!」

「うるへえ!自分の歳なんて覚えてねえよこんにやろー!」

「騒がないで下さい!」

「ごめんなさい」

すると近くから話し声が聞こえ始めた

「フ?話し声や、盗み聞きしたろ」

「趣味が悪いですね……あれは貴族の人達でしょうか」

聞き耳中

「あー、あれじゃな、ここの貴族って奴らはあの白髪さんは結構聞いてくれそうやけど……色々やべー奴らなんじゃな?」

「優しく言いましたね大体は\*ウルサスのスラング\*ですよ」

「さてはあんた貴族関係が嫌いじゃな?」

「ええそりやもう——」

スラングのオンパレードですしばらくお待ち下さい

「落ち着こう、一旦ね?」

「すみません…人数減りましたね」

「だねーついてくる人が……ええ?今あいつ何言いやがったよ貢献って、意味的にただの略奪を少し上品に言っただけやないか殴るか、殴ろう、よし行ってくる」

「へ?あ、まって」

——貴族集団——

——ないだろうk「どっへーイ」(ゴスツ)うぐつ!」

「えっ?」

「はっ?」

「ぐっ…だ、誰だお前は!?!」

「白い奴らに学生と間違えられて投げ入れられた旅する一般人だわどあっほーう」

「こんな事して…!ただで済むと思っているのか!?!」

「なんだこの定番セリフ、いやあんた様がさつき言ったの覚えてる?」

「さつき…?ハツ平民が貴族に対して貢献する、当たり前的事では」

「なんだこいつただの言葉遣い丁重な盗賊ジャマイカ」

「なに：？今なんと言った!？」

「だってあれやろ？それめっちゃ簡単に言えば他の貴族じゃない奴らから略奪やろ？ただの盗賊じゃないですかやだー」

「貴様：!!」

「平民が何ですかこのやろーあなたさんだって首っ切つて身体だけにしたらあなたが言ってる平民と見分けつきませんよ」

「言わせておけば!!」

「やめなさい!」

掴みかかろうとするパーヴェルに止めるよう声がかかるが止まらずそのまま首を押さえつけようと迫る

「ウルサスの人って力強いよね：」ガシッ

「なっ、離せ！私に触るな!」

「いや、はいごめんなさい煽りすぎました、いやただね？そう言うのはダメだと思うんだ、後白髪の人あのままだと了承したろ？そんな争い見たいん？いやここがそういう考えって事だったらまあ悪い事しましたよ」

「いいから、さっさと離せ!」

「忘れてたすいません」パッ

「うわっ、」ヒュルツ：ガシッ

「大丈夫ですかい？触ったら怒られるんでロープで引っ張ってますけど」グググッ

「……………」

「うーん……………あ、そうだ、なら取引でもしません？」

「…取引?」

「そうそう、言われたら大抵の物は貴方に用意しますとも、そのかわり貴方はですよ、その貴族やらのプライドやらメンツやら平民貴族の差やら、脱ぎ捨てて下さい」

「なんだと？何を言っている？馬鹿なのか?」

「え、今気づいたの？そうだよ?」

「……………どこまでなら用意できるの?」

「生徒会長様!？」

「うーん………ここで全生徒1年間三食食べて行けるぐらいの食糧  
だったり、紅茶、娯楽用品とか?」

「後に連れてグレードダウンしてるじゃないか」

「いいの思いつかないんだよあんた様はなんかあるのかい?」

「貴様の死」

「これは酷い、何回ぐらいやったらいい?」

「は?、そうだな100……これぐらいだろう」

「OK、じゃほらっ」サツクツ

「これは……ナイフ?これがどうした」

「ん?私の死だろう?さつき言った回数やればいい」

「は、ハハッ、気でも狂ったか!なら望み通りに!」

「まあやったら契約に了承したという事で」ザクツ

「——シエーヴルさん!!」

「なんだ、お前は」

「貴族……やっぱり貴方達は!」

「まだあつて数時間かそんぐらいなのにそんな心配していただけると  
嬉しいねえ」

「な、」

「——」

「え、ええ?」

「深くまで刺しましたねー、まあ刺したんで、契約、よろしくお願  
いします」

心臓にナイフが突き刺さったまま起き上がるその男は仮面をして  
顔が隠れているのに、とてもいい笑顔をしているように見えた。

## ウルサスの…… (2)

「馬鹿な…貴様は死んだはず…!?!」

「ハツハツハ、残念だったな!ただじや死なん!」

「と、とりあえずナイフ抜きましようか」ナイフを握る

「あ、まって一気に引き抜かな「えいっ!」うっげえ…」ぼたぼた…

「あぁごめんなさい!」

「大丈夫、ちよつと異物感が無くなっただけ」

「一体どうなっている!?!」

「こうなってるんですよ?」

「どうなってるのよ…」

「まあ、ひとまずですよ、条件飲んだという事でいいつすね?いいよな、よし解散!さよなら!」

「待て、それとこれとは話が違うだろう!何故我々が貴族としてのメンツをすてなければならぬ!」

「邪魔だからでしょうよ」

「邪魔だと?」

「こんな状況ですよそんなメンツやら権力やらつてなんの役に立ちますか、いや、精神状態保つのに役に立つ?うーん?」

「なにを一人で喋っている!貴族の事など平民が分かるわけないだろう!ましてや貴様のような貴族を殴るような奴にはな!」

「何が貴族じやこちとらどつかのどところの一番上殴って争い治めたりしとんのじやい貴族一人殴つてもちよつと罪悪感ぐらいしかないわ」

罪悪感少しあるのかとその場に居た全員が思った

「な…ん、なら何故殴った!」

「言葉より拳が出ちやうんだよ、いつか直したいなコンチツクシヨウ!」ヒュン……キラーン

「なら直す意思を見せろ!次からは拳を出さない!わかったか!?!」

「ああわかった!検討に検討を重ね慎重に審議してから拳を出す!」

「そうではない!そもそも出すなど言っている!」

ワーワーギヤイギヤイ……

「……………なんだか論点が完全にズレてないかしらあれ」

「私もそう思います……………」

「お、おい貴様ら！話がずれ

「なんだうるさいぞ！（うるせえ！）」

「ヒッ、」

「ああ！もう面倒くさい！寒いし面倒くさいし！、！そうやあんたら一旦平民…普通の生徒として暮らしてみい、少しは好きになれるかもしれないぞ」ズアッ…

「!?なんだこの霧は、一体どういう事だ！せつめ——

その場に居た貴族の集団が霧に包まれる、霧は校内まで入っており少しして、霧が晴れるとそこには……………白い髪の生徒会長と言われていた少女以外全員が倒れていた

「一体何をしたの!?!」

「寝てもらっただけです後ついでに離れていった人達とかも寝かせましたと言うか全生徒寝かせました、やっちゃったぜ」

「何してるんですか、と言うか寝かせた?、もしかしてシエーヴルさんって……………」

「あー感染者だよ一応、でもほぼかかってないような物なんだけど…後これちよつと違うものだしまあ説明させないで、説明苦手だから」

「え、う、はあ、この際それはどうでもいいわ、寝かせたと言っていたけど、一体どうして?」

「えーただ貴族としてではなくごく普通の、一般の生徒としての世界を体験してるだけですよ、本当に嫌なら、貴族としてのメンツが大事ならすぐ目覚ましますよ後死んでしまったら」

「何故私は寝かせなかったの?」

「話通じそうだったから★、あ、」シュンツ…

「え、消えた、?、これは鏡?でもどうし（ピカッ）きゃ!」ポイ……………シュン!

「え、いきなグヘ!」

「うわ!、え外?なんでこんなに人が倒れて」



「ふあ！火が…え？どういう…」

「食堂の人達…？火？まさかあの人」

「爆鎮完了！」ビシッ

「何してるんですか、ここら一帯が真っ白になってる…」

「見られた…恥ずかし、消化器の勢いが凄くてな、ほら」

指差した方向を見ると

消化器「ガタガタガタガタガタ」ブシユウウウウウ…

「荒ぶってる!?!いや止めて下さいよ!?!」

「いやー、…どうやって止めようか力づく？結構ダメージくらくらうと思  
う…」

「早く行って下さい」

「ヲ？」

「早く」

「ワツカリマシター」ダツシユ

数時間後

「長く苦しい戦いだった」

消化器「……………」

「腕変な風に曲がってますよ…何故火事か？」

「これじゃない？」カラッ

「それは？」

「割れたランタン、少し寒かったから付けたんでしょ、それでなんかで  
ガツシャーン、ライ違うまあなんやかんやで色々あったんでしょ」

「なんで迷惑な事を…」

「わー辛辣ー、まあ命あるからいいじゃない、あ、やっべ貴族の人達お  
きてるかもしんね」スチャ

「またいきなり」

「で帰ってきたわけだけど」

「まだ起きてませんね」

「あ、おかえりなさい？まだ起きては居ないわよ」

「おつかしいなあ…普通30分ぐらいで起きるんじゃないけど？」

「どうしたのかしら…」

「ん…ハッ！私が読んでいた漫画はどこへ!？」

「え？トレーニングマシンは…」

「やっぱりあの脚が…あれ？」

「さてはかなり楽しんできたな？あんたら？」

「すっごい楽しんでそうですね」

「えーと？」

「とりあえず全員起きたね？コーヒーのむ？」

「あ、私はコーラでお願いします」

「私も何か炭酸飲料でお願いできるか？」

「待って、まだ一人起きてないわ」

「え、誰…この人か名前なんでしたっけ」

「パーヴェエ「OK、パーさんね」怒ると思うわよ…？」

「そんなものより私シリアスが怖い」

「と、とりあえず待ちますか」

一時間後

「おい！その手は反則だろう！」ライフ 300

「貴族さ「私の事はニコでいいぞ？今は貴族ではなく、お前達と同じ、カードゲームを楽しむ者だ」…ニコ…かかったな！これで終わりだ！」

「な！グ、グアアア!!」ライフ 0

「楽しんでるなあ……」

「フツ、フツ」筋肉を見せつけている

「全く…貴族に負ける訳にはいかないなあ！」脱ぎ

「な、何をしてるんですか貴方達わあ！」顔を手で覆っている

「離れていった他の人達も集まっている……」

「これだけ騒がしいのによく寝れるなあ」

やから一時間



「ちよつと傷つくわねその反応は…」

「ここにいたか平民」

「あ、パーさんどうも気すみました？」

「ああ、後は私がやる」

「まだやるんですかあ…何があつたんですかね」

「聞きたいか？」うずつ

「あ、遠慮します…」

「そうか…そういえば名前は？」

「シエーヴルですよ？」

「そうか、フツ私と似ているではないか名誉に思え」

「感謝の極み………じゃないよ私はヴルそつちヴェルじゃないです

か」

「そうだな、だが言葉の響きが似ている、名誉な事だ」

「やだ、極論そういうのは好き、これは感謝のするわ」片膝つき頭下げ  
る

「すいませんここに………何やってるんですか？」

「感謝してた」

「感謝されていた」

「は、はあ？まあとにかく来てくれませんか？」

「え、なんですか」

「いや掃除を試してみながんばったので食事をしようって事で、少し、料理を作って出してるんですけど………」

「人が足りなくて猫の手も借りたい状況という訳だね、私も同行しよう」

「自由人」

「その通りだよ」

—— 食堂 ——

「やってきました食堂」

「そんな事言っていないで作って下さい」

「あいさ、で何作るん？私ウルサスの料理とか全く知らない…」

「………教えよつか？」

「んお？……………綺麗な目してるねー」

「え！ありがとう？お兄さんもいい仮面だね！」

「ありがとう、私のお気に入りに入るんだ私の事はお爺ちゃんがいい……………君の事はフライパン少女と呼ぼう」

「フライパン少女？、うん！いいよ！」

「じゃおやすみなさい、寝てきなさいな、」

「え？大丈夫だよ？」

「寝てないじやろ？後色々あったんじや寝なさいな、睡眠はいいぞお？」

「んー…分かった、でも、作り方は教えるから寝ないよ！」

「んまー元気な子、ならお願いしますよフライパン先生」

「これがのちにグムと言われる少女との出会いだった

「え、また会うんですか？」

知る訳ない、今考えてるんだ（メタア）

## ウルサスの…3

「つまり落ち着ける場所がほしいと、まあ周り結構騒がしくなったからなあ…何故私に聞いたのかわからなけど」

「それは…暇そうでしたので?」

「結構ズバツと言うんですね…うーむ静かで落ち着ける、…あ、いし所知ってる防犯もバツチりだから寝ても大丈夫、ただ一人にはなれんけど」

「そうなんですか…案内お願いしても?」

「あいよー今からこれ持って行こうと思ってたし」(朝食の入ったお盆)

「着いて行ってもいい?」

「あ、いつぞやのフライパン少女、うーん…」

「私はいいですよ、」

「なら行きましょう、ごーごー」

朝ご飯を食べた後の廊下で声をかけられ落ち着ける場所へと案内を頼まれフライパン少女と本を持っている少女を連れてとある場所へと向かっていた

「やつほーう、ご飯持ってきたぞー起きろー」ガララツ

「…なんだオマエか」

「食堂来てなかったでしょう?だから持ってきた」

「そうか、置いたらすぐにとっか行け」

「置きますともだけど今回条件があります」

「…なんだよ」

「ここに二人ほど入れてもいい?」

「他の教室を探せ」

「知ってる?もうほかの所はカードゲームの部屋やらトレーニングの場所なってるんでっせ?静かで、落ち着ける、後防犯してる所ってここなんですよ冬將軍」

「それは遠回しにアタシがボツチって言ってるよな?」

「さてなんの事やら」

「貴方は……ソニアですか？」

「オマエは……アンナか」

「フライパン少女だよー！」

「それ気に入ったんですね……」

「うん！」

「………わかった、だが一つアタシからも条件がある」

「ほいほい」

「次からは大盛りだ」

「めっちゃ大盛りで持つてきますとも、なんだつたらおまけもつける」

「後昼の時暇だなんかしろ」

「なあんて無茶振りなにしろつてんですか後話し相手なら来たでしよ

う、ほらあのフライパン少女見てみなよ、いい寝顔だぜ？」

「寝てるじゃねえか、………可愛いな」

「素直だ、デレましたよ冬將軍！はるが………ぐっふ」

「なんだ？どうかしたか？アタシはあまりこういう時言う言葉を知ら

ないんだ……」

「本当ウルサス人つて腕っ節強い……」

「アンナもすげえぞ」

「知り合いなんですかい？」

「………まあ」

「ほえーまあいずれゆつくり、私これから夏將軍と手合わせするんだ」

「そうか、じゃあな………待てアタシも行く、最近身体が鈍ってるから

な、二人は好きにしているといい」

「え、あ、いってらっしゃい」

「はー、驚くかねえ夏將軍は」

「どうだかな」

——中庭——

「お、きた………か？」

「どーも、すんごいゲスト来ちやった」

「………」

「お、おお」

「あれって…冬將軍か!？」

「マジかよ…」

「(うるせえな…)」

「よく見たらカツコいいよな…」

「誰がつけたか冬將軍…いいではないか私もそんな二つ名的な物が欲しいな」

「じゃあ付けてやるよそうだな…。(瞬殺のニコ) どうだ？」

「いいな！」

「(自分)がつくんだろ知ってる」

「な、今日こそ倒してやる！スタンバイ！」

「…うるせえな」

「ヲ?どうしました將軍」

「なんでもねえ、こうか？」ガシッ

「待てなんで私が実験台なんだ」

「(そこにいたから(だろ))」

「待つうわああああ!!」

ロザリンはソニアに服を掴まれ次に物凄い勢いでソニアは体を軸に回転し…ロザリンは上に投げ飛ばされた。

「大雪山…おろし!!」

「…ああああ!!(ボフォン)…んっつお前らな！」

「うーん完璧」10点

「豪快でした」10点

「いいと思うわ」10点

「よっしや満点!じゃないんだよ!私を実験台にするなよ！」

「いやーノリがいい、それよりいつの間にか?本好きさんと生徒会長さん」

「少し見てみようかなと」

「面白そうだったからきたわ」紅茶飲み

「フライパン少女は？」

「教室で寝てますよ、フライパン少女って長くありませんか？」

「えー本人気についてそうだし…料理器具とかけて、少女と



く。」

「…その心は？」

ここで冬将軍（ソニア）が言うんだ…と何人かが思った。

「どちらも扱いが難しいでしょう、という事でフライパン改めムーさんにする」

「一体どう言う事なの？」

「アイツの言葉に意味求めたら無駄だと思うぞ」

「私もそう思う」

「私もですかね…」

「まあそれはいい、なあ私にも何か教えてくれよ！」

「えー、とりあえず殴ればいいよいずれ相手は倒れる」

「いい言葉だな」

「ただの脳筋じゃないか！」

「夏将軍…とある場所にはこんな言葉がある…力こそ正義だと」

「ぐ、また負けた…」

「フハハハ!!力こそ!そう力こそ正義なんだニコ!!」

「カード馬鹿どもうるさいぞ！」

「賑やかになったわねー」

「そうですね…読み終わってしまいました」

「あ、そうだそうだ、本好きさんよ」

「なんですか？」

「これいる？」

「その紙は…——えっ!これって!」

本を読み終わり、次に行こうとしたアンナ、そして唐突に渡された何枚もの紙そこに書かれていたものは

「第一話の…下書き!?!」

それは今読んでいた推理本の下書き…出版される前の様々な案などが書き出された作者手書き文字のものだった

「いや、好きなら喜ぶかなあと」

「どこでこれを？」

「いや手伝いの途中推理物とか謎解きものは読まないって言ったらな

んか投げつけられた」

「手伝い…?」

「実際に、というか幻覚でその状況とかを作り出したりして手伝って  
たんだよ、もう絶対ああいうのは手伝わねえ」

「大変、目に光がないわ」

「殴れば治るんじゃないか?」

「掃除をすれば輝くぞ!」

「いやカードバトルを始めよう」

「共に筋肉を鍛えようではないか!」

「ナイスマツスル!」

「一緒にお菓子を作りましょう!」

「ああ!いきなり来るな!狭いじゃねえか!」

暫くお待ち 「光に……………なれええええ!!!」

「疲れた…」

「お疲れ夏將軍」

「ああ、いつの間にか全員帰ってやがる…」

「お昼だからね…:…:…あ、そうだ將軍」

「なんだ?」

「冬將軍からさ…:昼飯の時なんか暇らしいからさ」

「?ああ」

「一緒に放送室でラジオするか」

「唐突過ぎる……………まあいいぞ!」

—— 食堂 ——

「…:チツ、アタシはいいって」

「いいじゃないですかソニア」

「いっぱい食べてね!!」

キーン…

「ん?なんだ」

『あーあー聞こえてるのかこれ?』

『知らないっす、あー聞こえます?聞こえてる人は全力でなんか叫

んで下さい、はい 1 2 3』

『ドロー!! (大胸筋!!) (大雪山おろしいいい!!)』

『あゝあゝうるさい!!』

『耳が!耳がやばい!』

「何やってるんだアイツらは」

「そう言う割にはいい顔してるわね」

「あの時いた貴族か、そんな事ねえよ」

「本当ですか?」

「うるせえ、アタシは寝る」ガタツ

「まあまあ、デザートも出るからもう少し居たらどう?」

「……めんどくせえな」

『あーやつと耳が治ってきた元気いっすね』

『次からはこういう事やめそうぜ、鼓膜が足りなくなる』

『……………1』

『やめろつて!』

『あつハイ、まあ話しを変えまして、はいと言うわけですよとある人からですよ昼の時なんかしろとあったわけで始まりましたよこの口ザリンラジオ(?)』

『待てよ私の名前しかはいつて(モグっ)ねえふあないふあ』

『食べるか喋るかどっちかにしましょう、だって私おまけみたいな物ですし?私みたいな年寄りみたいなやつより若々しい花も恥じらう学校生の方が良くない?』

『お前がメインなんだよ、まあ今はいい、それよりもだ食堂に特盛の裏技あるって本当か?』

『これって全員に聞かれてるんですけど、ただ合言葉言えればいいだけだよ、いつの間にかこうなってたけど』

『なあ教えろよ、な?私とお前の仲だろ?』

『まだほぼ初対面みたいなものですよ將軍…じゃあゆうぞー』

青い目の鳥が飛び立つ

春に花がさき

野原を走る

馬、森走る

鹿、弓を引けば

矢、それを見る私は

牢の中。

はいこれ、』

『なんだよ謎解きかよ、言ってる事もむちゃくちゃだし…なんだよ』

『いやーかなり安直だからわかりやすいよ？うんめっちゃ無理矢理だし』

『分からない！ああ次だ！お便りがきてる！えーと？』

『待ってよ、これ最初なのになぜ？』

『考えるだけ無駄だ、じゃ行くぞ…——』

## ウルサスの子供たち？ 4

——って訳で今回は終わりっす、いずれ来る日までのんびり生活しましょ〜』

『また唐突だな…またな!』

「アハハハ! ヒツ…ハハハ!!」バンツバンツ

「笑い過ぎだろシユラ…そんな面白かったか? これ」

リエータとビーハンターは訓練室でのとある疑問をきっかけに話そうと言う事でお菓子を持ち寄り部屋で話していた

『グツ…まだまだ! はあ!』

『お、まだ来るのか、オラ!』

『ウグ…これぐらいなら!』バシツ

『おお!?!…今のは危なかった、なあそのタフさはどうしたんだ?』

『学校に居た時のお陰だよ、散々実験台にされたからなそしてそこで学んだのは…叩いて!』

『おっ—』

『殴って殴って殴り続ければ! 相手を倒せるって事だ!』

『どんな奴に教わったんだ、だが技術がまだだね!』

『うおっ、……くそっもう一回だ!』

訓練室の利用時間は——終了です他オペレーターの——

『あー今日は終わりだな、それよりだ、さっきの話聞かせろよ実験台? 学校で何があった? 蜂蜜ジュース持って来て話そうぜ?』

『そうだなあ……いいぞ、お菓子は私が持つてくる』

『いいねえ、シャワー浴びてさっぱりしてからアタイの部屋に集合な!』

そんな会話がありビーハンターの部屋であった事などを大まかに話しながら、昼時にやっていた校内放送のテープを回していた所3回の放送を流した時にはもう涙を流すほどの大笑いをしていた。

「いや、最高だよ、ここの飯の時にでもやってくれよ!」

「あー無理だ、私一人じゃできねーよ、もう一人声聞こえてただろ? アイツが居ないとこんな愉快にできないそもそもだ! いきなりなんな

「なんだよ！」グイツ

「おいおい、そんな一気に飲んで大丈夫か？何があつたんだよ」

「大丈夫ふだ！、そうだ、アイツがいきなりだ！」

「ああ」

「消えたんだよ！いきなり！」

「消えた？」

「そうだ！ある日いきなり」「ごめん、後よろしく、もし、もし外に出たら、助けが来たら周りを見て、私を代わりに恨んでいい、だけど前向いて、やりたい事して、ゆっくり息を引き取ってくれ、」ってテープで流して！どこ探しても居なくて！意味わかんねえよ！確かにそれから数日してロドスが来て外見て驚いた！けどいきなり消えるのはなんだよ！」

「お、落ち着けよ、ほら「大丈夫か？外まで響いてるぞ」（ガチャ）

「いや、蜂蜜で酔ったみたいでな：色々吐き出してるんだ」

「……学校での事か？」

「お、察しがいい、そうなんだよ」

「次会ったら全力で殴るって決めてる、それよりだグムにお菓子取りに行つて来てもらったって聞いてなアタシももらいに来た」

「お、おつかないな、ほら、ところで、だその噂の逃亡犯の名前つてなんだ？」

「それはシユラ、お前—シエーヴルだろ」

「シエーヴル：？なんか最近聞いたな：」

「それは本当か？」パキパキツ

「骨鳴らすんじゃねえ：たっしか前新しく入った奴でボスと歩いてたのを——までどこ行くんだ？」

「ドクターの所だ、少し聞きたい事ができたからな」

「リエータ、他も連れてくぞ」

「確か貴族の：パーヴィルだったかアイツも居たよな呼んでくる」

「ま、待てよ、そうと決まった訳じゃないだろ？特徴とか聞かないのか？」

「そうだな、どんな感じのやつだった？」

「確か：仮面つけ「決まりだ、行くぞ」は、はあ？」

——ロドス、ドクター執務室——

「ど、どうしましたか？ 皆さん集まって」

「少し話があつてな、ドクターいいか？」

「話せる事なら話そう」

「仮面をつけてふざけた話し方のやつ：知ってるか？」

「……（天井をチラツと見る）知らないな」

「ダウト、嘘ですね」

「何を根拠に」

「少し悩みましたね？そして何故少し天井を見たんですか？」

「顔隠しているのに何故わかる：何故天井をみたか？そんなの決まっている……そんな全力で首横に振るなもうバレているだろうC、降りてこい」

そう天井を向きながら話すドクターを見てアーミヤは少し頭を押さえウルサス学生自治団のメンバーは天井を見たそこには

「……：はろー、ドクター君よもうちよつと頑張ってくれてもいいじゃないか、めっちゃ頑張つて合わないようになり情報整理してたのに」

「めんどくさくなつたんだ察しろ」

「酷い！それでもあんたは」とりあえず、降りてこい」やですよ絶対冬將軍さん私の事せつおし（大雪山おろし）するじゃないですか本少女もやめて？本を素振りしないで？夏將軍と生徒会長、パーさんに至ってはなんすかそれ生魚とお湯とモップってなんですか酔ってんかあんなら」

「降りて来てくれないの……？」

「アー困りますムーさん罪悪感がすつごいのか、まっつてその水風船どうするのかパーさん待つてよ待「フツ！」イッタイメガアアア!!」ヒュー……ゴッス……ガシッ

「ここで暴れないでください」

「無理だ……大雪山……おろし!!」

「うおおー！」

「オラッ！」べっチャ

「フツ」(ゴン)

「ふふふ」(コポコポ)

「零したお湯は拭き取っておきます」(キュキュ)

「見事な連携だ…」

「熱いはヌルツとするわ、私が悪いんですねそうですねごめんなさいはい」

「さて、なんであんな事したか話してもらいましょうか」

「いや、あの、私もういらないうんじやないかって」

「へえ、それで？」

「それで、ほら私が居るとさらに話がよじれると思っさ、だからレユニオンの人達を轢きながら移動してね？、「へえ、それで？」「アーウ…」  
「それ元レユニオン幹部だぞ」ペラッカキカキ

「あら、新しい話の種できたわね、お茶会…しましょう？」

「強制ですよね知ってる！につげろーい！」

「あ、まて！」

「リエータ」

「なんだ？」

「見てろ」

「………ああ」

「おお、扉開けたら筋肉しかねえアツハツハ、無理だわこれ」

「まあゆっくり話そうぜ？全員集まったんだ楽しむぞ」

「ただの私の地獄では？」

「何か？」

「黙ります」

暫く、お待ち下さい、暫く、暫く…

「おはよー！」

「お、 Gumちゃんなんかいつもより元気じゃないか？」

「へへっそう？今日のご飯は楽しみなんだー！」

「そうなのか、なんだかいつもは見ない顔もいるな」



「何があるんだ？」

キーン……

「な、なんだ？」

「始まった！」

『あつあー？ウツウー？聞こえてるか？』

『知らないよ、あれなんかデジャヴ感じる』

『ハハツそうだな！よっしや頼むぜ最初！』

『え、嘘私最初なん？バツカじゃねえの？』

『あ？』

『ごめんなさい、じゃ学違う違う帰ってきたー口ザあ、リエータ放送ーわーパチパチ、ステキー（裏声）スキダー（高音&小声）』

『棒読みで噛み噛みじゃねえか後最後恥ずかしくなつたろ』

『そうだよ、こんなんでも私は恥ずかしがり屋なんだやめてくれで、だ初回なのに何故か今回はゲストも質問もあるぞなんで？（疑問）』

『急遽用意したんだ、いいだろ』

『あ、もう来るんすね、はいドクター君です、よく用意したな』

『あの放送が生で聴けるんだいいだろう』

『あれそんなにいいの？ただのくっちゃべってるだけの面白味のないものだぞ？』

『アーミヤをってみろ』

『そう言えばどうしたの？社長は』

『笑いすぎてお腹が筋肉痛動けなくなっている、おかげで今日は少しサボっても何も言われない、いやっほう！』

『さては理性無いなお主』

『何を言っている、いつからあると錯覚していた』キリッ

『なん…だど？おんなじ反応するのか…ええ？（困惑）』

『仲良いな、さて一枚目のお便りだ』

『そういう切り替え、嫌いじゃない』

『知ってるか？これ、私達の仕事なんだぜ？』

『今更でしょ』

『とあるオペレーターからだ「ドクター!!私だ!結婚してくれえええ

!!」……………全力で読んでしまった』

『勢いがあつてヨシ、ご結婚おめでとうございます』

『おめでとう』

『違う、そもそもこれ書いたの誰だ』

『知る訳ないでしょ』

『そうだな（ビリッ）次だ——』

「なんだこれ、なんだこれ（再確認）」

「めっちゃ、めっちゃはっちゃけてるドクターが、ドクターが、」（プルプル）

「アタシが前出た時と同じ便りじゃねえか」

「あれ結局誰が出したのかしらね？」

「グムは知ってますか？」

「フライパン少女は知ってるよ！、それは……………お爺ちゃんです！」

「そうなのか、つまり今回のも」

「多分そうだと思うよ！」

「変わらねえ」

「けれど、ちよつとしたロドスへの恩返しとちよつとした搜索の為に  
入ったけど…よかったじゃないですか」

「まあ…否定はしねえよ」

「青い海！照りつける太陽！あゝちゝいゝ！」なら脱げよ」※夏イベントです

『皆さま！おっはようございまあす！シエスタ市へようこそ！日々の人間関係…その他諸々疲れてませんか？そんな疲れた皆様方！半月に渡って行われる黒曜石祭、青い海！ご飯を食べて忘れてしまいましたよ！では皆様！いつてらっしゃい！……こんな感じですかね？え、その録』ブツツ！

「……………いつそ殺して欲しいなあ」

「…この放送、お前の声に似てるな」（遠い目）

「スーさん…信じたく無いけど本物がやってます…あの放送の人許さねえ…何が「ご飯奢るからすいませんけどこれ言っていただけませんか？」だ、何がどうしていきなりドツキりに巻き込まれないけないんすかアツツウ…」ガクツ

現在地 観光都市シエスタのビーチにて……………いつも着ている戦闘服とは違い、軽装に身を包み呆れた様な目で砂浜に崩れ落ちた馬鹿を見る男…—スカルシュレッダーといつも通り全身を隙間なく着込み昨日シエスタのスタッフの唐突ドツキりを仕掛けられ砂浜で溶けている仮面の男…………シエーヴルの姿があった。

「そんな話について行くからそうなる……………と言うか脱げよ、そんな暑いなら」

「私も、そう思う、何故脱げん？」

そう言いながら後ろから大きな影…いつもよりは軽装で手にドリントクを持ちながら歩いてくるパトリオット

「私のアイデンティティがなくなる!!」

「なんだそんな事か、ほら着替えてこい」

「そんな事!?!私からこのキツチリ服取ったらアイデンティティがなくなつて影薄うなるよ!?!?!」

「無くても濃いだろ…パトリオットも、俺でさえ一応水着着てるんだ、

ほら行け」

「……なら上着だけ脱ぎますよ……」

「上着脱いでも後2枚着てるんでいつそ上半身裸になりましょう主人」

「それはちよつと……」

「………持ってきていないのか？」目隠し

「いや、ありますよ………あのターさんも目隠ししてるんです？スイカまだ設置して無いっすよ？後その剣でやるん？」

「……ん？」ブンツ

「目隠し外しましよおう！」ザツ……

「……すう……すう……」

「こんな自由でいいのか……？まあいいか」

「わあっ！、綺麗だね！サーシャ！」

「そうだな……綺麗だ」

ビーチにて、レユニオン大集合である

「あ！皆さん！」

「……大集合だな」

「ドクター君達じゃ無いか、やほー二日ぶりぐらいっすね」

「唐突に休みもぎ取って「ちよつと海と言う名の湖みたいな観光都市行ってくるー」って言って……楽しそうで何よりです」

「前はまだ寒かったから水着とか着れなかったしねー……ちよつと冷たいものでも買ってくる」どろお……

「なんか足溶け始めてないかC!?!肩貸すぞ……？」

「ドクター君も似たような服装やけどね……」

「正直クソ暑い」

「二人とも熱中症には気をつけて下さいよ……？行きましようか」

「………私も、ついて行こう、何か食べたい物は？」

「ああ、すまんが行ってやってくれ……パトリオット」

「なんでも構わない……いってらっしやい」

「分かった」

「ん〜？あれ!?ドクターとCお兄ちゃん!大丈夫!」

「熱い…すいませんがフライパン少女…おすすめのアイスお願い…ドクター君達は?」

「え、………おすすめでお願いする」

「え、えーと…これを…いいんですか?」

「給料あんまり使わんから…」

「はーい!少し待っててね!」

「アア…生き返るわあ………」パクツ…

「えへへ…よかった!」パタパタ

「忙しそうだな…」

「そうっすねえ…」

「アハハ…流石に目が回っちゃいそうだよ…そうだ!ドクター!アーミヤちゃんを借りてもいいかな?」

「え?」

「手伝ってくれたらなんとか手が回りそうなんだけど…」

「手伝おうか?」

「ドクター君よ、私達(パトさん含む)みたいなのが露店にいたらどうよ」

「………怪しいな、かなり怪しいな」

「でしょう?」

「お兄ちゃん仮面外したらいいのに…」

「外しても客は来ませんよ、 Gumさんみたいな二人だったら話は別やけど」

「ええ〜?…ねえお兄ちゃん」

「はいはい?」

「露店を売り終わったら…一緒にご飯食べよ?」

「いいっすよー美味しい所教えて貰ったんですよ、行きましょ行きましょ」

「やった！約束だよ！」

「シヤア！」

「ヨクイイマシタ！グム！」

「タブン、シリアイノコドモトイクカンカクダト

「イワナイデオキマシヨウ、パーヴィル

「なんかあそこで將軍達見てるけど」

「あ、…本当だね！」

「では、頑張つてく終わりぐらいにまた来ますんでー」

「アーミヤも頑張れ」

「はい！」

「…大丈夫か？、二人共」

「大丈夫つすよパトさん」

「ああ、問題ない」

「ならいい…」

「では…私は屋台バーでも見に行く事にする、またな」

「またどこかで…ドクターが消えてもう4年か…」

「まだすぐそこに、居るぞ」

「そりやそうですね…なんかあっち凄いな…見た事ある人いる」

「…タルラ？」

「………」

「(いや…人違い…じゃ無いな、何故いる!?)」

「………」

タルラは観光客の女性Cをチラツと見ると…目隠しをし始め

「………」スタスタ

「もうちよつと左だ!!」

「………違う！そっちは右だ!!」

「………フツ！」

………スポンツ…コーン！

「痛ツ!!」コン！

「……スイカ割りは難しいな」

「わざとだろう？そんなピンポイントで当たらないよな？」ガツシイ

「あー…観光客の女性…多分それ、素だ」

「……もういい…」

「……食べるか？」スイカ

「……貰う」

「本当にあれ本人なの？あんなポンコツじゃないでしょ？ねえ？」

「いや聞かれても分からん…」

「それよりそれ…暑くないの？」

「そうだよなあ…もつと言ってやれせつかくの休暇なのによ」

「……パトリオット、いいじゃないか少しぐらい」

「……このワツフル、は私のだ」

「…頑固者め」

「……甘さは、正義だ」

「「……ビーチフラッグで決めよう」

「楽しそうだねえ…」

「隊長も楽しそうですけどねえ…」

「ほうほう…ここは一応湖で果てがあると…ちよつと主人泳いできま  
す」

「向こう岸まで行くつもりだな？私も同行しよう」

「なら自分も」

「俺もお」

「なら僕も」

『もう全員で行こう』

「やめろお前ら、何時間かかると思ってる」

「全力で」

「泳いだら」

「多分半日」

「そんな事に半日使うな、ライブでも見に行けアホ共が」

「えー…私あんまり最近のやつ分からないし…エンペラーぐらい？前に確か少し生で聞いた」

「色々あって面白いぞ、せつかくの黒曜石祭だ」

「祭りって聞くと私太鼓とかしか思い浮かばんから…舞でも舞えばいいかい？ 僕等は目指しちゃう？」

「やめろやめろ、もうちよつと今に関心を持って少し古いんだよ」

「容量が いっぱいです」

「こんのツ…旧型が!!」

「旧型で何が悪い!」

「アップデートしろよお爺ちゃん…」

「すまんがこれで最新式だ」

「なら機種変だな、中身をゴツソリ入れ替えよう」

「かなりやばい事言っているのに気づいていますか？」

「夏と水着のせいだ俺は悪くない」

「なら私も悪くないな」

「お前は平常運転だからギルティだ、よって水着に着替えてこい」

「だが断る」

「よろしい、ならばビーチフラッグだ」

「スカルシュレットダーもやるか」

「手加減は、なしだ」

「なんだこのメンツ」

「はい、位置に着きましたね…パトさんデツカ…こほん、レディ…  
ゴッ!!」

「「ツツ!! (よつこらしよ)」「」」

ダダダッ…ズボツ!!

「「なっ!?!」」

「さつき落とし穴掘ってた人いたから」スタスタ

「先に」

「それを」

「「言っておけ!!」」

「こんな格言を知ってる？ 恋と戦いはあらゆる事が正当化される…つまりこれも正当化されるわけだな、フラッグゲット」



「アレがクズか…」

「勝ちにしか興味のない外道め…」

「これが……お前の……やり方か」

「酷い言われよう」

引つ張り出し中

「また恨みが増えたな」

「そりゃ酷い……??」パリンツ!

「あ、おい、……消えたって事はなんかあったか」

「戦闘ですか?」

「さあな……まあ行ったんなら大丈夫だろ、……ちよつとBBQの所行つてくる」

「迷子になるなよ」

「なるか」

「また厄介事かなあ?ドクター君よ」

「C!丁度いい時に!手伝え!」

「ど、どこから現れたんですの?」

「それはサイコロく♪聞いてみよ♪」ゴロン…ゴロン

「今そんな場合じゃ「居たぞ!!」来たか!」

「はい!『最近あつた恥ずかしい話!』黒服の人!どうぞ!」

「は、はあ!?え、えーと…ズボンのチャック閉めるの忘れて一日過ごしてた事?」

「あーそれは恥ずかしい…その黒服さんは?」

「俺も!……え、なんだろ…」

「(結構ちゃんと足止めしてる…)」

「……………」

「シユヴァルツ!」

「話をしてくれた貴方にはこちらをプレゼント!特製キーホルダーですー……………あ、なんか始まつてる?」

少々会話中しぼら「全員捕らえろ」

「早いよ、まだ全部いい終わってないって」

「何を言っ……何をした」

「か、身体が動かない!？」

「なんなんだ!ふざけるなよ!」

黒服とシユヴアルツと呼ばれる者たちは何故か足が地面に縫い付けられるように動かなかった

「ただ即席だからすぐ動けるようになるけど……そんな時は頼みまーす!!」

「ッ!よくやった!とりあえず逃げるぞ!」

「はあ、はあ:足が、限界です」

「:増援が来たか!」

「黒服さん多いっすね、量産型?」

「ドクターとか言う奴は好きにしている:仮面のやつもだ」

「……誰が好きにしている?」

「また厄介事かCとロドスの」ガシッ

「!?熱い!」

「なんだ!?うおっ……ぐえ!」グンッ!

「うわあ:焼いたり、よろけさせて膝で腹蹴り上げるなんて:コワア」  
「手加減は無しだ……いやこの炎のやつは手加減をさせた方がいい」

「……イフリータ服を燃やす程度でな?」

「チエツ、じゃあミダイヤモンド・レアぐらいにしとくぜ!」

「スーさんも少しは手加減しようぜ?一割殺しぐらい」イデッイデデ

「逆にどうやんだよそれ:フッ!」ウオッ

「強い……」

「鼻を上方向に引つ張ると予想以上の激痛になる……」

「私より身長高いのに何故引つ張り上げられるのか」

「鼻あっ!鼻もげる!イデデッ!!」膝ついてる

「こんな感じか?」グイッ

「!?いい、イテエ!このガイテエエ!!」

「何やってるんだお前は:それ」ぐりっ

「手の甲おおおお??」

「阿鼻叫喚だな…!!」

「これ私が教えたって言わないで下さいよ?あの二人にめっちゃ怒られる気がするから…」ポイツ

「??…分かった!」

「さて、………まだ来るか?あ?」

「ヒツ、撤退!てっ、撤退だ!」

「昔はスーさんあんなじゃなかったのに…立派な不良になって…」

「不良ってなんだよ…怪我無いか?」

「ええ、わたくしはセイロン…わたくし達を救っていただき、感謝いたしますわ。」

「…おいドクター(C)こんな時…どうすればいいんだ?」

「…あー…笑えばいいと思うよ」

「絶対違うだろそ「分かった!やってみる」純粹…」

「あ、そういえば肉焼いてたんだっ!またな!」

「………アレが純粹無垢か」

「とんでもない純度でしょう?」

「だな…じゃ俺も戻る……なんかあったら言え」

「………やさしー」

「………わたくし達も急ぎ戻りましょう」

「そうだな、すまないがC、いいか?」

「大丈夫だ、問題ない」

「その返しはなんかな…」

次回に続く

「青い海！……照り焼きチキン」「腹減ったんだな？」

## ※夏イベ2

「火山が噴火かあ…大変つすね、溶岩って熱いし」(小並)

「他人事みたいに言うんだな」

「内心慌てるからご安心を(?)」

「ああなんか言葉遣い可笑しかったな」

「そういえばヘラグさん、あの後足止めありがとうございました、本当即席だとすぐ破られちゃうんですよね…」

「なに、あの短時間でアレ程拘束できた素晴らしい事だ」

「ぐっ…これが大人か…!!」

「Cの方が歳上だろ…」

「それ言われたらなんかなあ…あの銀髪の人強そうでしたね」

「……あのシュヴァルツというボディガードには心当たりがある」

「心当たりが？」

話聞き中

「はえ…なんか前に聞いた事あった気があるような無いような……セイロンさんは知らなかった見たいですね」

ガシャン！

「…セイロン!?いつから…おいC、事前に言え」

「今気づいたんですよ」

「そうか…」

「……その傭兵は、いつから活動を始め…そしていつ、姿を消したのでしょうか？」

「彼女の噂が流れ始めたのは、私が退役する前になるな、そして途切れたのは…おおよそ一年前、例の一家の事件と共にな」

「……六年前まで「はい、とりあえず暗い雰囲気やめましょ?ほらとりあえず紅茶でも飲みな?」え?…え?…え?」(困惑)

「お前本当」

「いやだつてさあ…なしてこんな暗いん？シリアスとか無理つすよ書けんし」

「メタいんだよお前！もうちよつと頑張れ！」

「無理だよ…もうダメなんだ…」

「諦めるな」

「ヘラグさん…私、頑張つ…違うよなんでこんな茶番してんだよほらセイロンさん困惑してますよ？」

「…？…？…？」

「お前が発端じやるがい！最近無かったのに！誰か！スーさん呼んでくれ！ツツコミが追いつかん！」

暫くお待ち下さい

「本当すいませんでした」

「だからって口の中に爆弾は酷くない？」真つ黒

「うるせえ、それしても足りんだろまた色々馬鹿しやがって、しかもあんない所の嬢さんの前で」

「市長の娘さんやつたつけ…」

「もつと駄目じゃねえか！」スパアン！！

「……良き友だな」

「友？……友達なのか？」

「知らないつすよ」

「ハア…で？詳しくは聞いてなかったが、どんな事になってる？」

「そりゃカクカクシカジカですよ」

「マルマルウマウマとでも言うと思つたか？」

「無理矢理にでも言わせてやる」

「……（もう既に言つてないか？）」

「言う気は無いな？」

「ならトランプでもして勝負するかい？」

「…やろうか」

「…私も参加しよう」

「ならもう一人呼ぼうか」

数分後

「……何故居る」

「…何故呼んだ？」バキツ

「ババ抜きでもしようかなと」

「……………」ガシツ

「あ、すごい頭包まれてるか——あー潰れる、頭潰れます帕特さん  
あああ…」アイアンクローで持ち上げられている

「これはしょうがないな」

「慈悲などない」

「勝負説明！帕特さんスーさんか勝てば色々教えます！私かヘラグさんが勝てばこっちに任せて！以上！あー結構ヤバイ！」ミシミシ

「そろそろ辞めてやれ」

「……………」

「仮面にヒビ入るかと…さてやりましょうか」

「切り替え早いな…」

「さあ！始まりましたチキチキババ抜き勝負！解説は「要らないのでは？」

「要りませんね、あの二人の警戒に戻ろうグーニーズ」

「時々唐突に変なこと言いますよねマルー…ん、このアイス美味しい  
ですね後でまた三つほど追加で買いたしましょう」

「マジヤレさんお腹壊しますよ」

「そうですよ！、この前キーもお腹壊してたし！」

「それは二人のお腹が弱いだけです、私は平気で…あむ」

「そんな事言つて後悔しても知りませんよ、多分主人も助けません」

「それは…怖い、辞めときます」

「…………そろそろ二人とも戻るみたいですよお？…それと皆さん、仕事  
ですう」

セイロンとドクター、そして少し隠れてはいるが二人に近づく謎の  
集団…

「はいはい、任務を確認します、12pを開いて下さい」  
『はい』

「さつき隊長から送られてきた任務は『二人の警護』(バレないように)です、そしてもし害を及ぼす輩が居れば……騒がれずに抑えろ」  
「命は取るなですね?」

「Exactly、その通り、適当に拘束しとけらしいです」

「適当に……つまり大通りに吊し上げとけと」

「いいですね、採用」

「バラバラにして部屋に……」

「それは不採用です」

ツツコミのいない恐怖を暫くお楽しみ下さい

「縛り方どうします?」グイッ

ナンツ……ア……トサツ

「足の方縛って吊るします?」

……!?……ク……ソ……

「なんか血抜き中みたいになりませんか?」

ヒツ……エ……ドサツ

「焼き鳥食べたくなってきました」

ヤ、ヤカレ……ル……

「後でご飯皆で食べに行きましょうか」

「え、副隊長の奢りっすか!」

くエ、ホント?」

くニク!ニクリョウリ!イキマショ!!

ザワザワ……ガヤ……ガヤ……

「……割り勘でお願いします」

「しようがないですねえ……」

「……流れ作業のようにやるの結構怖いよね」

「んー?そう?」

「……こんな所でなにやってるの?」

「あ、Wさん、どうも」

「……なに縛ってるのって聞いてるんだけど?」

「え？人です」

「…面白そうね、貸しなさい、こう！縛れば！いい感じよ」

「ほうほう…」

一方ドクター達

「……………いいぞ」

「……………ああ」スツ

「(ジョーカー引いちゃったなあ…)」

「(…これを言うのはきつと、最後だな…早く、早く戻ってきて来れないか！ロドスのドクター!!なんなんだ！この雰囲気、そろそろ血吐くぞ、ほら吐くぞ今に吐くぞ!!)」混乱

「……………なんですの？あの雰囲気は…」

「……………分からない…だが一つだけ言える事がある」

「ええ…わたくしもきつと同じ事を言えると思いますわ…」

「あそこに入りたくない」

現実是非情である、それもそうだろう、とても恰幅のいい男二人と普通に楽しんでそうな仮面の男、胃を押さええて震えているガスマスクの男が丸テーブルを囲み四人で異様な雰囲気でババ抜きをしている、こんな場所に入る人間が居るならば…その勇気を讃えよう、君が英雄だ…だがこんな言葉を知っているだろうか？……………誰かのピンチの時、もうどうにもできないそんな時

バアンツ!!

「ん？」

「…なあにしてるの？こんな所で？」

「…ありがとう…!!ミーシャ!!」

ヒーローは、英雄は必ず現れる、古い書物にもそう書かれている

「ハア…またあんたが何かやったんでしょ？C」

「ありがとう…姉ちゃん!!」

「ね!?!…ちよつと!!何があったって言うの!?!」

「えーただトランプ遊びしてただけなんじゃけど……………いやかなり変



な光景だなこれ」

「ドクターからヘルプが来たと思ったら…こんな事になっているとはね、覚悟は出来てるのよね？」

「いやー…すいません、もうやるようにやって下さい」

ガシヤアアッ!!!

「吹き飛んでいったな」

「……………作戦会議、しましょうか」

「…私は戻るぞ」

「またやろう」

「……………」

「さて、どんな作戦にするんですか？」

『いつ戻ってきた!?!』

「再配置早いですから私」

作戦く会議く中く

「で、その、ク…クツクツ、クロマ」

「クローニんだ」

「そうそれ、その人が居るであろう所の近くまで来ましたけど…どんな風に行きますか？…ヴィグナさん？」

「うーん…とりあえず配達員を装って見るってのはどう？」

「ならピザでも用意しよう、食品サンプルだけど」

「よし、じゃあ行きましょうか！」

「そうですねー」

「…謎の安心感があるな、」

「ドクター君どうしたんです？」

「なんでもない、行くぞ」

コンツココツコンツコンツ

なんだ！

「アツアツのピツアをお届けに参りましたー!!」

……………場所が違うー！よくみる馬鹿が！

「えーそうですかあ？…ヴィグナさん、1」

「2」

「3!!」パンツ!!

「なんだ!？」

「アツアツアツの食品サンプルデース!」パァン!!

「いついいいたああ!!?」

「『開けろ!配達員だ!』」

「もう既に関けたけど!!」

「Cも同じような事時々言ってるだろ、さ、弱み弱みくつと」

「その言い方はやめた方がよくありません?」

行動開始、次回に続く

「青い海！青い空！、やっぱり海はいいねえ…」 「そうだな」 ※夏イベ3

「…この人達オリジムシより弱っちいのね…」

「それはいい過ぎだと思えますけど、だってアイツらあれですよ？環境で色々変わるから、…特にアシッドムシ、テメーは駄目だ」

「それもそうね」

「馬鹿にしてるのか!？」

「あんちゃんオリジムシ舐めんなよ？アイツら確かに単体だったらどうにかなるけど大量にくるかな？めっちゃくるかな…!」

「お、おう…」

「ちなみにオリジムシが大量発生し過ぎてもうオリジムシの巣を観光名所にしてやろうって言う人達が居てだな…」

「はあ…?」

「ただ欠点があつてだな…電気製品使えん…大量にいるから」

「でしょうね」

「なに雑談して居る！、あんな数人も倒せないのかお前らは!!」

「で、ですが！強いんです!」

「そんな事知るか！この阿呆共！増援を呼んで始末しろ!」

「そんな声張つてたら枯れますよ?」 カチャ…

「…!!?いつの間…手錠を外せ!」

「おもちゃの手錠だから無理矢理外したらどうです?」

「馬鹿に…馬鹿にしてるのか!!」

「そう言いながらそのおもちゃの手錠を壊そうとするクローニン

「グツ…ああああ!!?痛い!」

「壊そうとすると足の小指をぶつけた痛みが両足にくるおまけ付き」

「なんて酷い事を…!!」

「人の心はないのか!!」

「この人でなし!」

「黒服さん達もいかが?」

「すいませんっした」

「くうう…!!お前らあ…!!」

「見つかったぞー」

「えー本当っすか」

「見せて…はっ!」

「ヴィグナさんが釣られた」

「ち、違うから!!」

「……チツ」ダツ

「あ、逃げた」

「えー悪役つてもうちよつとなんか言ってから逃亡するもんじゃないの?」

「悪役もまた大変なんだろう」

「スーさんみたいに?」

「……」

「ノーコメントっすか」

「そう言えば外って…」

「ヘラグさんが居ますね」

「……逃げない方が良かったんじゃない?」

「あの人の自由だから」

「で、どう言う状況です?これ」

「……出てきた時丁度アイス持ったタルラが居てな」

「ああ、食い物の恨み」

出てきたドクター達の目の前にはクローニンにアングル・ホールドを決めるタルラの姿だった

「……」ギリギリ…

「ギブッ!ギブだ!」バンツバンツ!!

「ギブアップ!?ギブアップ!?!」

「YESだ!ギブアップ!早「ノーギブアップ!ファイ!!」ちよ、

「おおああ!!」 ミシ…ミシミシ

「…フツ」グツ

「な、なんだ？」

タルラはホールドを時次にクローニンを羽交い締めのようにクローニンを持つと

「…ツ!!」グツ…

「おっ…グツハア!!」バアン!!

「ドラゴン・スープレックスだ!ドラゴン決めた!!」

「凄…」

「セイロン様…あまりその様な目で見ては…」

「綺麗…あ、ライブが始まる」

「散々だなあクローニンさん」

「…食べ物は大事にしろ」

「…誰だ?タルラにプロレス技を覚えさせたのは？」

※一般レユニオン兵達がやっていたのをこっそり見て覚えました

「…気絶しては、話せないな」

「ヲ?おおく久しぶり背伸びたねえへ…市長さん」

「…貴方が居るならしようがないか…ハア、久しぶりです」

二人は握手をする

「お父様!?!知り合いなんですの…?」

「…前に世話になったシェ「Cでいいっすよあとついでにそんなに丁寧に言わんでいいよ」…Cだ、…覚えては居ないか？」

「…??」

「覚えとるわけないでしょうが、まだ目も覚えてなかったんぞ」

「…シュヴァルツも居なかったか」

「…記憶には無いですね」

「そうか…少し手加減と言う物が無いのか?相変わらず」

「それはあっちの白い髪…居ないっすねえはい、ごめんなさい市長さん」

「…貴方にそう言われるとむず痒い、昔と同じでいい」

「マアスタア？」

「ああ言えばそう言う人だった…面倒くさい所も変わらない」

「ハツハツハ、あ、ちなみにあそこの廃倉庫にクローニンさんの手下の人達は全て拘束して転がしてあります煮るなり焼くなり蒸すなりしてあげて下さい」

「……………そして仕事が早い、いつからしていた？」

「さあ？、ちなみにスタッフの中にも居たので代わりのスタッフ要員を入れてますんで……………そろそろつすね、全員少し揺れますよー」

「は？うお！」

地面が揺れる

「地震!?これは…」

「そろそろ噴火するんじゃない？ほら、止めるなら走る走る」ダツ

「あ、待て！……………一ついいでしょうか？市長」

「ああ」

「…あれとはどう言う関わりで？」

「……………昔、お世話になった、それだけです」

「そんな大層な事はしてないけどねえ…大体全員市長〓サン達がやったし」

「戻って来たのか…」

「いやいや、そう言えば聞いてなくて、ちよつとそこのお嬢様」

「……………はい」

「この場所は好き？」

「…ええ！」

「あらいい返事、ドクター君」

「……………なにがなんでも止めるぞ！」

「いい声かけ！テンション上がるねえ、ワクワクしてくる」

「ここが無くなるか無くならないかの瀬戸際なんだぞ？そんなワクワクするな…」

「大丈夫大丈夫、市長も娘さんもここが好きらしい、なら無くならないよ多分アネモスもそうだと行っていきます」サラサラ…

「そうですそうです」

「いやその前にお前なんか消えかかってるぞ!？」

「洞窟で会おう！分身消えまーす」サラサラ：

「なにがどうなって…」

「……………セイロン、いい事を教えよう」

「？はい、お父様」

「理解できる物と、理解できない物、そんな物が沢山あるそして理解してはいけない数少ない物…それがCと言う人物だ」

「ちよつとお父様が何をおっしゃって居るのか理解出来ませんわ？」

「……………そうだな」

時は少し進み、火山洞窟内

「まさかこんな場所があるとは…」

「そんな事があったの？いいなあ…僕も技かけたかったよー」

「貴方の場合尻尾が邪魔で痛くないのではなくて？」

「あ、それもそうだね…：…なんか聞こえない？」

ゴオン…ゴオン…：

「なんだか固い物殴ってるみたいなの…」

「……………この先だな」

「C様が待っている場所ですね…」

歩を進めて行くドクター達、奥に行くにつれて音は大きくなっていき

ドゴオ!!…：ハナ…：テ!…：ドゴオ!!…：落ち着けつつとるヤロ

ガアオアアアアアア!!!

「……………うるさ!!」

「耳が…キーンってする」

「なんですの!?!あの、咆哮は?!」

「とりあえず、急ぐぞ!」

で、たどり着いて見た物は

「あのさあ…新しく住む場所決まって嬉しいのは分かるけど、小爆発起こさないでくれない?色々危ないから」

「……………!!」ズズツ…

「いや分かったならいー熱い、熱いあ、待ってそんな来ないで、アシツドムシー!お前は来るな!服溶ける!うオオ…：…」ジユウ…

大量のオリジムシと火山が動いてると言ってもいいほどの大きさのオリジムシと戯れるCだった、辺りには何かが焼ける匂いが漂っている

「…楽しそうだな？」

「あ、ドク…熱いって服の中入らないでくれ……………とりあえず、噴火は収まりそうっすよ、全員引越して言う事でいい火山を知っているんですよ」

「引越し…オリジムシと会話でもしたのか？」

「うん」

「うん!？」

「昔なんとなく動物と会話できないかなって…」

「ええ…」

「いやまあかなり申し訳ない事を言ってるんだけどね…人間の所為なのにこっち側が移動する事になってるし」

「それは…………」

「まあ新しい火山にとりあえずこの小型火山連れて行って色々話たりしたら気に入ってくれたみたいで」

「でもそれじゃあその火山が代わりに噴火してしまうんじゃ…」

「ああ大丈夫大丈夫噴火しても逆に山が賑やかになる、また化け物みたいな感染生物増えるけど」

「…………あの山か!あの、一切場所が分からないあのお前が連れていってくれる!」

「そうそう」

「ああ…ならいいか」

「え、いいの?」

「あの山は…まあ別に大丈夫だろ、本当、…………あの小型火山みたいなのが可愛く見えてくる」

「(そんなヤバイ場所なの…?)」

「まあと言う事で、ちよつとそっち側持って」鏡ダシーノ

そう指示され丸い小さな鏡を持ち引っ張ると…鏡が大きくなる

「…どんな原理なのでしょう」



「考えるだけ無駄ですわよ」

「そうそう」

「……なるほど、先程お父様が言っていたのはこう言う……」  
そしてある程度の大きさまでなると

「さあさあ並んでー詰まららない様になー」

ゾロゾロ…ゾロゾロ……

「こう見るとなんか可愛いね」

「そんなもふもふのトランスポーターさんにオリジセンベイ」

「何これ…」

「オリジム市のお土産」

「何処にある都市なの!？」

「(サクツ)…意外に美味しい」

「意外ってなんすか意外って……さて一応引越し終わって……火  
山は噴火しなくなりましたけど、このまま終わりって……なんか面  
白くなくない?」

「いやこのまま終わって欲しいんだが」

「そっか…なら帰りましょう」

「なんなのこいつ……」

その後

「セイロンとシユヴァルツがロドスに入る事になった」

「え、まじで?市長さん許可したん?」

「そうらしいそんな事よりCカメラ持ってないか?」

「あるけど」

「貸してくれ、アーミヤが可愛すぎる」

「何枚でも撮るがいい、後で全て現像してわたしてやる」

「あ!お兄ちゃん!」

「ヲ?、グムさーん、どうもー」

「……また何かして来たの?」

「ドクター君を手伝って来ました」

「そっか!お疲れ様!」

「……可愛いなあ…グムさん本当……」

「……あはは！言いすぎだよー」

「いや本当、私の周りってなんか……キャラ濃い人とか多いから」

「一番濃いのはお兄ちゃんじゃないの？」

「うーんそんな純粋な目で言ってくるの、嫌いじゃないご飯食べいきましよ將軍達も呼びます？」

「……それがお姉ちゃん達は何か用事があるって……」

「そうなん？……怪しいなあ」

「うーん……とりあえず、いこっ！」

「……こちらブック、対象動き出しました」

「……なあこれ意味あんのか？」

「ありますよ將軍、」

「とりあえず乗ってあげましょうソニア？楽しそうだし……」

「まあ……いいけどよ……パーヴィルは？」

「あそこよ」

「全く……何故こんなにもゴミをちゃんと捨てないのだ、これだからイベントに浮かれる平民共は……ゾーヤ新しい袋をくれないか持って来ていた分が無くなってしまった」ヒョイ、ヒョイ

「え、もう？……はい」

「恨み言言いながらゴミ拾いをしているわ」

「ここに来てもかよ……」

これはとある夏の日の出来事、楽しく、何もかもを忘れて休む、そんな夏の休日の話

帰還！密林の長！+α D「かなりの異物混ざってる  
が大丈夫か？」C「異物って私の事？」

とある荒野の墜落現場で、四人の人影とロボットの姿があった  
……一人は頭を抱えて何かを呟き、一人はどこかに歩いていく

「ケルシーに……ケルシーに殺される……あ”あ”」

「いつまで言ってるんだドクター？ほらもつとシャキツとしろよ！」バ  
ンツ

「イツツ……ふう、すまん落ち着いた」

「しっかし綺麗に盗られてやがんな……こんな時に便利な奴もブレイズ  
が持つていきやがったし」

「本当こんな時便利なのがな……」

こんな事になる数時間前、ドクター達一行はガヴィルの故郷に行く  
ため飛行装置を使い向かっていたのだが……何者かにより撃ち落とさ  
れその際……

『ZZZ……』ガシツ

『とりあえずC持つていくから……まだ寝てるの!?!』

ブレイズが寝ているCの首根っこを掴んで飛び降りて行ってし  
まった、……何故、かなりのめんどくさがりで休日は大抵部屋か何  
処かに居るCがこの女性率の多い里帰りについて行っているかと言  
うと

しばらく前、ロドス艦内

「とりあえず行くメンバーはこれぐらいか……ん？ちよつと待て  
………なんと言う事だ！」

ドクターは驚愕した、その理由は

「私と操縦士以外……男が居ない……!?これはまずい……誰か誰か居ない  
か」

なにを今更言ってるんだこいつ、と思うかも知れないがこのドク  
ターは男性オペレーターと最近よく遊び、よく仕事をしていたので女  
性オペレーターしか居ない今回の休暇は久しぶりに会話するのでど

ことなく居心地が悪く感じたのだ、故にドクターは暇なオペレーターを探すのだが…

「シルバーアツシユ…いや絶対駄目だ言ったら来るだろうけど駄目だシエーシャ…色々話がめんどくさい！他…任務中…」

ドクターは悩んだ…悩んだ末に

「……………!!一番いいのが居た！暇そうで、ついでに何か有れば大体な何とかしそうなもの！あいつも最近仕事潰けだ！昨日の深夜まで一緒に仕事したからな！」

そしてその数分後の食堂

「…んで、私に着いてきて欲しいと」カチャカチャ

「ああ」

「私普通に仕事あるんですがそれは」

「ふっふっふ…私は知っているぞ、明日から数日休みを取っていると」

「なんで知ってるんすかドクター君…さては私のやつ見たな？」

「そうだ」

「権力の乱用じゃないですかバアカ！行かんぞ私は！部屋で惰眠を貪るんだ！」ガタツ！

「お前以外誘える男オペ居ないんだ！頼む！私以外全員女性ぞ！」ガツシイ!!

「操縦士のデイランさんおるやろがい！」ググツ！

「あんま会話した事ないんだよ！察せ！」

「ドクター君のコミュ力なら大丈夫だ！頑張れ！じゃ、解散！」

「おま、お前私コミュ症だぞ?!馬鹿か！」

「お前のようなコミュ症が何処におる！そもそも私の方がコミュ症じゃこんにゃろおー！」

ワー…ワー…ギヤイギヤイ

「おう、じゃあC、表でろや」

「たしかにここ食堂やしな」

「お騒がせしましたー」

「嵐のような会話だったな…」

「毎回あんな感じです」

その後その会話を聞いたブレイズやガヴィルにより説得（暴力）され着いてゆく事にそして飛行中でひたすら眠って居たCは墜落中に持っていたのかれたと言う訳である、この回想中にガヴィル達はトミミ達と出会い移動を開始し、霊殿へ向かっていた

「……………ん、くああ…」

「お？おはようドクター、よく眠れたか？」

「百万パワーだ」

「そうか、ほらスープだ飲め」

「…美味しい…そういえば、一つ聞いてもいいか？」

「え、私ですか…？なんでしょう？」

「この辺だったりで黒い髪のカフェインだったり…オレンジ色の女性とかは見えていないか？」

「えつと…分かりません…」

「そうか…最後に仮面した変な奴は？」

「へ、変な人ですか？……………分かりません、」

「そうか…」

そんな会話もありながら、途中で尻尾の細い太いの喧嘩などをへて霊殿へとたどり着いた一行

『ガヴィル！ガヴィル！ガヴィル！』

「大人気だな」

「騒がしい奴らだ」

「そう言わないであげて下さい…」

「そうそう、全員ガヴィル先生の事好きなんだよ（適当）」

「それで……………仮面の変な人!？」

「どうも変な人です」

「Cここに居たのか!!」

「ちよつと遭難してジャングル生活楽しんでたら親切な鳥が飛んで（？）来まして…案内してもらいました、あの、そんな警戒されると私

悪者みたいなんで、とりあえず干し肉食べます?」

「そんな警戒しなくていいぞ、貰う」

「私も貰う」

「え!?!、じゃあ一つ…」

「どーぞ、ちなみにここには他に人は居ませんでしたよ、やったねジャングル探索だよ、楽しいね」

「ブレイズは一緒じゃないのか?」

「起きた時には私は一人滝から落ちてましたね…」

「そうか…」

「あの…この人は?」

「アタシの同僚だ、強いぞ」

「嘘教えたら駄目ですよ」

「事実だろうか? あ?」

「一回も私貴方に勝ててませんから」

「それは毎回毎回引き分けに持っていくお前が悪いんじゃないか!」

「私が勝てる訳なからうが! 先生!」

「なんだあ? 認めないのか? よしこつちこい」

「なんです? 喧嘩ですか? ばつちこい売られたら買いますよ」

そう言つてガヴィルは舞台の上に立ち、Cもその誘いに乗り舞台に立つ

「おい! あれつてガヴィルじゃねえか!」

「なんだなんだ! やり合うのかあ!?! いいぞやれやれ!」

「その仮面の奴なんてぶつ飛ばしちまえ!

「なんか:Cいつもよりテンション高いな」

「あわわわ! ガヴィルさんが舞台にあがっちゃったア!!」

「……………とりあえず落ち着け?」

「珍しいじゃねえか、こんな風に乗ってくるんなんてよ?」

「今日は自然がいっぱいテンション上がってるんすよ、いつもの山とは違うこの感じ…スツゴイ、スツゴイ、ワクワクドキドキするなあ!!」

「おいおいおい…やけにハイテンションだな…いくぞ！」ダンツ！  
「私が負けるけど！」ダンツ！

…ドツ…ゴオンツ!!…

「あれって普通の拳と拳が当たった音か？」

「凄い…」

「おいおい！これどっち勝つかわからねえぞ！」

「舞台が割れてきたぞ！」

～数分後～

「ハア…ハア…やるじゃねえか」

「まだだ…まだ！腕はまだある！命も！ほらまだ…まだ！来い…来い  
来い!!」

「やってやろうじゃねえか!!」

「…一旦落ち着け」

「あ?」

「…あ、機械少女さんこんにちは、さつきぶりです」

「おお！久しぶりだなズウママ」

「切り替えが早いな…足元を見てみる」

「…?あ、」

二人が立っていた舞台は粉々に崩れてほぼ原型を留めていない

「あ…まあ！形あるものはいずれ壊れる運命だし！」

「そうだな！」

「…強いな、相変わらず」

「本当に医者かってぐらい、でもカツコよくていいと思います」

「まあな、で?そっちは最近どうなんだ?出てきたって事はいじつて  
たのが完成したのか?」

「ああ、すぐ見せる」

「ちゃんと動くかな…」

「……大丈夫だ、ちゃんと起動している」

そんな会話をしているとジャングルの方から大きな何かが近づいて  
来た、全体はまだ見えないが着実に一歩ずつ、歩いて来ている  
「よいつしよ…よいつしよ…」

「ゆっくりでいいよー!!大きーん!」

「おう!わかつとるわーい!」

ガヴィルとズウママが会話をしている時にCは誰かと会話をしている

「えーと…もうちよつと上!」

「ほーい!」

「OKバツチリ!」

「大祭司…放て!!」

「あれ、これ私もまきこ、ぐああー」

「んなっ!?!」

「……いっつつつ、ああ?」

「ガヴィルさん!起きましたか!」

「おはようございます、いい夢見れました?」

「おお:あれがずつといじつてたやつか?」

「はい…ビッグ・アグリーと言う名前だそうです」

「イカすじゃねーか!」

「分かるーいいですよね、」

「……お前確かあのデカイのに指示出してなかったか?」

「〜♪」(歌いながら目逸らし)

「目逸らすな」

そんな会話をしていると…

「おい!兄貴!大丈夫か!」

「へ、へい」はいはーい、とりあえず寝ましよう拒否権はない「はっはあ!?!」

「おい!なに「兄貴を助けたいならとりあえず落ち着けアタシが診る」

……おう

「トミニ、救急箱取ってくれ」

「は、はい!」



診断中

「どうですか？」

「……………鉱石病の心不全の症状だ」

「あれま、はい薬」

「……………お前、名前は？」

「ヨギだ、兄貴はヨタ」

「何処の部族だ？」

「ユ―ネクテス族だが」

「…一つ聞くんが、ズウママはあのバケモン作る為に、お前らに鉱石を探りにいかせた事はあるか？」

「あるが？」

「……………ドクター、どうしてもズウママにまた会わなきゃいけないみたいだ」

こうして、ドクター達はジャングルへ入っていく事が決定した。

帰還！密林の長！+α2D「そろそろタイトルの在庫ないな…」C「元からないよ」

「実際尻尾の細い太いどっちって言われてもどっちもいいと思うんです、どっちもかつこいいですし強そうで、結構憧れます、メカザールスとかゴ○ラみたいなの怪獣みたいで」

「作品によって色々変わるからな…たしかにどっちもいいかもしれないな」

「そうかよ、アタシはやっぱり細い方がいいぜ…お？ありや何処の部族だ？」

「気になるなら行ってみましょうそうしましょう」

エンジンの事やら色々話を聞く為ズウママ達の部族の場所まで行く事になり雑談などをしながらジャングルの奥へと進むガヴィル達

「ふあ…暇ねえ」

「ハンモック用意しましょうか？」

「そうねえ…いいか…誰？」

「イナム！」

「ガヴィル？どうして私の所に？…そう、仮面の変人ね？貴方」

「私の事変人って伝わってるんですね…その通りなんですけども…」

「そう落ち込むなよC、否定しようもない事実だが」

「ドクター君それ普通だとドドメ刺してる言葉って分かってる？」

「こいつがトミミの言ってたイナムってやつだ」

「はじめまして、ドクターだ」キリッ

「はじめまして変態仮面です」ドンッ

「なかなかキャラの濃ゆい二人ね」

「だろ？…あれ？なんでお前もサルゴン語がわかんだよ？」

「これでも正式なこの辺り一帯のトランスポーターだもの」

「トランスポーター？お前が？」

〈 商売人&医師会話中〉

「ほえーここってそうやったんか、全然違くてびっくり」

「違くてびっくりって……知ってるの？」

「少し前に一回二回来た記憶が……2回目の時は確かもう確か採掘場はほぼ機能してなかったし……三日三晩殴り合ってたからあんまり景色見る時間なかったし……」

「少し前ってどのぐらい前だ……お前の少し前どのぐらいか分からないんだ」

「えーと……百五十年？いやもうちょっと早かったけ……うーん？まあいいや」

「……ねえガヴィル、この仮面の、何歳なの？」

「知らね、自分で覚えてないって言ってるからな」

「……そう、そういえばクロワツサンって人は知り合い？」

「クロワツサン？ああアタシらの連れだ、どっかで会ったのか？」

「ええ、多分市場の方に居るわ」

「さあ！見てらっしゃい！彫りたてホヤホヤの木彫刻だよ！」

「どうだい！爺ちゃんの代から伝わる鉱石だぜ！これで武器をつくりやあそりあばつさばつさとー！」

「賑やかだなあ……ちよつと記念になんか買おうかな」スタスタ

「こんな賑やかだとは……」

「驚いた？あの売り文句様になってると思わない？、クロワツサンは……あそこよ」

市場の一角にてアダクリス人と交渉しているようだ、……その光景を少し見ていると何処かから聞き覚えのある声と別の声が聞こえてくる

「さあさあ……ラツシヤアアアセエエ!!見るも触るもあんさん自由！よってらっしゃい見てらっしゃい！欲しいものは交渉を!!」

「何やってんだあいつ」

「この言葉喋れるのね…」

「普通に買い物できないのか…」

数秒前

「どれ貰おうか…うーん…交換材料もあんなないし…」

市場をざっと見ながら何か探すC、が交換材料もあまりないのでうしろをか悩んでいたところに一人のアダクリス人が近寄る

「なんかあったか？」ポンツ

「フ？あー…どんな感じだったっけ…確か…——言葉、通じてる？」

「おお！話せるのか！で、どうしたんだ？…もしかしていいもん見つかんねえのか？」

「そうなんですよ…ここ来た記念にってなんか小さめでいいんですけど物がなくてねえ…」

「そうかあ…そうだな、よし！俺がなんか作ってやるよ！物はいらねえー！」

「マジ？でもなんか頼むんでしよう？」

「よく分かってんじやねえの、ちよつと店番息子とやってくれねえか？その間にちやちやーつとやるからよ」

「期待はせんでよ？、やりまっせ」

でその息子さん（8歳）と共に全力で色々しているC

「どうです？この石細工、この部分が鉱石埋め込まれてんで陽に照らせば綺麗な色に変わるんすよ」

「おお…」

「見たところ…最近気になる人いるんでしよう？」

「え、お、なんで分かる!？」

「いや、あつちの女性チラチラ見ながらそんなソワソワしてたら誰だつて…いやまあそんな事はええんよでどうします？今の会話聞かれて周りの人ちよつと見てますけど…」

「うーん…この貝殻と俺が作った木彫り…でいけるか？」

「おお、結構いい木彫りやないですか、これはいいもんかもですよ」

「そ、そうか？最近楽しくてな…」

「分かります…こう言う木彫りとかってやりはじめたら止まりません

よね…」

「喧嘩もいいが作るのもいい…」

…大変よ…」 攻めて…

「攻めてきたって!？」

「ジャイアントウッド族だつてよ!」

「あー、ごめーんちよつとなんかあったみたいだから行ってきてもいい?。」

………オーウー…デキタラダレカニワタスー!!…

「ありがとうございますーす!」

「野郎ども行け!なんて——(ギインン…)…ん?」

「お前…族長首だろ?なあ首置いて…あれ?」

「Cじゃん(ロドスJK部の…)」

「C!先に来てたのか!」

「先の上の首獲つたら収まるかと…まさかウタゲさんとは」

「だからなんでそんな今回血の気多いんだC」

「あはっ、続きやるう?なにげにした事なかつたんだよねえー」

「私に仲間の首を獲れと?やりやあしませんよんな事」

「ありや残念」

「それより他の人達とめえや!」

「あー、ええーと、悪いんだけどさ」はい、止めに行きまーす」話わつかるー」

「ハイハイ、とりあえず寝ましよう、おやすみなさい夢の中で続きして下さい」パンっ!

『スヤア…』

「こんな時楽でいいよな」

「手を叩くだけで全員眠らせた…?」

「補助オペレーターですから(?)」

「適性検査全部に適正あつてまだどれも決めてねえだろ」

「私の個人情報見たな！」

「医療部だからな」

「んな事よりなんでウタゲはんはあん人らを率いてたんや？」

「うーんとねえ」

言ったことをざっくり言うのと戦って！戦って！戦い抜いた結果あ  
あなつたらしい

「コックピットの攻撃は違反ですよ」

「なんか色々違うくない？」

「あーなるほど、彼らはきつとあんたが珍獣に見えて捕まえようとし  
たんじゃない？」

「ハア!?このピッチピチの美少女の何処が珍獣だつての!？」

「伝説ポ○モンだからあながち間違っああごめんなさい別にスロース  
タートとか巨人つて何とか馬鹿にしてませんごめんなさいごめんな  
さい…」 ガンツガンツ

「なんの話してんだ…」

「(多分レジ○ガスの話やろなあ…分かるでえ…)」

その後霊殿であった事やこれからの目的などを説明した後、バカ  
ンを楽しみたい！と言う事で向かう途中にある大滝まで行く事  
になった一行その途中

「ドクター！それにみんなも！よかった！」

「飛び降りた時首元掴まれたって私聞いたんですけど」

「……あ、あはは、途中で離しちやって…ごめんね？」

「私は許そう「！」だがこいつが…それよりその背負ってるのは？犯罪  
は誘拐ですよ？」

「切り替え早いね？それがね…カクカクシカジカつて事でね」

「マルマルヴボアアアって事っすか」

「あれ!?なんか返答違わない!？」

「ジャングルの中ぶらぶらしてたらガン飛ばされて襲われたんで襲い  
返したら部下含めて全員落としたそうです、で言葉通じないからガ  
ヴィル先生に聞いてもらおうって事らしいです (適当)」

「なんか色々変な感じするけど伝わってる…」

「え、適当に言ったのに？」

「そうなの!？」

「君は知りすぎた…消えてもらおう」スツ  
「どうしてそうなるのかなあ!!」ガード!

「あれ完全に遊ばれてるよな」

「……う…ん…ここは…?!ガヴィル!何故ここに？」

「お、起きたか、お前はアタシの仲間に手出して返り討ちにされたんだよ」

「ハイ、目が覚めたかな？」肩車(上)

「こんな状態ですいませんねえ…」肩車(下)

「…??」

「混乱してるから一旦普通にしてやれ」

「ブレイズさん身長高いからチビの私には辛いんすよ」

「そうは言っても数センチ違いでしょ？」

「それもそうっすね」

「アツハツハ!あれなんかデジャブ?」クルツ

「こっち見んな」

そんな事が色々ありながら大滝へと歩いていく途中

「今思うとあの機械少女がそんな部下に雇われるのを厭わずに行かせることとはないと思うんです」

「………とりあえず行って聞いてみるしかないだろ」

「それもそうっすね、」

「そうだ、よし、もう着くぞ」

「………ここ私が落ちた所やん…」

「え、マジ?あの滝から落ちたの?」

「川に落ちてそのまま流れてここに落ちましたね…あつちら辺に多分キャンプ地あるし」

「ええ…」

「まあそんな事今はどうでもいいだろ、……腹減ったな」

「そう言うと思ひまして……ほらドクター君、両手を出しな」

「……? ああ」

「そして布を被せます……それっ」

その掛け声と共に両手を覆っている布を取る……すると何故かドクターの手には竹を編んで作られた籠が乗せられていた……

「……マジックか?」

「そんなもんです、のんびり食つときましょ……そこで戦おうとしてる二人も先にご飯どうですー?」

「えー! ご飯! 食べる食べる!」

「(ぐううう……)」

「ほれ、とりあえずサンドイッチ」

「……………(ハムツ)」

「Cくカメラない?」

「ありますよー防水のが」

「やるう、で、水着着ないの? 暑くない?」

「ふっふっふ、そう言われると思つて今回はなんと!」

「なんやなんや! 着替えるんか!」

「いや服をいつもより薄着にして素材も涼しめにしてるだけです」

「同じく」

「なんなのその拘り方……ん? 見間違ひかな?」

「どないしたん?」

「あれ、ケーちゃんじゃない?」

「多分そうっすね、……あれなんか幻覚見えます?」

「あー……まだ幻覚見てんのか」

「Cどうにかできるか?」

「捕まえないとどうにも……」

「一番いい方法があるんじゃない?」

「あ、ご飯……ケツオベさああん!!」

「毎回唐突に大声出すな!」



「唐揚げあるよおおお!!なんだったらクツキーも!!」

……………ピクっ……………パシヤー!パシヤー!

「早い、早いよあの人」

その後サンドイッチなどを食べながら楽しみつつトミミの合流を待った。

帰還！密林の長！+α3C「私無事にロドスに帰れたら…」D「フラグ立ったな」

「♪」

「シエーヴルはん、なんかご機嫌やなあ…」

「いい記念品できたんだとよ」

「それであれ〜?」

「それよりそろそろケーちゃん背負うの交代してくれないか?…?体力の、限界なんだが?」

「ZZZ…」

大滝でトミミと合流してその後少し遊んだ後にエンジンやその他諸々の為部族の元へ向かっていた、ちなみに記念品は鉾石を削ってきた短剣を貰ったCである。なんか作ってたら武器になった!すまん!PV製作者のアダクリス人

「代わって言うても…寝ちやった時ドクター君の事掴んで離さなかつたし…見てよがっしり掴んでるよ?剥がせる?私は無理っすよ」

「近くにあった物掴んだ感じやったもんな…あ、こつちも無理やで」

「体力付けるのに丁度いいんじゃないか?」

「おう…味方が居ない…」

「頑張れ」

「それかCがドクター背負えばいいんじゃない?」

「ほう…私に二人分背負えと?そう言ってます?…:…:しょうがないなあ…毛玉」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャ…一体この登場は何回使われて擦られてるんでしょうね、久しぶりの呼び出しでこれって…だから、ネタ古い、マイペースって言われるんですよ」スンッ

「ごめんて…最近呼ばんからってそんなスンッとして辛口なコメントしないでくれ、世代古いのは許して…最近のあんま見ないんだから…後マイペース関係ないやろがい」

「それ別のやつの話もしてないか?」

「おつと失礼、でなんの御用で？まさかわたくしの背中にもた人を乗せるつもりじゃないでしょうね？前は許しましたが次は「後で食っていいぞ」………ちなみにいかほど許していただけ「好きなだけ」よし！さあ乗って下さい！もう何処へだって連れて行きますよ！』ボンッ！

そう言つて唐突に煙と共にある程度の大きさの首の無い狼？のよ  
うな生物になる毛玉

「つて事でどうぞ、モフモフつすよモフモフ、評論家Rさんも絶賛」

「あ、ああありがとう………ちなみに食わせるって何を食わせるんだ？」モフ

「肉」

「なんの？」

「肉」

「あ、聞いたらいけないやつだなこれ」

「そろそろ着くぞ」

「先色々偵察行きますでしょうか？」

「いや真つ正面から行く」

「そう言う所大好きつすわ、「おっほーい!!」アフィン！」ゴンツ！

「！どうした！……あ？鳥？」

「うーむ……上手くいかんの……よし！次もレッツトライじゃ！……ん？

(コンコンツ) この羽感触……ぬしCの爺かの!？」

「やあやあ大さん、また爆発したん？」

「そうじゃ！……しつかし最近の若いもんはこんなにつつ飛んでいったわしを探しにもこんとは……まあ爺がおつてよかつたわい！年寄り同士共に行こうではないか！ビッグ・アグリーもぬしがおるならもつと良くなるかもしれん！」

「いやー実は大さん、今からビッグ・アグリーに多分積み込んでしまつたであろう物を取りに来たんですよ私たち」

「なぬ？それは本当かの？そりゃいかん！ならば！またこの先で会おうぞーい！」スツ

「消えた……」

「なんやったんや一体…」

「いやあ元気だなあ大さん年寄り言ってるけどまだまだ元気なの羨ましいわあ」

「充分元気だと思うが…?」

「むしろお前はもうちよつと落ち着け、それと身体検査ちゃんと受けろ」

「受けましたよ」

「身長体重だけじゃねえか!」

「血も取ったやん!」

「あの後見たら血が無くなってたんだよ!騒ぎになったわ!」

「え、マジで?」

「何度も話したよなあ?ああ?」

「知らなかった…」

その後真つ正面から普通に歩いて集落の中心近くまで来た一行、首のない謎の生物に驚いたり機械がそのまま突撃してきたりなどあったがそれはなんとかおさめ:Cの両腕が大変な事にもなったがどうでも良い事などで置いておき、鉱石の事などの事も色々な早とちりだとわかりそっかそっか!と笑って帰ればよかったがエンジンを返してもらわないと帰れないので……ユーネクテスの計画の為、ガヴィルと再戦する事になった。?アツカイヒドクナーイ?／

「れでいすあんどじえええーとるめーん、右に見えるは我らがロドスの暴力医師、拳は正義、ガヴィル、左に見えるは機械に可能性を見出した者ユーネクテス&ビッグ・アグリー、一体どちらが勝つか瞬き禁止の戦いをご覧あれー」

「やる気ないな」

「アタシの紹介おかしいよな?お?やるか?」

「その前にそっちやって下さい」

「分かってるよ」

「私はちよつと寝とくんで…」

「急にテンション下がってきたな」

「ケオベさんの食べた茸気になってさつき一口食べたから…あ、Wさんが居る」混乱中

「いや馬鹿だろ」

「どんなやつかもっと理解深めないといけないから…もしかしたらなんか役立つかも知れな…あ、空からなんか…ホットケーキ落ちてきてる、すごい」

「とりあえず寝とけ…」

「……………いつ始めたらいい？」

「こつちは準備バツチしじや！」

「あ、ではレディ…：ファイ!!」

「つて事であつち始まりましたね、凄いなガヴィルさん東方不敗かな」  
「結局寝ないんだな…：東方不敗つて誰だ？」

「こつちの話つす、茸は消化して適応したから大丈夫、よく行つてる山にもこつち言うのがあるし」

「胃袋どうなつてんだ、で？なんか役に立ちそうか？」

「乾燥させて粉末状にしてから色々調整して飲ませるかして簡単な催眠状態で長い事足動かせなかった患者さんのいい歩くりハビリとかのシュミレーションになるかも、ちよつとした夢遊病みたいな感じに」

「身体に直接思い出させたりする感じか…」

「ちよつと簡単なアーツでサポートできたりもするかも……………でもあんまなあこれは色々危険性高いしこれはお蔵入りかね」

「……………依存性があるのか？」

「ほんの少し…それ以外が問題、簡単に人を操る事ができるし、犯罪に使われる可能性高いし」

「それは…そうだな、この話は忘れよう」

「……………」

「トミミさん、その考えは駄目ですから」

「!!…なんの事ですか？」

「そんな事で留めても何の意味もないからな」

「止めたいなら自分の力で、全力で当たって砕けて下さい」

「手伝いはしないけどな………砕けたら駄目だろ」

「大抵計画は予想通りに動かないんですよ、前例を知ってます」

「その前例は大体Cのせいだったろ」

「ナンノコトカナー、それよかもう決着つきそうっすよ」

「………」ダツ

「のわああああ!!……いやイマイチじゃな……」

「………ぶっ飛んでったけど大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、すぐに戻ってくる」

「じゃあいいけどよ……っかあれって普通のやつなのか？うちのあれと知り合いなら普通じゃねえんだろっけど」

「私にも分からない、本人からは随分昔からここに居るとしか聞いてない……やはりCもじいやと同じぐらい昔から生きているのか……」

「そっぴやどうやって知り合ったんだ？あのリーベリが関わってるみたいだが」

「ああ、爆破で飛んでった際に焚き火にじいやが落ちてきたらしいその後ここにきて………そしてビッグアグリーの改良にも少し手助けしてもらった………ビッグアグリー………」

「あー…わりいな、ぶっ壊すしかなかった」

「分かっている………確認した限りエンジンは無事のようにだ」

「そりやあ助か「ガヴィルさん！」ん？トミミか」

「ズウママに勝ったって事は…ガヴィルさんはここに残ってくれるんですか!？」

「あー…それは……」

「頑張れートミミさん!」

「ガンガンい（ビュン!）あつぷな!ガヴィル!石投げてくるな!」

「うつせえ！アタシは残る気はねえよ！まだまだやる事があるからな！」

「…だ、駄目です！」

「は？」

「い、行かせません！絶対に行かせませんから！、本当なら私が大族長になってガヴィルさんを引き留めるはずだったんです！」

「まさか、今回の祭典もお前が開くよう仕向けたのか？」

「そうです！ですが…でも、まだ計画はおわっていません！ビッグアグリーも倒されましたし、後はガヴィルさんを引き留めるだけです！」

「ああ？どう言う事なんだ？」

「まあまあ後からおいおい説明しますんで…とりあえず包囲されてるんでやりましょ」

「本には『心を勝ち取れなければ体を縛りつけなければいい』……………全員、

かかれ！当たって砕けろ！！」

「熱ければ…冷ませばいい…」

「恋はいつでもバーニング!!」

「じいや…？」

「二人は何言ってるんだ？」

「なんか言葉の使い所間違ってるよ、あの子」

「大さん、準備はOK？」

「答えはYESじゃ！」

「真…」ダツ…ゴンツ…ヒュン…ヒュン！

「グツ!!」ギョルウ

そう言いながらCは向かってくる一人のアダクリス人を殴って宙に浮かせ身体にロープを巻きつけるそして…

「大雪山…おろし!!!」ギユン…ギユンギユンギユン!!!

「う、うおお!!?」

高速で身体を回転させアダクリスの戦士を振り回す…それはよく見る大雪山おろし…かと思いきやその回転は更に速くなっていきCを中心に竜巻が起こり始める

「いづくぞおい!!」バサッ!

「え、大司祭?」

そしてその竜巻の中に大司祭が体を回転させながら突っ込んでいく…そしてCがその竜巻を…投げた

「サイクロン!!」「クチバシドリル…」

『合わせ技!! (じゃー?)』

「「うわああああ!!?」」

「もうあいっただけでいいんじゃないかな」

「あれがズイマーに教えた男の大雪山おろし…いやあれはもう大雪山おろしって言っつていいのか?」

〜数分後〜

「「いーい」」パアン

「砕けました…いえ、まだです!まだヌール!ベータ!」

「ドクター!」

「ああ、数日ぶりだな」

「ちよつとドクター少しは乗ってくれよ」

「え?」

その後は暴露、ネタバラシの嵐、全てをバラされたトミミは無事(?)尻尾ぺんぺんの刑を受け、その後最終手段の自分がロドスに行くと言う結果だった、ちなみにズウママの方は

「聞いて下さいよ、機械少女…今その人…いや機械?の他にもロドスって所には後二機ぐらい会話可能なのがいまして…」

「それは本当?」

「ええ…社長専用機だけどころかなり高性能な着ぐるみ型も居ます、そして…今ならロドスに入るとビッグアグリーの代わりのエンジンが見つかって修復できます、後鉱石病の治療と機械専門の人と色んな知識を吸収できます」

「ガヴィル、私は行くぞ、絶対に行く」

「お、おう、」

かくして、里帰りは無事終わった、めでたしめでたしって感じですが「そうかなるほど、…飛行装置は貴重な乗り物だと言ったはずだが?」



「いやいやしようがないじゃないですか予期せぬ攻撃にどう対応して動けど、一応新品同様まで直しましたけど…一応専門の人に見て貰ったりした方がいいんで私の給料から代金を全部引いて下さい、後これ」バサツ

「これは？」

「一応実地調査と言う名目なんで報告書をば…そこにあつた植物やら環境やらの効能やらなんやらしか書いてませんけど、では私はこれから大さん達とボ○ムズ見てきますので」

「……………ご苦労だった、がちやんと仕事しろ、そこで隠れて見ている二人もだ」ガチャ

「……………ありがとうC、お前がケルシーと交渉してくれて助かった」

「うん、ありがとう…本当怖いから…」

「私だって怖いですわこんちくしょー、今度ご飯食いにいきましよう、じゃ見てきまー」

「私も任務行つてくる〜」

「気をつけてな」

帰還！密林の長！+α 終わり

## カジミエーシュ観光のすゝめ 1 ページ目

立ち並ぶは煌びやかで高いビル、そして人が練り歩き賑わいを見せる街、カジミエーシュの都市カヴァレリエルキ、ただ今カジミエーシュメジャー開催間近により大量の観光客が居る、その中に二人の男女がいた

「ほええ…思ってたより都会だあ…」

「そうですね、昔よりビルがもう一段ほど高くなった様に感じます」

「だるま落としたらたのしそうだあ」

「やってみますか?」

「エツ君に相談してみようかな…」

身長が高く黒い肌に紫の目、アネモスとアネモスより身長の高い仮面の男シエーヴルの二人である、シエーヴルは辺りを見渡しながら想像より進んでいる都市に驚き、アネモスは久しぶりに戻って来た場所に懐かしさを覚えるが変わっている所もあり記憶と照らし合わせながらシエーヴルと歩いてゆく

「いやーいずれ来るだろうと思ってるなんも名物もなんも調べてなかったから何が何だかわっかんねえや…」

「主人大丈夫ですよ、案内しますので」

「頼もしい…」

「と言ってもかなり変わっているの役に立てるかは分かりません」

「そういう正直な所が好きよアネモス」

「ありがとうございます」

何故二人がここに居るのかそれは1日前に遡る

昼 食堂にて

「主人」

「フ?、おかえりくアネモツサン任務お疲れ様く」

「お疲れ様です、隣いいでしょうか?」

「どうぞ」

「ありがとうございます、…いただきます」

「アネモツサンもグムさんの豆スープですか」

「はい、美味しいですよねこれ」

「分かる、パンと一緒に食べるのがこれまた…」

「そういうえば主人、旅行に行きませんか？」

「行こうかな」

話が唐突に切り替わりそして即答、実はこれがこの二人の日常会話である、その会話の後少し無言でご飯を食べすすめ数分たったあと

「ちなみにいつ出発するん？」

「この後すぐですね」

「ウツソダロお前」

「マジです」

「準備する暇もリサーチする暇も無いっすね」

「情報なんて飾りです」

「そうか…情報は飾りだったのか…！」

※旅行などに行く際はちゃんと色々と調べてから行きましょう

「そうと決まれば着替えとか準備しなきゃ、ご馳走様でした」

「休暇届を二人分出してきます、では後程」

「また〜」

「二(仲良いなあ…)二」

そんなこんなで数時間二人は集合し

「久しぶりにかけっこする？」

「…………申し訳ありませんが、主人であろうと負けるつもりはありません」

「昔からマジで走ってたの覚えてるからダイジョーブダイジョーブ」

「二では(よし)…………位置について…よい…………」

…ドンツ!!

そんな感じで足元にちよつとしたクレーターを残しつつ土煙を巻き上げながら目的地を目指し走り続けた二人は無事に辿り着き、結果勝者はアネモスだった、そしてその後少し仮眠をとり観光の為歩き回っている二人

「少しここから離れた場所なりますが美味しいポンチキ…ドーナツみたいなのを売っているパン屋さんがあつたはずです、行ってみま

「行く、何がなんでも行ってやる…行ってやるからな……」では行きましよう」

が、その後

「どこどこだろなあ…」

アネモスとはぐれたシエールがいた、この馬鹿!!初めての場所はあんまり動き回ったらダメって言ったでしょ!!

「だってだって!初めての場所って色々みてまわりたいじゃん!!」

分かるけどさ!!地図は!!?

「無い!!情報なんて飾りです!!ってアネモツサンが」

バツツツカヤロオオオオ!!!

暫くお待ち下さい

「いやほんとどうしよ、テンション上がりすぎて見えない何かと話しちやつたよしつかしどうしようかね…」

ただ今の持ち物は先程お土産屋で買った(と言うかもらった)騎士の剣を模した木刀にカジミエーシユメジャー開催記念メダルでありそれ以外は干し肉に裁縫キット簡単な医療キットに鏡であり地図などは持っておらず初めてきた場所なので全く土地勘がない為鏡を使って移動も出来ず完全なる迷子なのであった

ガツンツ…

「あ?」

「あ、すいません」

考え事をしながら歩いているとかなり酒臭い恰幅のいい鎧を着た男にぶつかってしまったかなり酒臭い

「それだけか?」

「すいませんでした」

あつさり頭を下げるC、初めての場所で絡まれるのは困るし観光を楽しみたいので因縁もつけられたくないので判断が早かったが現実には酷いものである

ゴズツ!!

「あつぷなあい!!」

咄嗟に手でガードするが中々衝撃で骨から少し嫌な音がする

「チツ、防ぐなよ」

「よくある不良のセリフう…」

酔っ払いのあんまりな物言いに一発殴ろうか悩み始めた所

「おいそこの、なにしとる？」

車が一台側に止まった、車から老人が酔っ払いに話しかける

「こいつがぶつかって来たからなちよつと騎士として制裁をな」

「え、騎士い？ただのコスプレ不良じゃくて？」

「喧嘩売ってんのか!？」

「失礼しました、こんな場所にうろついでるもんなんだなあと思いまして」

「この…」

酔っ払いが腕を振り上げる、が上げ切った所で何者かに捕まれる

「おいおい…酔いすぎじゃねえのかあんた…少し落ち着こうぜ？」

「うるせえ！離せ！こいつがぶつかって来たから悪いんだよ!!俺に!!」

「前見て歩いていなかったのは謝ります、土下座でもしましょうか？」

「なんじゃそのドゲザと言うのは、まあいい別に謝らなくてもよいぞ

こやつはこの辺じゃ有名なタチの悪い酔っ払いじゃからの」

「はえ…：…なら一発殴ってもよかですか？」

「唐突すぎんか!？」

「本当唐突に言うなにちゃん!？」

酔っ払いの腕を掴んでいたウルサス人の男がCの突然の発言に驚いた力を緩めてしまった、それに気づいた酔っ払いは力任せに殴ろうとするが身体が動かない、目の前には腕を上には振り抜いた体制のCの姿

”死に晒せえ!!” (極東スラング)

ゴオオツ…！

酔っ払いの身体は浮き上がった、それもとんでもない勢いで上方向に飛んでゆき…最後には星になったグッバイ酔っ払い、数日後には落ちてくる事を願う

(啞然)

「(上に同じく)」

「ふう…あ、助けていただきありがとうございます」

「あ、いや…助けた…のか?これ…?」

「ワシら…何もしたらんの…」

「いえいえ、殴られそうだったの助けていただきましたし…:…:すいません、また迷惑をかける事になると思うんですけど…:道教えてくれませんか?」

〜観光客状況説明中〜

「なるほどなあ…それは…まあ災難だな」

「いやあ…地図ぐらい買っとくんでした」

「そうじゃのお…:そうじゃな、よし着いてこい若いの、今からワシらが行こうとしたりした所で地図を描いてやろう」

「ありがてえ…」

そんなこんなで車に乗せられ老人…:フォーとコーヴアルに道を教えてもらう事になり言っていた店に向かうC暫く雑談していると店につき二人についてゆき店の中へ入ってゆく

「いらっしやい…:見ない顔だね」

「道に迷ったらしくての」

「すいません、お邪魔しまあ…:アネモツサアン」

「主人…:手上げてください」 縄持ち

「あ、縛られるんですねわかります」

「知り合いかい?」

「はい、先程言っていた私の探していた人?です」

「人の部分に疑問持つのはやめようか」

「なんじゃ、連れが見つかったのか、よかったのお」

「うちの主人がご迷惑をおかけしました」

「なに中々楽しい人だったよ、いきなり絡まれてた酔っ払い殴り飛ばしたのは驚いたが」

それを聞いたアネモスはゆっくりとCの方へ向き直り

「絡んできた男の風貌を教えて下さい主人、蹴り殺して来ます」

「星になったから安心してほしいそれよか…フォーさん方本当にありがとうございまして……お礼としちゃ物足りないかもですけど、これ、開けましようか」

そう言うといつもつけている腰のポーチから黒い瓶を出す…ラベルには「ロイヤル・リキュール」と書いてあるがそれを見た途端アネモスとC以外の動きが止まりその瓶に目を向けた

「それは…かなり貴重なものじゃないのか?」

「今亡きガリアの最高級の酒…マニアなコレクターしか持ってないって噂だぞおい…」

「軽く出しよったなこやつ…」

「まだ樽とか瓶でいっぱいあるんでいくらでもどうぞ、息子も喜ぶはずです」

「息子お!?!」

「血は繋がってませんけどネ」

そんな会話をしているうちにカジミエーシユメジャーの開会式が始まる、カジミエーシユ観光のすゝめ 注意点第一・事前情報と地図などは持つておきましょう。

## 本編 1話

ハイ！どうも初めまして私シエーヴルと申します以後お見知りおきを、突然ですが今私は「一体なんだ…」「一般市民…？でも今は」  
「……………」色々と大事な場面の中心で事故起こしました！

―ロドス目線少し前―

「…………ドクターを連れて早く避難しろ。」

「できません！私は…………」

「感じるだろう！このままで「退いてくれやおんどりやあああ!!」ツツ…………なんだ！」

突如後ろから何かを削るような音を発しながら突撃してくるものがあるそれはバイクに乗った人のようで足を地面につけて火花散らしながら止めようとしているが、「二アール達を通り過ぎタルラとロドスの中間に横転し止まった（事故って爆発した）」

「二体…なんなんだ今のは」

「分かりません、ですがそれより今は目の前の」

「あゝあゝ死ぬかと思った、でもバイクっていいよね早いしカッコいいしその分メンテナンスとか大変だけど、あなた方もそう思いませんか？」

「分かる」

「ドクター!？」

「だよねーそれよりなんか熱…………誰だあんだ」

「……………」

「無視って…………辛いよな」

「まって下さい、あれは」

「周りが…歪んでいる?」「…!、まってその人逃げ」

直後とてつもない熱が放出される

「!?危な」

「いや、今出たらあんたらが危ないでしょうもん金髪のお人よ」



その中間にいる人物……仮面をつけた人物アーミヤ達の方を向きながら何事もないように普通に話しており背後には丸い大きな壁のような物がありその熱を抑えているようだった。

「……………お前はなんだ」

「あー初めて話してくれた、私シエーヴルと言う旅をしてる一般人ですそちらは？」

「名乗る必要はない」

「えーうっそん、あー待ってさつきなんか白い服着た瓦礫の下にいたやつから聞いたかもしれないえーと……………レユニオンのラスボスのタルラさんだ！」「……………」

「無言で威力強めないで？この鏡も万能じゃないのよ？」

「一体……………本当に何なんだあの……………シエーヴルとか言う男は」

「ただの旅する一般市民ですって、本当本当」

「ただの旅人ならあの怪物のアーツをそんな風に止めれないが？」

（しかもあの鏡と言っていたものを境界に熱がこちら側に来いていない何がどうなっている）

「気にしたら負けよ、うーむ……………ドクター？君だっけか」

「なんだ、どうした」

「赤と青…それか緑、どれが好き？」

「……………個人的には青だ」

「二番は？」

「赤……………だな」

「そつか…じゃすまないが私は君たちの敵になるかもだ」

「ああ…え？までどう言う事だ」

「二番目に好きな色が緑なら中立青なら味方赤なら敵だ（とんでも無理論）」

「オーマイ…なら今ここで私達を？」

「まだ入社してないから、って事ではよ、はよ逃げて次あったら敵や」

「……………行こう」

「Ace…信用していいのか？」

「ワタシ、アンマリ嘘ツキマセーン」

「よし、ならば、行くぞ!!」

これがシエーヴルとの初の遭遇であった

## 2話

ロドスの集団が去った後そこにはレユニオンリーダー タルラと謎の男シエーヴルが残った。

「…何故邪魔を」 そう呟くように言い周りが先ほどよりもさらに歪み出した

「ほら困ってる人は助けなきや？ね？そう思いませんか？それよかさつき言った通り私レユニオンに入社してもよろしいでしょうか？」

「……いいだろう、だが次は邪魔をするな」

「意外とあっさりですね、断られるかと」

「断って欲しかったか？なら今からでも消してやろう」

「焼かれるのって結構辛いからやめて下さいお願いします、……結構喋りますね貴方」

「……………」

「ミュートモード入ります」

——ロドス視点——

「くっ…、出口まで来たのに！」

「そんな簡単にチエルノボーグから脱出できるなんて……貴方達さつきもしかして仮面をしたよく喋る男に会わなかったかしら？」

「(仮面をした…あいつか?) もしかしてシエーヴルとか言う」

「どこで? どうして? どうやってあったの?」

「(なんだこいつ…! 目が、目が怖い) さ、さつきお前達のリーダーと会った時に乱入してきただけだ」

「そう……ふふ、そう……ふふアハハ」

「何なんだ……」

「ごめんなさい、少しええほんの少し気分が上がっただけよ?……: 申し訳ないけどまた今度ゆっくり話しましょう? 私は今から行かなければいけない所ができたの」

「W……?」

「じゃあね……ふふ、今行くわ……」

「ちよっとまでW……くそ、全員、ダウンタウンに撤退する……何を考

えているのか分からん」

「い、一体何だったのでしょうかドーベルマン教官……」

「分からん……が間接的にだがまたあの男に助けられたようだな……頭が混乱してくる」

「ですね……一体何なんでしょう本当にあの人」

全員が一瞬ため息を吐いた瞬間である

「そこに誰か……ドーベルマン教官！」

「!! 偵察部隊の皆さん! 無事だったんですね!」

「ええ……少し気を失っている者も居ますがとりあえずは皆無事です、途中でもらったこれがなければきつと全滅でした」手には謎の機械が握られていた

「それは……?」

「途中変な奴に会いました、顔を見るなり『なんかお前ら死にそうだな、という事でこの謎技術使った機械をあげよう一度使えば壊れるから計画的にな』と言われ使ってみましたら、全員の姿が消えて、そのまま隠密行動をしてそこで機械が壊れてとりあえず出口に」

「そうか……なんだかその変人に心あたりがあるが、作戦時間を大幅に過ぎている、我々もただちにロドスに撤退するぞ!」

——シエーヴル視点——

いやー入れてよかったようん、話わかる人でよかつたうん……うん? 深くは考えず行こう、レユニオンの人達ってどんな人達が居るかなー面白い人居るかな居るよね居るな(確信) 楽し「シエーヴル……?」  
……

「まず身体のを完全に抜きます、前に倒れるようにし、身体が地面につくかつかないかのギリギリで足に力を入れて、太陽に走れ! 風のように! (暴論)」

「また、逃げるの?、……絶対には捕まえるわ」

「……(何をしているんだこの二人は)」

「何あいつ、新しい仲間? へー……別にどうでもいいや」

「(あとで、ボウガンのメンテナンス終わったら挨拶に行こうかな)」

第一章 終了

### 3話

チエルノボーグの一件から少し経ちロドスは今スラム街にて近衛局からあった

感染者ミーシャの保護の任務を実行していた。

「こんな任務を待っていたんだ」

「重装オペレーターや各オペレーターに指示完了しました、行きましょう」

「とは言っても、手当たり次第か偵察部隊の報告を待つしかないのだけれどね」

「細心の注意を払って行きましょう」

——少し時が経ち——

「ここなら見つけられないはず…あの子達は大丈夫かな…」

パキッ

「—！誰！—」

「あなたが…：ミーシャさんですか？」

「え？、どうして——！！連れて行く気！私の爪は——」

「落ち着いて下さい、ごめんなさい、驚かせるつもりは」

「この方達は同僚のフランカさん、リスカムさんです」

『こんにちは』

「私達はロドス製薬と言って、感染者の為の組織で…私達は少なくとも貴方の助けになりたくて、貴方と交流が——」

次の瞬間建物の窓を突き破り煙と共に何かが突撃してきた

「な、なに！—」

「敵襲ツ！！」

全員が煙の中戦闘態勢をとる、そして

「ゴッフ、煙多すぎた、えつとごめんなさい」

「え？きやつ、なに！なんなの！—」

「爪痛い痛いやめて、首に刺さってるから！—」

煙が晴れ始め目にしたものは、ミーシャをおんぶし窓から降りよう

とするいつぞやの男の姿だった

「……………なんか凄い犯罪臭ね」

「フランカ！気を抜かないで！、……………私もそう思いますが（ボソツ）

「言わないでよ、自分でも結構思ってたんだから、じやさいなら」

「待って下さい！貴方はやっぱり！」

「無事レユニオンに就職決まったよ！やったねウサギさん！ありがとう  
うドクター君！」

「おめでとうございます！じゃなくて……………ああ!!」

「逃げたな……………おめでとうって言ってるのに」

「そうじゃないでしょう？」

「待って、通信です」

へこちら近衛局だ！今日標を背負った謎の人物が壁を走って逃げている  
と言う報告があった！そちらも追え！今すぐだ！

「……………壁を走るって普通にできるんですね」

「そこじゃない」

「とにかく追いましよう！」

「すぐは無理かもだよ」

「エクシアさん、それはどう言う……………」

「この建物全体にトラップが多数あって……………下手に触れたらドカンだね  
！」

「いつの間に……………解除はどのぐらいかかりますか？」

「うーん、ただ出るだけの解除だと2〜3分って所かな、かなり簡単な  
作りみたいだしね」

「少し危険だがいい方法があるぞ」

「テキサスさん……………その方法は？」

「テキサスがとある方向を見全員がその視線の方向を見れば、そこ  
は先程シェーヴルが入ってきた窓があった。」

「……………本気ですか？」

「ああ」

「行くつきやねえ！（理性ゼロ）」

「ドクター……………わかりましたその案で行きます」

「決まりだな」

——シエーヴル視点——

「ああ、煙かった、帰ったら調整しよ」

「貴方…なんなのよ」

「レユニオンの新兵、シエーヴルさんですどうぞCと呼んでくれ」

「レユニオンって所の人は皆んな壁を普通に走って建物と建物を跳んで移動できるの?」

「鍛えて気合いがあればどうにかできるんやない? (適当)」

「そう… (思考放棄)」

〈…い…おい、おいシエーヴルお前今どこに〉

「あースカルシュレッダーさん?…長いからダーさん今ミーシャさん背負って集合場所向かってるよ」

〈……もう一回言ってくれ、今なんと?〉

「目標を奪取、これより目標地点へ猛ダツシユしてます」

〈……計画が狂うな〉

「大変だ」

〈誰のせいだと?〉

「ごめんなさい、初任務で張り切ってたんです」

この通信を聞いていたレユニオンの兵達は (濃いのが仲間になったなあ) と改めて思うのであった。

## 4話

窓を開放的にしダイナミックに目標を攫ったCは龍門の街を跳ねながら合流地点へと向かっていった。

「兎の様に跳ね！老人の様に腰を痛める！」

「腰大丈夫なの？と言うかそんな歳じゃあないでしょう？」

「ミーシャさんよりやあ私や歳上よ？」

「こんなのが歳上なんて（絶望）」

「こんなのが歳上なんですよ、人生って辛いよね…」

「そうね…それより周りの現実を見ましよう…逃げていても始まらないわ」

「おそろきれい（精神崩壊）」

「いつまで茶番をしている？…抵抗しないのならば二人とも拘束させて貰う」

「いやね、ぴよんぴよんしながら逃げたりしてたらね、いきなり着地した場所が十人ほどで囲まれた近衛局の皆様を中心とは思わんやん？」

「よく見てないからでしょう？」

「さつきからなんか辛辣じゃない？」

「疲れたのよ…もう…」

「大丈夫？干し肉食べる？」

「いらない」

「お、俺貰ってもいいか？」

「俺も（私も）……」

「お前達？」

「「美味い!!」」

「ならよかったよ、作りがいがある」

「隊長！これ非常食に…!!」

「お前達、まだ勤務中だ！対象からの物を安易に受け取るんじゃない  
！……私にも残っていたらくれ」

「隊長も欲しかったんですか…小官も一つ」

「分かりました…背高いなあ羨ましい」



「そうですか？」

「背高いとほら、遠くまで見れそうじゃない？」

「そうですね…」

「なんでこんなにのんびりしてるの？」

「あ、そうやった今逃げてるんだった、ありがとうミーシャさん」

「忘れてましたね、」

<シゴトシゴト>

<ソウイエハオレタチシゴトチュウダツタナー

「よしっ切り替えて行こう、これより、近衛局はお前達を「サヨナラー!!」(ゲシツ)はあ!」

チエンが切り替えて号令をかけようとした所目の前にいた男は一直線にこちらに向かって走り出し次の瞬間にはチエンの肩に足を乗せ思いつきり踏み台にした近衛局職員一同驚愕である(一番は近くにいたホシグマが目を見開き驚いていた)

「私を踏み台に!」

「アツアツ、待って飛びすぎああああ!!!」

「え?い、いや、きああああ……」

「アツハツハツハ!!! (やけくそ)」

(バキッ) ドゴオオン……

「…………ハツ、もう、もう!こんな事!次から!しないで!」

「待って、待ってしない、しないから暴れないで足、足折れたからちよつとマッテ」

「ダサイ!じゃない大丈夫なの?これじゃもう……」

「大丈夫じゃな、いや大丈夫だわまだ、まだ!私は逝ける!まだ!」

「本当に意味が分からない!! (半泣)」

<イタゾー イタゾーオオ!!

「見つかった!」

「そんな時、ありませんか?」

「今がその時よ!」

「私のポケットに鏡があります、「え?」出します、光ります(!?)「ええ!」後は身を任せて吸い込まれます、あ、酔っちゃうかもだから気を

つけて「待つて、心準備が！情報量が多い！待つてえええ…（吸い込まれる）準備なんて…：…そんなもの！（吸い込ま）」  
「ここか！…：…居ない、探せ！そう遠くまで行っているはずがない！」  
「なんでしよう…この手鏡」  
「そんなのは後でいい！行くぞ！」  
「Yes sir！」

——合流地点——

「……………」

「なあ」

「なんだよ、」

「（スカルシュレットダーさん…キレてるよなあれ）」

「（だろうな、作戦全部無視で飛び込んだ奴がいるからな、作戦時間も少し変わって俺たちはここで待機だったし…これもあのシェーヴルって奴が悪いんだ）」

「（マジかよ、シェーヴル最低だな、それとよ、俺たちの後ろにある鏡つて…なんだ？結構でかいが）」

「（知らね、来た時からあったし）」

「…………何を小さな声で話している？」

「イエー！何も（スカルシュレットダーさんの足綺麗だな）え？！」

「…後で話がある」

「ハイ…ゴツフウ!？」

「（いきなり鏡から出てきてレユニオン兵二人をクッションに気絶してるミーシャ）」

「たっだいま戻りました（ガチャ）あのースーさん武器、向けないで？」

「……………遺言は？」

「私…この戦いが終わったら…」

「黙れ」

「ヒドウイ、貴方が言えって！」

「うるさい！こんな事ならWが居た方がよかった！何故か知らんが気

絶して代わりにお前が来て！こっちは！疲れが！溜まりきってるよ！」

「スカルシュレツダー!?性格変わってないか!?!」

「うっさい黙れ!」

「酷い!（肩に手が置かれる）ん?」「ドンマイ（満面の笑みなお仮面してるから見えない）」…殴っていいか?」

「やるなら外行こうや…」

「久々に切れちまったアヨオ…」

「爆殺スルアイツダケワ、殺す!（殺意ましまし）」

何故こうなってしまったのか何故カオスな事になってしまったのか、そして、いつまで気絶したミーシャと名もなきレユニオン兵は放置されるのかもしこれをリーダー（タルラ）が見ればどんな顔をするのか…レユニオンはこれから更に、苦労する事になる（絶望）

## 5話

スカルシユレットダーの疲労が溜まり、部下がキレ、シエーヴルが外での話し合い（物理）が始まり、その後数十分でスカルシユレットダーが部下に背負われシエーヴルが無傷で帰ってきた。

「いや、何があつたの?」

「起きたのか……少し話があるんだが、すまないが今全身が動かん……この男のせいだな」

「ただただ筋肉を痙攣させて動けなくしたただけっすよそのうち動きますよええ」

「攻撃が全く擦りもしなかった……いつか絶対殴ってやる」

「私に攻撃を当てるなど3分早いわ!携帯食作って食って出直せ!」

「クツソオウ……」

「そんな簡単に絶対勝てない気がするの自分だけ?」

「(気にしたら負けっすよ先輩)」

「心読んで話してくるな?C?」

「心読むのは結構苦手なんです」

「苦手なのね?」

「それよか、みんな撤退しましよ?スーさんこんなやし」

「お前のせいだぞ」

「さ、皆さん並んでー最大六人までの鏡渡りよー(無視)」

「え、また?待ってまた待っ(デジャブ)」

「「え?ちよつとなんなんだああ……」」

「仲良いな」

「待て、何故そんなに急いで撤退する、このままもう少しでも」

「すでに近衛とロドス?だった?ロドスだな、が近くまで来てるって言ったらどうする?」

「……………何故そう言える?」

「ふっふっふ、これのおかげだよ(人型の手の平ほどの紙を出す)」

「なんだ?(いきなりその紙が浮かんで周りを飛ぶ)なんだ?(困惑)」

「知らん、式紙ゆうらしいけど」

「アーツか？」

「いや違う多分実際私は雰囲気でこれ进行操作している」

「ええ…、分かった、今回はお前に従う…：次からはお前とは一緒に作戦行動はしたくない（きっぱり）」

「心が痛い…気がする、じゃまた後で本部で会おう。ミーシャさんとゆっくり話しておいでーな」

「気がするだけか…：ん？待てお前はここに残るのか？」

「そうそう、ラーさんからの仕事でね」

「タルラから…？どんなだ」

「ロドスのドクターの排除」

「そうか…：は？」

「前に邪魔しちゃったしねーまあ駄目だったらすぐ帰るわ」

「待て、一人でか!?待て！」

「そうだ！少しは俺達も！」

「うっせえ！早よ行け!!（蹴り）」

「な、お前、お前」

「うおおあ!!」

「…：…：身体動かないのにどう戦うんや？まあいいや、おっ仕事おっ仕事」

——ロドス&近衛局——

「…：…：…：おかしいわね」

「何がです？」

「全く、本当に全く人がいないのよ待ち伏せの兵も何も」

「ありえない、あの大人数を…：痕跡もなく？」

「…：それを可能にしそうな人物はなんとなく知って居るわね…」

「さ、流星にそんな事は…：できないのではないでしょうか？」

「…：もしやあの屋上で会った干し肉のレユニオン兵の事ですか？」

「…：多分そうでしょう」

「話を戻そう、もう既に撤退したと言う説はどうだ？」

「ナイスですドクター、退路はチェンさんが絶つてくれています」

「対面したと言う報せも来てないわね」

「全員ワープして撤退したとかどうですか」

「今はふざけている場合では」

「お！正解に近い！近衛局の職員の人！」

「よっしゃ！」

「——何処から!!」

「まつえでーす!!」

その声ができる方向に注目すれば5メートル程離れた場所にいつも通りに立っているシェーヴルが居た

「いつから居たの…」

「待ち伏せ兵も居ないって所らへん？」

「え、嘘でしょう」

「ずっとスタンばってました」(サムズアツプ)

「(気配も匂いも何もなかった、この男…かなり異常ね)」

「はい、て事で本題に入ります」

「一体なんだ…」

「ドクターさんや。」

「ああ、なんだ告白か？」

「惜しい…:正解は貴方を排除します」

「何処が惜しいですか！」(警戒態勢)

「次あつたら敵言うたし、まあ許して☆…:グフツ」

「あれ勝手に自滅してないかしら」

「フランカ!気を抜かないで!」

「分かって「ハアイ」(ガキツイン)——ツツ!!」

突然目の前に現れ蹴りを繰り返す、フランカはそれを咄嗟に防ぐが「重いツ!一撃で手が痺れて…:おかしくなった!何度も受けられ…」

「フランカ!」

「え——(ゴスツ)カフツ!」

フランカの体は吹き飛び廃墟の壁に激突した

「足は二本あるんだ、使わな損だ」

「フツ!! (バンツバンツ)」

「セイツ (ヒュンツ)」

ガキキツ…

「撃った弾を…石で打ち落としたり!」

「はあああ!! (バンツバンツバンツ)」

「牽制しながらの突進…そう言う策は大好き!」

「フツ (勢いをつけたシールドバツシユからの至近距離射撃)」

「ラツセイ! (パキツ、パリパリカヒュン…)」

「なツ!? (盾を、割った!?!、そしてあの至近距離でかわされた…) ならば!」 (ガバツ)

「おうっ!」 (ドスツ)

リスカムは盾を手放し次にシエーヴルにタツクルをした

「フランカ!!」

「フウツ! 分かっているわよ!!」

先程飛ばされたフランカが意識を取り戻し攻撃を加える、が

「閃光つてご存知?、眩しいから目瞑ってね」

「な、しまっ (バシユン)」

「うっ、らあああ!!、」

「(ガリリイン!!) 持っててよかったナイフさん!!」

「(防がれ…た) バタツ…」

「フランカ! リスカム!」

「(——予想外かなり強いようですね)」

「ドクター! 下がって!」

「あちやーこれは…どうするテキサス? テキサス!」

「フツ…」

「あんだそんな好戦的なん? (ガキキツ!!)」

「あんな物見ればテンションも上がってしまうだろう?」

「ガムシヤラに戦ってるだけなんですがそれは、(パツ)」

二人が距離を取る

二人が距離を取る

「レユニオン所属一般兵 シェーヴルですどーも」

「ペンギン・ロジステイクス テキサスだ」

「挨拶終わったんで」

「ああ」

「全力で楽しもう」

「テキサスく？なんか口数増えてない？」



## 6話

……テキサスとシェーヴルが戦闘を開始しすでに数時間が経っていた普通これだけ経てば戦闘は収束に向かってゆくのだが、二人は更に戦闘を加速させ周りはテキサスによる剣が突き刺さりシェーヴルによる小さな爆破で悲惨な事になっている

「一向に止まる気配ないわね…私達の応急手当とかも終わっちゃったわよ…」

「加勢しようにもあれだと弾が味方に当たっちゃうしね…」

「それより、リスカム」

「はい」

「貴方珍しいわねさっきの時いつもは冷静に状況を見て判断するのに、突撃だなんて」

「そうですね、なんだか…いつものリスカムさんの行動では珍しい…」

「あれは……なんと言うか、フランカが吹き飛ばされて気が動転したのもあるのですが…実は」

「どうしたのよ」

「変な事いいますよ？」

「アレに比べたら多分変じゃないから安心しなさい」

その場に居る全員が同意する

「それがあの時あの人と目が合ったんです」

「へえ…」

「その時に、何か頭の中に何か、…叫び声？掛け声のようなものが聞こえて…その時になんだか…突撃しなくてはって思って（混乱）」

「リスカム貴方疲れてるのよ」

「休暇届など出しますよ…申し訳ありません、そんなに疲れていらしたとは……」

「安眠枕などのおすすめを探してみるか…」

「すいません…本当に変な事言いましたね…」

「ああ、うん、そっちの方も色々大変なんだね、話変えよ？見てよあの戦い仮面のレユニオンの人さっきからずっと片手のナイフ一本で頑

張ってるよ」

「そうですね……………どうして片方の腕使わないのでしょうか？まさか手加減を？」

「か弱い女性に容赦なく蹴り入れて吹っ飛ばす男よ？」

「そういうばそうでした、では何故？」

「直接聞いてみればいかがでしょうか？」

「ホシグマさん…ですが今あの状態ですよ？」

「アレなら普通に答えてくれそうだがな」

「ドクターも賛成みたいです…誰が聞きましょう」

「おーい！仮面の人〜!!」

「エクシアさんが聞いてくれそうですね、」

「…：はい！なんですかー？赤い人ー!!早めに、早めにお願ア”ア”」

「なんで右腕使わないのかって!!」

「それはね!!さつき盾殴った時手の骨が砕けたからだよ〜!」

「ありがとー!!ってゆう事らしいね」

「……………馬鹿ですか？あの人」

「……………きつと、絶対馬鹿ね（確信）」

「……………ツツ（笑いを堪えるドクター）」

「…ふふつ（釣られて笑いを堪えるアーミヤ）」

「なんかボロクソ言われてる、でも気にしな（ザスツ）あ」

「……………あ、（え？）……………」

ロドスと近衛局、ペンギンの皆が見たのはナイフをもった腕を真上に跳ね上げられその次に振り下ろした斬撃で右腕を切り落とされたシェーヴルであった、呑気に会話していたこいつが悪い（辛辣）  
「切れたな……………悪あがき発動!」

左腕を無理矢理動かして首を掴もうとする、が――

「あう、（ザスツザスツザスツ…）」

剣の雨が降り腕、胴体、足を貫通した

「……………勝負あり、だな」

「対戦ありがとうございます、テキサスさん」

「次……があつたら、全力で……な」

そう言いながらテキサスは倒れ、気絶した

「その人達……この人かなり疲れたみたいだから運んであげて……？」（ポタツ……ポタツ……）

「そんな状態でよく喋れますね」

「喉には刺さってないから喋れるぞ？手はこのとうりだけど」（グー  
チョコキパー）

「そうではないのですが……」

「皆さん！この剣を抜いて下さい！」

「え？助けるんすか？私、敵ぞ？」

「一度助けて貰ったしな、……私を消す任務もこれでは終わりだろ  
う」

「いやそうじゃけど……このままほっといたら厄介の消えるんじや  
よ？」

「弔いはしなきゃいけないでしょう？」

「は……優しいね、あ抜かなくていいよ自分で外す触ったら怪我  
するかもだしね」

「え？ちよつと待って下さいそのままに、変に動いたら——ツウ!?」

大変な事になっております、しばらくお待ち下さい

「あーなんか異物感が消えた気がするわー」

「大丈夫？アーミヤ間近で見てたからな」

「うっ、だ、大丈夫ですドクター、もう見たくはありませんが……」

「と言うか一体……本当に貴方何者なのよ、服に血は付いてるのに  
……」

もう傷が無いじゃない」

先程まで身体を貫かれ身体からは大量の血を流していた筈だがその  
光景が嘘のようであり血はもう流れておらず、先程斬り飛ばされた  
腕も拾ってきたかと思うと、切り口に当てそのままくっついた。

「いや、うん、多分皆様がた予想してる通り、不死ってやつなのよね、  
私うん」

「本当に居るのね……首落としても「生きてます」燃やされても「新

しく別の場所で身体ができます」氷漬けにされたら「寒い中生きてます、待ってバイオレンスすぎる、色々危ないこの話やめましょ？ね？ね？」

「……………いつそんな事に？」

「え、知らん、忘れた」

「殴りますよ」

「盾直したから許してリスカムって人」

「え、あ、ありがとうございます」

「じゃ！定時なので帰ります！これお礼のクッキー！みんな食べてくれ！また何処かで！さらば！（説明だったり色々から逃走）

「あ、待って下さい！まだ話が……………消えましたね」

「速いわね……………とりあえず、私達も撤退しましょう…疲れたわ」

「盾が……………以前より軽くて硬くなってる気が…」

『リスカムさんへ』

盾を破壊してしまつて申し訳ありません、なので簡易ですが一から作り直しました。前より硬く、そして軽くしてあります、ですがリスカムさん以外が持つととても重かったり衝撃が強くなったりしますのでリスカムさんにしか扱えないようになつちやっ☆ Cより』  
「……………」(一同唾然と呆れにより疲労がピークに達し始めました)

——シエーヴル視点——

「いやー最近の子つて強いんだなああんな滅多刺しされるとは、お陰で服が真っ赤になつてしまつた、通常の3倍動けそうだ、いや私の血結構ドス黒いし逆に遅くなりそうだな、次会つたら装備忘れずにちゃんと持つてこ。」

「つて事でただいまデース！」

「！！！！「ウワアアアアアア！！血塗れの幽霊だあ！！！！」」

「おう、触れるから全力でポルターガイスト(物理)してやる壊された奴から前に、どうぞ」

「シエーヴル……………!?お前死んだはずじゃ!?!」

「ダーさん……………残念だったな、一回死んできたよ心臓とか腕バツサリ



## 7話

ミーシャ誘拐から数日、奪還の為レユニオンの痕跡や情報を口トス、近衛局が総動員で探したがそんな事はなかった、とでも言うように何も掴めず少しずつ搜索を終了しかけていた。

「……あの日以降レユニオンを見たなどの情報も入ってきていません、これはやはり……」

「…本当に面倒なやつを敵に回したな…」

「はい…すいません、ドクター一つ、いいですか?」

「どうした?」

「あの人…シエーヴルですが一体何者なんでしよう?不死、と言っていました、一体いつから生きていて、何を考えているのか…あの身体能力の高さはなんなのか」

「分からない…本人に聞くしかその答えは出ないだろう、次会った際質問でもしてみよう」

「そうですね」

「何聞か紙にでも書いたら?」

『そうですね、(そうだな) え? (ん?)』

「アーミヤ?今誰に返答した?」

「ドクターは誰に…」

「え、なに幽霊でも居るの怖い祓つところか?一応できるよ?多分」

「シエーヴル!」

「なんで!」

「クカカツ!毎度お馴染みシエーヴル、通称Cさんだよ!なんと休日フリーさんの旅人Cバージョン!安いよ!(?)」

このドクターとアーミヤの居る部屋は扉が一つあるだけであり他の場所からは入れずドアを開け入る以外は入れないはずだが、気づけば少し離れた場所に椅子に座りお菓子の準備などをしているCが居た

「一体なにをしに来たんです!?まさかドクターを!」

アーミヤがドクターを後ろにし構える

「いやさつき言った通り私休日取ってこつち来たから今はただの旅する一般人よ?」

「レユニオンとは関係ないと?」

「そうそう、だからミーシャさんなんて人は知らないしどこに居るかもさっぱり」(カチャカチャ)

「そうか…分かった」.

「(ドクター?)」

「(あれがああ言っているんだ、何しようが答えんよ、直感だけだな)」

「(そうですか…分かりましたそれより…あの人は何を?)」

「ところで何をしてるんだ?」

「え?そりやお茶会の準備だけど?」

「はい?」

「何故お茶会?」

「いやーあの時ゆつくり話せなかったし、私も話したかったしね?茶でもしばきながら駄弁ろうかなと」

「はあ…?」

「唐突だな…」

「ほら確かどつかの言葉であるやない命短し恋せよ乙女?いや、意味違うか、違うな(確信) まあとりあえず座りなよ、他の人呼んでくる?」

「え、呼んでもいいんですか?」

「沢山の方が楽しいかんね」

「お前が蹴り飛ばした女性が来ても?」

「ワターシ、ナニモシリマセーン」(目逸らし)

「呼びましょうか」

「そうだな、二人とも呼ぼう」

通信機により二人を呼びくるまで先に始めようと言う事で始める事にした三人(なお、二人とも全力で走ってきてるのですぐにつく模様)

「さて、何話すよ」

「決めてないのか…まあいいそうだな…何故あの時あそこに居たんだ？」

「うーむ、私旅しながらよくその街やら村で話聞いたりして場所決めてるんよ」

「ああ」

「それでとある店で—

---

『へえ〜旅してるんか、それでおすすめの場所ねえ…』

『どんな場所でもいいっすよ、店でも遺跡やらでも』

『俺のそこ行ったら絶対寄る料理屋教えてやろうかあ？』

『え、本当ですか』

『ああ！そこで出る飯が旨くてな！チエルノボーグつつう所にある場所—

---

「と言う事で来た、空いてるかなと思って見に行っただけど瓦礫の山と…：…うん、ダメだったよ」

「ええ…その為だけに来たのか」

「美味いって聞いたらそりゃ行くしかなかろう！ただその後白い服の奴らに襲われたり天災来て散々だったがな！ヘルメットが無かったら即死だった」

「してませんでしたよね？」

「してなかったな」

「ナンノコトカナー」

そんな会話をしていると扉を蹴り破るように入ってきた影が四つ

…

「邪魔するわよ」

「お邪魔します」

「やつほー！アップルパイ、持って来たよ★」

「……………」

「フランカ、リスカムそしてペンギン急便のお二人？」



「何処から嗅ぎつけたのか来たのよ、それよりそのクッキー食べてる…仮面着けてるのにどうやって食べてるの？いや、それよりもとりあえず一発蹴らせて何故か少しあの後腹が立って来たのよとりあえず、蹴らせて」

「フランカ落ちて着「ん…ぐ…よっしやばつちこいなるべく優しくお願いしますそつちの趣味はないんだ」ああ…なんなのこの人…」

「フツ!!」（シユツ…）

ゴツツン…

「……………」

「……………痛い…」

「……………ごめん…」

「謝って済んだら近衛局は要らないのよ!」

「ごめんなさい!治すから!ごめんなさい!本当に!」

瓶を開け中の緑の液体を足に掛けるシェーヴル、そして若干涙目のフランカと言う少しぐだぐだ風味が漂って来た

「と言うかなんでそんな横腹固かったのよ!鉄の塊蹴ってるみたいだったわ!」

「ちよつとした癖で攻撃されると力入れて固くしちゃうんですよ!」

「入れ過ぎよばかあ!!」

「ごめんなさい!!」

暫くお待ち下さい

「それより!足大丈夫ですか!?!」

「え、ええ少し取り乱してしまつたわ……………もう治ってる」

「不思議なお薬使いましたから」

「危険な香りしかないわね、副作用は?」

「特に無し」

「万能ね…それで商売したら?」

「作るの時間かかるんで駄目です後色々面倒」

「そう」

「ちなみにどれぐらいかかるの?」

「三年」



## 8話

突如現れた馬鹿によりお茶会が開かれ人数も集まりまったりして来たお茶会、お菓子をつまみながら楽しい(?) 会話が始まるうとじていた

「かなり時間が遅れた気がする」

「いきなり何を言ってるんです?」

「こつちの話だから気にしないでくれ」

「はあ? あ、そういえばまた質問なんですけど」

「なんだい? :ア、アーシアさん?」

「アーミヤです、それで? :何故旅をしているんです?」

「暇だから」

「暇だから!?!」

「即答だったな」

「まー言っても最近再開したしね最近までヴィクトリアの学校いたし」

「え? 学生だったんですか?」

「おう、暇だったし面白そうだったから見た目だけなら入っていても

問題無しデース」

「ちゃんと卒業したのか?」

「え? 途中で辞めたけど?」

「ちゃんと最後までいて下さいよ? :」

「いやー、うん? :学校とかって私苦手なのよね」(遠い目)

「何故行った?」

「暇だったから」

「駄目だこの人」

「そんな悲観しないで? :きつといい事あるよ? :」

「殴りたい」

「暴力反対です」

「: : : : :」(無言の拳)

「困ります? :」(受け止め)

「受け止めないでください」

「なんか貴方最初の頃と変わってない？真面目そうな冷静女性でしたでしょう？ね？ね？」

「なんかもう…いいかなって」（虚目）

「ああ…うんごめん、私のせいですかね…でも反省しないこれが私だもの」

「殴りたい…!!」

「落ち着いてほらくッキーでも食べて」（投げ入れる）

「ん!?ん…」サクサク

「甘い物ついていいよねー」

一番の会話を聞いていてドクターはふと、気になる事があった

「そういえば生まれは何処なんだ？」

「え？ああ生まれ、ね忘れた」

「忘れた？」

「いや、どんな人が居たのかだったりどんな会話したりしたかはおぼろげだけど覚えてるんだ、でも会話した人の姿だったり故郷の名前覚えてないんよね」

「家族の顔も…？」

「それは元から知らん」

「え？」

「父親は生まれる前に死んでいてー母親は身体が弱くて、産んでからすぐに亡くなったらしい話聞いただけだからどうか知らんけど」

驚愕だった、故郷の事は覚えておらず親しかった人の顔すら覚えていないそして、自分を産んだ親は顔を見る事無く生きてきた事をあつさりとお菓子食べながら言った事に、

「あ、家族は一頭いたよ、途中別れてしまったけど」

「一頭？」

「そう、馬おつきい奴でな珍しい綺麗な紫色の目してたんだ」

「そうなのか、……途中で別れた？」

「こそ、住んでた所から旅出て二年程してからねー」

「なんで旅に？」

「暇だったからでしょう？さっき言っていた通り」

「そうそう、暇だったからそれともう一つ」

「え、もう一つ？」

「昔少し病弱でねー余命2年じゃったのその時14歳」

「え……？」

「それで旅出て最後の方は血とか吐きながらアネモス…あ、馬の名前ね、の上で目閉じて休んでたと思っただら…気づいたら極東にいて、人に拾われてて、不死になってたすごい誕生日プレゼントだったアツハツハ!!」

驚愕、唾然とした、さっきの話もかなりだったがさらっと言う並には重く訳がわからなかったそんな事があつたのに笑い話にした目の前の男も分からない、作り話と笑い飛ばすには言葉に迷いがなく何より目が、大切思い出を懐かしむように涙を流していた……涙？

「え、まって！泣いてるの!？」

「え!？」

「そんな辛い事だったのか？」

「え、どしたのあんたら」(ポロポロ)

「泣いてますよ?」

「あつ本当や涙拭くからこっち見ないでくれ」

「……………」(ガン見)

「……………」(ガン見)

「めっちゃ見るやん、見ないで」

そう言つて片腕を横に振ると全員目が黒く染まり

「え、何も見えないよ!？」

「何か引つ付いてる……………わけじゃ無いな」

「なんでそんな見られるのをいやがるんです?」

(カコツ)「だって私見せられる様な顔してないですしーあと恥ずかしいついでに恥ずかしい」

「クツ、見えない」

「残念だったな!」(カポツ)

次の瞬間視界が晴れる

「あ、みえ……た？」

「……??？」

「え、え？」

「どうしたんよそんな知らない人が後ろにいる様な顔して」

「いやその通りだよ、後ろの人誰だよ」

「はい？後ろ？」（振り返る）

「……………久しぶりですしゆじまって前向かないで下さ」

「……………」

「……誰です？主人とか言ってますけど後その人の後ろの壁が破壊されてますから……………ね？」

「いや知らない人つすねこんな褐色の黒髪高身長美人なクランタの人知りませんねあと私直しとききますすいません」

＜無視しないで……主人……＞

「そんな趣味あったんだな……少しお前の事分かったよ」

「そんな趣味あったかなあ……すごい色々大きい人やね」

「そうだな、キュツとしての所はして正直気分が高揚する」

「君色々指揮する立場よね？周り女性しかいないのしってる？分かるけど」

「正直ね貴方達……」

「そろそろ話かけてあげたらどうです？涙目でなんか震えていますよ」

「あら可愛い（本音）じゃ、死ぬ気で行こうか」（振り向き）

「ハロー？」

「グスツ……主人……？なんで無視したんです？」

「混乱しとるんじゃよ察してくれ、で、誰です？（ストレート）」

「え？」

一変して顔が絶望に近い顔になる

「分からない……んです……………か??？」

「私にはさっぱり何も分かりません」

「そんな……」

膝から崩れ落ちる

「う……えうああああ」

「アーウ」

「泣かせやがった!」

「最低!」

「やはり殴るべきですね!」

「もしもし近衛局?」

「……………」(サクサク)

「ごめん!ごめんってほら立って?こっちでお菓子食べながらはなそうぜ?」

「アネモス?」

「うえっ…グスツ…え?」

「どーしたアネモスほれ手かすぞ」(手を差し出す)

「主人?名前,分からないんじゃ……………」

「ナンノコトカナ」

「……………分かってたんじゃないですかあああああ!!」

次の瞬間その崩れ落ちていた紫色の目をしたクランタの女性は逆立ちの様な体制をとり足の間でCを挟み込む様にして拘束し次に「らああ!!」

「ウオアアア!!」

頭から地面に叩きつけた……………だがこれじゃ終わらない

「フンッ!」(ゴシユウン!!)

「グエエ……………」

次の瞬間突き刺さったCの腹に蹴りを入れた

「蹴りが見えなかった……………」

「修理が大変だ……………」

「いいわ!もつとよ!」

「なんかスツとしました」

「蹴り強すぎん?」(何事もなかったかの様に立ち上がる)

「前世知ってるでしょう?」

「前足の軽い蹴りで大きな岩割った馬が居てだな……………」

「懐かしいですね、久しぶりです主人、もう一発どうです?」

「なんか目覚めそうだから辞めてくれアネモスさんや」

「…………アネモスってさつき言ってた？」

「そうです、私がアネモスです呼んでる気がしたので走ってきました、障害物がありました。問題ありませんね」

「修理大変なの分かってる？もう直したけど」

「ね？」

「ね？じゃありません、一応謝りなさい」

「ごめんなさい…障害物がある道とかは苦手で…」

「まって下さい、お願いです、呼んでる気がしたので来た？何処からです？」

「ちようど近くを歩いていたのですぐ近くですよ、後呼ばれたら行く、普通でしよう？」

「呼んでないんですが」

「泣きますよ？」

「私も泣くぞ？」

「なんだこの2人」

「私がアネモス、主人の従者（自称）です」

「私がシェーヴル、最近職についた主人（勝手に言われている）です、ねえ主人ってやめない？Cでよくない？」

「私の主人なので呼び方は主人以外あり得ません」（暴論）

『こっわ…』

「ヒ、ヒトマズ、座りましょうか？」

まだまだ続くお茶会こんな長くなるとは思わなかった（本音）、果たしてロドスはこの2人の会話に正気を保っていられるのか？胃腸薬を片手にまた、混沌と疲労の雑談が始まる……



## 9話

「と、言うわけでじゃ私図書館行くから」

「待て、待て待ってくれ続きは？途中で投げるなちゃんと話せお前ちゃんと書け作者」

「だって！だって！あの後すぐに近衛局の人来ちやって走って逃げただけだもの！後書くテンションが上がらないんだよ!!」

「今2人居なかったか？」

「気のせいだよ」

あのお茶会から二日が既に経っていてその時の話を食堂に居たスカルシュレットダーにどんな感じだったか聞かれ話していたCだったが途中で逃亡しようとしいつもの言い争いをしていた

「仲良いよなあ…スカルシュレットダーさんとシェーヴル」

「いいのか？あれ完全に怒ってるだけだろあ、ソーセージ貰い」

「あつ!?てつめかわりに天ぷら貰い！」

「おつま後から食おうととってたやつをお前え!!」

「落ち着けよお前ら、俺のハンバーグ分けてやるから……」

「お前が神なのか……」

「崇め奉れ、しかし…変わったよなあ」

「んお？ングツ…確かなに少し前はここ無かったしな他にも図書館やらジムやら…最近はあれだろ？動物カフェできたんだろ？可愛かった……」

「孤児院とかも作ったって聞いたぞ？」

「それも全部シェーヴルって奴が悪いんだ……」

「まじか最低……じゃない最初確かアイツが来てから最初が飯まじい！って叫んでから色々やったんだっけか最初は大量に物資やらが運ばれてきて筋肉モリモリマッチョマン達が色々建てたり運んだり…何事かと」

「昔から仲良い所から運んでもらってるんだってな、色々ヤバいんじゃないかって一人作業員の奴に聞いてみたら『Cさんは昔から知ってますし後こことは取引せずCさん個人と取引してますんで……』

多分大丈夫つすよ、まあなんか言われようがされようがどうでもいいんで』とか言ってたし…今思えばあの作業員他と違う格好だったな」

「多分それそのトップだぞ」

「マジかよめっちゃ普通に話して酒飲んでから仲良くなっちゃったぞ時々運びに来た時も飲んでるし」

「コミュ力お化け…」

「お化けってお前…あ、そうそう聞いたか？とある噂なんだけどよ」

「うわ、それ本当かよ」

「知らなかったわ…」

「早いよお前ら、で話戻すが新しい部隊作られるらしいぞ」

「へー隊長は誰になるんだ？」

「おいおい大体予想つくだろ？最近入ったばかりだけどかなりの問題児だけど戦闘力やらは結構高いそう…皆様ご存知シエーヴルだよ」

「うっわあ…」

「その最初ら辺のキャプションなんだよけど…あれかあ…」

「疲労で死ぬのでは？（予想）」

「うっわボロクソ」

「その話知らないんじゃないやけどねえスーさん」

「言われてなかったのか？パトリオットが伝えると言っていたはずだぞ…」

「うおっスカルシュレットダーさんにシエーヴル!？」

「楽しそうな会話してたから絡みに来た」

「なんとなく着いてきただけだ」

「私もです」

「いつ来たお前」

「今来ました、後背中にWさんくつついてますよ」

「うっそだろお前」（首が後ろに回る）」

「ハアイ」

「いい笑顔ですね離れてください柔らかい匂いする」

「ご飯作ってよ」

「そのカウンターで頼みなさい美味しいよ？カレー」

「いいじゃない最初は作ってたでしょ?」

「やー、所で部隊とかなんやらつてどうゆう事で?」

「ああ作戦地域での遊撃とかをもう一つ作ろうかとか言う案が出てなうちの部隊だけでもいいんだが…まあいい馬鹿が来たから使えるなら使おうつて事だ(ぎっくり適当)」

「ぶっちやけましたね…:お断りします」

「拒否権は…:ないからな?」

「お断りします」

「主人:諦めましょう」

「お断りします(鋼の意思)」

「さて、顔合わせ行くか行くぞ」

「い、いやだ!私には荷が重すぎる!やめてく「上司命令だ」なら…:…  
いつか…(虚目)」

「行つてらっしゃい主人」

「アネモスだったか?お前もだぞ」

「え、:働きたくないです」

「行くぞお…:アーネーモース」

「道連れですかああ…:」

「逃げられたわね…:」

「仲良いよな」

「仲良いな」

「W何処となくしよんぼりしてないか?」

「気のせいだろ、ちよつと見に行こうぜ」

「アツハツハ、賛成だ」

――― 訓練室扉前 ―――

「着いたぞほら入「うわああああアア!!」(蹴破り

「うわああああアア!!」(扉飛んできた

「私のご飯が!」

「おい!?オセロ盤ひっくりかえりましたよ!」

「先生ー!!マルー君が飛んできた扉に当たって壁にめり込みました  
!!」

「……」（チーン）

「耳が！耳が痛い！クツソうるさい！」

ガヤガヤガシヤガシヤ

「大惨事じゃないか」

「ヒハッフハハ!!」

『気持ち悪い笑い方で笑ってんじやない（ねえです）よ馬鹿が！』

「面白い隊長だねー」

「騒がしいですね、何事です……マルーさん!?大丈夫ですかあとどうして扉が吹っ飛んで……ああそれよりマルーさん生きてますか!?!」

「う……あ、もう駄目「マルーさああん!!」じやなあい!!」

「まあですよね」

「あれ、結構冷めてますね……恥ずかしいんですけどそれより手当てしてきますね」

「ごめんなさいねえ、治しときますね」（紙はつつける）

「あ、ありがとうございます隊長……あ、本当に治ってる」

「すまねえ……色々テンションがおかしくなってたわ」

「……とりあえず送り届けたから戻るぞ」

「あ、ありがとうございますスーサーさん」

「ありがとうございますスーサーさん」

「その呼び名やめろ」（スタスタ）

「さて、……最初何するん？自己紹介？殴り合い？果し合い？」

「殺伐としてますねー」

「違いますよね？隊長」

「隊長なんて呼ばんでくれよ……じや自己紹介からね私シエーヴル！永遠の（外見と身長）16歳！身長167cm体重はその日によって変動する……どうぞよろしくじや、さいなら」

「待ちましようよ主人諦めましよう人生あ、私アネモス、18歳身長189cm、体……重……は」

「辛いなら言わなくていいよ？後人生はあつてないようなものだから大丈夫だよ？」

「なんか悲しいですね……あ、私はペツローのグーニーズです、昨日20

歳になりました身長170、体重は 58kgです……これ入ります？」

「いらないんじゃない？」

「なら何故言わせたんですか」

「気分だよ、次誰か言う人」

「はいさつきご飯ひっくり返されたキャプリー19歳、マジヤレです身長160cm体重は秘密ですはい」

「俺はリーベリのアディアさんですよ身長168cmだっけ……忘れましたがよろしくお願いしますねえ」

「僕弟！サルカズのグー！154cmの体重……忘れた！」

「俺兄！サルカズのキー！158cm！体重は同じく忘れた！……テ  
ンションこんな高いの慣れていないので、いつもはこんな感じですよ  
(小声)

「さつき突き刺さってたヴィーヴルのマルーです身長167cm体重は61kgです……コーヒー溢しちゃった……」

「私は「俺は「うどん食べたい……次私が……」

「……結構多い事に驚いていますはい、あ、グーニーズ君や」

「はい？」

「副隊長ね、あ隊長でもいいよ？なつて(必死)」

「副隊長ですね！はい！分かりました！隊長は絶対辞めさせませんのでそこら辺はよろしくお願いします！」(スゴイ早口)

「そんなーあ、うちの方針決めるぞ」

「え、早いですね、それでその方針とは？」

「死にません死ぬまでは、死なせません死ぬまでは！」

「当たり前前の事じゃないですかヤダー」

「いいじゃない、まのんびり行きましょー明日から訓練するよーと言うか君たちフレンドリーだね初対面とは思えないコミュニケーション障だからめっちゃありがたいわ」

「そうには見えないんですけど……とりあえず今日は解散ですね、はい解散です」

「主人が言ってる事大体嘘なんで大丈夫ですよ」

「ひどくない？」  
「お」「お」「お疲れ様でしたー」「あー」  
「スゴイバラバラお疲れー」

## 10話

「はーい訓練の時間でーすみんな集まれー」（棒読み）

「もうちよつとやる気出しましょうよ隊長…」

顔合わせから一夜明けて次の日ご飯を食べた後Cからの呼びかけがあり部隊の皆はまだ扉の治っていない訓練室に集まった

「いや訓練だとか集団行動つてめんどくさくない？後隊長やめてくれどーせ逃げるぞすぐ逃げるぞほら逃げるぞ」（ウオーミングアップ）

「逃がしませんよ？後隊長呼びじゃないなら…：…何がいいんです？」

「普通にCとか馬鹿野郎だとかこの野郎とかでええぞ？むしろ推奨する」

「前者はともかく後者二つはないですね…：…うーん…やっぱり隊長呼びですかね、そっちの方がなんかしっくりきます」

「そうかあ…：…まあいいけど、みんな揃ったねー一応点呼取りまーす番号ー」

『いーち!!』

「全員揃ってるな！よし！」

「適当すぎます」

「深く考えたら睡魔に襲われるぞニー君や」

「あ、分かりました」

「よしじゃイクゾー」

「何処にです？」

「山」

「山ですか…山？」

「話は向こうで聞かせてもらおう！」

「こっちのセリフですう!?!」

次の瞬間謎の浮遊感が全員を襲った

「うおお!!?」

「ムグググ!!?」

「楽しそうだね！」

「そうだね…」

「説明を下さい主人」

「説明する前に全員着地準備ねー舌嚙んだら言っつてね治すと思うから」

「よいしょ！」（ズーン…）

「ほいつしよ」（スタ）

「ん〴ん〴！」（ドサツ）

「ぐえ！」（ズサア）

「えい！」（グエ！）

「うわあ!?!ごめんなさいマルーさん！」（グツハア）

「ありがとう？」（お姫様抱っこされてるC）

「どういたしましたして、今日は少し重いですね」（抱っこしているアネモス）

「装備着てきたからねーと言うかこの状況誰得よ」

「知るわけないじゃありませんか」（下ろす）

「はーいと言うわけで…マルー君大丈夫？骨逝つてない？」

「だ、大丈夫です、少しは頑丈なのでウゴゴ…」

「そうかい？無理は駄目だぜ？、ハイ話戻しますが山です、川ありません、野生動物います」

「は、はあ、それで？」

「今から一人ずつ手合わせします（唐突）」

「ええ…」

「全員の戦い方や癖見てなかったわ」

「隊長あれですね、まっああたくの無計画ですね？」

「おうよく分かったな私武器あり武器なしどっちがいい？選ぶ権利をやろうじゃマイカ」

「え、あ、じゃあり…でお願いします」

「私の愛用品かお気楽用どっちがいいよマルー君」

「へ？…：…愛用品でお願いします」

「ヲ、もしかしてやる気出して戦えつて言ってます？」

全員がうなづく、見渡してみれば全員の目が楽しみでしようがない



と言う目をしているそれを見たCは

「あ、なんか私がなんで隊長に選ばれたかわかる気がする」

「隊長、早く、早く出してください楽しい楽しみで……笑ってしまいそうですアハッアッハハ」

「クキツ…クカカツ」

「…お腹いっぱいです、食後の運動といきましょう」

「ワクワクするなあ、フフ武器の手入れしとこう」

「(ジュルツ)」

「グーヨダレ出てるぞ」(コン…コン…)

「兄ちゃんも楽しみにしてるじゃん足鳴ってるよ」

その他の隊員もやばい笑みを浮かべていたり自身の武器の手入れやどんな戦い方かなど考察している者も居るが全員の思う事は一つ

『ああ楽しみななあ』

「ねえここってこんな戦闘狂集団だったの初めて知った怖」

「そうですか、で、本音は？」

「めっちゃ血湧き心躍る変な笑い出そう」

「アハハ！素直ですよねえ！テンション上がってきましたよ！」

「アツハハツハツハハ！なら私のメイン武器出しましょうかねー少し待ってくれ」(腰のポーチを開ける)

「(どんな武器なんでしょう、あのポーチに入る…警棒？ナイフ?)」

「多分驚きますよグーニーズ副隊長」

「ほう…楽しみです」

「おーあったあった」(ズルウン)

「(あれは…刀の…柄？だけど柄だけで60cm…どうやってあのポーチに…)」

「よいしょー！」(ヒュン…)

「は？」

「デカツ…」

「四次元ポーチ……」

「驚いたでしょう？」

次にグーニーズ達が見たのはそのポーチから出ていた柄を掴み一

気に引き抜き上に投げると…そこには明らかに全長は220cmは超え鞘に納められた刃は160はありどう見ても鞘には入らない、到底扱える者はいないだろうと言うほどに大きな白に黒の花の模様のある太刀だった

「そんな驚くかい？」(ガシッ)

「いや、普通そんな小さなポーチに入らないでしょう!?!と言うか重くないんですか!?!」

「いやいや、ロドスの方とかの話聞いてみ?こんな普通に扱うやついっぱいおるしそうおかしくないやろ、後ポーチには無理矢理詰めたから大丈夫だ」

「ええ……少し持ってみても?」

「はいどーぞ」

「はいありがとうございますさま(ズシン…)あの持ち上がらないんですけど」

「頑張れできるだけ!諦めんなよ!」

「無理ですって!少し片方浮かせるので限界ですって!絶対見た目より重いでしょこれ!」

「鞘だけで50kgぐらいだぞ?」

「………全体で?」

「210ぐらいじゃね、知らんけど結構軽いど」

「これ片手で受け止めてましたよね」

「気のせいだよきつと」(柄を持ち肩に背負う)

「まあいいです………さて最初誰にしましょうか」

「副隊長でいいんじゃないですか?」

「え?いいんですか?………ならお先に」(ガシヤ)

「盾と剣つか………シンプルで厄介だなあ」

「ええ昔からこれですから………では早速…手加減無しでお願いしますね!隊長!アハハハ!!」

「頭おかしいよこいつ、大好き」

とんでもなく人に見せられないような嬉しそうな顔をしてCに突

撃していく グーニーズ脚が速く距離をすぐさま縮められ最初の一撃がきた

「ハァー！」（ブオン！）

「おお…」（ガン）

柄部分で受け止め少し楽しそうに声を出すC

「いいなあ…迷いない！」

「それは、褒めて、ま、すかあ！」（ガスツ）

受け止められている状態で次にしたのは少し手の方向に尖っている盾で容赦なく腹を殴った、が

パキツ

「え、マジですか」

その尖った部分を膝と片腕の肘で思いっきり挟み無理矢理折った

「絶対当たったら刺さったろあれ」

「刺さったらそのまま地面に叩きつけようかと…私の剣片腕で受け止められて少し悲しいです…」

「いやいや、結構頑張ってるよ？私少し腕震えてるもん」

「ウツソだあ」

「ホントホント」（ガシツ）

グーニーズの剣を持つてる方の腕を掴む

「離してください」

「ヤ・ダ・☆……………空だアア!!」

「ぐっはあ、!!」

そして掴まれて抵抗していたグーニーズをそのまま勢いのまま引つ張り背中から地面に叩きつけた

「かんっぜんに地上ですよ！」

すぐさま立ち上がり距離を取る

「今度はごっちからいくぞー」

「…ふう…ふう、はい！来て下さい！」

そう言うところは一歩踏み出した…そして消えた

「え」

「ああああ!!!」

「ッ!!」(ガシャン…ゴリュ、バキツバキバキツ!!)

気づけば目の前におり咄嗟に盾で防ぐが盾ごと腕の骨を鞘で叩き折られた

「うっ、ぐ、まだ」

「ハイハイ駄目です、いや、ごめん、こんなするつもりじゃなかった」  
(土下座)

「い、いえ、とても…ええ!とても楽しかったです!またお願いします!」

「腕の骨こなつごなにしたのに満面笑みで言えるの怖いんじゃないけど、治すからこっちきなさい」

「す、すいま、せんありがとうごさいます」

「いや、…うんごめんね?本当」

「いえいえ!力の暴力を感じました!」

「鞘でぶん殴ったらただの鈍器にしかありませんよね」

「だなあ…」(緑の液体かけながら)

「つ、次誰にする!?俺、俺いいか!」

「いや私が行きたいです」

「いや僕達が!」

「まあここは…これで決めようよ」(パキパキ)

「拳で、話し合いまししょうかあ!」

『いくぞゴラア!!』

「うちの隊殺伐としてるよな」

「毎日楽しそうですよね」

「私も参加してきてもいいですか?」

「もう戦ったでしょ?また今度だーよ…今気づいたここ常識人居ないな」

「今更過ぎですねまあ…私は大抵常識人なので(?)、よろしくお願いますね隊長」

「維持したり色々する自信も誇りも何にもねえや…次回!大乱闘!もうめんどいから全員一斉にやるぞ!」でお送りいたします!」

「誰に言ってるんです?」

「ひどいネタバレを聞いた気がします」

## 11話

「わったしも混ぜろおおおい!!」(飛び膝蹴り)

「ぐっハア!」(顔面ヒット)

「……腕治ったから私もでええす!!」(拳)

「ふ、ふくたいぐえ!」(鳩尾ヒット)

「よいしょー」(回し蹴り)

「ありがグフツ」(吹き飛び)

「飛んできアツハア」(巻き込まれ)

「大惨事じゃあないですかあ」

前回のあらすじ、色々あって大乱闘になった(あらすじとは一体)が、我慢なんて出来なかった

「もうみんなで生き残りかけた混戦にしようぜ」(提案)

「戦わねば生き残れない」

「それで行きましょう」

「どーせみんな半分生き残る」

「半殺しって事じゃないですかやだー」

「よっしいつくぞー」(斧振り回し)

「俺も行くかあ」(両手にナイフ持ち)

「そろそろ私も帰ってご飯食べたいですねえ……」(大きな円状の刃がついた杖持ち)

「それどうやって使うの……?」(籠手装備)

「面白い形してますね……」(脚部全体にプロテクター装備)

「これはですね……内側にも刃が付いてましてこれを……こう」(Cを輪っかの中に入れる)

「なんで私で試すの?別いいけ(サクンツ……)あつ……」

ドサ……ドサドサ……

「………と、こんな風にやるのが得意な武器です」(目逸らし)

「おー」

「隊長の身体が半分になってるー後両腕も取れてる……」

「ねー動けないから誰か上半身持ってくっつけてー腕持ってきてくれ

たら自分で戻るからそれでもいいけど」

「ダルマみたい……可愛い……」

「待ってその人確かイン……インドアさんだっけ貴方色々おかしくな  
いか」

「何処がです……？動けなくてぐったりしている……いい……」（持ち上げ  
る）

「待っていい笑顔だけど、目に光はつけとこ？ちよつと？待って何処  
連れていくの待ってえ！」

「隊長お!!腕です!!頑張ってくっつけてえ!!」（全力投球）

「ありがとう……!!ありがとう!!」（ピタッ）

「話ませ——いたい!」（ポーン）

腕の戻ったCを離すまいと力を入れようとした時頭に何かに踏ま  
れた様な感じがあり倒れ顔から地面に突っ込むインサニア（こちらが  
正しい）

「脚が勝手に動いて踏みつけましたよ容赦ないわあ……」

「そうですね女性の敵です」

「身体をいきなり真つ二つにしたの忘れないからな……あれ何が  
あったっけ」

「忘れてます……よっ!」（ズオ!!）

「片手斧かあマルー君は、」（ガシッ）

「片手で受け止めるってなんですか……これどうです?」

一旦距離を取ると斧を両手で持ち突き出す様に振るつたすると

ガシャン!

「変形ってかっこいいよね!」（ひよい）

「フッ!」（斧を振り上げる）

「あ、ドジっうおお」

斧の先の槍の様な部分が引っかかりそのまま

「アフィン……」（ズシヤ）

「真面目にやっています?」

「真面目にやると弱くなるのだ……腰痛い」

「じゃ不真面目に」

「えーい」(蹴り)

「掛け声の割に威力高い!」(ズザザ!!)

「ひゃっほーい」(カンツ)

「あっしまっ——痛い!」

武器を蹴り上げられ次には頭にチョップ(結構痛い)を入れられ

「ほい、君は首落とされました」(斧を回収する)

「……隊長相手だどうにも身体が動きませんね、力抜けると言うか  
なんというか……」

「そう? まあ一応アーツ使ってるしね、……無しでもおんなじ事言  
われた事あるわ私って普通の人のなのに」

「普通ってなんでしたっけ」

「普通って……普通でしょ?」

「普通……普通……フツ……ウ?」

「頭が痛くなってきました……」

「所でアーツ使ってるって言ってましたけどどんな?」

「そうだなあ……それ」(ヒュン)

「え?」(サクツ)

何か考える仕草をしようといきなり何かを出し投げると

マルーの心臓に——ナイフが刺さっていた

「え……痛……え?……なんでなんで……」

「大丈夫、落ち着いて、深呼吸して」

「え、は、えはい、スウー……ハー……」

「落ち着いた? じゃ痛みは? ナイフは刺さってる?」

「へ? 痛くない、ナイフ……刺さってない!?! でもさっき……今のアーツつ  
てやつですか?」

「そう……かね? よくわがね所で他の人は私は何投げた?」

「……斧でしたね」

「槍でしたよ?」

「尖った石でした」

「近づいて素手で貫いてましたよお?」

次々にそれぞれ違う物を言っていていき最後は……



「アネモスさんは？」

「……………何もしてませんでしたよ？それと、主人私の隣居ますし」  
『え？』

「言っちゃたかあ…」

そう言うのと目の前にいたCはパッと消え一番後ろの離れた場所のアネモスの隣に立っていた、頭に何故かオリジムシを乗せて

「いつからそこ立ってたんですか」

「身体くっついてからかね」

「完全に手に感触やら受け止められた感触あつたんですけど…」

「あつたんだよ、きつとうん」

「あやふやだなあ…疑心暗鬼になりそうです自分」

「まじですか」

「まじですよ」

「あんま使わない様に……………多分しますはい」

「ええ…つまり、隊長のーツは幻覚…？ぽいを作り出すわけですね？」

「そうなんじゃね？詳しくわからん勝手に調べてくれ」（ガリゴリツモグモグ）

「オリジムシが生きたまま食われていく…」

「残酷ですね…そろそろ日暮れそうですよ、帰りますか？」

「そうだねえ、帰ろっか着地準備！」

シユン

「じゃ、これってなんなんですか？瞬間移動は？」

「本を読む、山の変な人に話聞いたりする、出来ないか試行錯誤、いつの間にか数百年、現在こうなった」

「説明がめんどくさいんですね？分かりましたいつかゆっくり聞きま  
す」

「じゃみんな身体の汚れ洗ったりして……………食堂でご飯でも食べるか  
い？…そういえばこの隊出来てからの祝いとかしてないわ」

「ええ…するんですか？」

「料理は私が作ろう」



「ち、違うわよ！えっえっと色々忙しくて帰れなかったのよそれでえっ」と（あたふた）

「珍しい……Wがあんな事になっているとは」

「あ、スーさんと、ミーシャさん、こっち来てたんですね」

「ええ新しくできた所に来てみようと思って……作ってるのCなのね大丈夫なの？」

「できたよーはい、ハンバーグとその他もろもろろろ……」

「舌回らなくなってますよ、どうしました？」

「味見で辛いのかべひやってしびりえ（ガリ）ーイツ……」

「舌噛みましたか」

「イテエ……」「まあ召し上がれ」「」

「増えてるー」

「んー：美味しいわこの味よ、」（パクツ）

「この真っ赤なのは……麻婆豆腐？ってやつですか……辛!?水!み、みずー」

「このシチューもなかなか……」

「（モグモグモグゴクンパクツモグモグ）」

「マジヤレがヤバイ（語彙力）全部食われそうヤベエ」

「おかわりもあるからゆっくり食べい」

「シェーヴル、おかわり」

「よく噛んでる？Wさん？太るよ？」

「口にこれ詰めて火花にしましょうか？」

「あー困ります爆弾魔！困ります爆弾魔！」

「誰が爆弾魔よ」

「それはきつと君だ！」（いい笑顔でおかわりを渡す）

「はっ倒すわよ」（パクツ）

「おお、こわいこわい」

「すいません、コーヒーを一杯」

「ねこはいますよろしくお願ひします」

「やめろお前ら伝わる人にしか伝わらないネタやめろ」

「作者に言えよ」

「作者って誰？」

「さあ？気にせず行こう」

「お酒いる人々」

「飲みまーす」

「じゃ、一応、……杯を乾かすと書いてええええええ  
!!!???

『乾杯（うるせえ）!!!』

「駄目だテンションについていけない」

「大丈夫、私も」

そんなこんなで夜は更けていき騒がしくなっていく

## 12話

少し時間が経ちほんの少し場が落ち着いてきた頃

「そういえばさつき話が綺麗に流れましたけど、Wさんのポンコツ伝説の話他ないんですか?」

「ちよつとなんなのそのポンコツって!? 誰がポンコツよどつちかと言えよこつちの方がポンコツの変人よ!」(立ち上がり骨付き肉食べているCを指差す)

「だってさつきの様子みたらただのポンコツにしのみえませんか? あと隊長がそういう人って事は既に周知の事実ですよ」

「その通りだからなんも言えんよチクシヨ」(ガリゴリ)

「骨ごと食べるんですかあ?」

「骨強くしたいから…」

「前スプーンも食べてたわよね?」

「血が足りなくて」

「そのせいで大量のスプーンとか買う事になったの覚えてる?」

「はて? なんの事(カチツ) あーまって爆破しないで」

「冗談よ……冗談よ?」

「大事な事だから二回言ったってええ? ずっとカチカチ言ってるんですけどええ?」(カチツカチツ)

「気のせいよ」

「ならないや」

「よくないですよ? うるさいのでどうかして下さい?」

「えーだって背中に手届きませ」(こうすればいいんじゃない? (ゴキツ)

「ああよく届きますわ」(プラーン)

「よかつたわね、早く取ったら?」

「手に力入らないんですよねーなんでだろーなんかかしてる?」

「折れたからじゃない? あと関節外れてるとか?」

「わーすつごーい通りで力入らないわーあ、あつたあつた」(ガシツ…ベリッ)

「普通に動いてるじゃないですか」

「気合い入れて頑張りました」

「気合いつて凄い」(純粹な気持ち)

「ヤベエあと5秒で爆発する」(4秒)

「威力は弱めてるからに近くが吹き飛ぶだけよ?」(3秒)

「それがヤバいんですよWさん」(2秒)

「どうするんですかた」「アー(ゴクツ)」ああ…口おつきいですね(思考放棄)」

あと数秒しか無かった爆弾をCはそのまま飲み込んだ

「んん、…爆発的な味でしたねご馳走様でした(?)」(フシュー…)

「煙めっちゃ出てますけど大丈夫ですか」

「身体がとつても熱くてドキドキしてるわこれが…恋?」

「違うと思いますほら水飲んで」

「ありがと…これお酒じゃないか(ゴクツ)」

「飲むんですね…それ度数90超えてますけど大丈夫ですか?」

「え?」(服の隙間から火が溢れている)

「手遅れみたいよ」

「どうしてそうなったんですか!?!」

「なんか強そうですね」(小並感)

「熱いんですけど」

「マシユマロ焼ける」

「ちよつと消火してくる」

「…何故燃えている?」

「あ、リーダーくんば(ボウツ)火力が 上がった!」

「…?好きで燃えているわけでは無かったのか」

「な訳ないでしょうが火力あげないで下さいよ全身が燃え上がってま  
すよ機動しそうな戦士になりそう」(全身火達磨)

「服は無事なんです…真っ黒になってますけど」

「特別な素材で作ってもらいました、それより消火してもいい?」

「早くして下さいよ」

「あ、はい」(シュー…)

「どうやって消したんですか…」

「心を落ち着かせた」

「いつか自分も身体燃えたら試してみます」

「おうやってみい骨しか残らんぞ、せつかく服白だったのに黒っぽくなっちゃった…」

「イメチェンですね」

「強制的だったけどネ！ここで一つWさんの話を一つ…」

「え!?!いきなり？待って…」

「ある時な私とある少女漫画を机の上に置いてたんだ…」

「なんでそんなの持ってたんですか？」

「帰ってくるの不定期だから暇だったんだよ…それでな、帰ってきたからご飯作りに台所行って少しリビングの方見たらな？」

「それって、!?!それ以上はやめ——」

「すんごい顔赤らめたりしてチラチラと真剣に見てたんだよ、すんごい可愛かった初めて居て良かったと思った…これ写真な」スツ…

「かわっ…」

「想像つきませんね…」

「…：…こないじめて楽しいの!?!勝手に逃げて！久しぶりに昔話したと思ったらこんな…：…こんな!!」（写真を破り捨てる）

「めっちゃ楽しい、後逃げた言うなちゃんど手紙書いて出て行ったやろ？レシピやら色々なメモも残して行ったから…」（写真をヒラヒラ）

「なああの時も言っていたが逃げたやらなんやらってなんだ？暮らしてた時何かあったのか？」

「腹立つわねえ…：…そう！この馬鹿はいきなりでったのよ！ふざけた手紙残してね！」（バァン！）

「どれどれ…」

——これを読んできるといえるということは私はもうそこには居ないでしょう、

とりあえず仕事お疲れ様〜ご飯はもう冷蔵庫入れてあるあっためて食べてくれ、その他諸々やらは色々書いて横の手帳に書いてるから

それ見てくれや、

突然消えて申し訳ない…が反省はしない、だって男だものじゃ、お元気で、どうか幸せに Cより

PS、もし何処かで見てもスルーしてくれ恥ずかしい

「これはー……隊長、ギルティですかね」

「すいません腹切ってきます、ごめなさい」

「やめろ、掃除が大変だろう」

「いや、旅出たのはいい訳があるんですよ」

「なによ、言ってみなさい？」

「……毎回毎回不定期で帰ってきたと思ったら服脱ぎ散らかして、そのまま寝てだよ？疲れてると思っただけ好きな物作ろうと思っただけなんでもいいって言われてよ？その他の時もなんでもいいって…献立決まらないしどんな味がいいかもなんも言わないそして家事も全く手伝わないでまあそれは疲れてるからまあいいんじゃない、うん、でもな……」

「は、はい」

「帰ってくるまでクツソ暇なんよ、完全に不定期で気づいたら居なくなってることもザラなんだよ…何処か行こうにもあんまり留守にすれば埃溜まったりもするし帰ってくるかもしれない、と言うわけで旅に出た」

「すっごいいきなり飛躍しましたね」

「悩みが前少し聞いた離婚する時の妻の悩みなんですけどそれは」

「私昔から少し女々しい人なんすよ自分」

「それで離れたらここで会ったと」

「びっくりして心臓止まったわ」

「それよりさつきからWさんが喋ってないんですが」

「ああそれなら話聞いて当時の自分思い出して悶えてお酒一気飲みしてぶっ倒れたよ」

「なにやってんですか」



「そろそろお開きにしますか寝ちやった人は誰か背負って運んで下さい」

「ほら、隊長はWさ——なんでグーさんとキーさんくつついてるんですか」

「いや、いきなりふらついてきたと思ったらしがみついてきて寝ちやった…」

「あつたかい…」

「んんう…」

「……………」

「あれ起きました？Wさん」

「……………背中」

「あーハイハイ」(背中向ける)

「(ガシツ)」

「首絞まってぐぐぐ」

「えーと、大丈夫ですか？同じぐらいの身長の人とその他二人くつついてますけど」

「うぐつ、息、が、大……丈……夫送り届けて見せる」(使命感)

「一応ついていきます…」

色々あつて宴はおわ「この部分いるー？」「知りませんよバーカ」

「酔ってんなテメエ」「そうですよそりやじゃ終わり」

「誰に言っ——」

## 13話

昨日の宴（と書いて混沌と読む）から一夜清々しい朝を迎えたレユニオン朝ご飯を食べ目を覚まして動き始める頃

「はい、集まりましたかー二日酔いの人居たら言ってくれー物理で治すか薬渡すから」

「そんな事より隊長、あの後どうしたんですか？二人連れてった後Wさん運び行きましたけど」

「無理矢理剥がしてベットに叩きつけた、あの後少し後片付けとかしてシャワー浴びたら首に絞められてた痕残ってましたよ…まあいつも首も隠してるから問題ないがなー」

「でもなんでマフラー巻いてるんですか？」

「……………あ、そういうえば訓練前に決める事あるから決めるぞー」

「話逸らすんじゃねえですよ隊長、こっちはそういう話大好きなんですよお？」

「るせえるせえ、実はいつも着てる首付きのやつが乾いて無くて今日は着てないからとかじゃねえ」

「べらつべら喋るじゃないですか、て事は今マフラーの下には痕がついた首があると……………よし、脱いで下さい」

「発言がただの変態ですよマジヤレさん？あとグーニーズとマルーは私をとりおさえようとす「総員……………かかれえい!!」馬鹿やろう勝つぞ私あゝあ!!」

バンツ!!ゴスツ!!ビリっ、ガラガラ……………

「なんだ!?!凄い音がしているがなん——」

「うるさい!まだ朝早い——」

様子を見に来たスカルシユレッダーとメフィストの見た訓練室の中の光景は

外だった、そして地面に突き刺さっていたり辛うじて残っている部分に激突して気絶している部隊のやべー奴ら…そしてその部屋の中  
央に立っている

白目をむいて気絶しているマルーの襟首を左手で持ち右手でマジヤレをアイアンクローをして持ち上げているシエーヴルだった

「ふう……………死ぬかと思った」

「それこっちのセリ——痛い痛い!!待って下さい!!割れます私卵じやななレジギガガ?!?」(メリメリメリ)

「大丈夫私の握力じゃ割れない割れない私を信じてー」

「た、たいちよ、まって、おちつき、おつきましよう」

「説明しろ、こんは早くから消化不良起こすような事件を起こすな(キリキリ)」

「僕…まだ寝ぼけてるみたいだ、帰るよ…………」(ふらっふらっ)

「昨日の事話す、色々あってこんな事に」

「これ は 酷 い、いやもう、そこはいい…別にここが崩壊しても別に普通だ…普通? いや考えるのはよそう……………ふう……………ちゃんと直せよう?あと」

「そりやもちろん直しましたよ(事後)あと?」

「肌白いんだな、あとその痕どうした」

首の部分をトントントツとスカルシュレッツダーがするとCの身体が止まる

「oh…グーニーズ……………お前副隊長にしてよかったわ…いい奴だったよ…」

(首にマフラーを新しく作って巻き始める)

「ここに居ますよ?突き刺さってただけですからね?」

＜クソイタイ

＜デモ?

＜メツチャタノシカッタモツカイシタイ

＜ワカル、ソレヨリウワギカシテ、マエヤブレタ

＜アイヨーオレモオンナダケドナ

＜ウツン

「上着作ったからどうぞー」(投げつけ)

「ありがとうございまーす!あと隣の変態を止めて下さーい!何故か今にも脱ぎそうです!」

「抑えられないこの衝動！開放感を今あああ!!」  
「大丈夫？今日は休む？体にいいもの作ろうか？」  
「ぐふっ、心の底からの心配が一番効く…」（血吐き）  
「すまん…耐えられない、部屋に戻らせてもらおう…」  
「さようなら…スーさん…お元気で…!!」（マジ泣き）  
「やめろ、本格的に胃が痛くなってきた、本当に泣いてるじゃないか」（呆れ）

色々落ち着きましようの数分

「……………はい、という事ですよ決め事決めましようはい」  
「話に戻るのにかかるの時間がかかりましたね、正直もう帰りた、で決め事とは？」

「近々新たに作戦を開始するらしいでうちの部隊は部隊を二つに分けて行動する片方は最近獲った所にメツファイ達と行動もう一方は龍門にくっついて感じで」

「ざっくりしてますね…まあその方がいいですが」

「詳細はパトさんやらに聞いてくれ半分聞き流してて実は半分以上ちゃんと聞いてない」

「アツハハー馬鹿だこの人ーでうちの部隊は22人…ちようど半分いけますね」

「いや10人ずつで分けるぞ？」

「はい？でもそれだと二人…」

「グー君とキー君、二人で一人の計算だからよ、確かに片方だけでも普通より強いが二人合わせりやもつと強いコンビネーションバツチリ二人は兄弟って事で二人で一人うちの部隊は21人だ」（暴論）

「そうだったんですか…一人余る人…：…隊長はどうするんですか？」

「ぼっちって言ってるよなそれ、私？私はどっちも見ながらその場で色々しながら手伝ったりしますよ？めっちゃ走り回るめっちゃ忙しいこんなところ辞めてやるうー！」（キレ気味）

「ああ…お疲れ様です」

「そんな事は私が退職届をリーダーに投げつけなければいい話だ、でキー君達どっ行くよ？グーニーズとマルー君がいる獲った所いく方かい？それともアディア達がいく龍門の方かい？」

「うーん…：本当は隊長について行きたいですけど…ダメなんですよね？」

「死んだ目でひたすらピョンピョンしたりする仮面の男が見たいなら」

「あ、やめときます…：じゃあアディアさん達の方で」

「はい、じゃ訓練行くぞー」

「あ、は（ふわっ）い、いきなりやめましようよ…：あれ？ここは？」

浮遊感を感じ着いた場所は昨日とは違い、ボロボロだが建物が建ち並びかなりの月日が経ったような場所だった

「ここは結構昔に天災で切り離された都市だよ何処のかは知らんけど」

「ほへえー…：今回はどんな事を？」

「いやー次つてめっちゃ建物あるだろ？」

「ですね」

「で、普通に地上歩いてたら瓦礫やらで到着が遅れたり逃げ遅れたりするかもしれない…：道もわからんしな」

「ですね…」

「てことでパルクールだ建物から建物に飛び移ったりして移動する、こつちの方が速い！分かりやすい！命危ない！」

「最後やばいですってあとパルクールって言ってもそんなピョンピョンできるわけが…：…ああそういえばそんな事した人がいるしかも壁も走ったりするって言う噂の人がいた」

「いや、なんかできたから…：そんなパルクールが不安な貴方にこれ」（ヒュンヒュン）

「鉤縄ですか…：ならできますね！よし、始めましょう！」（ヒュン、カキッ）

鉤縄を受け取ると次々に4階建の建物を登っていく部隊員達…：そ

の中でも特に早かったのが

「ひゃっほおう！」

「アデアさんのテンションが壊れて——はっや、なんすかあれ立体起動ですがくっそ待てやごらあ!!」

「上達早いなあ…アネモス鉤縄使わずにそのまま壁走ってるし建物一つ飛ばしで屋上着地しとるなんだあのドヤ顔、殴り…剥ぎ取りたい」  
(落ちた隊員をキヤッチする役をしている)

「あ、ありがとうございます、じゃ!逝ってきます!」(ガキンツ!ヒュオツ)

「はい気をつけて、水分とりなよ…あ、今日は魚にしよう」(壁に垂直に立っている)

「次回!パルクル、オニごっこ!多分遅れまああああ!!!」(ガシツ)「んな事言ってる暇あるなら足元みようマルー君よ」「すいません…今じゃないといけない気がして」「使命感ってやつやね?私もよくある」

## 14話

鉤縄などを使った訓練（遊び）から色々あつて二時間程、今は全員水分補給などの休憩を行なっていた。

「んー楽しいですねえ」

「結局追いつけなかった…」

「追いつきました」（ドツヤアア）

「そもそも鉤縄使わず壁走り抜けたりする人はちよつと…」

「やーい言われてやんの」

「隊長も同類ですからご心配なく」

「デスヨネー干し肉いる？」

「貰います」

「上達が早くて私いらないうんじやないかと思うんだ、てことでここ辞めようかな」（退職届を右手に）

「ダメですよ？」（ビリビリっカチツ…ボツ）

「燃やしやがりましたよこの人せつかく丁寧に書いた物を」

「なんて書いたんです？」

「こんな所辞めてやるう!!」

「駄目です」

「ナンテコツタイ、まあ直接言いに行けばいいか、狩りごっこしようぜ（唐突）」

「狩りごっこ…？あああのタッチしたらその人が次追いかける人になつていくあの遊びですか」

「そうそう、よく昔知り合いとやったんだ…30とか26の集まりで全力で」

「白熱した戦いになつてそうですね」

「深夜でめっちゃ飲んでたからテンションがよく分からない事になつてた」

『俺に触ろうなんざ50年早オロロ』（キラキラ）

『もうあつい！ぬぐう！』

『あんた女でしょうが！ちゃんと着ときなさい！あ、ついでに、よろしくね』

（タツチ）

『ガツハツハ!!愉快な事だなあ!!どれ、ワシも全力で行こうかあ!』

『あんた動きが一番ヤバいんだよ?この前音の壁突き抜けたでしょう?』

『何気に私一回も捕まってるわ、あ、やばいじゃない事言っちゃった、話せば分かる、許して待って……逃げるんだよお!!』

「地獄かな?」

「深夜にそれって中々に迷惑ですね」

「山の頂上付近だったから大丈夫大丈夫……多分ね!」

「何やってんすか」

「まあ話戻しましょうよお?、どうせ普通のルールじゃないんでしよう?」

「チキチキ!絶対に地上に降りてはいけない!パルクール狩りごっこです、

ポロリモアルヨ（小声）

「いいですね乗りました」

「建物の上はいいんでしょう?」

「YES!あ、ついでにタツチされたら追いかける方になるのは変わらんが元々追いかける人だった人は変わらず追いかける様にしますか」

「つまりどんどん増えていくと……」

「そうそう、『手で触れられなければいい』からあとはルールを破らせずにゲームを楽しむだけだぜ☆……私には合わんなやっぱり」

「（手で触れられなければいい……なるほど）」

「（とりあえず殴ればいいんだよね?）」



「じゃ最初の人決めるからジャンケンしようかちなみに今回は私も参加します」

「参加しない時もあるんですか…」（しゅん）

「なーんでしゅんとしてんですかねーキー君は」（脇に手差し込んで持ち上げ……全力で投げ飛ばす）

「うっわああああ……アアああい!!!」

「お帰り」（ボスツ）

「ただいまです…次からは言ってからしてください」

「え、次があるんですか」

「次は無いんですか？」

「私が知ってるわけがない私あれぞ？いつつも何も考えず自由に行動してるかな？自分でも何してるか分からん時ある」

「知ってます」

「あ、そうですか…よしジャンケンするぞー」

『最初は…グー!!（はい!!）フハツ、ジャン（ふふっ）ケンポン!』

「なん…だと…?」

「1回目で決まりましたね…嫌な予感しかしない」

「グ、グー、アハッアハハツ!!」

「反応しちやっただからしようがないじゃん!」

ジャンケンで奇跡的に一回で決まり、最初のハンターは…

「私かあ、なんかカッコつけたセリフ言おうか?じゃ始めますか」

「え、じゃあお願いします、それ聴いてから自分は逃げます」

「…お主、今、鈴の音が聞こえるかね?」

「え?」（カロンカロン…）

「…お主、聞こえているな?はい、マルー君タッチ」

「……………」

「あれ?どしたね、エラーはいてんの?まて気絶してない?起きろ」（ゴスツ）

「ツハ!え、隊長?今鐘の音がえ、怖、え?」（混乱）

「えー…ちよつと前に夢で見た人のセリフ言っただけなんだけど…あ、マツ君よ」

「命の危険を感じた…、はいなんでしよう?」

「あつちに向かってさ……ゆっくり振り返りながら……斧もつて……」

「あ、分かりました…自分…言っても、え?分かりました…」

——屋上——

「マルー達何喋ってるんでしょかね、さっきの鐘の音も気になるけど」

「さあ…私にはさっぱり、あ、そろそろうご——ゴヒュ」

「——どうしつ!」

突然後ろにいた仲間が変な声を出したかと思うと後ろには

「……どこもかしこも、獣ばかり」

貴方も、どうせそうなるんでしよう?」

巨大な斧で押さえつけながらこちらに向かって殺気を飛ばすマルーだった

「いつのま「はーいタッチー、マツ君中々に怖いなあ演技力高くない?」しまった!」

「そろそろ!そろそろ離して下さい!怖い!怖ですから!」

「あ、すいません、隊長がヤレって」(斧を背負う)

「中々に怖かったアイスできたもん」(シヤリシヤリ)

「一体どういう事ですそれ?」

「まあ気にせず行こう、ささっ捕まえ行こうか」

狩りごっこが始まります。

## 15話

「ゴフツ、いまの、カフツ人…数は20人、あと、ハア…1人足りなゴツフウ」ドサツ…(吐血)

「なんでそんなダメージ受けてるんですか隊長…」

「これが…重い話を聞いたギャグの塊の成れの果て…宿命だよ(?)」

「すみません、よく分かりません」

「自分でも何言ってるか分からない…であと逃げてんのはアディア君だけかね」

「そうですね、どこいるんでしょうか」

狩りごっこが始まり一時間ほど、大半の部隊員は普通に捕まったりはたき落とされたりなどして捕まっており、残すはアディアだけとなっていた

「アネモスさんあそこで気絶してますけどいいんですか?」

「放置でいいよ、煽ってきた奴は放置だ」

「ですね、あのドヤ顔は少し腹立ちました」

「私も休んでいても?、まだ腕が動かなくて…」

「グツ君はよかったなあ…私の関節外してタッチさせないようにしたり色々…最後は数の暴力でゴリ押されたけど」

「手で触れられたら駄目って言われてたので全力で避けたりしてましたけど…数の暴力って怖いですね全員が一直線で走ってくる光景は中々…ホラーでしたねめっちゃ笑いながら来てましたし」(遠い目)  
「楽しかった」

「もう後悔はない」

「もう…いいかなって思って…」

「諦めんなよお前!駄目駄目」うるせえよこのヴァカ」すいませんでした」(土下座)

「さて、制限時間も二時間切ったし、アディア君探るか…面倒だからズルするわ」(直球)バサバサア…

「ズルしちゃうんですか、めっちゃ袖とかから紙出てますけどそれで

索敵する——出し過ぎじゃありません？ちよつと空見て下さい？紙のせいでちよつと太陽隠れてますよ？」

「多い方がいいじゃないかあ、じゃ索敵開始」

「数の暴力…その索敵ってどんな感じなんですか？」

「どんな感じってー？」

「あの、生物が居た時に大体この辺みたいな感じで分かるのかとかですか？」

「あーそういう事もできるらしいけど私は視覚を共有して探してるかね？」

「視覚を共有ですか……あれ？待つて下さいあの飛んでった奴全部と共有してる訳じゃ無いですよね？」

「めつちや見える軽く目回りそうだわ」

「でしょうね！あの数全てと共有してるのなら普通廃人にでもなりそうですよね！」

「頭おかしいよこの人」

「あ、見つけたわ」

「早いなああれだけ飛ばしたら当たり前かあ……なんか白い球体が浮かんできた、なんですかあれ」

「なんかこつち来てません？来てますね（確信）」

「オーライ、オーライ、はいストップ」ズボツ……ズルウ

「なんかあの球体から足出てきましたけど」

「あ、（察し）」

「確保ー」

「…雑じゃありませんかあ？これ…これはないでしょおお？」

「気のせいだよ」パラパラ…

「気のせいじゃありませんよお？ねえ？」

「球体が崩壊して服の中に紙が収納されていく…」

「袖にケース入れてるから…」

「無視しないで下さいませんかねえ？まあいいですけどねえ」

「あ、優しい…」

「…ハッ、ここは誰、私は何処…」

「ここはアネモス、貴方は地獄」

「なるほど…おやすみなさいあとは任せました主…人…幹部…お…ご…ぎ…い…スヤア…」

「幹部…??あ、そういえば隊長って幹部になったんでしたねおめでとぅごいいます」

そうマルーが言うのとピタッとCの動きが止まる

「え? 私ただの一般兵なんだけど…」

「部隊の隊長の時点で一般ではありませんね、本当に知らないんですか?」

「え、知らない、この中で私が幹部になったって知ってる人手あげて?」

C以外の全員が手をあげる

「え、嘘だ私ただの一般隊長兵だよ? なんの力もない特に何もしていない人だよ?」

「隊長、あの時々ある食堂の朝礼的なのでてましたよね?」

「あの不定期のやつ? 私確か昨日は寝てて参加してない気がするけどあったって事は聞いたけど」

「そんな時にタルラさんが言ってたんですよ正式に幹部に上げると」

「嘘だ! あのリーダーがそんな事言う筈ない! あのリーダーだぞ!?! 嘘だ! 嘘だ!」 (必死)

「ところがどっこい! これが現実! これが現実なんですよ!」

「嘘だ! なんて!」

「知るわけがないじゃないですかそれ以上何も言いませんでしたしあの人考えが読めないんですよ」

「あと隊長? あのさつき言ってた作戦会議とかあるじゃないですか?」

「あつたね、聞いた内容言ったわ」

「あれ呼ばれてる人達幹部クラスだけですよ」

「そんな筈…:…筈…:…ない! (開き直り)」

「本当ですかあ? 怪しいですよお?」

「寝てたらスーさんに叩き起こされて『一応幹部なんだちゃんとかい』」

とか『タルラの考えが読めん…』だとか言ってたけど！私は違う！」「言われてんじゃないですか、ほら諦めましよう？・隊長？」「いやだあ！責任やら心持ちやらに縛られたくねえ！こんな所辞めてやるー！」

「辞めさせませんのでご安心を、おめでとうございます、シエール隊長？」

「うわあ…うわあ…やるかあ…やるのかあ…」（虚目）

「おや、案外諦めが早い…」

「私の身体は希望・絶望・諦め・夢・よく分からない物の第五要素でできている」

「ええ…」

「希望と夢が二つ合わせて1割絶望が2割諦めが3割分らないものが4割だ」

「夢と希望が無いに等しいんですがそれは」

「気にするな、帰ろう、ご飯食べよう、リーダーに退職届出しに行こう」「ですね…：…なんか最後なんか混ざっ（フワアン）てませんでし…居ない」

——レユニオン執務室——

「と、言うわけなんです、冗談なんですよね？そう言っして下さいませんか？お願いします」（必死二回目）

「…：…確か食堂でこういう場合の返答の仕方を聞いたな」

「それはなんでしよう」

「…：…あきらめろん？だったか」

「貴方も大体なんか染まってきましたね首傾げないで下さい言い方も顔かなり整ってるから絵になるんですよ貴方、」

「そうか…：…あきらめろん」

「あー気に入りましたかりーダー気に入ったんですね、アツハツハー」スツ…トン…

Cは笑いながらとある紙を取り出した

「これは？」

「退職届です」

「…そうか……………」

そう言うのとタルラは目を閉じた、するとどうだろうか周りが歪みだし部屋の温度が一気に高まっていくでは無いか

「熱い、熱いっすよ、目の前で受けてる私の事考え、る事はしませんよね熱い」

「……………」

ボウツ！

「紙燃えちゃったよ…あとそれ以上は机とかも流石に燃えるんで辞めて下さいお願いします」

「…今なんでもと言ったか？」

「言っていないですよ？私言っていないですよ？」 スツ…

「……………」 ビリッビリ…

「受け取って…貰えないんですか」

「ああ…却下だ」

「くっそおう……………こうなったら走ってにげ(ガタツ、ツカツカ)ヲ？なんです？」

(チリン…チリン…)なあにこれえ鈴付き首輪っすか、そんな趣味無いんですけど私」

「…これで逃げられ無いな」

「え、待っててくださいよこれずっと着けて作戦とか出るんですか、と言うかいっ準備したんすかこれ」(チリン…)

「……………??当たり前だろう、逃げても分かるようにだ……………」

「うつわあこの人素だよ、こんな人だったっけ、色々おかしいよ、あ、帰ります、熱上げないで」(ガチャ チリン…チリン…)

「……………」

—— 食堂 ——

「あ、隊長、首のそれどうしました？」

「退職届出し行ったら拒否されて鈴つけられたわ」

「相変わらず意味が分からないですね、引きちぎればいかがですか？」

「後が怖いんですよねえ…、とりあえずご飯食べようかね…」

「そうですか……………全く鈴鳴ってませんけどそれ意味ありますか？」

「なんか鳴らさず歩く方法昔模索した事あるから…まさかここで役に立つとは」

「やっぱり意味ないですねそれ」

「そうかも知れない」



## 16話

「ハンバーグカレーをお願いします」

「はい分かりました」

「隊長ってよくカレー食べますよね、昨日はエビフライカレーでしたっけ」

「美味しいからいいじゃないか…一番好きなのは塩茹でした豆ですよ」

「なんとも微妙な…まあ自分も好きですが」

「グツ君も分かってくれるかやったね」

訓練が終わり色々あったがCは汗を洗い流し廊下で会ったグーニーズと会話をしながら食堂にて晩ご飯を食べようとしていた。

「はい、焼いた肉とご飯、それと挽肉の焼き物の乗ったカレーです」ゴトゴト

「その言い方なんかやめようぜ？なんか物騒ですよ？」

「安心しろ下さいな…シエールだけですよ？」

「わー結構ひどいグーニーズ君にも飛び火してるよ？やめたげて？後色々言葉おかしくなるとるぞ」

「普通に肉食セットAって言って下さいよ…改めてメニューのを見ると酷いですねなんですかこの適当な内容の説明」

料理受け取り口の近くにあるホワイトボードに視線を落とす

『今月のメニュー』

肉食セットA(めっちゃ多い) B(色んなやつ乗ってる) C(自分で作れ)

草食セットA(身体は野菜でできていた) B(程々に…肉も食えよ) C(普通のご飯とスープとサラダとおかず日替わりセット)

地方セット(様々な所の料理が出てくる日替わり)

残しは許さないb

Y料理長』

「なんですか？あてのメニューの名前に文句ありがとうございますかいいね？

ニーさん」

「いや滅相もございませんよ……と言うか料理長さんもご飯ですか？」

「そうですよ、今日一日何も食べてないんさ、腹ペッコペコ、シエーヴル隣座るよ」

「じゃ私はあつちで食べるから……」

「なんでナチュラルに私と料理長二人にするんですか、座って下さい？」

「ハイ、ワカリマシタ」

「腹立つね、あんた」

「フオーク向けないでくれ……ハンバーグ半分あげるから」(ヒョイ)

「おおありがとうね(パクツ)……うーん、やっぱり何か違うねえ……」

「何がです？」

「ハンバーグの味さね、昔食べた味を再現したいんだけどねえ、教えてもらった通り作っても何か違う、柔らかさとか(ぶつぶつ……)」

「先ご飯食べよう？冷めちゃう」

「混ぜ方をかえ……あ、そうだった、頂きます」

「……肉汁が溢れて美味しいですねこのステーキ」

「そりやそうさね、料理に命かけて取り組んでますかんね」(パクツ……ムシヤムシヤ)」

「熱……あつっ！」

「相変わらず猫舌だねえ……」

「熱した鉄は食っても大丈夫だけど料理だと熱いわ……(モグモグ)

「美味い……美味しい！」(大事な事なので二回)

「毎回おんなじ事言ってますんか？」

「しようがないさね、これ言葉のレパートリーが乏しい悲しい生き物だからね」

「最近私をいじる事多いよね……ハンバーグも美味しい全部美味しいうめっうめっ……」(モグモグモグモグ)

「子供の時あんたに作ってもらったのには負けるさね……おんなじ作り方なのにどうしてこんな違いがあるんかねえ……」

「えー私このハンバーグ好きだよ？もつと自由に作ったらええじや

ん」

「あの味が食べたいんよ…一回作ってきてくれへん？小さいのでええから」

「いいけど…食べれるの？小さいって言っても少し大きいよ？」

「大丈夫！意地でも食うてやる！」

「そこまでは無理しなくていいんじゃない？…じゃキッチン隅っこ借りるわご馳走様〜期待はしないでくれ…料理苦手だから」

食器を持ちそのまま食堂の厨房に入って行く

「大丈夫〜」

「…………子供の頃？え、料理長何歳ですか？」

「女性にそんな軽く聞くんじゃないよ…まあ40は超えとるよ」

「もつと若いかと…どんな繋がりで？」

「あての父と母親はな？とある都市で料理店をしとったとよ、そんな時いつも結構堅物で笑わん父が仕事せんで店を閉じて、大笑いしながら話した相手がアレだったあてはそんな時7歳ほどや」

「お父さんとはどんな関係で？」

「昔ちよつとした戦いで知り合った仲らしいわ、兄ちゃんが無理くり和解させて戦い終わらせたらしいけど」

「ええ…何してるんですか」

「知らん、だけどその両方の頭と話して両方を鉄拳制裁したらしいでしょうもない争いやったらしいし」

「面白そうな話してるわね」

「相席いいか？」

「ミ、ミーシャさん!?最近空気だったミーシャさんだ！孤児院から来てたんですね！後スーさんどうぞ」

「ちよつと後でお話ししましょうか？、まあ少し用事がね」

「所でなんだ？料理長の昔話か？」

「思い出の味の話らしいです」

「興味あるわね、一緒にいい？」

「かまへんよ、で、その後色々あって父が夢だった料理店を建ててその時に色々支援してくれたのが兄ちゃんですその後メニユー作り手

伝ったり食材届けに来たり、一緒に遊んでくれたりしたんや」

「へー、そんな事もするのね」

「隊長 もしかして…ロリコン」

「少し距離を取るか…」

「いやただ暇つぶしで遊んでくれたりしただけやで？、まあその後にご飯作ってくれたりもしたんやけど、その時に好きだったのがハンバーグなんや」

「ハンバーグ美味しいのよね…あの匂いといい食べた時のあの幸福感…たまらないわ」

「どっから湧いたW」

「話が聞こえたから来たのよ」(ガタツ)

「本当あの柔らかさといい溢れる肉汁といい…いつか絶対盗んでみせるわ、その為にこの誘いに乗ったんやし」

「店はどうしたんです？」

「今はあの運送の奴らがサポートしてくれて移動料理店として子供と孫がやつとるよ」

「移動料理店…勇氣ありますね」

「感染者だからだとか後ろ指差されても色んな人に店の味を知ってもらいたいんやと」

「へえ…色々危険があるのに、強い…」

「そういえば料理長」

「なんや？」

「隊長の事兄ちゃんって呼んでるんですね」

「へ？なんの事や？…あ、いつの間にか呼んどったあ！忘れといてやあ…ああ…恥ずかしい…」

「できたぞーには乗っからんから普通の皿乗っけてきたわ、なんか増えてる余計に作ってよかった、後いつものキャラ付少し無くなってるよ？料理長」

「人数分あるじゃない…一つ…いや二つ貰うわね」

「キャラ付け違う！後その二つは私のや！」

「すまないが貰う…美味いな」

「隊長もスーさんもどうやって食べてるんですかね……前も食べましたけどいいですねこれ、おかわり」

「いや無いっす、普通の家庭の味だよ？炒めて、四角い白の塊入れてその他諸々入れて混ぜた後、一人キャッチボールしたら焼くだけ数少ない私の作る料理だよ」

「んつく……それにしてもレパートリーあつたじゃ無い」

「気のせいだよきつと」

「うーん……変わらない味やなあ、ポイントとかないん？」

「え、食える物作ろうとする意思だけだよそれ以外だと」

「参考にならないなあ……まあええいつか盗んだる」

「ええ……好きなように作った方がいと思うけど」

「自分が食べたいんや！」

「あつはい」

「あ、そうそう、C、孤児院の何人が何故か龍門に行きたいって言うてるのよ、後遊びに来てとか」

「え、本当に何故、なんか忘れ物かね……ワカリマシタ、今度連れて行きます、後明後日ぐらいかいつかそっち行くわ」

「明後日は作戦日だぞ……」

「らしいです」

「話聞いていなかったな？」

「なんの事やらさっぱり」

「フロストノヴァとパトリオットに説教させるぞ」

「やめて、最近フーさん元気になったからめっちゃ怒ると寒いんだ、後パトさんも体格的にめっちゃやこ（ゴスツ）頭へこむんですけどパトさん」

「話をちゃんと聞いていなかったとは、どう言う事だ？」

「さっぱりでああ拳振りあげないで暴力反対、私は平和主義なんです」

「そんなわけが、ないだろう」

「私嘘はつきません（逃げ）」

「それが嘘だろう」

「あ、フーさんどうも、足が冷たくなって動かないです、私寒いのが苦手

なのでやめてもらおうとたしかります」（ガタガタ）

「そうか、もつとかいいぞ、最近何故か調子がとてもいいんだ」

「ああ困りますあの困ります寒いっす寒いおおう」（身体を丸めてる）

「ならちやんと話を聞け、そもそもだお前は……………」

「説教されてる…」

「長引くだろうねえ…」

「少し可哀想……………な気がするわね」

「まあ…いいだろ程々にしておくよう少し言っておくか…部屋に戻る」

「スーさんおやすみなさい」

「ああ…おやすみ」

17話(?)

「肉野菜地方その他盛りEXぐだぐだふあいなる定食下さい」

「なんだその、この世の終わりのような名前の定食は、」

「知らん、適当に言った、おはようございますパトさん」

「ああおはよう………朝からそれを食べるのか」

Cの前に置かれたのは、軽く子供二人分の大きさはあるような器に乗った立って立って食べるのが前提のように盛りに盛られた肉と野菜、その他諸々の料理だった

「まさかこんなの来るとは思ってたなかった」ゴトツ

「大丈夫か？手を貸すか？」

「大丈夫っす」

「ならばいいが」

「よし、頂きます」パンツ

「……この後時間はあるか？」

「いつも暇なんでありませうよ」

「そうか、ならこの後だ、トランプ…でもするか」

「………」(混乱)

「そんな事があつたのが最後、いやーいきなりすぎてびっくりした、久々に思考停止したわ」

「久々……??いつもじゃないか」

「ソナナコトナイヨスーサン」

「嘘だろ…所で、なんでこのメンバーなんだ、あといきなりトランプ？」

とある個室、そこに円状のテーブルで向かい合う4人…言い出しつぺのパトリオット、誘われたシエーヴル、Cに誘われてきたスカルシユレッダー、そして………

「(な、なんで私もここに…)」

「……………近くを通りかかったと言うだけで誘われた一般通過レユニオン兵だった、哀れ」

「…あまりちゃんとは話した事無かったと思っただけでな…カードゲームが突然したくなつたわけではない」

「絶対後者が本当の理由だあ…」

「あ、あの…」

「どうした？」

「わ、私 あんまりカードゲーム系の遊びを知らないんですけど…よくてババ抜きとかしか知らなくて」

「大丈夫だ、元からそんな難しい事はせず軽い遊びをしようとしていた」

「じゃーババ抜きからしますか、」

「……………このメンツでやるのはかなり…彼女が大変だと思っただが」

「え？」仮面↑

「……………」仮面↑

「表情わかるのが一人しかいないぞ」ガスマスク↑

「だ、大丈夫ですよ？」顔出し↑

「…どうする？」

「大丈夫です！私ポーカーフェイス？は得意なので！」

「……………やるか」

開始

「ほい、引いてどーぞ」

「これだ、よし、いいぞ」シユ

「これですか…？」

「……………」

「これ！……………ああ…どうぞ」

「……………シエーヴル」シユ

「フ？なんですか？」スツ

「最近、フロストノヴァの体調が良くなっている」

「いい事じゃないですか、お陰で少し説教される時めっちゃ寒い」



「確か今日は朝からお前の隊の所とスノーの奴らと一緒に走り込みしてたぞ、訓練所を50周ぐらい」

「めっちゃ元気じゃないですかやだーなんで朝からそんな走ってたんだ」

「……………」

『ハハハ!!まだ!まだ行ける!』

『新参に負けるかあ!!』

『ま、待て!そんな対抗意識を…………ああ!私も行く!』

『え!?!大丈夫なんですか!?!』

『大丈夫だ!行くぞ!!』

「…………お前のせいだな」

「理不尽すぎませんかね」

「単刀直入に聞く、なにをした?」

「え、私に聞くんすか、何故」

「こんな事するのお前だけだからだろう」

「そんな…酷い…信じてたのに…」

「何をだよ…」

「知るわけが、…………右がジョーカー、左が4」

「…………お前を信じる!……………」

「む、無言…」

「話を戻すがなにをした」

「ああ、(話から)逃げられない!」

「当たり前だろう」

「えー私心当たりは……………ないっすねそんな悪い部分だけ食べたとかないない」

「(言ってる…絶対なんかしたんだあの人)」

「悪い部分だけを……………食べた?」

「苦かった、」

「感想は聞いていない説明をしろ」ガシツゴツツ

「刺さってる被ってるやつ先刺さってる」

「説明したらどうだ、嘘つき野郎」

「スーさんからの呼び名がひどい事に…食べたってそりや食べたんですよ(?)」

なんか早死にしそうだったからその…ちよつと寝てる間に夢に入って、色々して悪そうな部分だけを取り込んだだけですよ、多分なんか検査でもしたら少し数値でも下がってるんじゃないですか? ええでもガンガンガー使い過ぎたらまあ元に戻りますよ、まあ私が代わりに肩代わりでもしたらいいからいくらでも使ったらええですよはいただ少しは長生きして欲しいですねはい」

「待て、お前なに言ってるか途中で分からなくなってきたるだろあとなんだ途中なんかめっちゃ重要な事言ってなかったか?なんだ、ゆつくり言えこの馬鹿」

「よく分からないな…つまりだ、お前のアーツなどは別の…力で何かしたと言う訳だな、それで、アーツは普通に使える健康体(?)を取り戻して、だがまた使い過ぎれば前の状態になってしまうと…その負担を肩代わりする?」

「そんな事言っ「言ってまし…ジョーカーだあ…」はい、上がり三番だったか」

「話を逸らそうとしてないか?」

「よーし、ちよつと用事あるんで行きますね!アネモス!!」

「はい、呼びましたか?」

「よろしく」(立ち上がり)

「分かりました」(椅子に座る)

「待て話は…」

「メツフィー!!魚釣り行こうぜ!!」ダバダバ

「速い…速い!あとなんでメフェイスだ!」ダダダッ

「追うぞ!」ダッダッ

——廊下——

「今日はどうしよ」メツエエエフツイイ!!「うわあああああ  
!!!?!?!」ガッ  
シイ!!

「!?メフェイス「ファウスト君も行くぞ!!」…ああ!」（釣り道具）

「ファウスト!?なんでもう準備万端なんだい!?待って、おろしてよ! 離せよ!なあ!」

「なんだ…」

「クラスレさんも道連れにするか」

「は?」ガシツ

「よおし、いくぞー」

「待て、行くと言つてない!」

「そうだ、何故私もだ」

「近くに居たからだよ」

「メフェイス…諦めよう」

「ファウ…:ス…:ト?そんな、待つてよ!待つ」

「待て!何処へ行く!」ハア…ハア…

「釣りに」

「は?、待て、待て!」

「そうですよ隊長!自分達も行きます!」

「魚…:…:かいいかもしれない、」

「スノーデビル隊隊員…:僕行きます!」

「俺もだ!」

「よしバス借りてきた!」

「さっすが隊長!どっから借りてきたんですか!」

「社長!」

「ありがてえ!」

「よっし逝くぞ!!」

『おぉ!!』

「な、なんでこうなってるんです?」

「ご主人は…:…:そういう人です、さ、行きましようか時間は待つてくれません」

「は、はい!」

「……………」(七輪抱え)

「(いつの間にかリーダー(タルラ)も乗ってる…:あの抱えてんのなん

だろう、シユールな光景だ)」

この後めっちゃ普通に楽しみ、途中で作戦日が明日と言う事を思い出し、全員が『あっ』と言う顔をした、なんでこんな…なんだろうか。

# 18話

——貧民区——

「……………」

……パシヤパシヤ…ドンツ

「きやー！」

「あつごめんなさい！ぶつかるともりはなくて…」

「大丈夫ですよ、礼儀正しいんですね。（レ、レインコート着てて可愛い…）」

「えへへ…あ！お姉ちゃん！助けて！」

「どうしたんですか？」

「あつちでおに、お爺ちゃんとお姉ちゃんが……………とにかくお願い！来て！」

「わ、分かりました！（とても急いでいるんですね、一体なにが…）」パシヤツパシヤツ

「だから！いらないと云っているだろう！話を聞けこの＊龍門スラング＊」

「駄目ですーちやんと傘ぐらい差して下さい、なーにがいらぬですか、そんな全身びっしよびしよで風邪でも引くつもりですか風邪つて馬鹿は引かんで言うけどめっちゃ普通にかかりますからね、結構ツライ」

「それは…私が馬鹿つて云っているのか!？」

「言っていない、言っていないですよ！殴りかかろうとしないで！」

「来たよー!!」

「おかえりー!!隣の小さいお姉ちゃんは？」

「喧嘩止めるの手伝ってくれるって、ね!…お姉ちゃん？」

「（あれは、チエン長官と…シエーヴル!?何故あの二人が!）」口があんぐり

「お姉ちゃん」ぴよんぴよん

「ハツ、チ、チエン長官!シエーヴル…さん?なにしてるんですか!」

「なんだ！（あ、ロドスの）」

「ってアーミヤさんも傘差してないじゃないですか最近は傘差さずに  
出歩くのが流行りなんすか合羽ぐらい着ましよう？寒いし」バサッ

「あ、ありがとうございます？」

「…これで傘は無くなったな！」「はい、御所望の品です（バサッ）何処  
からでしたんだ!？」

「私はポーチから」

「意味がわからない」

「分かってしまったら終わり、…あ、私そろそろ行かないと行けない時  
間に……帰るか」

「ああ帰れ」

「わ、私が来た意味とは……？」

「ドンマイ、お姉ちゃん」

「大丈夫！いつもおに、お爺ちゃんはあんな感じだから！」

「それは…なおさら駄目ではないですか？」

「あ、そうそう、その……チ、チ、チ、

「チエン長官さんですよ…（小声）」

「チエンさん、帰り道とか何処かで足元気をつけて」

「またね！お姉ちゃん達！」

「あ、赤い目のお姉ちゃん！、これあげる！」

「………これは？」

「手作りのぬいぐるみ！なんか、暗い顔してたから、だから、これ！」

「…だいじよ「はい！」いや「はい！………」受け取る

「（す、凄みを感じました）」

「じゃ、帰りますかー、ハイパス！」バサッポイツ

「なっ、待てどこへ」パシッ

「わー逃げろー！」

「ナイスキャッチ！」

「きやー！」

突然水溜りが光だしその中に子供達とCが飛び込んでいき、姿が消  
えると、光は収まった。

「な、なんだったのでしょ」

「知るわけがない…この傘どうするんだ」

「…………貫っておきましようか、所でチェン長官は——」

「ただいまー！」

「ただいまデース」

「あ、おかえりなさい、忘れ物は見つかった？」

「うん！下敷きになってたけど、毛玉ちゃんに手伝ってもらった！」

「毛玉ちゃんに？、シェーヴルはどうしてたの？」

「赤い目のお姉ちゃんと喧嘩してたよ？」

「ちよつとCこつち来なさい」

「あーミーシャさんごめんなさい、ちよつと色々急がないと行けないんでまた今度で、お願いします、ごめんなさい！本当にー」シユ……………  
バアツン!!

「うるさい！走る時は少し離れてから行って!!!…………聞こえてないわよね、知ってるわよ」

「たっただいまあ!!」ガリリツ!!

「地面抉れてます隊長、どんな速度で走って来たんですか」

「こんな速度」

「なるほど？」

「で、どんな感じ」

「はい」双眼鏡

「んー、あ、居るね」

「ええ、何か感じたので少し上から見てました、でよく見たらいました、他にもあそことあそこ方面らへんに…」

「なんなんその索敵能力、あっちも結構プロだと思っただけ」

「いやあ、全部勘…と言うか本能で探知してるのでどうにも」

「なにそれ怖い、じゃ私他のポイント行きましようかね」

「はい、また後で」

「で、なにをしている」

「あ、スーさんとフーさん、おでんです、いますか？」

「……大根を一つ」

「スカルシユレット？、いやその前にだ、その縛っているのはなんだ」

「え？潜り込んでた人達だけ……」

「は、外せない」カタカタ

「……」

「……」

「……どうするつもりだ？」

「いや、寒そうだったからおでん作ってたんだけど暴れてたから、縛った？」

「だから何故そうなる」

「とりあえず……あつつ……最初から話せ、何かわかるかもしれない」

「少し覚ましてからたべなよ？」

「うーん、とりあえず終わりかねー、……スーさんとフーさん居るのになんで私もここ居るんだろ、今回メツフィーがあんな状態だから少し足りん所置けば良かったのに……私がいても同じか、そう思わん？」

「いきなりこつち向くんじやないわよ、あなた一人で普通に多分一つの都市の機能を全て停止させる事できるんじゃないの？いても同じ？それっていいじめ？」

「そんな過大評価されてるとは……目星失敗してない？ファンブツてるよ大丈夫？」

「幻の効果範囲と効果もつかい復唱していいなさい？」

「わーすれちゃったーよー」

「腹立つわね……まあいいわ、今はとりあえず我慢しておきましょうか」



「そうっすねーお茶のむ?」

「あら気が効くわね、その人達も一緒にどうかしら?」

「ツ——」カチャ

「物騒、出てきたと思ったら銃口向けられる、ドキがムネムネしますね」

「なに言ってるの?...これどこのお茶?」

「私が作りました」

「買った」

「お茶いれたっけ?」

「できるわよそのくらい」

「あ、あの?」

「あ、飲みます? あったかいものどうぞ」

「あ、ありがとうございます...:じやなくて! あ、美味しい」

「ジェシカ、そんなあっさりど渡されたものを飲むな」

「気が抜ける...」

「諦めなさい、これの近くにいるとこんな感じよ、気が抜けるのが身体持って歩いてるみたいなものだから」ズズツ

「まんじゅうあるよ」

「.....」

「なんですか白い人そんな目で見て、なんも入ってませんよ、ほら」

「んっ、ちよつと、いきなりは.....うっ、ぐ」

「やっぱり!」

「冗談」

「紛らわしい!」ガチャ

「あー困りますお客様ボウガンは(パシユ)撃ったね、」モツグウ

「指引いてしまったのよ...食べた!」

「ちようど口の位置にあって...」

「どうやって食べてるんですか...?」指を口に

「躊躇ないね? 貴方」スツ

「あ、ご、ごめんなさい.....??何か寒く...」

「——やつらだ、やつらがくる!」

「ッあ、はあ！」カチッ

メテオリーテが建物の壁を撃ち爆破する

「あら、あそこ私が爆弾少し置いてた所」

「なんであんな所置いてるんすか、ほら大惨事だよ」チュドーン!!

「近くに置いておこうと思ったのよ」

「ええ…」

「走れ！」

「さ、寒い…」

「逃げるみたいだけど、いいの？」

「さあ？私には関係ないわよ、Cは？」

「うーん……一応敵側だし後寒そうだし、……おでん作ろうか！」

「流石ね、よくわからない、本当にありがとうございました」

「てことでごめん、おでん食おう」

「なっ」持ち上げられ

「フロストリーフ!? 離しな「ゲット！」はあ!？」武器を取られ拘束

「大丈夫です「おでんですよ、楽しみですね」きやあ！」普通に拘束

「「拘束完了！」」

「……………」(呆れてる)

「こんな感じです」

「あれか、だからあそこはあんなになっていたのか、よしスカルシユ  
レッター、捕まえろ」

「分かった」

「おっ、」羽交い締め

「よし、」

そうするとフロストノヴァはグツグツとしている鍋から卵をだし

「……………仮面越しだが効果あるのか？」

「口部分はこういうわけか透けるから大丈夫だ、やれ」

「いくぞ」スッ

「やめッ」

するといきなり思いつきりCはしやがむと羽交い締めしていたス

カルシユレッツダーは前に倒れるように倒れそれに驚いたフロストノ  
ヴァは持っていた箸を投げてしまい熱い卵が投げ出されるそして卵  
が向かった先は…

「んんっ!!」顔に当たる

メテオリーテの頬だった

「ん！、あつ、熱い！なんでこんな熱いのあつっ！」

「ああ！すまない！手から離れて」

そう言つてフロストノヴァは『手』で触れた

「あつっ」ポイツ

また空を飛び次は

「ん…??ん!?!」はふっあぐっ

フロストリーフの口の中だった

「んっぐ、あ、熱かったが、食べれない事は無かったな」フーフー

「あんたすげえよ…」

「ああ…とりあえず、……………食べるか？」

「……………ただこう、(通信機は…壊れているか)」

「んお?直そうか?」

「直したら駄目だろ…」

みんなでおでんを食べた、とても美味しかったそうな(後日談)

## 19話

「……………何も気配がありませんね」

「確かにここなんだな？その通信が途切れた場所というのは、その人物どこるかレユニオン…何も居ないな」

「はい、その筈ですが…」

ロドス、近衛局の面々はメテオリーテ達との通信の途切れた場所付近に来ていた、がその場所にたどり着くまでに何もレユニオンからの襲撃もなく不審に思っていた。

「この状況…前に体験した覚えがありますね」

「ああ…あの時は確か少し離れた場所にCが（ヒュー…）なんだ？この音」

「バアーン!!ヒュー…バアーン!!」

「花火…?」

「綺麗……………じゃなくてなんでこんな場所?ここは放棄された場所のはずではなかったですか?……………まさかレユニオン…?」

「とりあえずあの花火の地点まで行くぞ」

「偵察チーム!収容完了しました、状況は…これは一体…」

「…軽度の皮膚の腫れ、体温の低下はあるが…全て既に処置してあり安静にして居れば大丈夫な状態までになっている…どういう事だ?」

——ロドス・近衛局——

「先程の花火の近くまで来ましたが…」

『アーミヤ、メテオリーテ達以外のチームの救出は完了した、誰一人命を落としていない、が一定の凍傷が見られる』

「凍傷…」

『偵察チームはレユニオンに特殊なレユニオンメンバーを二つ見たと言っている、十分用心しろ、後はドクター、分かっているな?』  
「分かっている」

『よろしい、指輪には注意を払え』

「分かりました……二つの特殊なレユニオンメンバーですか」

「アーミヤ、この付近は座標地点だ、」

「あ、そうでしたね、………なんでしょうこの匂い………なんだか美味しそ

「アーミヤ!」フロストリーフさん!無事だったんですね!」

「あ、ああメテオリーテとジェシカはその広場にいる……レユニオンの幹部二人とな」

「なっ——無事なんですか?」

「ああ……案内しよう」

「待て、そんな普通に出てもいいのか?罨かもしれないだろう」

「………チェン長官、行きましよう」

「………」

——広場——

「戻った」

「おーおかえ、ええ………なんか増えてる」

「んっ!?!ろろふお、あつつ!」

「落ち着いてスーさんほら水」

「ンク………ンク………助かる、それよりロドス、来たのか」

「………ここに居たかあ!!」ブンッ

「傘は投げないでください!赤目の人おお!!」キャッチ

「あ!メテオリーテ!ジェシカ!」

「アーミヤ!よく来たわね!!」

「………」

「メテオリーテ、ジェシカはどうしたのですか?」

「ああ……ジェシカは………舌を火傷してその次の瞬間舌を嚙んで痛がつてるのよ」

「いらい………ひりひりひまふ………」

「ええ………(困惑)」

「どうしてやけ………それか」

どうしてそんな火傷をしたのか聞こうとしたドクターだったが次に目に入ったものを見て原因が分かった、そうおでんである。

「コタツ」どうも

おでん「グツグツのおでん……ご期待下さい」

「コタツまであるのか」

「あ、入りますか？ あったかいっすよ？」ギリギリギリ……

「よそ見とは余裕だな？ ん？」ギリギリギリ……

「チェン……それぐらいにしておいては……」

「優しいなあ！ オニの人！ 多分周りからイケメンとか言われてるんだろ？ なああ！！ 身体からカツコいいオーラ出てるもん！」ギリギリ

「何を！ 言つて！ する！」ギリギリ……ゲシツゲシツ！

「痛い、脛蹴るのやめて下さい痛いっす」

「そうっ、か！」ゴツツ

「イツタ、マジでやりがりましたね、」ゴツツ

「ツツー！！ このっ」ゴツツ

「壊れるまでやってやらあ！」ゴツツ！

「やめて下さいよ……」ガシツ、ガシツ

「なっ」プラーン

「おお高い……」プラーン

「身長高いな……」

「隊長……どうですか？ 花火打ち上げました……なんですか？ 楽しそうな事してるじゃないですか？ 混ぜて下さいよ」

「グツ君背高いからやる側では……？」

「それもそう……ですかね？」

「ド、ドクターこのコタツ、抜け出そうとすると身体から力が抜けていってしまいます……」

「アーミヤが溶けている……クツ写真が撮れれば」

「そんなあなたにこれ、ガメ、違うカメラです」

「ありがとうございます」パシヤ

「……なにをされているんだ？」

「あ、フーさんおかえりなさい」

「——3人目！」

「そんな状況で言われてもあまり緊張感がないぞ……？」

「ハッ…」

暫くお待ち下さい(いつもの)

「すいません…見苦しい姿を…」

「いやいい…これも全部アレのせいだ」

「私ですか？」

「お前以外に誰がいる」

「うちの隊の奴ら」

「クツ否定できない」

「勝った、帰って寝てくる」

「させないからな？」

「そんなー」

「コタツ…導入を検討してみるか」

「——安心しろロドス、悩む必要はない、今から苦痛もなく死なせてやる」

「ツー!!全員後退しろ！」

「(二つの意味で)この温度差よ、体調崩しそうだよ」

「それより少し離れるぞ」

「あいあい」

「気温が…急速に下がっている…？」

「チツ油断していた、あの仮面のせいだ！」

「……………(少しおでんつついていたのは黙っておきます)」

「…どうする？後一分もしない内にこの広場全体を…凍りつかせるかもしれない」

「……………退きましよう、全力で」

「……………一応ここには幹部が何人かいるのだがな」

「……………どうやら退路は無いみたいね」

「スカルシユレッダー…」

「じゃ私はあっちの方で…足動かねえ」

「働け」

「いや、私いらなくない？もうスーさん達だけで行けるでしょ、ね？」

「はあああ……………(ため息)」

「なんかこう……気の抜ける」

「……知ってるか？これがこつちの日常だ」

「……苦労してるな」

「ああ……逃しはしないがな」

「だよなあ……」

「……♪——」

「え？速攻でそれやるん？」

「容赦は……なしか」

「……雪……?!?!?!まずい」

「……♪——」

「いつの間にこんな雪が、黒い氷が広がって——」

「……一応仕事してたんだな」

「事実を隠蔽するだけの簡単なお仕事、これ私も食らわない？」

「言い方……まあ、お前なら大丈夫だろ」

「寒いんだよしってる？もうお酒飲んじゃう」

「この状況でか……」

「——あのアーツは私達の熱を全て奪ってしまいます！」

「……これで終わりにしよう……♪……?!?!?!何が……」

「クツ……」

「お前がやったのか？」

「さつき食べたので力が有り余ってるから……な！」

「やっぱりお前のせいじゃねーか」

「本当に申し訳ない」

「……さつきから少し気が抜けるから黙っていてくれないか？」

「……申し訳ない」

——一方その頃近くの屋上で見ている一般レユニオン狙撃兵とマ  
ルー（狙撃タイプ）——

「わーやってますねー」

「やっぱり姐さん強いんだなあ……マルーさんの所の隊長あれ巻き込ま  
れてません？」

「いつも通りでしょ……あれなんかクロスボウの調子が（パシユ）



あ、」

カスツ、ボツ、バタツ！シユウウ……バンツ！！

「「あ、花火が」」

——広場——

「氷の刃が分断しています！、ですがながく（ヒュー……）え？」

「なんっ!？」

バァーン!!

突然花火の音が聞こえたと思うと後ろの囲んでいたレユニオン兵の近くに花火が着弾し、包囲に穴ができた（マルーの不幸体質により）

「……………今だ！行くぞ！」

「は、はい！皆さん！急いで！」

「しまった！」

「……………申し訳ない本当、腹切るわ」

「……………」

「身体が……こおっ、て、ゆ、く」

「……………」ゴツツウ！

「パトさんもすまねえ……」

「ほんとうにい、ごめんなざい……」（土下座）

## 20話

「急いで！まだ追って来ています！」

「まあそうだろうな！こんな獲物、そう逃すはずが——止まれ！」ザツ！

「ツワイヤー!?」ザザザツ！

「あー、…やっぱりアディアさんみたいにはいけませんかそのまま行けば拘束できたのに、残念」

「副隊長、そんな簡単に人生進みませんって」

「深い言葉ですね、さて、お仕事です」

広場から離脱し、合流地点まで走っていたロドスと近衛局だったが途中、道に大きく罾が張っており、その罾の先には何十人かのレユニオン兵が待ち構えていた。

「いきなり隊長から信号飛ばされたと思ったらこの状況ですよ、ワクワクしますね」

「ドキがムネムネと言うやつですねわかります」

ガキツ 「グーニーズーありがとー!!」

「マルー、またやらかしたんですか？」

「うん、やつちやつたぜ」

「ギルティ、焼き土下座+背中にダンベル(50kg)の刑」

「死んじやうからやめて」

「しようがない…ハラキリで許します」

「どつちにしろ死んじやう!?!」

「……………あれは多分」

「……………アレの部隊だな、間違いない」

「おやマルー、私達の隊長は有名みたいですね」

「多分悪い意味…でもそれでいい、それでこそ隊長だ」

「なんだあいつら、…力づくで通るか？」

「戦いを察知」準備完了

「……………」ガシヤン

「アハハ…」

クク……アハハ……ふふふ……

「——気配が変わっ……た？」

「すごい……強い思いが伝わってきます……」

「……あれは厄介ですよ」

「——見つけたぞ」

「……状況は最悪、どうするドクター」

「……どうするか」

「……何か聞こえませんか？」

「こんな状況でなに……近づいて来ている？」

ガラガラ……ゴン！ガラガラ!!!

「——横からか！」

ガラ……ギューイイイ!!!

「ドリ……ル？」

「なん……だあの身体について「すう……シエエエエヴウルウウウ  
!!!ドコニイルウウウ!!!研究させろおお!!!」うるさつ!!!」

「……呼ばれてるぞ」

「うっわあ……」

「お前がそんな声出してるの初めて聞いたぞ」

「居るのは！分かってる！レーザーがそう言っているからな！さあ  
！さあ！早く僕と一緒に研究所へ行こう！君の死について、僕とさあ  
!!」ハアハア

ロドスと近衛局の横の建物から突如ドリルで穴を開け、出てきたのは、機械的な青の色をした大きな両腕を持ち、頭に輪っかがある、オレンジ髪のサンクタ少女？だった。

「ん？なんだ、君らそんな見つめてきてさ、この腕が気になる？残念教  
えないよなんてたって僕の……シエーヴル！僕のシエーヴル！そこ  
にいるのかい？今行くよ！」

「……」  
「……」

「やめ、服の中に入ろうとするっ、な伸びるだろ！」

「アレには見つかりたくないんだよ、マジで」

「(声が：真剣だ：：本当に会いたくないのかあのサンクタ族に……)」

「……その少女!」

「……僕男なんだけど、まあいいよなに? その：仮面の人」

「……え、男なのか、すまなかった、……シエーヴルの場所を知りたいか」

「……いいよ、乗ってあげよう、でなにすればいい?」

「……ありがとう、突破口を開けてくれ」

「いいよお、：全て蹴散らしてあげる」ガシャ!カチャ：カチャ

腕の一部が外れたと思うと銃が飛び出し、両手に銃を構えた少年は……

「ファイヤああああ!!!」カチツ、バ、バババ!!!

その銃を乱射した

「……!」バツ、ピュン、ヒュン!

「トリガーハッピーってやつですか!」ヒュン

「おまけもあるよ☆、吹き飛ばべ!」ガシヨ、ポイツ

カンツ、：チュドオオン!!

「あ、あれ失敗作だった、まあいつか!でシエーヴルはどこだい?早く教えなよ」

「……」ビシツ

「ん?、……」

「……」おい、隠れるな視線が刺さってるんだお前出る……」

「……シエーヴル、やっと会えたね、さあおいで?」両手広げ

「……」

「ゴホツ、危なかつ……隊長が見たこともない目してる!」

「写真撮りましょ写真!」

「……なんで来たん?ネーネ……」

「……!!!(バタバタ)僕の名前を言ってくれたね!嬉しいなあ!でも僕今はシエヴローって周りに名乗ってるんだ：やつぱり僕には君しか

いない！君に名前をもつと言ってもらいたいさあ！僕とふべえ!!」ドサッ

「ちよつとなあ、激しいんだよ、落ち着こうぜ？な？」振りかぶった体制

「……………（ポカーン）」

「……………（今のうちに逃げるぞ）」

「（1、2、3!）」ダツ

「あ、また！おい、シエーヴ……………駄目だなあれ」

「待ってよ！一緒に研究所に行こ？大丈夫だよ、ちゃんと退屈しないようにいろんなもの準備したんだよ！一緒にずつと暮らそうよ！」

「やだよ、絶対もうそれ外に出してくれないじゃないですかヤダー、研究対象なんかには誰がなるか！私はまだ色々旅続けたりするんだよ！」

「そっか…まだ続けるんだね…じゃあ隅々まで検査したら一緒に行こう！全部研究させろ！」ハア…ハア…！（ワキワキ）

「もう願望じゃないですかヤダー!!そもそももうお前も歳じやろが！」

「大丈夫！君の為の麻酔薬作ってたら何故か肉体年齢だったりの老化を抑える薬ができたんだよね〜お父さんも姉さんも元気だよ…あ、使ったのはね」

「なんか予想できるからやめて」

「シエーヴルの「……………（ゴスツ）」いったあ！誰だい君！いきなり蹴るとかないんじゃない!?!」

「主人、この人誰です？なんか色々危なそうな人ですけど」

「ありがとう…ありがとう？何故、ここに？」

「なんか感じたので走ってきました」

「私の周りって怖い……………そろそろまた旅に出よ（小声）」

「おい、移動するぞ……………なんでいるんだ？」

「あ、スーさんすいませんなんもしてませんでした」

「いや…今回はまあ…しようがないだろ…」

「初めてなんか同情された気が…どうなりました？」

「あの後は逃げられた、運のいい奴らだ」

「運のいいのも実力のうち、つまりロドスとかはクツソ強いのでは？  
うわ怖い、戸締りちゃんとしとこ」

「戸締りしても、こじ開けられるだろうな」

「そんな荒っぽい事はしないでしょ多分」

「どうだかな、さっきのは？」

「あー…消えてる、やったぜ、おー？『また来る？』やめて、こないで  
(本気)」

「…あれはなんなんだ？」

「家族で追いかけて来るサンクタ族の次男」

「ええ…そんな奴らいるのか…」

「私の不死の研究をしてるらしいけど…：目怖いんだよあの人ら」

「怖いものあったんだな」

「いっぱい怖いものあるよそりゃ心は昔のままだからな！子供心（不  
純物混じり）を忘れずに！」

「不純物混ざってたら駄目だろ…」

「まあいいじゃない」

「はあ、行くぞ」

「あ、主人干し肉あります？」

「アルヨー」

「ありがとうございます」

「呑気な…自分にもくれ」

「さっきおでんも食べてなかった？」

「疲れるんだよ」ブチツ

「…：詳しく聞きたくもないが一応聞いておくさっきのやつ  
の事詳しく教えろ」

「すごい私より変人かもしれないサンクタ族家族の次男坊」

「短略化しすぎだ」

「えー昔身体動かなくなった期間があつてそれで拾われてお世話になつて、そしたらなんか、色々あつてああなつた」

「情報量が多い…そもそもなんだ身体動かなくなったってなんだ」

「時々なんかおかしくなる時あつてねーまあ昔の名残でしょ（ガタツ）フ？」

「なん、なん主人ま、主人！」

「落ち着け首取れあ！首取れるつてあああ!!ゴフツ」

「二人とも落ち着け！車両が揺れてるだろ！」

「なんですか、いきなりなんか…どうしたんですか!?めっちゃなんかアネモスさん荒ぶってますけど!？」

「とりあえずグーニーズ！止めるぞ！」

——一方ロドス——

「やあさっきの人達！なんか色々こつちの方が何故かシェーヴルに近づけそうだからね、少しお世話になるよ！全てはシェーヴルの為に！あ、家族にはもう連絡したから頑張れつて、よろしく！」

『（い、嫌だなあ）』

——近衛局——

「……………なんでそんな全身ぬるぬるしてるの？ふざけてるのかしらチエン警司？」

「……………なにも聞くな」（ハイライトオフ）

「そ、そう（今日は、ここまでにしとこうかしら…目がやばいわ）」

「とりあえず流しに行きましょう、足元気をつけて」

「こ、腰やった」

「いきなりあんなの降つて来るとは…すべつてえ!？」ゴツツ

「なんだこの蛇みたいなのお!?!めっちゃぬるぬるしてる!?!うお!」ズルツ

ヌタウナギ達 「ヌタヌタヌタ…」

## 21話

「…状況は？」

「最高よ最高、重要施設は攻略されて、貧民区と外都市の通路を解放！いやもう本当に最高ね笑いたくなるわね具体的な事はブリーディングを見てきたらどう？」

「…そんなキャラだったか？何処が最高だ」

「さあ？」

「その反応は今一番腹が立つな。変なものを思い出す」

「あらそう、ならもつとしてやろうかしら？」

「あ？」

「(ニヤ)」

ガチャ「…これはどういう状況ですか？」

「あら、前噂で聞いた例の会話方を試したくなつたの、効果は絶大だった見たいね」

「ああ…あの龍門突然現れた…今思えばあのレユニオンの事ですね」

「もういい、違う話にするぞ」

「隊長くどーもお」

「あくデイアさーん、どーもおどんな感じよー」

「今のところわあなんだかん大丈夫ですよ」

「そうかく敵、味方に負傷者、死者」

「敵負傷者は打撲、ちよつとした切り傷…何人が自決しようとする人いましたがまあこれは辞めさせまして、こちらはロープを使った際に一人アシクビラクジキマシター、死者は0ですヨォ」

「アシクビラクジキマシター」

「なにやってん、とりあえず休憩しときなさいこれ貼つとくから」

「あ、あちらさんのほうは縛ったり気絶させたりですまあとりあえず



避難をさせましたよお」

「私がソリで運びました」ぐっ

「俺があ結びました」ぐっ

「おつかーれー」ぐっ

「……何故だ？」

「えー？避難させたって事にかね？そりやあんまコロコロしたくないですし、無差別に殺戮とかもしたくありませんしー」

「今回は自分達は結構自由ですからねー」

「…そうか、まあそういう奴だったな」

「なに、あちらさんも命張ってんのにこれだと色々侮辱だったりになるかも知れませんが、あまり血を流したくありませんしねーほら私平和主義者あと身勝手な人」

「なお、昔色々非道な事してる賊を数分で首だけにした人が言っています」

「なんの事だろー」

「平和主義とは一体…？」

「まあ本当に必要な場合は殺りますとも、ええ多分」

「まあ今回は……色々狂って楽しんでる奴とかは容赦はしませんけど」

「(……なんでこいつらレユニオンに?)」

「(そんな事思ったら最後)」

「(スーさんは思考の海に飛び込んだ…)」

「(SAN値チェックいります?)」カラン

「心読むな！喋るな！いらん！」50↓50

「あ、成功」9↓3

「減少無しですよやりましたねスーさん」10↓10

「隊長なんで減ったんですか」

「気分かな…」

「ああ！もう行くぞ！」

「隊長ー!!」

「どしたー」

「倉庫！行きましょう！今なんか待ち伏せやらしてるらしいですけどそれが…」

「……………あーはん？OK？今すぐ行こうシリアス系とか嫌いなんだ、死んでも治す！」

「隊長なんか違う所の人格入ってませんか？どつかのバーサーカーとか」

「あああああざああ”あ”ああ!!!」ダダツ！

「また違う入ってますね！」

「陣形を…なっ！」

「鬼だつう、こうなつたら…!!う——

ガアンツ!!

「…！」ザリツ

——わああ!!……………え？」

「痛った」

「隊長の前方不注意」

「上空からのライダーキックが……………あらま、すんごいあれ私戦闘真つ只中に降りた？まだ始まったばかり？、これ全部貴方様が？」

「……………貴方方ですか、私を引き止めるつもりですか？」

「いや全然、それより何処、時間経ってるからもしかしたら失血死するぞ」

「あそこですかね……」

「よしい、……………まあ私敵ですからねしょうがない」

「……………なにを？」

「なんか死にかけの人がいるって話となんかしてるって話し聞いたんで、あとシリアスな雰囲気と感動があるって勘とかが言ってたんで、きちやいました」

「仲間を助け「お、俺たちは元々、死を覚悟で来ている！、臆するものか！」

……………そうだったか」

「うーん……………ちよつと残念だけど、まあこうしようあ、お前ら、一旦撤

退それか投降した方がいいと思う（無慈悲）「ビリッ

そう言つて、腕につけていたレユニオンの腕章を外し

「な、なにしてるんだ！シエーヴル！いきなり「預かつといてー」あ、ああくそツ、分かつた、撤退するぞー！」パリッ！

そう言つてレユニオン兵達は鏡を割ると、姿が一瞬で消え、その場には近衛局とシエーヴル、そして一緒に来た名もなき隊員が残った

「…私はレユニオンじゃない、ただの紛れ込んだ偽善者、ただの死に急ぎが弱い違法入国者ですよ、ね？」

「……………勢いが良すぎますね、分かりました」

「うーん、イケメンの風を感じる…急患は何処だ！」

「ビリッ！「だからそこです！」

ガチャ「なんか引つかかつてる……………let's go! GO GO

!!「バンッ！」

「豪快すぎる…」

「XR02!……………」

「チェ…ン殿…ですか？私は一番奥に…」

「その…目は？」

「うっかりアーツに…大丈夫で「一旦喋らないでー、はーい落ち着いて……………目は……………うーん、後で考えるところとして、とりあえずこれ飲んで」んぐつ……………にが」

「我慢、速攻で痛みを緩和したり血とめんのそれが一番だから、…いや普通使わないんだけど、血が足りんな、それより場所悪すぎるわ、移動します、イチ、にー、サン！」シユン！

「ここは？」

「私の家のような場所、ほぼ帰ってないけどまだマシ、おーいナモナシあとそこの人ら手伝つて」

「あ、はい」

「その床下から輸血パック」

「はい……………どうぞ」

「い…いいんです、もう動きた「まだちよつとしか生きてないのになにを言うあと数百年生きてからめんどくさがれ、私も動きたくないわ！

働きたくない!」……」

「……………(聞いてない……)」

「……………もしかして貴方は……………シエーヴル……?」

「え、なんで知ってんの怖」

「色々な…所で…話して、ましたよ、魚釣りが、たのしかった、だとか」

「魚…釣り?」

「あー昨日行ったからなあ」

「お前らそんな事してたのか!?!」

「ああ!釣りしてきた!楽しかったよ!」

「サンマ…美味しかったなあ……」

「… 状態は?」

「一応安定した、まあ私は本当の医師じゃないから、あとはそっちの専門に任せますとも、あー疲れた、そのドア開けたら元の場所に戻れるから、じゃなんか話あるんだったらー、」バタン

「は、はは、マイペースな」

「そのマイペースなやつに助けられたんだ、」

「そうですね……」

「隊長」

「私もう隊長じゃないんで」

「あ、そういえば自分達破り捨ててた」

「え、ナモナシ君も破ったん?はー思い切りのいい」

「た、シエーヴル程では、……………一つ気になるんですけど」

「どしたん、あ、カフェオレでよかった?」

「ありがとうございます、シエーヴルって誰の味方なんです?」

「知り合いとその知り合いなどついでに自分」

「ええ…即答」

「私の知り合いとか気に入った人が幸せだったり、無事ならいいんだよまあ私は時々真反対だったり色々とエゴっぽい事が多いけどネ私ってクズだし、」

「クズって……」

「あー自分語りとかやだよ恥ずかしい、自分の事なんて全くわからないからなんも話せねえよ」

「……それはその身体になってから？」

「いや昔からだったと思う、昔から夢なくてねー」

「そうですか……とりあえず話はここで終わりにしますか」

「恥ずかしいからそうしよう」

「………飲み物でも持っていきますか」

「あ、いく？なら行くか」

「どーも、飲み物デース」

「……ありがとうございます」

「えつと……」

「あ、目か、うーむ……ちよいと、ごめんね、」スツ

「え？」ピタツ……

「なにを？」

「うーん、ちよつと混乱するかもだけど許してくれ、目を開けて、どぞ」

「え、でも目は」

「いいからどぞ」

「……!!見え、る？」

「良かったよじや私はここら「まあ待て」……なんすか赤目の人」

「さつき自分の事を違法入国者と言ったな？」

「あー、もしや」

「逮捕だ」（いい笑顔）

「そんなーこんな状況なの？」

「仕事だからな」

「ゆっくり休んで下さい」

「………分かりました、姐さん、」

「ここは自由に使ってくれ、なんだったら手伝いに……あ、そうだ」ガ  
チャ

「え、!?なに!?」

「おじちゃんこんにちはー」

「あ、お姉ちゃんも！」  
「やあやあ、ミーシャさん達や院長は？」  
「え？院長は今…」  
「オマエノウシロ」  
「なん…だと…」  
「で何？依頼？野菜の世話しねーといけないんだけど」  
「怪我人、オマエノウシロ、ちよつとよろしく、お願いできますか？」  
「…………見返り」  
「何がいい」  
「動物写真集」  
「頑張つて撮つてきます」  
「成立だ、ミーシャ、ちびっ子共手伝えよう」  
「ガツテンダー」  
「アイアイサー」  
「は、はいよー？」  
「じゃお願いする、私今から連行されるから」  
「あー…面談には行つてやるよ」  
「一生私多分出られないわ…」  
「そうだなあ…行つてこい、」  
「行つてきます…」  
　一方その頃レユニオン  
「シエーヴルがレユニオン抜けたぞ！」  
「は？」  
「え？」  
「隊長？」  
「主人…」  
「…………なんなんだよあいつはああああ!!!」  
「落ち着け！スカルシユレットダー！」

## 22話

前回、シエーヴルが色々あってレユニオン抜けました(笑)

「(笑)じゃなねえだろうが！一体どう言う事だ！ちゃんと説明しろこの野郎！」ガクンガクン

「おお、落ち着けえ！説明する！とりあえず口調も何もかもがおかしいぞ！誰も(笑)とか言っていない！言っていないぞスカルシュレツダー！！」ガクン！ガクン！

「お茶です、ほら飲んでスーさん」

「……(ゴクツ)……ふう、すまなかった、さて事情を聞こうか」

「(威圧感なんかいつもより凄いなあスーさん)」

「(そらいきなりだとなるでしょうよ)」

「(結構仲良いですからねえあの二人……)」

「その奴ら……なんだ？その目は」

「いえ」

「なにも」

「ありませんよお」

「……と、とりあえず話すぞ……」

事情聴取中……

「はあああ……」頭抱え

「ナモナシって人……居ましたっけ？」

「ナモナシ君はアレですよ最近主人が身体を作ったあの」

「あー、そうでしたね、名前まだ決まっていなかった、」

「そうそう」

「……待て身体作っちゃってなんだ？」

「え？知りませんか？怪奇！シャワー室端の幽霊事件」

怪奇！シャワー室端の幽霊事件とは、レユニオンの訓練所にあるシャワー室の一番端にある個室で時折声が聞こえたり何かに肩を叩かれたりする事があり、とあるレユニオン兵が「三角座りで座り込んでる人？を見た」と言う証言があり噂になった事件である。

「…ああ、あつたなすぐに聞かなくなつたが」

「その時の犯人がナモナシさんです、なんかいきなり虚無に向かつて隊長話してた時はびっくりしましたよ」

「走つてアネモスさん呼び行つてましたからねえグツさん」

「…え？て事はあれ…本当に幽霊の仕業だったのか!？」

「ああそうらしいですよ、今は確か色々あつて隊長の式？らしいですけど、毛玉さんがなんか新入りが入つたとかで喜びながら生肉食つてました」

「そうか…いや今そんな話してる場合じゃない、今アイツは近衛局に捕まつてるって事だな？」

「捕まつてる…まあそうだな捕まつてる？ああ（再確認）」

「煮え切らないな…いやあれだから納得できるが」

「普通に一緒行動してそー」

「いや流石に逃げて……るだろ？」（確認）

「主人気まぐれなので予想付きませんこつち見ないで下さい」

「これだからなあ、はあ…」

一方その頃噂の奴は

「なんで私達一緒に同行してるんかね、手錠とかもつけず」

「知らないですよシェーヴルさん：少しでかいですねこの服」

「すまんなあ：それしか今日持つてなくて」

「そもそもなんで着替え持ち歩いているんだ：」

「何あるかわからないですし、そのまま旅に出たりしようとしたり」

「後者がとても心がこもった言い方ですね」

「そりゃあ私の…あそこじゃありません？」

「…渡された紙によれば、ここだな」

「おーなんか建てとる」

「…何も知らないんですか？」

「逆に私がなんか知つてると思ふ？」

「いや知つてるでしょ隊長」

「話右へ左へだからなあ」

「そう言う人だった！忘れていた…!!」



「今更すぎじゃない？ナモナシ君」

「それもそうでした、先輩達みたいに慣れないと」

「あいつらは慣れと言うのか…？あと先輩呼び、ぼーさんが狂喜乱舞してたぞ…もしなんかあったら言つて？ゴツドなハンドなインパクトかハレルヤ（鉄拳聖裁）するから」ゴキッ

「シエーヴルさんそれどっちも同じですよね？」

「精神的にチクチクするのはちよつと苦手で…前やりすぎてトラウマ与えた事あつて」

「ええ…あ、戦闘終わつたみたいです、」

「な、シエーヴル!?なんでそこに居る!?裏切つたのか!!」

「実はカクカクシカジカ…」

「…なるほどな」

「分かつたんだ…」

「いや全くだ、まあ色々あるんだな…今更何も言わん」

「と言うかみんな半殺しの人も居るけど生きて捕まってるな、よかつたね」

「（確実に致命傷を与えられたはずの奴が全く傷が深くない…Cのアーツか）」

「いやー今私手が出せないからなあ、すまんねえ」

「…チエンさん達はなんか家の…扉ぶつた斬りましたねあれ」

「わーダイナミック私も鍵とか無くしたらああやって入ろうかな、…出てくるまで暇だな…おーいそこの近衛局の人達」

「……なんですか？」

「出てくるまで暇だから人生ゲームしようぜ」

「あ、俺青の車がいい、拘束されてるから代わりに誰か動かしてくれ」「じゃあ自分動かしますよ、自分緑の車いいですか？」

「こんな事してる暇……やっぱやる、自分赤で」

「じゃ私黒」

＜オレモヤリタイー

＜ジブンモイイカー？

＜ワタシモー

「これ実は6人までなんだ：後の人達は他のお願ひします」

「あ、はーい」

「どれするか…」

「誰か将棋やらないか？」

「お、将棋と聞いたら俺だな、受けてたつてやる近衛局」

数分後

「ではチェン、入り口で待ってます。……………えっ？」

「えーと貴方は高級品を女性にプレゼント、三万払う」

「またですか…これで5回目…」

「ドンマイ…レユニオンの人、結婚マスか出た数字で全員から龍門幣が貰える……………この数字は五千ですね、やりい」

「おめでとうございます」

「おめでとさん」

「こんな感じで現実でも結婚できたらな…」

「あ、(察し)大丈夫だつてお前いい奴そうだから、いい人見つかるよ」

「そうかな…まあ頑張つてみるさ、あんたはないのか？」

「うーん…あんま考えた事ないな、シエーヴルは？」

「私に聞きます？」

「……………そういえばそうだったな、ナモナ…すまん」

「いえ、大丈夫ですよ」

「色恋沙汰は自由だよ…なんだつたらめつちや応援する」

「…参った」

「これで4戦中2勝2負け…次で決着つけますか」

「次で…決める!!」

「「うおおおおお!!」」

「……………楽しそうですね」

「あ、オニの人もう一人の方は？」

「まだ中にいますよ、人生ゲームですか」

「暇だったからやってましてね、あ、水入ります?軽食とかもありますけど」

「いえ、水だけで大丈夫です」

「そうですか、ほいどーぞ」

「ありがとうございます……敵だったとは思えない接し方ですね」

「そうですかねえ…のんびりいつも通りなだけですけどねー」

「そうですか、いい事だと思います」

「この能天気がいい事と？はー生まれながらの能天気が褒められるとは、ウレシイナー」

「棒読みですよ」

「感情があまりこめれないの…」

「…全員ゴールしたぞーさて一番の富豪は…ナモナシお前が一番だ」

「おめでとう、景品にこの近衛局非公式ストラップをあげます」(趣味小物作り)

「なら俺からもレユニオン非公式タオルを」(趣味裁縫)

「完成度が高い…」

更に数分

「…なんだこれは」

「あ、出てきましたね」

「いやその前に、何故全員遊んでいる…星熊何を編んでいる？」

「ああ少しマフラーの編み方を習っていました。とても分かりやすい授業でしたよ？」

「それだったら良かったですよ」

「いや、本当上手かった…また機会があればいいか？」

「…ああ、機会があれば…な近衛局の」

「…とりあえず次だ」

「あれ、もしかして私達またついていなきやいけない系？」

「何するをするか分からない、ならここに他と居るより連れて行った方が対処しやすいからな」

「首に鈴ついているから分かりやすいぞー」(チリーン…)

「全く鳴ってませんでしたよね？」

「アツハツハ、なんの事だかさっぱり、…やっぱり行きます？着いて

いく理由としてはさっきの不十分な気が…」

「行くぞ」

「あ、無視っぽいですね分かりました」スタスタ

「…おい聞いたか？、シエーヴルが抜けたって」

「おい、今は…はあ…聞いたよまたなんかあったんだらうよ」

「苦勞が絶えないよな…だけど結構やばくないか？もしかしたらあつち側に着いてるかもしれないんだぞ？」

「…その時はその時だろ、あれは、そういう奴だったって事だ、そんな事より、なんかおかしいな、マイクはオープンのままなのに——」何も聞こえない？」…ははっこりやまいたったな」

バリイ!!

「ああ！窓に！窓に!!」（カキカキ）

「ちよつと赤目の人、私を放り投げてから突入ってなんですか、扱いが酷い、あとそこ何書いてるん？」

「知らんな」ゲシッ

「あんたさては前に踏み台にしたの根に持つてんな？」

「…腕縛られてんなあいつ、あれごと攻撃」

「分かった」

「容赦ないなあ…なんか赤目の人通信してる…あ、ピアノ…」

「あのピアノは確かお嬢様が私に自慢していた…」

「…とりあえずあれ傷つけないよう私なんかやっときます」

「…お願いします」

カンッ！

「あ、シエーヴルてつめ、アーツ蹴り飛ばしやがって！どうやったらそんな音でるんだよー！」

「これ180万かそんぐらいするって」

『え、…あつちでやろうぜ（そうだな）』

「……………他の場所とかは、」

「……………お願いしても？」

「分かりました、出来るだけ被害がないようにやっときます」

## 23話

「疲れたわ……」ドシヤ

「シエーヴルさあん!? 全身血だらけで倒れないで下さい!! 掃除が!」

「ナモナシ君掃除道具持ってきて……掃除なら私がい!」なんか電波来たなあ……どこの貴族からだろ帰って……よいしょつと」

「お疲れ様でした、被害がほぼ無し……助かります」

「いえいえ……壊れたらあれでしょ? 署名やらなんやらでめんどいでしよう? ならこれぐらい、ほらもう全部怪我も無く」

「途中なんか壁が歪んだと思ったら……そっちに飛んでったアーツとかその他諸々がその場ではたき落とされてるんだ……怖いよな」

「正直一番そっちに恐怖した、……あれって元はお前らの仲間なんだよな? ……あれ一体なんだ? 大怪我してたよな?」

「元々よく分からない奴だからなあ……よくは知らん」  
「そ、そうか」

「お、ナモナシ君これ」

「綺麗なブローチ……細部まで細かく作ってありますね、」

「凄いやなあ、知り合いにも得意な奴居るがこれはこれでとても綺麗だよな……うーむ、ここに置いておこ」トサツ……

「……買うんですか?」

「YES! いやーなんかあんまり物欲無いのに欲しくなってるね、まあ私には似合わないからつけないんじゃないが」

「えー……」

「……ふむ、チエンこういうブランド物はどうです?」

「……まあまあだな、そいつらのペンダントはいいぞ、イヤリングはイマイチだが」

「あなたがイヤリングを着けている姿なんて滅多に見ませんね」

「制服が常だからな」話の途中申し訳ありません! 平面地図です! どうぞ」(っ)苦勞引き続き——」

「大変だなあー私にはあんなテキパキ指示出せんわ、隣失礼」

「なんだ？捕まった俺たちを笑いに……そんな奴でも無いか」

「なんです、笑って欲しいん？しょうがないなあ……いや私仮面がいつもニッコニコしてるからいつも笑ってるわ」

「そう言う事じゃない……なあ」

「なんでしょ」

「……止めないんだな、」

「なんの事かさっぱり」

「……そうか」スルツ…

「なーんの事かなー、ただ一つ、爆発っていいよな」

「——チエン殿！3階で大量の爆発物が見つかりました！あなたの足元——」

「そうだな！しかもこれはC&W印の特別品だ！お前らを天に召してやる！」

「——！」

「チエン！」

「ツー危ない!!」バツ

——ピタツ……——

床が崩れ、チエンと星熊が瓦礫と共に落ちていく……が次に目にした光景は、床が崩れかけては居るがその場に静止し2人の身体が少しふわふわとしているがその場で浮いている光景だった

「——え？」

「わーお、ナモナシ君がなんか目覚めたよおめでどう」

『おめおめー君も家族だ!』

『目覚めんの早かったな、まあかなり辛そうだが』

『え？なんですか!?!後輩私が見てない間に進化したんですかあ!?!ウツソ！毛玉シヨック！ばーさん後で見せて下さい!!私もみたい!うわああ!!』

「ナモナシ君にも聞こえてるから少し静かにしようぜ」

「う、ぐ、あ早く、チエンさんと、星熊さ、ゴフツ」

「——あ、ああ！早くこっちに引き上げる！」

救助中&移動中

「う、あ、ゲホッ」ドサツ：パシヤ

「あれま血吐いてる…とりあえず落ち着いて、ほい水」

「あ、あゝり」が、んっんうありがとうございます…」

「失敗か…運が悪い自分が憎い」

「ナモナシ君のレスキュー魂が働いちゃったからしょうがない、運が悪いなら今度神社行ってお守り買いに行く？それとも作りましようか？」

「いやいい、それでさっきのは？」

「アーツですか？」

「さあ…そうじゃない？あんまりこう言う事は知らな…：ナモナシ君身体死んでる、あ、そうだえーとペンと紙は何処だ」

『え…』

「——さっきので、力尽き『死んでるけど死んでないんです、皆さん…あ、文字書ける、やった』ペンが——浮いている!？」

『…：…前まで少ししか触れられ無かったのにめっちゃ触れますよ物限定ですけど、どう言う事ですか？シエーヴルさん』

「私に聞かれても…：あー多分あれよナモナシ君の身体かなり急ピッチで作ったから身体耐えられる用に調整してなかったんだわ」

『あーなるほど…：クツソ辛かったです』

「すまねえ…：…時間あったらちやんと作ってきます…」

「——ハツ、私は」

「起きましたか」

「…何があった？」

「先程までいた場所が爆破され、そしてそれに巻き込まれそうになった所を…：…あのナモナシ殿に」

「…：…死んだのか？」

「…：…ええ」

『死んでない』

「!?なんだ！」



「ナモナシ（霊体）君だよ、ナカヨクシテアゲテネ」

「――」

「チエン?…気絶しています」

「何回気絶してるんで…フ?」カラン、カラン…カチツ…シユ…シユ…

「――! 全員警戒態勢!」

「あ、起き、おっ」コツ…

「くっ、煙幕で何も見えません、…どうしました?…まさか」

次第に煙が晴れていき…近衛局の面々は改めてあたりを警戒する、  
そして

「レユニオンの奴らが…居ない?」

「あの2人もです、なんだか似た事態を前に」

「…あの時も確か短時間で消えたと聞いたな」

「ええ、報告した通り、逃げられましたか、音もなく」

「…\*龍門スラング\*」

「落ち着いて下さい」

「…もうちよつと運び方無かった?」グサア―（心臓部を返しのついた槍が貫いている）

「しやうがないじゃないですか隊長、他の皆さんはあの爆破した人以外皆救出してデコイに置き換えて、あとは隊長とナモナシさん、だれどめんどい位置にいたので…」

「自分特製スモーク投げてえ」

「私が紐つけた槍を蹴って突き刺して」

「マルーの斧に紐付けて釣り上げました」

「グーニーズは爆破の術師さんとナモナシさん回収してました」ポ  
タツポタツ

「そっかあ、そろそろマルー君降ろそ? 私串刺しにされて掲げられるから、ほらめっちゃ血落ちてる、」

「いやこのまま連れて行くのかなと」

「流石にやめて…歩きたびズンズン奥まできてるから」

「あ、はい、で隊長」

「なんでしょ」

「これ」

渡されたのはレユニオンの腕章

「あ、付けろと」

「そりやそうでしょうよ隊長、私達の隊長はあなたですから」

「えーでもグツ君がいればよかでし」「自分ずっと副隊長として指示出してましたんで、と言うか指示出していないので」「いや指示とか出さなくていいのが楽な部隊だけどき、ええ、……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「はあい！隊長ご案なあーい！」

「魚焼きましようよ」

「お腹減りましたしねえ」

「ふおうでん……………そうですね、焼きおにぎり…作ってみますか」

「おでんの残りもあるんであっためましよう」

「肉が足りない……………主人肉下さい」

「お前元々草食じゃ……………まあ焼くけど」

『（あいつらこんな場所で何やってんだ……………腹減ってきた）』

現在地 龍門近衛局ビル

数時間後

「……………なんか俺たち毎回こんな場所とかで飯食べてるよな」

「美味いからしよがない、あと責任はCになすりつければいい」

「私の目の前でそんな事言います？コアうめえ……………」

「甘い物はいいですよね……………隊長、通信、ですよ……………少し離して聞いた方がいいかもです」

「あ、はーへシエーヴル？居るのか？…あ、その声はスーさん」

「へ元気そうで何よりだ、で、何か言う事は？」

「……………ココア美味しいですよね」

「へ…すうー……………バツカかあ!!お前は!いきなり!何故!そんな事する!毎回毎回毎回!!今回の作戦始まってすぐに、抜けた?なんだお前口に撃ち込むぞなんだ?疲れさせないとお前はいつも通り動けないのか?お前?お前お前!!お前えええ!!」

「うつわあ!生の声が真横から聞こえた、びつくりした、スーさん来たんすか」

「ああ、ああアネモスに運ばれてな、なあおい、ちよつと前出る、殴る」  
ガシツ

「首掴まれてる時点で逃げられないんですけど」

「うるさい黙れ」グツ

「ワカリマシタ、」

「行くぞ、5、4、我慢できない1だ!」ゴンツ!!

「頭じゃないですかあんた!結構グラグラする!」

「は、はは、見たか、馬鹿が」

「至近距離で見ましたよ……………扉の前誰です?レユニオンの人……………近衛局の人ですかね」

「……………また会ったな」

「…そちらに戻ったんですね」

「あー完全に忘れてた、ここ近衛局のビルじゃんそらくるわ」

「完全に怒りで我を失っていた…これも全てCのせいという事にしておこう」

「何も聞かなかった事にしておこう」

「……………全員ここで拘束、抵抗するなら排除する」

「拘束って言う優しさをを見せてくれる……………いいねえ拘束され「させないからな?」上司命令って怖い……………」

「隊長、知ってます?隊長を連れ戻すの幹部三人ぐらいから命令されたからなんですよ」

「え、何それこわい」

「やはり…気が抜けるな…」

「おい、本当にやる気出なくなるからそろそろ止めろ」

「え、私いつつも普通に行動してるだけ…私からこの性格とつたら何残るって言うんだ!!」

「闘争本能」

「三代欲求」

「不死」

「身体」

「結構残ってるわ、なら無くなっても安心」ヒュン

「(カンツ)……唐突に斧投げてきましたね、しかも全然狙ってない」

「まだまだアルヨ??」ズラア…

「どうやって持つてるんでしよう…」

「そこは今気にする所ではない……来るぞ!」

「せーい」ヒュ…ヒュヒュン!

カンツ、ガガツン!!

「あつそーれ」ヒュン、ヒュヒュヒュンヒュン

カンツ、カカ、カンツカンツ

「遊んでますね?」

「その通りです」

「真面目にやれ」ヒュン

ゴンツ

「持ち手部分痛いわ……なんかめっちゃ嫌な予感する」

「どうしました?隊長」

「なんか嫌な予感がし…」

エエエエエヴウウウヴルウウウ!!」ガツバア!

「ああ! シュヴローさんが!」

「飛びやがった! 下のやつが受け止めてくれるだろ多分」

くセイヤアアア (バァン)

くイツタアア!!

「…………大丈夫みたいです」

「あれは…なんだ!？」

「ロドスじゃない?」

「あんなものまであるのか…」

「製薬会社とは…?」

「考えたら終わり」

## 24話

「スーさんどうします?」モグ

「どうするか…とりあえず食べるの止める」

「そうです、食べるのやめましょう」

「毎回なんか食べてないか…?」

「いやほら、腹が減っては戦はできぬって言うし…」

「だからってこんな所で食べるか?」

「いやいやドクター君よ、こういう場所でこそリラックスして（パクツ）……………（ゴクツ）やらないとすぐやられますからリラックス大事」

「は、はあ…?」

「ごちそうさまでした…よし、どします?人数的には……………少しこつち勝ってるかもですけど、見て下さいよあつちのあの人がバリツバリに戦闘向け!って感じのフェリーンの人居ますよ、強そう（小並）強い（確信）あとロドスの人達やら近衛局のお二人様だとか、何これここは処刑場ですか? 処刑場に立つのこれで3回目なんだけど」

「いや前の2回何があつてそうだった、だが…どうするか」

「1 逃げる 2 雑談 3 逃走 の三つの選択肢がありますよ  
隊長とスーさん」

「うーん、じゃあここはA とりあえず会議で、はい円作りましょ」

「敵の目の前でする事じゃないなこれ…」（でも円に入る）

「……………あれ敵の前って事忘れてないか?」

「いえチェン長官、あれ多分分かってやっていますよ」

「馬鹿なのか?」

「多分あのCって奴が一番馬鹿だ」

「そうそう!それがシェーヴルなんだよ!」

「敵対してるんだよね?」

### ——円陣会議——

「えー議題はこれからどうするかです、進行は私グリーンズが進めま

す」

「記録のマジャレです」

「いや今それ聞いている時間はない、そもそもどうして敵に背向けてこんな会議してるんだ？」

「そのの会議にスーさんも入ってきてるんですよ、さて、私は逃げる方に一票」

「隊長、その理由は？」

「相手が強そうだから（IQ低下中）」

「なるほどありがとうございました」

「待て待て待て、撤退するにしてもどうする、出入口は塞がれている、周りからも多分見られているだろ、しかも何人かは普通の兵だ、攻略するのは難しいぞ」

「それは私達とか普通じゃないって言ってるみたいですねスーさん」

「その通りだろ」

「酷い……」

「そんな人だったなんて……ファン辞めます」

「そんな事よりおうどん食べた「へいお待ち」ありがとうございます  
ズルズル

「あ、マジャレさんいいな、私もお願いします」

「ハイヨロコンデー」

「……………またなんか食べてないかあれ」

「食べてますね、うどんですか美味しいですよね」

「深夜に食べるカップ麺もなかなか美味いぞ」

「ドクター？帰ったらお話しがあります」

「あ、（絶望）」

〈あの、チェン殿〉

「どうした？」

へいえ、鳥……みたいなものが何か持って飛んできたと思ったら餃子が入っていて……『お疲れ様です、これおすそ分けです皆で食べて下さい、byとある一般兵より』と言う手紙が……これはどうしたら？〈

「…………とりあえず保管して後から食べる、今は何が起こるか分からない」

「わ、分かりました!」

「……………」

「餃子…いいですね」

「あ、会議終わったみたいです」

「すみません、お待たせしました……………よしというわけで」構え

「戦闘か…」

「——全体!回れ右!」

「二ハッ!」

そう言うと共に、Cはスカルシユレッダーを抱え、その他の何人かもレユニオン兵を脇に抱えると…………

「よーし!走れええええ!!」ダダダ——バツ!

「——そっちは空ですよ!」

「よいしょおおお!!」バツ

「スリリングですねー」バツ

「正直やめてほしかった」

「飛び降りた—!?馬鹿なのか本当に!」

「いや僕達もさつき少し飛んだんだけどね」

「おいこれ!この次どうするんだ!」

「考えてるわけないじゃないですかやだなー」

「——はあ!」

「おいおい」

「死にましたよ私たち」

「うどん美味しかったですね」

「アハハハ!!どうにでもなれ!」(壊れ)

「うーん……………あ、そうだ」バキツ……………メキメキ…………

「いきなり下から痛そうな音聞こえるんですけどどうなってます?」

「うーん正直見たくないです」



「シエーヴル!?なんだその姿!」

ぼすっ……ドオオン……

「お?なんか地面に……いやこれなんです」

「いや…隊長じゃありません?」

「おめでどう! シエーヴルは 進化した!」

「……ハッ、シエーヴル!?いやお前、いや、は?」

全員が困惑している理由、それは突然何かCがいる地点から痛々しい音がなっていると思えば、気づけば巨大な首の無い生物の背であり、困惑しないわけがない

「いやー隊長ってほんと不思議な人ですねー」

『ちよつと毛玉の身体借りただけだから……クツソ辛い、ちゃんと掴まっつといてー飛ばすよー』ザリッ…ドンッ!

「こいつ……頭に直接!、って毛玉の身体?いや、毛玉の身体って……あのふわふわの球体じゃ無いのか?うわつと、」

『あの姿は首に少し細工してあの姿にしたらしい、本体はこっち』

「……あれ首だったのか」

「身体的に………狼?」

『一応元はただの猟犬だったってよ、色々あって人食って食ってこんな身体なつたらしいけど』

「えー…結構深そうな話…いつか聞きます」

『慎重に検討して検討を重ね議論してから話す事にする、これからどうしますかねー』

「とりあえず撤退だ、すでにあのビル近くの奴は自分達以外お前の手鏡を使って撤退したらしい、………」  
「回きりなのが難点だな」

『そこら辺は許してください………めっちゃ疲れるんです』

「ああ分かっている」

『ここまでくれば(ゴキユ…バキバキ!!)安心っすね』

「その痛々しい音どうにか…なりませんよねはい」

「さて……これからどうなると思う?」

「えー…多分今正直言えば多分レユニオン側劣勢やろね、いや私達が働いてないって部分もあるけど、ロドスと近衛局の二つに色々多分動き出すであろう龍門の上の方の方々、うーん辛い、でもあんまりやり合いたくないのよねえ…」

「お前の所は何してるんだ？全然姿見ないが…」

「え、怪我人の救助やら戦場偵察やらなんやらなんやら…」

「……………戦闘は？」

「各自判断、えーと……………12名戦闘中」

「どうやって知ってるんだ……………」

「そりやもう龍門中に私の紙飛ばしてますから結構なんでも見えますとも」

「……………ずつとか？」

「二日前から少しずつ飛ばして見てますはい」

「二日……………前……………から？」

「道はバツチリ、迷うけど」

「……………その真剣さを普段から出してくれ」

「そんな事したら私倒れますよ」

「それもそうだな」（洗脳済み）

数時間後

「がこんな状況でございます、凄いなボロボロですねアハハ」

「それが思いつきり蹴飛ばした後に言う事？なかなか酷いな」

「あんな状態だったんで蹴りました（グツ）」

「た、助かったC」

「はいはい（シユ）はい走って！GOGO！」ガンツ

「お前は!？」

「とりあえず足止めしとくーほらハリーハリー！」

「……………頼む！」

「うーん熱いねえ、こんな信頼されて……………明日体調崩しそう」

「……………さっきの人？」

「うーん？あ、さつき将棋してた近衛局の人じゃないですかさつきぶ

りです、あと蹴つてすいませんしたフェリーンの人」土下座

「来て早々何やってるんだ？」

「ドクター君じゃないか、あれ、他にもいっばい……結構ピンチ？  
……アーミヤさん大変そうですね」

「会うなり抱き上げないで下さい！」

「ああもうどうしてこんな……こんな柔らかいの!?まさか……！」

「ドクター君あの光景見てどうよ」

「……楽しそうだな」

「そうっすねえ……じゃ私行く所あるから……その人達めっちゃなんか睨んでくるんだけどなに？」

「は？、ああグレーススロットか……色々あつてな」

「感染者と関係悪い系の人か……後ろの男の人は？」

「男？いやあつちにはグレーススロット1人だけだぞ？」

「え？」

「え？」

「………とりあえず特徴を聞こうか」

「あっはい」

説明中暫くお待ち下さい

「……なるほど、後ほど調べてみるか」

「そうしてください……じゃ逃げる」

「あ、待て！」

「だが断るまた会いましょう」

「………なんなのあれ？」

「レユニオン幹部（未定）色々謎なシェーヴルです、今のロドスと近衛局の溝が浅いのも、多分あれが関係していると思います」

「あれが……あんなので幹部が務まるような所なんだね、あつちは  
「いえあの人が異常なだけです」

## 25話

「うわー見て下さいよマルーさんと副隊長、ボウガンが全部こっち向いてますよーヤバいですね☆」

「グーニーズ、マジヤレさんキャラなんか違ってないそれかかぶってない?」

「気にしたら負けですよマルー、こんな時の返しは確か……あれなんでしたっけね」

「最近物忘れ激しくなってきましたよね……」

「隊長も酷いですが……これが副隊長になった定めですかね」

「いずれ思考回路も全て似てきますよ」

「え、それは怖い……初めて先輩より怖い物に出会いました」

「なんでこんな状況で雑談できるんだ?」

「えー日常茶飯事でしたし……」

「現実逃避ですし……」

「上に同じく……」

「ああ……そうかよ……」

今この場所では近衛局とレユニオンの睨み合いが数分続いていた……

「睨み合いってどんな意味でしたっけ」

「えーと……おい!近衛局の人く!!どんな意味でしたっけ!!」

「……なんの話なの?」

「……知ってると思うか?」

「まあそうよね……」

「……なあ!なんの話だー!!」

「え、聞くの?」

「……こつちも色々可笑しくなったな」(遠い目)

「そういえば聞こえてないじゃないですか、そりや分かりませんよ」

「実は——って事なんですけど!!」

「それはー!!……って意味だったかとー!!」

「ありがとうございますいまーす!!って事みたいですね」

「なるほど…この状況にあってます?」

「多分…ん?なんか来てませんか?」

「皆さん!!ここに居たんですかー!!探しましたよー!!」

「2人で迷子になってました、すみません」

「グーさん、キーさん来たんですか、さつきぶりです」

「ここに来ちやっतんですか、前見てみてください」

「え?…ボウガンが沢山こっち向いてますね、……あれって言う事は結構ここは大変な場所ですか?」

「どこも大変な状況なので、まあ些細な事でしょうこのぐらいは」

「すみません…騒いでしまつて」

「大丈夫ですよ、落ち着いていきましようほらあっち見て下さい右から十二番目ぐらいの人、ボウガンにビールのストラップしてます」

「あ、本当だ」

「おい、仕事中それ外せつて言われてただろ、怒られるぞ」(小声)

「だ、だつてストラップでもお酒見てないと手が震えて狙えないの…」

(小声)

「禁酒しろつて言われてたろ…」

「私に死ねつて言うの!?!」バツ

「そうは言つてないだろうが!?!」バツ

「ちよつと!、どうしたの!?!」

「ワタシカラオサケトツタラツタラ、ワタシ…ワタシ!!」

「くイマシゴトチュウダロウ!、シカモカナリノキンキュウジタイ!ス

コシオチツケ!

「くタイレツヲミダスナ!

「なんか騒ぎ始めたな…」

「次ですよ、早く」

「こっちはこっちでジエンガしてますけど（ガシャン!）」

「今押したな! 誰だ!」

「俺違う!」

「俺も違う!」

「俺は…違うの反対の反対だ」

「…………お前じゃねえか」

「うわバレた逃げるんだよ!!」

「待てゴルア!」

「ハア…ハア…ちよつと飲んでくる!」ダツ!

「いや待って! 今仕事! 仕事無くすぞ!」

「一体何があったって言うのよ貴方達!!」

「こんな緩い感じがいいんですかね」

「なつちやったからしようがないじゃないですか」

「それもそうですね、ジエンガもつかいしましよ」

戦えよお前ら

「心の声漏れてるぞ」

「ん? 何言ってるの?」

「いや…なんでもない」

「そう? それより、そろそろ終わるみたい」

「頼む…ドロー!! ……よっし! よし! これで…おわりだあああああ  
!!」

「な、に…グアアアア!!」ライフ0

「スゲエ…!! あの近衛局の奴…勝ちやがった! あの状況から勝ちや  
がったぞ!…うちで一番強い奴だったのに!」

「やるじゃねえか…まさかこんな強いのが居たとはな、完敗だよ、約  
束通り俺達は降伏する、煮るなり焼くなり好きにすればいい」

「いや、あれは運が無ければ勝てなかったよ……いいバトルだった……  
もう一戦、やらないか?」

「……勝者からのお誘いだ、やるしかねえよなあ!」

「「うおおおおお!!!」」

「……楽しそうだね!……ドクター?」

「……はっ!な、なんだ?、別に参加しようとか思っていない、思っていないぞ?ああ、「ゴソゴソ……」

「… Aceも最近やってみただけど、面白いの?」

そうブレイズが言った途端

グルッ

全員がブレイズの方を向いた

「え、怖」 一歩下り

「……少し一緒に来てもらおうか」

「え?」

「その間に……これ」

「……これって?」

「スターターデッキ」

「なんで持ってるの!」

場所が変わって

「Z z……」

「寝てる……?」

「どうした?……こいつはチエルノボーグで会った……シエーヴルじゃないか」

「この呑気な人が?」

「そうだ、もしあの場にこの呑気な奴が居なかったら俺はここに居ない」

「……え?」

「レユニオンのリーダー……それを抑えて俺達を逃した奴が、こいつだ」

「この人はレユニオンの感染者では?」

「その時はまだ入ってなかったからな、それともしドクターが選択を違うものにしていたら、今一緒に働いていたかもしれない、居たら愉

快な事になりそうだな、そう思わないか？」

「……気づかれていますか？はー歴戦って凄いな」

「いつから？」

「入ってきた時からだ」

「最初つからバレてますね、はい……」

「騙す気も無かっただろ」

「ソナナコトナイヨー、ワタシイツモゼンリヨクネー」

「なんだその喋り方……」

「まあいいじゃないですかえーと……マツチヨメンとグ、グ……グレートさん」

「違う」

「マツチヨメンってなんだ……」

「筋肉モリモリマツチヨの……」「それ以上は言わせないぞ？」あつハイ、まあおんびりしていつてくれ、すまんが茶も干し肉も無いが」

「……できるわけないでしょ」

「えー私争う気は無いですよ、ほら（ガシャン！）」

「銃落ちたぞ」ヒョイ

「あ、ありがとうございます、」

「いや渡したらダメでは？」

「争う気は無いと言っているんだ、なら安心だ」

「……ハア……」

「ため息吐くと幸せ逃げますよ」

「……煽ってるの？」

「いいえ……んお？ちよいとそのボウガンみせてもらっても？」

「……何故？」

「ちよつと気になる所が……いや強制では無いし私を信用出来ないなら大丈夫ですけど」

「……渡してみたらどうだ？」

「Aceさん……分かりました、変な事はしないで下さい」

「しませんよ」バラツ

一瞬で全てバラバラにされた



「……元に戻せよ？フリーズしてるぞ」  
「もちろんです、ちよつと威力強まったりはするかもだけど」  
「…すまん通信だ」  
「黙つときますよ」  
「こちらAceどうした？」  
「A、Ace？ちよつと助けて」  
「ブレイズか？状況を説明しろ」  
「最近やってたカードゲームあるよね？あれの事なんだけど…ドクター達にずつと熱弁されてて…」  
「あれはいい物だ、後でスターターデッキを用意する」  
「もう貰ったよ！」  
「そうか、楽しむといい」  
「え、待ってよ、切るつもり？Ace？A——プツツ」  
「なんの話で？」  
「あれはいい物だ、今日はデッキ持ってきてはいないが…ドクターが何気に強くてな、良いデュエルだった」  
「あつち何あつてるの？大会でもしてるん？購買になんとかなくカードパックとか置いてたら…まさかここまで広がるとは」  
「そつちでもやっているのか？よいデュエリストが居るか？」  
「レユニオン全体の6割がハマってますよ…私はしてないけど」  
「…………これを」  
「スターターデッキじゃナイデスカヤダー！！持ってきていないって言うってたやんあんた！」  
「ああ、俺のいつも使っているデッキは持ってきていないな予備デッキはあるさあ…………デュエルを始めよう」  
「ルール知らないんですけど…」  
「教えるから大丈夫だ、教えるのは得意だぞ？」  
「いかにもな見た目してますからね」  
「…………はつきり言われると少し傷つくな」  
「案外ガラスのハート…ごめんなさい」

数時間後

「……ハッ、ここは、確か私はいきなりボウガンを破壊されて……え？」

「この時……こうですかい？」

「そうだ、そしてこの時これをやれば特殊効果が——」

「ほうほう……難しいねえ爺にはなんの事だか」

「俺よりは歳下だろう？」

「軽く100歳越えって言ったらどうです？」

「はっはっは、冗談だろ？……いや本当か？……本当か（確信）」

「多分本当なんですよAceさん……こんなだから間違われたりするけど……あれ？グレートさん起きました？おはよう、ボウガンはそこに置いてあるから、自分で確認しておいて下さい、」

「いや、何やってるの？」

「ニデュエル」

「を教えてもらってます」

「グレースロットもやるか？」 チラッ

「いえ結構です」

「そうか……」

「……やっぱりお願いします」

「…!!そうか！」

その後密かにハマったグレースロットはロドス内でかなりの強者になった（後日談）

## 26話

「眠い、めっちゃ眠い」

「この状況でそれ言うか普通、いや普通じゃ無かったな」

「めっちゃ眠くない？私だけ？そこん所どうです黒い人達」

「……………」

とある地区、そこには黒い雨衣を着た集団に囲まれた、レユニオンの集団がいた、既に何人かのレユニオン兵は倒れており、その倒れた場所には赤い血溜まりができていた

「無視ですか…さて逃げますか」

「やっぱりそうなるのか…で案はあるのか？囲まれてるが」

「ヲ？何人かやられてるのに冷静っすね、すつごーい！」（小並）

「なんか違和感あるな…：…どんな状況でも冷静に行動、これ生き残る為に必要な、と本で読んだ、だから俺は落ち着いて行動する…：…まだ生きていたいからな」

「生に食欲…：…いいっすねえ生きる事には全力かけなきや、よーし！私やる気出しますすよー」

「……………」

「今本当かよって思ったでしょう」

「何故バレたし」

「目見たら…：…じゃそこで倒れてる人抱えてダツシユ、あっちの方ギャン行つてギャン行つたら多分合流できると思う」

「分かった(？)、だが追いつかれるだろ足止めはお前が？できるのか？」

「大丈夫！守るのは苦手だけど場を乱すのは大得意！」

「たしかに得意そうだ、さてどんな事をして場(ゴツシユ!!)…：意外に荒い戦い方なんだな」

瞬きをし、次にレユニオンの兵が目を開ければ、いつ近づいたのか黒い集団の一人の顔面を掴みそのまま地面に叩きつけているCの姿だった

「ハイパース!!ちゃんと黒の仲間さん受け取って!!」ガシツ、ポイツ!!

「!……」ゴスッ

「はい担いでダツシユダツシユ、」

「分かった!」

「あー!!後落ち着いたらでいいから倒れてる人に『本当に死んでるか』か聞いてみてねー!!」

「……??わ、分かったあ!!任せたぞー!!」ダツダツ……

「……予想外の反撃、目の前の目標を最優先目標とし、排除する」

「えー何その機械的な……ああそういえばスラム街に人は居た?他の班の人に聞いてみて下さいよ、一応あそこの人達は皆働き場所やらなんやらでいなくなったはずだけど……話する気は無いんですね」

全身に突き刺さる様々な凶器、が攻撃されている男は

「うーん……全身グツサリ、そのまま切り飛ばそうとした人も居るんすか……コワアイ殺意高すぎない?もうちょっと緩め——あ、待つて待つて無理矢理やろうとしないで腕取れるから」グツグツ

ごく普通に話してるところか全く敵意を向けていなかった

「あーあれだねこの状況あの終盤らへんのあの……あれ、黒、なんちゃら危機一髪みたいなの……刺して飛び出たらダメみたいなのオモチャあれみたいだね、首飛ばした方がいい?ポーンって」

「(……よく喋るな)」

「さて、一応ちゃんとやりますか、全員集まった事だし」

そう言うとき次には目の前の男は消えており、周りには他の場所にはいたはずの黒い集団が全て集まっており、そして自分達の身体は全くと言っていいほどピクリとも動かず、次第に視界が闇に閉ざされ、完全な黒の世界に、ただ声のみが聞こえていた。

「……」

「さてさて、集めたはいいもの……何しようか、あんまりひどい事はしたく無いのよねー……都市伝説とか怪談ツアーでもしてもらおうか、はい!ルーレット開始ー!」

これから長い夢が始まる

「ふう……疲れた…戦闘以外でこんな疲れるかなあ？」

「なんだか…すまなかつたブレイズ、熱くなつてしまった」

「まあいいよいいよ！さ、そろそろアーミヤ達の所に戻ろうか！……ん？通信機なつてるみたい……」

『聞こえますか？ドクター』

「…聞こえてる、どうした？」

「アーミヤ？私も居るんだけど？」

『今別で動いていたACE達からとある情報が伝えられましたその内容と言うのが、今回の襲撃での死者は決して死んでいないと言う…』

「死者が…死んで居ない？どういう事なんだ…？」

『それが、先程Cと接触し、デュエルの解説をしている際に情報を提供されたそうで……意味が分からなかったのですがその後に争いが起きていた地域での明らかに心臓部を貫かれているレユニオンの兵士に近づき、『本当に死んでいるのか』と言つたところ……』

「言つたところ…？」

『……何か身体に文字が浮かび消えた瞬間、心臓部にあつた傷は消え、眠っている状態で横たわつていたそうです、その付近にいた全ての人が完全の無傷、眠つていて武器に付いていた血なども全て何も無かつた、というような綺麗さだった、と報告を受けています』

「……今回の襲撃での死者は、0、確かに戦闘をしていない場所もあるが、その他の場所の戦闘地域では、誰も、死んで居ない……Cのアーツ…なのか？」

『そう…なのかもしれません、ですがおそらくこれは、龍門全体にこの現象が起きている、と思われれます、ACEによれば立ち去る最後に『今回の事件で亡くなる人は居ないよ多分、本当に殺したかつたらちゃんと相手見ないと、当たり前判定分からないから』と言つていたそうです…後クツキーが先程届けられました、こちらに戻つてきた際食べましょうドクター』

「ああ……ちよつと頭痛くなつてきた」

『分かります、もう考えるの放棄した方が得策かとドクター』

「……そうだな、また何かあったら……ふう……なんなんだろうかアイツ」

「考えたら負けなんじゃ無いかなあ……さて、行こっか！クツキーが待っている！」

「本当にアーツなのか……？こんな広範囲に……（ブツブツ）」

一方その頃

「あ、隊長戦闘中だつて」

「え？本当？あ、本当だ赤ランプついてる……この装置確かその戦闘の映像見れるんだよね？」

「ええ確か、謎に高性能に作ったとかなんとかで……みてみますか」

「結構珍しいですからねみましょみましょ」 pi

『トンカラトンと言え』

『……！……』 ダツ

『トンカラトンと、言え』 ザシユ…

『——ハッ、』

『赤が好き？』

白が好き？

それとも…

青 が 好 き？

『……』 呆然

『待つて、ルーレットに入れてない奴らいるなんで居るの？』

「………見るのやめましょうか」 pi…

「何やってるんすか…隊長」

「またなんかやらかしたんですかね主人」

「………あれがお前らの隊長の戦い方なのか？嫌な戦い方だな…」

「いやそれが聞いてくださいよ、近衛局の人、まだ全然戦ってる所見た事ないんです…かなりの怪力とかあったりするの知ってるんですけどなにぶん戦闘を始めようとしなくて…」

「主人は足の速さは普通みたいですよ、クルビアから龍門まで一時間

かかったって言うてましたから」

「どれぐらい距離あるか知って言うてます?」

「……??普通では?」

「あ、ダメだこの主従壊れてる」

「失礼ですネ、蹴りますよ」

「やめて下さい」(真顔)

「蹴られた部分だけ抉られるからやめて下さいお願いします」

「なんでそんなすぐに手出すんですかあなた方は!」

「深く考えていないからです」

「駄目じゃねえか!!」

「考えるのが面倒くさい!!」

「今隊長居ませんでした?」

「居ないんじゃない?」(幻聴)

「居ませんよ」

「でも声が……まあいいです、ん?こんなここ暗かったですっけ?」

「あー……マルーさんそこ避けた方がいいかもです」

「え? (ヒュー……) グオオモツ!」ズシン……

哀れなりマルー、マルーの上に落ちてきたものは、なんと驚き巨大な犬のような生物の首だった

『ン?なんか下敷きに……おおマルーさんではないですか、重いとはどういう……いえそれよりちよつと失礼』デロオ……

「……もう少し、他に私達を運ぶ方法無かったか?」ベタア

「もう俺媚に行けねえ……」ベタツタア……

「なんか……目覚めそうだった……」

「大丈夫かお前……いや俺もだけ……」

「口からクラウンスレイヤーさん達出てきましたけど……とりあえずタオルどうぞ?」

ボフンツ!!

「しようなないじゃないですか、首だけでどう運べって………口に唾えるしかないでしょう」

「結構奥の方まであつて飲み込まれてたが?」

「この人数を運んだ私を褒めて下さい！食べないように我慢すんの大変だったんですよ！コンチクショイ！」

「……………一歩間違えば食われてたのか?!いや、過ぎた事だからいい……………助かった」

……………マルー！副隊長！今さつき謎の生物が空…なんでクラウン（以下略）さん達そんなベタバタなんです？匂いが全くしないのが謎ですけど」

「さあ…毛玉さん達何が起きたんです？」

「それは…まあ次回かそんぐらいに話すでしょ、いや書くのか？」メメ  
タア…

「次回…？何を言って、まあいいです、さつきそこに簡易シャワー作っ  
たんで浴びてきて下さい、女性用はあつちです」

「……………行ってくる」



## 27話

——龍門スラム街——

『そこで言ってやったんです、「ただの——ん？なんか別の匂いがしますね』

「…なんだ？」

『……全員集まっ…いえ、もう遅いですかね』

＜…グツ!?

＜ナツ…

「…状況を報告しろ！」

「何が起きた!?——赤ツ!?あ…

『また人数が減りましたね…はあ、なんで主は、私を同行させたのか…コレガワカラナイ、逃げますよ…命大事にデース』ボフンツ！

——？

「なん——（パクツ）なんだ!？」

＜オツ!?

＜ナンツ!?

＜クギユ!?

「いきなりなんなんだ…この生温かい…」

——あ、あんまり動くな下さい飲む可能性ありますかね〜

「こいつ…脳に直接…!?つてもしかして口の中か!？」

——よくお分かりで、飛びます、ご注意下さい…アツヨダレガ

「…なんだ？、このベトベト、涎か！」

——『とまあこんな感じで逃げてきました』

「えーと…クラウンスレイヤーさん達…ドンマイです」

「なんで予備の服が…アイツの仕業か」

「ええ隊長です、では早速で申し訳ないですが撤退していきますか、このままだとここにも近衛局の人達やらなんやらで危ないでしょう、隊長からの指示もありますからね、撤退準備！」

『ワツカリマシター』

場所が変わって時間も少し進みとある場所

「え、あそこでそんな楽しそうな事してたの？参加したかったわあ穴掘り」

「いやあ結構楽しかったぞ？ロドスの方もかなりスタミナある奴らでな、案外早く掘り終わったんだよ」

「いいなあ、飲む機会あったら私も酒持って行こうかな、ウオツカはいいものだ」

「…いきなり合流したと思えば雑談か、状況報告は？C」

「あ、申し訳ねえフーさん、とりあえず脱出経路はちゃんと確保できますよー避難も今一応誘導にうちの人らつけてますけどじきに終わるでしょう、でレユニオンのチームの人達も撤収し始めてますとも、あれ今回私ぜんっぜん戦ってないなあ…まあクビになるだけだからいいか」

「…本当にお前関わった所では血が流れないな」

「いやほら、私達の所は自由にやれて言われてるから、ね？」

「その結果が途中での脱退、その他行為だと？」

「あの報告きた瞬間姐さんの周りの温度一気に下がったんだぜ…？」

「いやあ！あれは人を助ける為で…あ…りまし…て」ガチツ…

「反省しろ」

「綺麗に凍ってるな…」ツンツ……ピシッ

『あ、』

雪怪の一人が少し…指先で凍ったCを突くと、ヒビが入ってしまった

「ペトロワアア!?何やってんだよ!」

「いや！ヤング！普通こんな簡単にヒビ入るとか分かんないだろ!」

「お、落ち着け、まだヒビは小さい、完全にはまだ割れてい(ピシッ…ピシッ…)

…な…い…」

「…そうだ、姐さん！もう一回！もう一回凍らせたら!」

「そ、そうだな、やって「なんだこの像？Cに似てる…な？」あ、…ス

カルシユレッダー！それに触れるな！」

「え？なんだ？」パシツ……………」

ピシツ……………ガラ…ガラガラ

「砕けた…」

「バラバラに…」

「……………もしかしてだがこれ、本物だったのか？」

全員が頷く

「……………すまなかった」

「いや…私もアーツの加減を間違えてしまった、……………とりあえずパーツを集めるぞ」

「見事に凍ってるな…水取ってくれくつつける」

スカルシユレッダー&雪怪小隊修復中

「ふうっ……………凍らされるとき、意識あるのに動けなくてさ、バラバラになったらさ、再生に時間かかるし、視点が色々おかしくなるんだ」  
(遠い目)

『すまなかった…』

「いやいいつすよ…久しぶりに凍りましたけど…さてっ、ちよつとご飯でも食べますか、まあソーセージとかしかないけど」

「切り替え早いな…あーなんか飲みたくなってくるな」

「仕事中は飲酒禁止でしょう？」

「…美味しいのか？酒って」

「スーさん飲んだ事ないんか、美味しい…実は私あんまり味は分からないんだよ、違いは分かったり人と結構飲むけど」

「そうなのか…ウオツカはいいぞ？身体が温まるからな」

「ウオツカ…Cが飲んで身体から火を噴き出したあの？」

「あー、そうだな、医療用のアルコールより度数が高いからなよく燃えるなんだよ」

「かなり酔いそうだな…」

「慣れてないと喉を焼く痛みを味わうぞ、…Cはあまり酔わなそうだな」

「そうなんですよ、フーさん私この身体なつてから酒飲めるように

なったのはいいけど酔えないんですよ、前に極東の宴会で3年間飲み続けたけど酔えなかったんすよ」

「桁がおかしくないか？3年間って？」

「……本で同じような事を見た気がする『三年花見の乾杯』だったか：確かオニだったり様々な種族が集まって三年間も花見をしたと言う話：本当だったのか……つまりあれに出てくる『笑い面の山羊』はお前か」

「待つてその話知らない、何笑い面の山羊ってそもそも桜散るまで飲むって話で飲んでたら一年たった後の桜見て『散ってないからまだ飲めるぞ！』って誰かが言ったからあんな長くなっただけなのに：楽しかったけど」

「長生きしてるとそんな事もあるんだな：長生きはしてみるものか」

「長生き大事つすよ、私みたいなのでも本になるんですから」

「……（パクツ）……！！」グツ

「あ、フーさんが無意識に飴舐めて辛さに悶絶してる」

「……平和だなあ、」

「一応戦場なんだけどなあ、帰ったら畑の手伝いしないと……」

「お、それ俺も行つていいか？農業をちゃんと学んでみたくてな……」

「なら私より畑管理してる院長に聞いたらいい、口悪いけど」

「そっちの方が気が楽だなあ……」

「そういえばさあ、フーさん」

「ふう………なんだ？」

「確か次ロドス会えばと戦闘だつて？」

「……ああ」

「そう、なら賭けでもするか、どっち賭ける？」

「………俺は姐さんにジャガイモ三つ」

「俺も姐さんにおかず賭ける」

「………あつちに100だ」

「じゃ、私もロドスに500」

「………はあ、そんな簡単に賭けてくれるな、こちらにも準備がある」  
「存分にやつて下さい、こっちは私がなんかやっときますから」

「頼むぞC…ほんとに凍るからな」

「大丈夫つすよ、私達は周りの人をやっときましようか、ほら黒と白の対決って…良くない?」

「他の人を退屈させないように…か…ハハッ!サービス精神が凄いな姐さん含めた幹部三人がおもてなしか!」

「はああ…まあいい、Cごと爆破してやるか、で?あっちのウサギは勝てるのか?かなり無理そうだが?」

「フーさんには同胞達も居ますし、まあ奇跡か対策するか…:…:んんか足音が変つすね」

「変?」

「…:…ふはっアハハッアハハハハ!!!ふ…アツハハハ!!!」ガクツ

「———どうした!?何があった!いきなり崩れ落ちながら何故そんな笑っている!」

「いやっ、シュヴロー、だ、絶対そ、アハハハハ!!!」バン!バン!!

「だからどうしたんだ!?説(ザリツ…)——来…た、…:…:」

「…:…:」

「「…:…:」」

『…:…:…:』

時が、止まった

「アハッ…キツハは…ふうー…はあ、ー…久しぶりの登場のシュヴローさん」

「なんだいつ?久しぶりのシュヴローだよ?」

「あのロドスのコート(?)を来たウサギの着ぐるみは?」

「アーミヤ社長だよ?」

「なぜ?」

「あの白い人に対抗する為だよっ!凄いでしょ!」

今、フロストノヴァ達の前に現れたのはロドスのドクター、ロドスのコートを着たウサギの着ぐるみ、チェーンソーを持ったフェリー、クロスボウ持った灰色少女、その他部隊の方々…:…:ウサギの着ぐるみ(二回目)

「…:…:夢を見ているのか?」

「いや、残念ながら現実のようだフロストノヴァ、」

「……………あれが……………あの時の？……………だいぶ変わったな？」

「……………大丈夫か？アーミヤ」

「……………ドクター、ごめんなさい、もう駄目かもしれません」ズーン：

「……………ごめんね、止められなくって」

「……………」

「何も言うな、……………何も言うなグレースロート」

「……………なんでこうなったんだ？C？」

「いやー私にもさっぱり、うん、本当に」

「僕の技術を舐めないでほしいな！戦場にも可愛さが必要でしょ！」

『……………そう……だなあ（ですね）……………』

果たしてこんな事して怒られないのか？そんな事を思いながら次回に続く、え？若干メタ？ウオツカ投げつけ「やめろお前」

## 28話

フロストノヴァ達に会う数時間前ロドス、新しく入ったシュヴロー  
…初対面でかなり印象を与えてきた奴と共に進んでいた。

「あの、シュヴロー…さん?」 「動かないで」 あ、はい…」

いや立ち止まってるかもしれない、今アーミヤの周りを二つの小さなドローンがふよふよと浮かびながら光を発しながらグルグルとしておりその前でシュヴローは空中にある青い画面に何かを打ち込んでいた

「あんまり動くとデータがうまく取れないから、ラボを持って来られればいいのに…あのアツタマ硬い人がさ! 酷いよね! ちよつとしたコンテナなのに駄目って! お陰で即席で測って遠隔で制作だよ! バーカー! バーカー!」

「…… (ですから何故こんな事を…流れてくるものも全く分からないものだらけです…)」

「何やってるのかって顔だね? 大丈夫だよ! 悪いようにはならないさぐへへ」

「…説明お願いできるか?」

「!ドクター!」

「あ、おつかえりく…あ、そういえば説明してなかったね、今社長専用の装備を作っているのさあ! この腕見たいなね」 ガシャガシャ

そう言いながら片方の腕にいつも装着してある腕を動かした

「…何故今それを?」

「うーん、もしさ、もしだよ? あの時あったあの白いウサギさんとまた会って、戦うとするよ? 勝てる?」

「……………」

白いウサギ…フロストノヴァの事だろう、あの場で対峙した際に身に受けたアーツを思い出す

「僕は無理だね、0だよ0、あんなアーツ受けたらすぐに氷像になっちゃう、そこでだよ! 少しでも勝算を上げる為! 僕は今社長の為に力を貸そうと言うのさ! イヤー本当はね? 面倒だし、面倒だからやりた

くないんだよ、でも君達はね？シエールに気に入られてるから助ける！それだけでなんでもやっちゃうよね!!ね！」

「気に入られてる？私達が？」

「そうさあ？だって君達、あの逃げている時何か気になる事はなかったかな？」

「……気になる所しかない時はどうすればいい？」

「おでん……花火……沢山あります」

「あー……うー……うん……ごめんCが居るなら普通なわけ無かったよね、じゃあね……あの逃げる時なんか上手くいきすぎて無かった？さつき話聞いた時あった花火の着弾……僕の乱入」

※花火の事はただのマルーによる不幸な出来事です

「……Cが手助けした？」

「そう、多分花火もあの空を飛んだりしてる紙がなんかしたんだよ、それと僕の乱入、あれはねー……これ、」カラ……ガチャン

システムC起動します

その音声が響くと同時に空中にの矢印と円状のレーダーが映し出されておりその矢印などの端っこに小さな……

『……んお？、あ、来たんですかい？……なんか知らない人達も居ますね……まあよろしく私は……なんて言う？ただのAIなんだけど』

「……小さいC？」

『あ、あつちと会ったことあるんすね、私はCを元に作られたサポートAIでっせ、と言ってるけどお世話になってる時代のやつだから喋り方変やけどねー……で？要件は？レーダーには反応はあの時以来また微弱ですよ』

「……システムC、AI……大体何か分かった」

「ドクター……私も大体分かってしまいました……」

「い、いいじゃないか！安直な名前でも！分かりやすくして！で、でだよ？話戻すけど、グラフ出して……ありがと、でこれまでが君達に会う数日前の数値……これを見てどう思う？」

「すぐく……低いです……」

「そう、これはCが発する……説明は省くけどまあ色々して位置を特



定するんだけど…Cはどうかしてそれを抑えて僕から逃げてるんだけど…突然」ポロンッ

「数値が高くなっていますね…場所は…あの場所と一致しています！」

「そう！突然ここで数値が上がって特定できたんだ！、でも変だよね？これまで絶対姿現さねえ…って感じだったのに意図的にとしか思えないこの行動……シエーヴルは君達を気に入っているむしろ好きかもしれない！、なら君達を手助けするのは普通の事！Cの知り合いは助けるのは普通さ！も、もしかしたら褒めてくれるかもだし…」

「見えない所で助けられていたんですね…」

「気まぐれにしか助けしてくれないけどね…前だって料理してる時塩と砂糖間違えてるの教えてくれなかったもん…まあそんな話はひとまず置いといて、できたよ！Hey、カモン！」パチンッ

「…ちなみに何作ろうと？」

「ポトフ」

「……間違つてくないか？」

「甘い方が美味しいと思わない？」

「……」

「……ドツオオツゴンッ!!」

「空から降つてきた!？」

突如として空から落ちてきた物体…

「ラボから完全品を飛ばして来た！そして！これが！社長専用の装備だああああ!!」

舞い上がった土煙が晴れ…その正体が見えてくる、顔を横にし頬を地面に密着させ…周りから見ればだらけてるようにはか見えない大きなウサギのぬいぐるみ？だった。

「……え？ぬいぐるみ？」

「失敬なちゃんと装着できるから着ぐるみと言って欲しいな」

「いえ…着ぐるみ？」

「うん、社長は女の子だし、可愛さを求めてみた、どう？」

「いえ、どうと言われても…た、確かに！可愛らしいですが！」

「まあまあ！いいから！、あ、もしかして着ない時に持ち運びが大変とか？大丈夫大丈夫！ちゃんと考えてるよ！ほら社長、こんな感じに手を叩いて！」

「え、あ、はい……こう、ですか？」パンッ

……ピカッ！ガチャ……カシユカチャン……シユー……チーン！

「目が光って……普通サイズのぬいぐるみに……一体どう言う原理だ……？」

「じよ、情報量が多い……」

「さて！早く着てみてよ！ほらさあさあさあ！」

「……どうやってですか……？」

「最初だからそうだなあ……『変……身ッ!!』とか？」

「え、ええ!?!」

「………頑張れアーミヤ、」

「ドクターから謎の期待の眼差しが……!?分かりました！答えてみせませう！見ててくださいい！ドクター私の……変身をッ!!」バツ

——変……身ッ!!!

『起動を開始……認定、マスター……アーミヤ……装着………開始』

アーミヤが叫ぶとウサギは光を放ち眩い球体となりアーミヤを包み、周りには風が吹く……暫くして光が収まってゆき、その身体は現れる……

空にむかい立つ二つの耳……

真っ直ぐと前を見つめる青き双眼……

はつきりと主張するロドスのコート……

今ここに新たな戦士が立ち上がった

「………上のはなんですか？」

「アーミヤ……その事にツツコンではいけない、本当にただの着ぐるみにしか見えないな」

「ですが中は思った以上に視界が開けています、動きも……なんだかいつもより動きやすく感じます！」

そう言っって少し飛び跳ねる……

ビュン！

「……………は!?!」

ドーン……………

「……………今のはなんですか!?!」

「まだちゃんと制御できてないから…ほらハイジャンプ設定をOFFにしなきゃ」

「え、どうやっ『ハイジャンプをオフにしますか?』——はい!」

『ハイジャンプOFF、その他最適化を行います、暫くお待ち下さい』  
「凄いな…どうやってこんな技術を?」

「僕の父さん母さんは発明家でねー、家族全員でラテラーノを飛び出して自由に色々作って、そんな両親とかを小さい頃から見てやりたいようにやってたらいつの間にかこんな感じ、今じゃ自分が怖いよ」

『最適化完了しました、これからよろしくお願いします、マスターアーミヤ』

「凄い…!全く違和感がありません!本当に着ているのか信じられないです!」

『お喜び頂けて光栄です、簡単にですがここで基本スペックをお伝えします』

「…すいません、凄いはしゃいでしまいました、えっと…」

『……………レダでもお呼びください、固有名はありませんが呼び名がある方が、私を呼びやすいでしょう、ではスペックをお伝えします、このスーツは飛躍的に身体能力を向上させます、先程の跳躍は最適化の完了が間に合わずに起きてしまった事です、申し訳ありません』

「い、いえ、こちらにも興奮してしまいません…」

『…お優しいのですね…次に体温の自動調節、その他——』

「……………不思議な光景だ」

「あはは、着ぐるみワタワタしてて話し声が聞こえるんだからね、……………もしかしてドクターも欲しいのかい?」

「……………そ、そそんなわけないだろう?」

「こつち向きなよ男だからねしょうがないよ、…分かった、いいよ、でも条件がある」

「…………聞くだけ聞こう」

「シェーヴルがもしこつちに入ったら：同じ部屋にしてくれる？」

「…………もし入ったら交渉してみよう」

「約束だよ？、じゃあどんなの作ろうか！もしCが来たらびっくりするよな作ろう！」

この後、冷静になって考えるとこの姿で行くのだと、色々と手遅れな事に気づいたアーミヤ一行はもう諦めの境地にいたりあの場所へとたどり着いた。

## 29話

「あけましておめでとうございます!!(ピュン!)今年もよろしくお願  
(ビュンツ!!) いします!!」ヒュ…パシツ、ポキツ…

「当たらない…そもそもまだ年明けじゃないでしょ…」

「いやなんか言わなきゃ行けない気がして…」

「意味わかんない…」

そしてそんな事を言いながらグレースロットは自分にできるス  
ピードで矢を撃ち、Cを牽制する

パシユ…

「………」

当たった、そう確信した、が

「………消えた、ど………また負けた」

——グキツ……

「いやいや、よくやりますよ次の挑戦を待ってますとも」

「………終わったか、首を折ったか…お前にしては容赦ないな」

「スーさん達から言われたらまあ少しはやりますとも首は………ナイ  
フ跳ね飛ばされたんだからしょうがない」

「それはお前が悪い、早めにあのチェーンソー女は片付けたからなそ  
の後楽だったろ」

「いやいや…装填が早いですよあの人、狙撃は正確だから避けるの  
簡単だけど撃つのが早いんだ」

「正確だから避けやすいか…また来ると思うか?」

「そりや来るでしょう、えーつと今回で?」

「四回だな、よく心折れない、模擬的だが死を体験しているのに進んで  
くる」

「まあちよつとしたリアルな戦闘訓練みたいなの、ほらダ○ソとかみた  
いなゲームみたいなの、あとメインの戦闘はフーさんだから」

「そうか…リアル過ぎるのも嫌だな」

バンツ!

「ハア…ハア…来たよ!」

「やりますか」（夜叉の構え）

「待ってたぞ」（アリの威嚇）

「次は負けないから……」（荒ぶる鷹のポーズ）

「何してるの？」

何故こんな状況かは数時間前に遡る（説明が遅い）

ロドスと雪怪小隊、スカルシレットとCが対面しぬいぐるみの誕生秘話を聞き終わりなんやかんやあり戦闘が始まりそうになった場面まで戻る

「なんやかんやを説明しないんかこいつ」

「馬鹿お前また何言ってる」

「いや絶対説明めんどくさくなっただしよちゃんとしようぜ新年一発目だあががが」

「お前がちゃんとしろ!!」

「ウゴゴ」（氷の塊口に詰められてる）

「な、仲がいいなあつち」

「いいの……あれ」

「あ、あの、とりあえずそこまでに」ぽてぽて

アーミヤが止めに数歩前が出る

「！危ない!!」

「えっ」バサツ…バサバサツ!!

突然天井、地面から大量に白い人型の紙が剥がれるように飛び、アーミヤとフロストノヴァの全身に張り付いていく

「…なんだこれは」

「二人でゆっくり戦いあってくれ」サムズアップ

「いつ仕掛けた……」

「さっき話聞いている時に頑張った、私達の命運はフーさんにかかっている、頑張つて」

「大袈裟すぎるぞ、……真面目に戦える気がしない……!!」

そう言い残し二人の完全に紙に覆われ、少しすると紙は剥がれて全ての紙が剥がれてゆき…そこに居る筈の二人は居なくなっていた

「…何処へ連れて行った!!」

「タイムンでできる場所に飛ばしましたよ、安心して下さいあの着ぐるみがあるから、多分死にはしません多分、私を信用するな!!」

「自分で言うのそれ!?……残った私達はどうするの?」

「暇になるし、ひたすらどんな事になってるか心配しとくのも辛いでしょう?で、敵と敵が会ったんです、なら戦いましょう」

「また唐突だね……」

「お前からそんな提案とは珍しい」

「一応やっとなないとほら……怒られそう、まあ私は血を血で洗うーみたいな戦闘は好きません、ちよつとリアリティ溢れる戦闘訓練みたいなもんです、でもまあ多分何回も死ぬんで精神やられんよう注意して下さい」

「……何回も死ぬ?」

「あー……あれか」

「ルールは二対二のタッグバトル、だってこっちスーさんと私しか居ないし」

「……いつの間にかスノーデビルの奴ら居ない!」

「フーさんの戦い見に行かせました、あとドクター君も」

「いつの間に……」

「場所はここ、ここでは何回も死ぬます、まあその瞬間の痛みは無いから安心を本当に死ぬわけじゃないのデースが容赦はなしで私も今回は頑張ります、スーさんと連携できるか分からんけど」

「……なんか頭の上に緑色のバーが出てるけど」

「ああそれ私達のHPバー、削り切ればそっちの勝ちですとも」

「本当にゲームみたいな……分かったやる」

「まあフーさんの勝敗で全て決まるけど、さてさて、最初は誰です?タカイタクナイ

ハリーハリーハリー!!」

「今小声でなんか言わなかったか?しかし、久しぶりにこれやるな、毎回相手が変わるあの『ボス部屋』」

「そういえばそんな名前と呼ばれてましたね……今回は私達がボスですよ、頑張りますかスーさん」

「…………お前向こうに言っていない事あるだろあのギミック」

「HPゲージ削ったら分かるでしょ、…最初はチェーンソーさんと灰色の人ですよ、キバって行きましよう」

「俺は…弓の方だな」

「え、私チェーンソーの相手？ナイフでどうしろと？」

「知らん、素手で止めろ」

「分かった！」ダツ

「あ、おい待て!!」カチツ…

「仲間ごと撃つつもり!？」

何か話していると思えば片方がこつちに突撃して来たと思えば…次にはもう一人が発射機で飛び出したやつに向かつて…源石爆弾を発射した

カンッ!

「——避けて!!」

「ッ!!」

ドガアンッ!!

「…毎回思うがどうやって爆発させずに蹴れるんだ？」

「爆弾を自分で作ってたり解除してる爆弾の専門家が二人ぐらい居るから分かるんですよ、」カンッカンッカンッ

「一人は予想つくなあといつ弾盗んだ…蹴って遊ぶな爆発したらどうする」

「落ちる寸前の爆弾こつち蹴ってくるのか…」

「……………」パシユ!

「危ないなあ…………、スーさん今わざと避けんかったでしょ」パシツ

「腕鈍ってないか確認だ、普通にキャッチできるから問題ないな」カ  
チャ

「先生え!この相方チェンジでお願いします!」

「先生は死んだ」

「この人でなし!!」

「集中しろバカ」

「もう終わってますよ」



カチツ…

『え、』

「地雷とかの設置はバレないように計画的に」

チチチツ!!ドガアアアン!!

「…………あれ威力調整間違えてないか?」

「爆発は芸術だから(?)」

「意味分からん」

一方爆破されて散った二人

「爆破オチなんてサイテー!!…………あれ?」

「何言ってるんだブレイズ…やられたのか?突然目の前に出てきたが」

「…誘い込まれて地雷踏んだ」

「さっきの爆発音はそれか…待てグレースロットもう行くのか?」

「…………あんなの認めない、絶対に当ててやる」

「すんごい燃え上がってる…まあ悔しいよねあれ…よし行こう!」

「おう、いつてこい無理はするな」

「いつてくる!Aceも後で変わって!」

「マジかよ…」

そんなこんなで先程三回目の挑戦の際チエーンソーを片手で回転を止められ何とかナイフを跳ね飛ばし避けたと思っただらお土産と言わんばかりに爆弾を投下していき、その後先程の所までに戻るのである

「ち、ちよつと休憩、強い、アーツを使う暇も動く暇もくれないよあの二人!」

「ハア…ハア…折られるのってあんな感じなの…」

「苦戦してるな…よし次は俺が行こう、一旦休んで俺が戻って来たらまた行けばいい」

「…もしかして一人で行くんじゃないや…一人で رفتちやった」

「…………一人か?」

「Aceさんでしたっけ、タイマンをお望みで?」

「…そうしてくれると助かるな」

「スーさん」

「ああ」

「最初はグージャンケン!!ポン!!」

そんなわけで

「頑張れスーさん」ドンツ!ドンツ!カカツドンツ!!

「何だその太鼓どこから出したんだお前!!五月蠅い!!」ソイヤツ!!

「賑やかだな…」ソイヤツ!ソイヤツ!!

「うちのがすまない…本当にすまない…!!」

「あ、ああ別にいい、止めなくていいのか?」

「…少し待つててくれ、おい!法被着ようとすんな!なんか謎の三人組の幻見えるからやめろ!!」

「スーさんも着る?」

「着るか!!」

暫くお待ち下さい

「失礼、テンションが上がってしまいました」

「全く…そろそろやるか、」

「そうだな…よろしく頼む」

——こうして戦いの火蓋が切られたとき、めでたしめでたし」

「うん、中の様子報告してくれてるのは分かるんだけどめでたしめでたしは違うんじゃないかな?」

「めでたしめでたし」

「聞ってる?」

「めでたしめでたし」

「あ、駄目だ聞いてない」

「聞いてますよ」

「どつちなのかなあ!?!」

「猫さんとりあえず落ち着きなよ、でシェーヴル今どんな感じなの?」

「あともう少しで帰ってくると思うぞー、あの人強いっすねワンゲージ削ったよ」

「……………ワン…ゲージ…?」

「……ブレイズ」

「あ、おかえり？」

「……頑張れよ」

「待って！、何その不安しか生まれぬ言葉何があつたの!？」

「あの緑のゲージを削り切ると……いやここからは自分で見てくれ」

「ええ……」

「男の約束ってやつだ」

「ならしょうがないね」

「おーボロボロっすね」

「……硬かった……めっちゃ一撃が重かった……ぐおお……」

「お疲れスーさん、手当しますよ……これであつちにゲージの秘密がバレ「てないんだなこれが」な、なんだってー！、いや聞いてたから分かるけど」

「男の約束って言ったら……なんかカツコいいだろ？」

「分かる」

「やはり分かってくれたか」

「なんかこう……心の奥底にあるなにかが反応する気がする……」

「これが男心と言うやつなんだな……」

「多分そうっすよ……ほい、終わりましたよ」

「すまない、……破れた服まで直るってどういう技術なんだ本当……」

「企業秘密です、私のこの服もいくら消し炭になっても再生するから何も問題なし」

「そもそも消し炭になる事態がよく起きる事がおかしいんだよ」

「氷漬けになる事もよくあるぞ……」

「その件は本当にすまなかつた」

「いあいや、慣れてますんで」

「慣れたら駄目だろ……」

バンツ！

そして数度目の挑戦、謎ポーズをして居る場面に戻るのである  
「その構えなんなんだ？」

「夜叉の構え、そつちも何故にその構え？」

「いや：思い浮かんだのをやっただけだ」

「私もなんか思い浮かんだから：」

「意味分かんない：」

「さて、：最初っから本気で!!」

「うわなにめつちや血：熱くなつてきましたねー(○)」

「アーツか：：気引き締めていくぞ！」

「だが断る」

「なんでだよ！」

「反射で答えちやつた：」

「気が抜けるなあ：」

「：：次回まで続きます、いつになるか分かりませんが：：今年もよろしくお願いします」

「あんたも言ってるじゃまいか」

「：：：言わなきや行けない気がした、反応しないで」

### 30話

「ツラアイ…一人で二人相手って結構ツラア!?」ズルツ

第四回戦が始まり既に数時間、最初からクライマックス状態のロドス二人、二時間以上かけてなんとかスカルシュレッダーの爆弾を撃ち抜き、その後の追撃と言う賭けとも奇跡とも言える撃破をし、次にCを人数の差によりすぐ撃破…と、なればよかつたのだがスカルシュレッダーがやられた後更に手強くなりCだけで更に三時間経っていた。

「コケたツ!!今アア!!!」

「なんでそこで!コケたの!!」パシユシユ!!

「いやあ…昔から足元ちゃんと気をつけて!!歩つ!!かなきやと思ってるんですけど…ね!!」ガツ…ギヤリギヤリリリイイ!!

大事な場面でコケたCに攻撃を仕掛ける…が撃つた矢は全て身を捻って躲され、チェーンソーは足で止められる

「靴の裏硬すぎない!?かなり熱くなってる筈なのに削り斬れないよ!!」パッ

「鉄仕込んでおいてよかつたあ…うわちよつと溶けてる後でおつちやんに直してもらお」

「絶対普通の鉄じゃない…ちよつと溶けてるで済む鉄ってなに…?」

「こんな鉄」靴の裏見せ

「分からないよ…」

「実際私にも分からない…ただ時々紛争地域とか行った時気付かなくて足に刺さったりするから、ちよつとした安全靴欲しかったのに何故か軍用かそれ以上のやつ作っていきなり渡されたから…」

「あー踏み抜き防止って大事だよね…前に釘に気づかず踏んじやつて危ない思いしたから…」

「でも地雷とかだつたりしたら刺さつたりしなくてもアウトなんだけど」

「だよね!」

「アッハッハ」

「なんで意気投合してるの…」

「知らない（知らん）!!」

「ゴホツゴホツ、……なに馬鹿やってるんだ？」

「あ、おはようスーさん、……あ、第二ラウンド開始？」

「え?……あ、」

ブレイズが上を見るそこには……0になっているCのHPバー  
だった

「いつのまに!？」

「多分滑った時足捻ったからかなあ……イタタ」

「そんなので削れたの? 本当に?」

「いやいや、元々あの時結構ギリギリでしたし、よし! お二人様、よく頑張りました、さて緑のHPバーを削り切った二人には! なんと!!」

「——第二ラウンド突入だ（デース）」

その言葉と同時に空になり黒くなっていたHPゲージが赤色の  
ゲージに変わる

スカルシユレッダーは赤黒いオーラを身に纏い、Cは腰のポーチか  
ら大きな刀を取り出す……

「……………」

「スーさあん…照れたら駄目でしょうスーさんが言うって言ったんで  
すよっ…」

「いや…予想外に…なんか…な?」

「……………」 放心

「……マジ?」

「ほら、ゲームのボスってよくあるじゃないですか、第二形態それで  
す、ほら灰色の狙撃さん展開が早すぎるとかでポカーンとしないで」  
パンツ!!

「ハツ…え?……え?」

「色々決め事により鞘より刃は抜きません、殴り倒すけど」ドゴツ!!

「それもつと辛いよね?」

「実際斬るより殴る方が強いと思うの…この大太刀」素振り中

「斬る方がいいだろ…」

「そうかねえ…まあこのままでも斬ろうと思えばいけるけど」

「鞘の意味とは？」

「信じるか信じないかは…貴方次第です」

「こつち見ないで」

「灰色の人にめつき嫌われとるんよね…いや人に好かれる事も少ないけど石投げられんだけマシかあの時最終的にギロチンされたけど…」

「さらつと重い話をするな、さつきから急展開で体調不良起こすぞ」

「おつと失礼そろそろやりますか」ガツ…バコツ

地面に手を差し込み地面を剥がし壁のようにする

「……嫌な予感する」

「……………」

「それ〜」ブン…バツゴオオオツ!!

大太刀でその壁をぶつ叩き高速で破片を飛ばした、これをなんとかロドスの二人は避ける

「……………片手でそれってどんな力してるんだ？」

「いやあ、私普段は非力だから戦闘時は少しやる気出してるけど普段だと力あんまでんとよねえー無意識のリミッターみたいな」

「なんだそれ…」カチツ…ボシユン!

「会話しながら撃つてくるのやめない!」BON!!

「油断を誘えるだろう?」カチツ…ボシユン!

「油断も隙もない…!!」BON!!

「そもそも油断したらいけないと思うんです」

「お前が言うか」

「そうでした…」ダンツ!!

「はっやツ!!」ガアアンツ!!

「吹き飛ばえええええ!!」ググツ…ダツンウ!!

下から振り上げられた太刀をなんとか防いでいたブレイズだが、体が急に軽くなるのを感じた瞬間

「…………ゴフツ…」

天井に背中から叩きつけられていた

「天井に……叩きつけた……?」

「よそ見は命取りだぞ、ロドスの」カチヤ

「あ、」

BON!!

「……地面じゃなくて天井に叩きつけるとかあり!? しかもあんなの持ちながらあんなスピード……ラスボスじゃない!!」

「どうどう落ち着け、ワンゲージ削ったんだそれだけでもかなりの事だぞ?」

「そうなの……? まあそういう事にしようかな……流石にちよつと心折れそう……かな」

「え、そんな心に傷いっちゃいましたか? ごめんなさい……えーと、ご飯食べます?」

「なんだか……悪い気がしてくるな……」

「え、二人とも? なんで居るの?」

「これをどうぞ」スツ

「なにこれ……金色のメダル?」

「そう、ワンゲージ削った記念メダル、タッグ戦だったからはい灰色の人もどうぞ」

「そのさつき戦った男も、これを」

「あ、ああ……」

「いやー拠点いる時も削ったら記念メダル渡してたんすよ、初級だと銅中級だと銀上級倒したら金って感じに」

「……え、と言う事は私達がやってたのは……上級って事? でも倒してないよ……」

「上級ではないな、やっていたのは特級、敵を一回倒すとその敵が数段パワーアップして襲ってくる上級の上の難易度、パワーアップしたのも倒すとプラチナメダルが貰える、ワンゲージだけでも金だ、そして金だと食堂でおかわりを何回でもできるようになったり図書室の本を予約できたりする」

「待つて待つて、それ君達の拠点だけでしょ? めっちゃ充実してそんな拠点だけ……」



「あ、すまん…」

「と、言う事でおめでとうございます、とりあえずケーキどうぞ」  
「いつの間になつてたの？」

「えーと…数時間前から分身作って焼いてましたね」

「ハイ、ワタシブンションマツタネー」ボンツ…

「消えた…」

「ほら他の人もおいで〜？切り分けるぞー」

＜ケ、ケーキ？デモカロリーガ…

＜キニセズイコウゼ☆

＜オイシソウ…

「……………今日だけで何回食べるんだ…」

「ほら、デザートがまだでしょ？」

「太るぞ」

「この体になってから身体変わらないの…」

「…羨ましい」

「羨ましいかね…ま、食べましょか、ほらアーミヤさんとドクター君も」

「あ、ありがとう……………ごさい…ます？」

「甘い物か…」

「フーさんとその仲間達もいい」

「ありがとう、…これはなんの祝いだ？私は負けたぞ？」

「ロドスのこの二人が特級でワンゲージ削ったんで」

「……………あれをやつてたのか？私もボス役でやった方がいいかな？」

「やめて!!」

「ふふっ冗談だ」

「……………って決着ついたの!？」

「今更だな？」

「今更ですね…」

「フーさん綺麗に心臓部の所服穴空いてますね、直しときます」

「ああ、ありがとう……………甘いな」

「辛いのはつか食べてるからですよ」

「あの前に食べたマーボードウフだったか…あれをもう一度食べた  
い」

「あれは…とある炎の料理人Tの協力がないと作れないから…」

「炎の料理人T…誰だ」

「…レユニオン内で結構知ってる人多いと思う」

「分からない…」

「多分知ったら驚愕すると思う…」

「うーん…」

「まあそんな事よりケーキだれるんで食べましょ」

『呼びましたか?』

「呼んでないですよ?…食べる?」

『いただきます』

「食べれるんですか!?レダさん!」

『ええ、大抵の物はエネルギーに変換できます』

「そんなボ○ボロットみたいな機能入れちやつたのシユヴロー?」

「ボス…なんだ?」

「あ、知らないか…ちよつと作者現代っ子なのに知ってる年代古すぎ  
ん?」

「メタイやめろやめろ向こうに話しかけるな…向こうってなんだ  
?俺は何を言っている?」

「元気出してー!!…あれなんかおんなじ事を言う人が出てくるよう  
な」ズボツ!!

「むぐむぐ…ハッ俺は何を考えていた?」

『伝説について』

「伝説って?」

「ああ!…やめようなんか無限ループにハマりそうだ」

「…コントかなあれ」

「大体いつもあんな感じだ」モグモグ

「……………」モグモグ

「…タルラ!?!」

誰もいない

「どうした?」

「い、いや気のせいだった」

「それより、戦いどんな感じだったんです?」

「ああ、あの転移された後……—」

次回フロストノヴァ戦

### 31話

転移先、場所不明、青空の広がる不思議な場所にて

「……ん、着いたか不思議な感覚だったな……？子うさ……あああああ!!?」——何故上から降って来た!?

フロストノヴァが上を見上げて見れば……かなりの高さから落ちてくる着ぐるみが見えなんだがワタワタしているのが見えた、何故？

「なんで上空に!?嫌がらせですか!」

そんな叫びをアーミヤが言っている……

ピコンツ

『アーミヤ、ただ今メールが送られてきました、読み上げます』

「この状況ですか!?どうぞ!!(?)」

『送り主 C 内容 ごめん……座標間違えました、……お許し下さい

!!、以上です』

「……絶対!絶対に許しません!!」

『………パラシュートを展開します』

バサツ!!

「た、助かりました……ありがとうございますレダさん……」

『いい動画が保存できました、ふふふあの慌てようしつかりと』

「け、消して下さい!!」

『嫌です、とてもいい動画なので』

「……マスター権限を利用します!」

『………分かりました、消去します……』

「……レダさんは感情豊かですね……」

『そう見えるだけですアーミヤ、私は無機質なAIですから』

そんな会話をしながら地上に到着する

「……多分アレが何かドジったのだろう?……大丈夫か?」

「だ、大丈夫です……ここは?」

「さあな……だが普通の場所では無いのは確かだ見てみる」

「……?……太陽が……黒い?」

「そうだ、そして土も……触っているのに触っている感触がない」

「少し向こうの光景もなんだか…不鮮明な…」

「ただ一対一で戦う為に用意した場所なんだろう…二人だけ周りに何もなく、全力を出せる場所…良い場所だ」

『メールを受信、読み上げます』

「え、またですか？」

『送り主 C 内容 太陽の暖かさはちよつと…でも風とかは再現できますよ？やります？』

「…いらないと伝えてくれ」

「…いらぬそうです」

『了解しました、…返信完了』

「…始めよう」

フロストノヴァから冷気が流れ出す…そして雪が降り始める

『…温度の低下を確認、身体保護機能を起動します』

「…やはり凄く冷気、レダさんのおかげで抑えられているとはいえ…」

「(い、いまいち集中できない…集中…集中だ…何故着ぐるみにしたんだ…?!…ハッ、また考えていた)」ブンブン

「……………いきます!!」

『突撃コマンド、始動します』

「え? 違い…きや!」ダッ

「!!くっ!」ザリッ

突然アーミヤがフロストノヴァに向かい走り出し拳を突き出す、それを避ける

「グッ!」ガンッ!

が回し蹴りをくらう

「…ふう…流石にパワーの差がある…可愛い見た目なのにな(小声)」

「こんな接近戦をする筈では…可愛い見た目なのにちゃんとパワードスーツの役割をしてるんですね(小声)」

『御二方、褒めて頂きありがとうございます…アーミヤ、油断したようです』

「え、…足が…凍りついている!」

「……………やめだ」

「え？」

『対象、アーツの使用を停止、足の氷を溶かします…暫くお待ち下さい』

「駄目だ…集中できない!!」ブンブン!

そう叫んだと思えば頭を両手で抱え頭を左右に振るフロストノ  
ヴァ

「え、ええ!?!どうしたんですか!?!」

「どうしてだと?子うさぎ、今の自分の姿を分かっているか?」

「……………あ」

「忘れていたな?よく考えてみてくれ、そんな着ぐるみを着て、真面目な話をする、戦闘をする…………それを相手から周りから見たらどう思うと思う?」

「……………」ふいっ

「目を背けるな、思考しろ、ちゃんと考えて…………その考えた事を言うてみる」

「…………とても、とてもシニールな光景と思いました!!」

「そうだ!!集中できるわけないだろう!!そしてそんな着ぐるみが高速で迫ってくる…それはどうだ!!」

「恐怖を感じます!!ごめんなさい!!」

「ああ!!少し怖かった!!」

ウサギ達魂の叫び中暫くお待ち下さい

ドクター&スノーデビルの皆視点

「……………なんだあれ」

「…姐さん…分かります、その気持ち、怖いですもんあれあんな速度で走って来たら…」

「パトリオットさんが真夜中に歩いているの見た時ぐらいの恐怖だな…」

「真つ暗な所に赤い光が二つ蠢いて…あれは怖かった」

「そつちも色々あるんだな…」

「そう言うロドスの方はどうだ、そんな怖い話ないのか?」

「……仕事をしていて」

「……」ゴクツ

「一つの書類の束が終わったと思うと……次には三つほど束が増えてるんだ」遠い目

「……それは怖い、別の意味で」

「ああ、別の意味で……干し肉をCから貰ってるがいるか？」

「お、それ俺にもくれ、Cが作るのなんか美味しいんだよ、干し肉」  
「僕もいいですか？」

「いいに決まってるだろ？ほら」

「これが噂の干し肉……話は聞いていたが食べた事は無かったな」

「たまにしかくれないからな……たまに購買で売ってるが」

「購買があるのか、そっちの拠点は」

「ああ、突然施設が色々建つてな、色々売ってる購買、動物カフェ、訓練場、食堂、娯楽、図書室、色々ある」

「訓練場にあるボス部屋楽しいよなあ……ボスが鬼畜な時あるけど」

「あの話はやめろ……トラウマが……」

「大きな盾……一撃必殺……赤い目、うっ頭が」

「だ、大丈夫か？初級理性回復剤ならあるぞ？」

「なんで持つてるんです？……あ、なんか話終わったみたいですよ」

「はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

「久しぶりにこんな心から叫んだな……」

「ええ……疲れました……」

「……私もだ……戦う、と言う気が完全に削がれてしまった、ハハツ、謎の開放感がある……だが次に会えば戦うと言ってしまった、……そうだな、あれをしよう、アーツで、積もるまで待つのは長いな、子うさぎ

Cに伝言を頼めないか？」

「え、はい！レダさん」

『メールの送信準備……内容をどうぞ』

「雪を積もらせてくれ」

『……送信完了』

そうレダが言つて、瞬きをする…次に目を開けると一面の白い雪、そしてアーミヤとフロストノヴァの後ろに雪で作られた腰の高さほどの壁のような物、そしてドクターとスノーデビルの皆がいた

「ドクター!どうしてここに?」

「向こうの方で見ていたんだが…一体何が始まるんだ?」

「これはまさか……」

「兄弟達」

「はい!」

「……そちら側に着くといい、こっちは私一人で十分だ」

「え、…本気ですか?」

「手加減はしない………スタートだ!!」

そう言うくとフロストノヴァの周りに白い手のひらほどの白い球体  
がいくつも浮かぶ

「…!!危ない!!」 ドンツ!!…パスパスパスパスっ!!!

「なっ、」

「クッ、姐さん本気でやる気だ!!壁に隠れる!!」 ガッ

「え、ええ!?!」

戸惑いながらもレダを脱ぎ、着ぐるみから小さなぬいぐるみに変化  
させ壁の内側へと身を隠す

「ロドスのドクター!!そこに(パスパスパスっ)…グ、ぐあああ!!」ド  
サッ

「一号さんが!!」

「駄目だ!!壁から出るな!姐さんにやられるぞ!」

「一体なんなんだ!?!」

「これは………雪合戦だ」

「雪合戦………?」

「なんとなく戦闘の気分じゃない時…だが何か身体を動かして勝敗を  
決めたい時に最近やる真剣勝負…それがウチでの雪合戦だ」

「ルールは普通の雪合戦と同じ…雪玉を身体の何処かに当てられたら



退場、そして相手のチームが全員当たって退場となればこっちの勝ち、その逆だどこっちの負け…普通時間を決めて残り人数で勝敗決めたりするんだが…今回姐さんはその事について何も言っていない…つまり時間無制限の殲滅戦!!」

「つまり……………ただ遊んでるだけだなこれ!？」

『そうとも言える』

「だがヤバいぞ、確かに人数ならこっちが有利かもしれん…が相手は姐さんだ」

「無敗伝説を持つ最強の雪合戦マスター…それが姐さん、フロストノヴァだ!!」

「無敗…伝説…」

「姐さんアーツ技術は最も難しいレベルにまで達している…その技術を使えば自分の周りに大量の雪玉を生成できる…こっちは雪を集める、丸める投げるの動作が必要なのに対して、あっちはその動作を全て省略してこちらに高速で飛ばせる!!もう自分でも何言ってるかわかんねえ!!ウオツカくれ!!」

「なんて技術の無駄遣いなんだ!!」

「それ言ったら駄目です!ドクター!!」

次回 黒うさぎ、雪合戦マスターへの挑戦

### 32話

「……………フツ！」ブンツ

「……………」ヒュン！」

「あぶつ！……………やはり相殺されたか…」

「強い…少しでも気を抜けばスノーデビルの皆さんのように…」

「(顔冷たい…)」雪に顔が埋もれてる

「……………いつまでこうしてれば？」うつ伏せ

「さあな…もう…眠いんだ…」燃え尽きてる

「寝たら死ぬぞ!」バシヤ

「だからって熱湯かけんな！すぐ冷えるだろうが!!」

「ごめん…もつとかけてやらアア!!」

「ヤメロオオオ!!」

「…退場した方が楽な気がしてきます」

「もうちよつと頑張ろうぜ？ほら、ちよつとみてみるよ」

「……………」ソワソワ

「なんか姐さん楽しそうだろ？」

「楽しそうだな…と言ってもどうする、普通に投げて相殺されるだ

けど、石でも詰めるか？」

「ドクター、それはただの凶器です」

「冗談」

「そんな事したら俺達が殴るからな、原型が残らなくなるまで」

「いや本当に冗談だ…石なんて入れられたら誰だってそうする、私だってそうする」

雪合戦が始まり数分…最初はまだ人数が居たが反撃しようとする身も無慈悲に相殺、さらには

「まさか二方向からの全力投球が突然の雪の壁で防がれるとは……………あれ反則では？」

「雪だからいいんだよ(適当)」

「なるほど(?) 問題はないですね(??)」

早速アーミヤが寒さと場の空気によって頭が良い感じに壊れはじめた、そして唯一ツツコミにまわれそうな最後の砦ドクターは…

「雪なら大丈夫だな！」 理性0

もう手遅れだった、そうさつき既に最後の初級理性回復剤を雪の中に落としてしまい、既にドクターは理性などなくなっていたのだ!!  
「実は…雪を集めてから溶かして、それで即席麺作って食べるのが憧れなんだ…」

「雪山のある程度の高さの雪ならいいが…普通に街とかに降ってるのはやめとけ、腹壊すぞ」

「そうなのか…」

「なんの話をしていたんでしたっけ…」

「何って…そりゃあ…」

「打倒姐さん（フロストノヴァ） 作戦会議…はっ!」

「いかんいかん、何かに意識乗っ取られる所だった」 理性1

「もうかなり危ない所まで行っていましたよ、ドクター」

「これが、極寒の恐怖か!、久々に体験したぜ…」

『違うと思います…ストーブ機能ON』

アーミヤの抱えているぬいぐるみのコートが赤くなると、周りの空気が温まり出した

「……………あつたかい…」

「あつたけえ…」

「救いの光だ…」

「……………雪溶けないかこれ？」

「大丈夫だ…どう言うわけか溶けてない…」

『……………一つ提案があるのですが、よろしいでしょうか?』

「…話を聞こう」

「……………(ずっと立っているのも、疲れるな…よし) おーい、兄弟達」

「敗」敗「敗北者…?」

「言っていない、少し手伝ってくれ雪で椅子を作る」

「あ、はーい!」

数分後

「……………なんだ…これは？」

「なんか…凄い…豪華ですね」

「テンション上がり過ぎちゃいましたね…」

目の前にあるのはフロストノヴァの身長よりも高く、さらにかなり豪華な装飾と細かな模様が彫られている氷と雪の椅子だった、肘掛けには雪うさぎが二匹乗っている

「王座の椅子って言うか何というか…」

「……………できた！」

「お前はお前で何……………器用だなお前!？」

スノーデビルの隊員が汗を流し完成させた物は…等身大のレユニオン幹部とそのリーダーの雪の像、今にも動き出しそうな程の完成度、そしてその像の表情は皆何故か笑顔である

「何故こんなにも笑顔なんだ…完成度はすごいが」

「作っていたら何故か…こう、笑顔に、できるならレユニオン全員分作りたいですけど…」

「流石に時間がないな…写真に保存しておくでしょう」スツ

「姐さんなんで持ってたんですか…？」

「……………」パシヤ

「無視しないで下さい!？」

数時間後

「……………よし！作戦内容は叩き込んだ…逝くぞ！」

「勝ちましょう…絶対!!」

「俺達の戦いはここk」それ以上は打ち切りみたいだからやめろ」

そう意気込み、ドクターとスノーデビルの隊員1人が両側から飛び出す、目の前には王座の椅子に足を組みこちらを見るフロストノヴァ……………え、なんだあれ強そう」

「止まるな！走れ！ロドスの！」パスパパスツ！

「！、ああ！分かつてる！」

そう言いながら両側から全力でフロストノヴァに向かい走ってい

く二人

「……………さつきと同じか？舐められたものだな」

「そらっ！」ブンッ

「…!!」ブンッ

二人が雪玉を投げる…それを相殺せんと雪玉が当たる…が

……………パスッ…パスッ！パスッ！

「……………固めて氷の塊にしたか！当たると普通に痛いぞー！」

「…ごめんなさい!!」

「私は許そう!!だが!!」

そう言うのと雪玉の展開をやめ高速で自身の周りに厚い雪の壁を作り出す

「これで……………今だ！」なにつ!？」

……………ラビットフット…フルパワー……………

バゴオ!!

突如フロストノヴァの足元から何かが高速で飛び出てくる

「グッ…ハア!!」ガンッ！

「まだです!!」ボフッ！

その飛び出した何か…レダスーツのアーミヤは次に空中を蹴り、フロストノヴァに迫る

「クッ…まだ…まだだ!!」

フロストノヴァは氷の壁を作り、その突撃を止める、その硬き氷の壁に黒ウサギは手を突き出す

「レダ!!」ガチャン!!

『スノーキャノン！準備OK!!……………ファイヤ!!』

……………白き線が、黒の螺旋の光と共に氷の壁を突き破り、フロストノヴァを貫く

『……………貫いちゃったああああ!!??!!』

……………想定外だったようだ

「レ、レダさん!?こんな、こんな威力なんですか!?!」

「あれ、あれって！ただの雪玉を射出しただけなんだよな!?!いや、なんか黒い螺旋状のやつと共に姐さんつらぬ@&^>!?!」



「……………こんな感じだな」

「レダさんその記録後で見せてくれませんか？見たい」

「俺も見せてくれ」

「心がないのか二人とも……………」

「心臓はあるぞ」

「俺も一応あるな」

「当たり前だろうそれは…そもそもないのに生きてる奴が何処にいる？」

「居るさ！ここにな！」バアアン！！

「さつきあるつて言つてただろ馬鹿」

「動くも止まるも自由自在さ、フツハツハ」

「なんだこいつ……………」

「……………なんかあの空間入りづらいですね」

「そうだなあ…ただの仲良い会話なのにな……………」

「自由に入り込んで大丈夫つすよ？」

「うわあ絡まれた」

「おいドクター君！ちよつと書類くんね？終わらせとくからさ……………な？友達だろう…休めよ」

「なんだその……………あれよく聞けばただのいい奴だこれ」

「おいおいロドスのドクターとうさぎい？、これ飲むだけでふわふわしてすぐ夢心地だぜえ？ほら飲めよ…な？」

「な、なんだこれ」

「ホットミルク」

「身体あつたかくなつて眠くなるな……………」

「な、なんだなんだあ？子うさぎ、寂しいのかあ？、話し相手になろう、飴食べるか？」

「い、いただきます」

「フーさん…最初つからただのいい人……………」

「演技力が足りんな………何やってるんだ俺は」

「スーさんもだいぶギャグ要員に」

「やめろ！そう言うギャグ要員はあつちの黒猫とかにしとけ!!」

「え!?!私!?!」

「あの人はほら、もう単体でいいから」

「それはどう言う評価なんだ……?」

その後 色々とありフロストノヴァ（+雪怪）がロドス入りを果たし、Cがスーさんを拘束して、ロドスに確保された………Cは逃亡したが

「覚えてやがれよCいいいいいい!!!」バツタン！バツタン!!

「スーさん！とりあえず落ち着いて!!血が！血が出てます!!」



### 33話

前に、不死の化け物に会った事がある、それは本当に不死の化け物、体が爆ぜようと、首を落とそうと蘇る、理不尽に殺される事もある、がその化け物は笑う何か言いはすれど、それは怒りではない、相手を憎みもしない

『ねえ、なにも思わないの?』

『えー、別に何にも』

簡単に言った、何も思っていないとそして自分の死は全く持って興味がない、自分の死は……周りの死に関しては無剰なほどにお節介を焼く、子供には無限の未来がある、若者には今を変える事ができる、大人は、老人は若者に色々伝えられる、とはいっ言っていたか、けど一つ疑問が生まれる

あの男がこの計画に素直に従うのか?争いの雰囲気をごっそりと台無しにするあの男が?

とんでもなくどうでもいい疑問だが、少し気になりだすとどんどん大きくなってゆく、あの女に何か言わなかったのか?……あの男も当たって砕けるとよく言っていたし聞い……使い所が違う?うるさいわね、爆破するわよ

……誰に言ってるのかしらこれ

コツ…コツ……

「……W、お前が来ると言う報告は聞いていないが?」

「ごめんなさいねえ、……それよりなんで椅子と机が用意されているの?」

「……?……ああ、今から紅茶を用意する」カチャカチャ

「そう言う事じゃないのよね?待って、本当に準備するのやめなさい、それとそれ緑茶よ」

「……座らないのか?」

「……………調子狂うわね」

「……………」

「……………」

……………

「……………最近、どうだ？」

「ねえ…今なんでそれをチョイスしたの？なに？親なのあなた？」

「沈黙は気まずいと聞いた」

「色々なんか変わったわね…」

「…そうだな、Cに教えられたシユレインガーの猫でも」

「なんなのよ!!その会話のセンス!!何教えてんのよあれはあれで!!」

「他がいいのか？後は…そうだな」

「そう言うのを聞きに来たんじゃないのこっちは、」

「なん…だと…」

「何、なんなのよ、その反応」

「いや…やってみたかっただけだ」

……………正直この女は嫌いだ、目の前のタルラは嘘でがちり固められたクソ野郎、まるで別人のように相手に疑われないよう形を変え、相手の望む事を話す…………

それが少し前までのタルラ、だが今は？冗談を言う、正直…いや冗談でも正直でもなんでもないだろう、言うならそう、ただの天然、悪く言えばポンコツ、何がどうなっかってこうなったのか、こんなのが計画を実行するようには見えなくなってくる。

「……………ハア…で本題だけど、今回アレは何も言っってこなかったの？」

「……………それを聞くためだけに来たのか？」

「はっ」

「……………Wは私を殺しにくると思っていた」

「はあ？」

「……………Cにも言われた、「もしかすればターさんを殺りに来るかもしれんけど気をつけて」と」

「なに？殺して欲しいの？いいわよ」

「……抵抗はする」

「……はあ……やめよ、やめやめ、そもそもあれがそんな事簡単に許す訳ないじゃない」

「………そうか」

「だけど見逃したわけでもない、いずれは狩るは、いずれはね」

「………Cが何も言ってこなかったのか、だったか、ああ言ってきた」  
「そう」

「お弁当のおかず何がいいかと」

「待って全然関係ないじゃない、しかもそれ私にも聞かれたわよ？」

「卵焼きは甘い方が好きだ」

「聞いてない、卵焼きの好みは聞いてないわ、え、なにそれしか聞かれないの？」

「??…そうだな」

「はあ!？」

「なんかおかしいかね？」

「おかしすぎよ、何か言う筈よアレは…勝手に行動している?…ありえ………いつの間に来たのよ………本物じゃないわねC」

「え、なんで分かるの怖…いやこの計画さあ…もう既に突き進むしかないやん」

「………」

「だって既にチエルノボーグって言う都市を占領してしまっただんでしょ?その時点でもう計画止められんやん戻るもなんもできない、なら突き進んで行ってしまわないとほら当たって砕けろって事つすよ」

「………確かにそうね…よく考えたら分かる簡単な事だった…ハア……」

「まあ今から邪魔するけど」

「………本当マイペースよね」

「よせやい、照れる、うわ私のキャラじゃねえ」

「………集まって、なにを、している?」

「あ、パトさん」

「私は行かせてもらうわ、じゃあね」パリンツ

「あ、手鏡使つて一瞬で逃げやがった、私も「待て」駄目かあ」  
「…………裏切るのか？」

「まあこの作戦を今から少し邪魔するから……………そうなるんですかね」

「……………考えは変わらないか」

「フ？まさかそんな事をパトさんから聞けるとは、嬉しい？珍しいっすねえ」

「……………ここで、大人しく、していて貰おう」

「……………私を排除するのではなく？」

「そんな事が、出来ないのは、分かっている」

「えー？分かりませんか？パトさんならばできるかもしれない」

「そうだったら、よかったな」

「あつはー、そんな事言うとは思わなかった、……………答えはNO、今から邪魔しますええ」

「……………」

「ではパトさんターさん、また会いましょう」パラツ：

そう手を振りながら身体を紙に変え飛び去っていく

某所 6 : 30 PM

「ああああ!!!」

「とりあえず落ち着けスカルシュレット」

「落ち着けるか！クツソあいつ次会ったら「レユニオンスラング」」

「久しぶりに聞いたなその言葉……………」

「はあ、もういい、……………しかしもうすぐか」

「ああ、今もここに近づいてきている」

「……………あいつ、どう思う？」

「多分既に動いているかもな」

「どうなるか……………」

「さあな、なるようになるだろう」

「そうそう、なるようになりますよ」

「……………」ガシッ

「……………」ガシッ  
「……………」ギッ…ギッ  
「……………」抵抗するな」  
「残念します」  
「このやろう…」  
「いやあちよつと休憩には…」  
「休憩についてお前なあ…ここ一応敵陣だぞ」  
「いやあさつきパトさんとターさんに喧嘩売ってきちやつて」  
「なにやっつてんだお前!?!」  
「パトリオットに喧嘩売った!?!」  
「だって邪魔する事ちゃんと言つといた方がいいかなって!!」  
「なんで無駄に律儀なんだよそこで!!」  
「だから結構怖いんすよ、だってアレですよ?あんな巨人みたいなのに目の前でペラペラ喋るんすよ、SAN値削れるわ後SAN値1しかないよ私」  
「もう手遅れじゃねえか」  
「てことでスーさんフーさん、ゲームしましよ」  
「唐突すぎる」  
「レースゲームしましよ、なんか走り抜きたい」ドンッ  
「どつからゲーム機本体とモニター出した…?」  
「私はポケットから」  
「考えたら駄目なやつだな、ヨシ」  
「アイテムはありにするのか?」  
「普通のルールでやっていきましよ、私この赤い頭巾着た白い仮面のキャラで」  
「あ、俺は赤の配管工にする」  
「私は…丸っこい幽霊にするか」  
「なら私はいつもの刺々しい亀にするわ」  
「毎回Wさんそれっすよね」  
「Cだっていつもそのキャラじゃない」  
「だってなんか親近感湧くし…可愛いし」

「一番配管工が安定してる」

「この幽霊も可愛いぞ」

ピー…ピー…ピー!!

「レース開始!」

「スタートダツシユミスった!」ボンツ

「これはどうやって進むんだ…」

「ちよつとルール知らない奴混ぜてやってるの!」

ワーワー…ギヤイギヤイ

「…ちよつと姐さん達!なに自分達だけ楽しんでるんですか!」

「ちよつと待っていてくれ兄弟…そこだ!」最下位

「あ!ちよ、赤甲羅投げたの今誰よ!」最下位一個前

「フハハ!W先に…ツ!!バナナか!」

「アハツ!ざまあ無いわね!」

「最下位争い楽しそうだなあ」二位

「上手そうな事言つてたのに最下位争いなのか…W」三位

「次俺たちもいいか?」

「いいつすよ…ちよつと私は消えますけど」

「…行くのか」

「YES、なんか凄い元気な元?警官さんが居るから一緒遊んできま  
すわまさか窓から飛ぶとは」

「お前じゃあるまいしな」

「え、悪口ですか?」

「さつきを思い出してしろ」

「あ、ごめんなさい、ではまたいつか会いましょう」

「殴るから帰ってこい」

「全力で逃げさせてもらいます、代わりにこの大乱な闘でできるゲーム  
置いていくから」ダツ

その後大変盛り上がったそう

### 34話

「ちよつとめつちや飛ばすじや無いっすか赤目の人」タツタツターン  
「うるさい！着いてくるな！」

「着いてくるなつて言われても私の行き先同じですし」ダツ

「だからと言って走ってバギーに追いついてくるのは間違っている  
！」

「バイク今メンテ中だからしようがないでしょう！後近く居ないと疲  
れてるから隠蔽の効果赤目の人入らない!!」

龍門から少し離れた荒野、そこを進む一台のバギーと何故か並走し  
ながら言い合っている男、とてもシニールである

「アカメサアン！今何キロお!!」

「時速145キロだ！」

「まだまだいける筈でしょう！」

「……………なめるな!!」グツ

「アハハ!!いいっすねえ！最高!!ちなみにあの移動してるのに乗り込  
む方法は？」

「飛びつく」

「そう言うの、嫌いじゃない、でも縄でも引つ掛けましょ？一歩間違え  
ばまた傷口ひらきまっせ？」ガキンツ

「毎回何処から出すんだ…？」

「私は（以下略）」

「……………」ヒョコ（左を見る）

「……………」ヒョコ（右を見る）

「……………」スタスタ

「……………」スタスタ

「…いや何故着いてくる」

「さあ…」

「ふざけているのか？そもそも、そっちはあの鏡？と言うのを使えばよかつただろ、何故あそこで待ち構えていた」

少し前、チェンとホシグマとの戦いが終わり龍門から出る際

『どーも、ちよいと怪我の手当しますねー』

『はっ。』

『後ついだんで一緒にいきますか行き先一緒にしよう？』

『はあ？（二回目）』

その後走ってここまで追いつき、そんな事をしなくても目の前の男は一瞬で移動する術を持っているがそれを使わなかった事にチェンは疑問を持っていた

「いやあ…今回色々して疲れてましてもしもの時の為に色々温存しようかと」

「フツ、驚いたな、お前みたいなのでも疲れるのか」

「おつと？それは煽ってます？そりゃ疲れますよ、何個か身体作って作業してそれでだてさえ広くてめんどくさい龍門全体を監視しながらなんか黒い人達相手して避難やらなんやら…もう…ゴールしても…いいよね？」

「勝手にすればいい」

「当たり前強い…この先倉庫、人が何人か居ますね、敵だったらどうします？」

「お前ごと斬る」

「私ごとつすかあ…ちよいとお待ちを」コンツ…ココツ…ドンツ！

…そのノックはCか？

「あ、レユニオンの人でしたかやつぱり」

…お前…確か…いやまあいいやとりあえず入ってこいよ

「あの一…敵意マシマシの人居るけどいい？」

…え、なにそれ怖い…いいぞ

「つて事なんで攻撃しない、ヨロシ？」

「…可笑しな動きをすれば斬る」

「はーい！お一人様入りまーす!!」バンツ

「二ラツシャーサー」



「ご注文は何にしましょう?」

「あ、ああ……とりあえず焼き鳥——じゃな「焼き鳥お願いしまーす!」  
おいー話を「お酒はとりあえず生で? わっかりました」

「とりあえず焼き終わるまで塩キャベツ」ゴトツ

「こんな事して居る場」「ビールお持ちしました!」ゴンツ

「……なに? うるさ、…C? 久々に来たの? ……それと誰?」

「おー……ウルサスの人元氣してます? あの人は?」

「…そろそろ名前覚えてよ…何回忘れんの?」

「人の名前覚えんの苦手で…」

「はあ…まあいいや、もう一人もごゆっくりあっち行くから」

「………このウルサス人か?」

「そうそう、占領された後感染してね、最初の頃は荒れて荒れて…何回  
殺されたか、まあ色々納得させましてとりあえずここで暮らしても  
らってます」

「とりあえず?」

「いずれ多分ロドスがここに来るでしょうからその際には保護しても  
らおうかと」

「他人任せか」

「その通りでございます、こちら辺は私の管轄じゃなくて好き勝手に  
きないんよねえ…」

「……そんな事してなにも言われないのか?」

「言ってるんだっいたらここで鳥焼いてないが?」ジユウ…

「それな」

「まだ開店時間でもないしな」

「ちなみにさっきの人はこの看板娘…?? やってます」

「…そろそろ行か「焼き鳥、どうぞ」…わざとだな? わざとなんだな!」  
バンツ!

「台パンはお辞めくださいお客様」

「二度あることは三度あるっていいいますしお寿司とりあえず落ち着い  
て焼き鳥食べましょほら塩ですよ、私はネギマすき」

「………(モグツ)…!」

「美味しいでしょう?」  
「……………」モグツ…ゴクツ  
「めっさ食うやん…言葉が出ない程美味いってよ」  
「当たり前だ」  
「心を込めて」  
「作ってるからな」  
「そういえばこの前ターさんが——」  
「ゴツホツ…そんな事して!？」

数時間後

「……………」私は、なにをしているんだ…」  
「まあ落ち着いて、ほら腹たまったんならこの先全力出せるでしょ?」  
「ほらとてもいい」ト」  
「……………」いつの間に傷を全て治した?」  
「ご飯食べてる時こっそり薬を少々ふりかけまして」  
「指で摘んだ程度がベスト」  
「なるほどなあ…」  
「そしてよく叩く」ドンツドンツ  
「柔くなるんだな」  
「その後は色々して皿にのつけたら完成」  
「ワオ!簡単!」  
「その色々の過程を教えてくださいよ」  
「じゃ、気をつけてく死なないように」  
「……………」(ボソツ)「ダツ」  
「……………」なんか言っつたけど聞こえた?」  
「さあ?」  
「それより、さつき鼠が手紙運んできてな」  
「もしかしてマルー君かい?」  
「よく分かったな、で内容はな…レユニオン全員抜けたってよ」  
「バカジャーネー」  
「馬鹿とは照れますね」  
「お疲れ、鼠さんチーズだよまたね」

「私確か避難誘導した後待機言うたよな？」

「すいません、なんか電波悪くて…」

「自分は通信機が突然爆発して…」

「バカジャネーノ（二回目）」

「で、主人何します？」

「このまま話進めるの？マジですか？」

「マ」

「マジやないがな、ほら帰って！待機！待機して！」

「隊長お？そんな時隊長ならなんと答えるでしょう？」

『だが断る』

「デスヨネ、ダヨネ、バカジャネーノ（三回目）カエレヨオ…アホドモオ

…ドロオ

「命令なんて聞くと思います？答えはNO」

「グツ君前はポリビアの軍みたいな所出身よね？」

「一体いつの話で？ほら、何かするんでしょう？ハリーハリーハリー

!!」

「んもーなんか何処で道間違えたかなあ！ロクな人になれんど私みた

いにー・（自虐）私みたいに!!（反復法）」

「まあとりあえず諦めましょ」

「あれが副隊長になった定めか…あ、生で」

「ウオツカ！」

「ワイン！」

「カルーアミルク」

「レモンサワーで」

「私は鬼殺し、はあ…よし、全員！酒持ったか！」

『YES!』

「まだ飲めませーん！」

「同じくー」

「甘酒え！」ドンツ

「目ある者は見よ！耳ある者は聞け！」

「腕を掲げよ!!声を張り上げろ!!」

「これより我らは作戦を開始ス！繰り返す作戦を開始ス!!」

「乾杯!!」 キンツッ!

『乾杯!!』 キイン!!

『ンクツ…ンクツ』

……ゴンツッ……プハア……

「よし行くかあ！とりあえず隊分けんぞお!!地図注目！」バツサア（やけくそ）

「周りを置いてけぼりにしていくこの感じいい!!最高です!!」

「とりあえず！こつから多分ロドスの皆様方くるからあ！足止めする」

「誰逝きますう？」

「多分あつちやばい人来るでしょ、て事でアネモス、マルーそれからグー、キーそれと後数十人足止め、この地点待機、ヨロシ？」

「え、僕達も？」

「YES！兵装の使用を許可する！とりあえず足止めよろしく！」

「杭打ちしていいんですか!？」

「ブーツも使つて!？」

「ああ！最大出力でやって！コロコロせんようこつちですから！」

「いいよおつしああ!!」

「ただ会話で稼げそうなら会話でしてね」

「後の数十名は？」

「頑固な奴を殴りに」

「ワオ！死に行くようなものですね！」

「そりゃこんな雑多兵にあんな兵士達に勝てるかと言われたら…半数削るぐらいしかできませんよ」

「ですよね…なら勝てない相手には？」

「武器を使う」

「イエーイ」ハイタツチ

「イエーイ」ハイタツチ

「でも迫撃砲とか効くかね？」

「やってみなきや分かりませんよ」

「そりやそうだ」

「ハッハッハ!!」

「とりあえず足止め班は出来るだけ足止めよろしく、あっちの社長とパトさんは合わせたらなんかダメな気がする」

『はい』

「さ! 「あ、死にそう」 ってなったら即座に撤退! 頑張っていきましょー」

『はぁーい!!』

「では開始」

## 35話

ガアンツ!!

「…硬ああつた! なんなのその宙に浮く塊!!」パツ  
「グー! 引いて!」グツ…

ザツ…ギイイン!!

「…………とりあえず引こう! また捕まる!」バツ

「キーも駄目だったじゃん!」ダツ

「あんな硬いとか思わないじゃん馬鹿!」ダツ

「……逃がさない」スウ…

「うわあい!!」ズサアア…

「あつちは楽しそうですね」ギヤリギヤリイ!

「ぜんっぜん楽しそうじゃ! なさそうだけどね! と言うかなんでこんなに靴底でチェーンソー止める人多いのかなあ! ロスモンテイス! 無理はしないでね!」ぐぐッ

「金属を仕込んでますので」

「なんかそれ最近聞いたよ!」

「…ブレイズも連れてきて正解だったか?」

「……それはどうだろうな」

「予想以上に強いんで多分正解だと思いまーす」

「あの小さい子一人で何人やられたか…」

「それでもピンピンしてるオレ達!」

「クソ痛え! でも燃える! もっとくれ!」

「「え、お前そんな癖が……」」

「ちよつとあるかもしれない…」

「「実は俺（私）もあるかもしれない」」

「お前達…!!」うるっ

「……」

「知らなくていい、あれは見たら駄目だ」

「……??」

こんな事態になる数時間前

チエルノボーグ倉庫区域

「………おかしい、何かおかしい」

「おかしい、それもそうだろうなここに来るまで一度も戦闘がない、その他の事もだ、これをおかしいと思わない方がおかしいだろう」

「この光景…三度目でしようか…」

「ああ、こんな事態は既に数回に渡って経験している」

「うーん…なんか私もこんな体験したなあ」

「ええ…こんな時は決まって…もう少しで地表です、皆さん」

地下基盤から潜入し数時間、ロドスの全員は倉庫区域内まで来るのに全くの戦闘も、人の気配、妨害と言う妨害が全て無く不審に思っていた。

「…ッ！アーミヤー！」

「え、わっ！」コンツ

地表へと出た瞬間に高速でアーミヤに何かがぶつかる…それは軽そうな音をしながら頭へ当たりコンツ、と言う音を響かせた

「………バトミントンの…シャトル？」

「どうしてこんな所にこれが…」「ごめんなさーい！こっちに………」

あ！ロドスの人達だああ!!」「え？」

「え？本当に？………うわ本当だ！まずはえーと…おはよう御座います」ペーこり

「おはよう御座います…??」

「いえ、キーさん、こんな時はなにガン飛ばしとんじやワレと睨みつけて…」

「絶対違う事が分かりますよアネモスさん、それ完全に喧嘩売ってますし」

「…??主人は喧嘩売れと言っていますませんでしたっけ」

「絶対ふざけてますよね？」

「よく分かりましたね、マルーさん」キリッ

「顔がいいから腹も立ちませんね、美人って徳です」

「……………あれは前にここで会った」  
「Cの所の部隊だな…気をつけよう見えるだけではまだ数人だが戦力が分からない」  
「……………ずつとここでバトミントンしていたの？」  
「多分そうなんじゃないかな…あのサルカズの子二人はラケット持つてるし…」  
「…そっか」  
「そんな所で内緒の話してないでもうちよつとこつちにきませんか？お茶しかありませんけど」  
「……………（罨…：だろいな、こんな簡単に招くわけがない…）」  
「あー、キーさん、そんな感じだと完全に罨とか疑われますよ？」  
「え、そう…：ですよね、あつちからすればレユニオンを抜けているとしても敵ですから…」  
「……………え？レユニオンを抜けている??」  
「脱退届を鳩に飛ばしてもらいました」サムズ  
    ロドスの全員に困惑が広がる  
「なら何故ここに居る」  
「隊長…：今思ったらもう隊長じゃありませんよね…：…いや隊長でいいや、隊長からロドスを足止めしろと命令があつたからです」  
「……………レユニオンは脱退して居るのですよね？」  
「ええ、我々は受理されても拒否されていて元レユニオンです」  
「なのに、足止めを？」  
「隊長からの命令なので、ロドスのうさぎの社長さん、貴方をこの先に居る人物を合わせては行けないと、そう言われて」  
「……………この先に居る人物？」  
「ええ、その間会話でもしながら待ちませんか？隊長からの連絡があればすぐに通しますので」  
「……………どうする」  
「……………あつちの話を信用する理由は何処にあるんです？、ただ罨に誘い込もうとしてるだけでは？」



一人のオペレーターが言う、それもそうだ、突如として待ち伏せていたとは思えないように現れ、そして発言も色々とおかしい、信用できる要素は少ない

「……進みましょう、作戦を優先します皆さん、戦闘準備を」

「…分かりました」

「そう言うならしようがないよね…全力で行くよ」

「…うーん、やっぱり自分では隊長のように相手の戦意を削ぐような話術は無いみたいです、戦闘が始まりそうです…」

「いえ、マルーさん今回は雰囲気をぶち壊すカードなどが少な過ぎただけです、きっと主人も最終的に戦闘になります、多分きつとかもしれません」

「段々と自信無くすのやめましょうよ」ガシヤン！

「……………最初に聞いておくが、引く気は？」

「いやいや、ドクターさん…分かり切った事でしょう？ありませんよ、我々は足止めをします、一秒でも一分でも一日でも、それが命令です」  
「……………戦闘、開始します！」

ここに戦いの火蓋が切って落とされた。そしてさつきに戻る

「あんなシリアスな雰囲気やっぱり合いませんよねやっぱり、こんな風にふわふわな感じが肌に合ってます」ヒュウ…ゴツ！

「うっ…ぐう！、そんな事言いながら攻撃重いよね…？蹴りの威力どうなってるの？」

「やっぱり槍や剣…そんな物より蹴る方がやりやすいですね」

「こんな強いのとまた戦うとか…燃えてくるね！」

「おや、バトル好きでしたか主人には勝てませんが…スーさんには勝てる私ですどうぞ楽しんで下さい」ヒュ…パアン！！

「それってあのツ！投射器つかっつ！？てた方！？遠距離からでもきんっつ！！距離でも強かったよ！あの爆破！」

「……………??近距離で（ヒュッ）スーさんが爆破？（パアン！）大鉈では無くっ。」

「フツ！……何かおかしい事言ったかな？それと…鉈？」バツ

「ええ…確かスーさんは近距離戦では確か大鉈を二本使っていた気が…少し前に主人と模擬戦していた時の記憶ですが…」

「……え、もしかして、手加減されてたの？」

「いえ…分かりませんが、確か近距離では投射器を撃たずに…刃物を…」

「……ちよつと待つてもらっていい？」

「……どうぞ」

「……うわああああ!!嘘だああアア!!!」

「…いいんです、叫んで下さい、あの二人は残酷なんです…」ぽんつ  
くえ、大丈夫？甘い物食べます？

く叫ぶと楽になりますから…思う存分叫んで下さい

「ブレイズ…？何故いきなり肩を叩かれて…宥められているんだ？」

「何かショックな事でもあったんだろう…」

「うつわあい！」ダダツズサア

「危ないよっ！」ピヨン！

「……遊んでる？」

「……」目逸らし

「……」目逸らし

「二人とも、正直にフェリールの子に言ってみな？」

「……ちよつと楽しんでました！」

「以下同文！」

「正直でよろしい！だけど一応命のやり取りしてるから！」

「はーいー！」

「……楽しそう…」

「ロスモンテイスさん…？」

「……なんかあっち平和だな」

「周りだけ見たらなあっちがおかしいだけだ、本当におかしい、ある一定のラインから絶対にこちらを進ませない、既に一時間を過ぎようとしてる」

「…………足止めと言うのは本当の事みたいだったな、この時間にまだ怪我人が出ていないようだ」

「…よく分からない事態になった、この先は一体どうなっている…」

一方、その先の場所

ゴリツ！……………ゴンツ！…バキツ……………メギツ！！

その場所では、山のように巨大な男と仮面をしたその男より小さな男が

「……………フツ！」ゴツンツ！！

「よいっしょ！！」ゴギツ…バアアン！！

一歩も引かぬ殴り合いをしていた、片方の男、パトリオットはその身体から繰り出す拳と、その身体による守りでその場を一切引かず、

もう片方、パトリオットより体格が小さい男Cは、一撃受ければ吹き飛んでしまいそうだが、決して同じく引かず、そして殴られればそれを倍に返す勢いで拳をぶつけていた

「……………既に一時間ちよつと殴り合ってますけどあの二人」

「もうこつちもあつちの人達もどうすれば良いのかわかってませんよお？あれえ…」

「隊長あれどうして吹き飛ばないんでしょ……………よく見たら二人の後ろにある赤い線、血ですねあれ、あむっ」

何故こうなった

### 36話

パトリオットとシェーヴルが殴り合う数時間前の事

「……聞こえているか！状況を報告しろ！伝令兵はどうなっている！！……クソ、駄目か！何が起こっている!?……いや待て、誰からの報告だ？なんの報告を待っているんだ？……何故ここに一人で居るんだ??自分は……自分は……なんだ!?!」

そう深い霧の中叫ぶ遊撃隊の戦士、突如として現れ戦士達を隠したその霧は前も、後ろも、自分の足元さえも白く塗り潰し、いくら声を張り上げようと何も返ってこず、その場にただ一人しか居ないと言う孤独感を作り出す

最初は、とある場所の伝令兵との通信が途絶えた事から始まる、そして気づけば伝令兵からの通達そして仲間からの通達は一つ、また一つと途絶えていくその事態に戦士達は警戒を強める。

「……おかしいぞ、何故奴らはこんなにも見せつけるように排除していく、罠か？それにしても分かりやすすぎる」

「ウルサスの戦術とは完全に別、そして分かって居る襲撃に……何故このような速度で途切れていく?……何があつ……」

「……どうした?……おい!……どうした!……何故……何故こんな霧に囲まれている!?!」

さしすせそして気づけば周りは真っ白に、右も左も分からないまっしろけ!そりや困惑するでしょうよ、急に何も見えなくなつて何も聞こえなくなるんだから、その声は誰かに届くといっすねー」ダツ

「……?……誰か居るのか!……返事を……グツ!?……ゴホツ、なんだ!!」

「……?……やっぱ硬いなあパトさん所の人、力加減難しいんだけどなあ……モウイッパーツイキマース!」豆腐を持ち上げる

『多分豆腐で気絶させようとしているのが間違つて居るんですよ隊長、こっち仕留めました』

『どうやってるんです?それえ?』

「豆腐の角ぶつけてるだけでつせ?」

『湯豆腐っていいと思うんです』

「分かるー…よつと」振りかぶり

「…そうは、させん」

…グツシャ!!

「豆腐が!」

『そんな…豆腐…』

『俺達のお…豆腐があ…』

「……………」

「あ、とりあえず拭いときますねパトさ(ブオツ…)豆腐のかけらああ!!」目に直撃

「……………!?この叫び声はCか!?何処に…(パクツ)??口の中になにに…にかつがアア???……………!?大尉!?いつから…今まで自分はなにを…??」

何かとてつもなく苦い物を口に入れられた戦士の一人はその苦さに思わず悶える、…そして次に顔を上げれば霧は晴れ、周りには仲間が倒れ、目の前にはパトリオットが立っている、どうなつて居るのか分からない

「シェーヴルの、アーツ?だ、そうだろう、シェーヴル」

「あー目に思いつきり豆腐が…え?アーツ?あー…はい、ちよつと記憶やら知能やらを曖昧にーそして視覚と聴覚を鈍く…いやあパトさんその苦い薬の作り方知つてたんすね…、あ、私が作り方言ったんだ」

「巫術を、無効化したのも、お前だろう?」

「行動に障害になると思つたんで、ああいうの壊す…無効化?なんだろ…まあ得意なんすよ(適当)、あとはまあ霧と共にポンポンやつてつて…不意打ち上手くいつてよかつたつすよ本当」

「…ロドスより先に、立ちはだかるのは、やはりお前か」

「立ちはだかるだなんてそんなそんな…もう足ガツタガタですよパトさん怖いんですもん、なんですかその赤いその目、怒つた時のナ○ガク○ガかなんかみたいに光の跡残るんすかカツコいいなあ!!(本音)」

「…こんな時でも、変わらない」

「こんな時もどんな時も私は変わりませんよ、歩く屍ですから私、

ちよつとうるさいけど……ちよつと？うーん……ヨシ、気にせずいきましようあ、そういえばパトさん、フーさん達生き残りしましたよ」「……そうか、」

「ロドスは強いっすよ、フーさんの方もだけどあのフェリーンの人とか灰色の人とか、いい目でしたよ」

「……それを、聞いて、どうしろと？」

「もうぶっちゃけますとパトさん、負けますよ多分」

「……」

「いやあだつて、ただ純粹に強いのもありますよ、それとあれですなんとなく直感でここで会ってしまえばパトさんはあっちに殺される、ええ直感です根拠もなーんにも無いただの直感、ただそう何故かハツキリ言えます」

「珍しい、そこまで、言うとはな？」

「自分でもそう思いますよーここまで言い切れるのは初めて……では無い気がしますけど、……まあこの程度の事言ってもパトさんは止まりませんよね」

「そうだな」

「ワオ、そうだなとか言っちゃいましたよ、うーん流石フーさんに頑固者と言われるだけはある、そんなだったらすぐにフーさん反抗期来ますよ」

「……反抗期？」

「あ、わかってないやつですねこれ、反抗期つてのはですね……」

↳説明中

「……特には、何も、思わない」

「寛容な人だった……」

「……結局の所、何が言いたい？」

「え？いや言いたい事は戦闘やめて撤退しません？つて言う事ですけどしませんよね？」

「私は、進むのみだ」

「ええ、ええ分かっていますともそんな人だとはなんとなく、パトさんはパトさん達は進みますよねー、パトさんの考えだとかはまあアアた

くもって理解しても理解しませんけど私あれですもん馬鹿ですもの理解なんてできませんよもつと分かりやすくして下さい説明書付属してません?」

「……………」

「だから私は一番原始的な方法でパトさんを止めようと思います、止まらなくても無理矢理にでもやりませ戦いは戦わなければ終わらないと言う事で」

「……………」

「こんなセリフは私のキャラじゃ無いのだけどね……………こいよパトリオット、武器なんて捨ててかかって来い」

「……………いいだろう」ザクツ

「え?」

そう言うのとパトリオットは手に持つ武器を地面に突き刺す

「……………そっちが、言ったのだろう?」ズン…ズン…

「ファイファイ、……………これは予想外、絶対に乗っては来ないと思って言ったのに」スタ…スタ…

「た、大尉?」

『隊長…??』

二人が歩き、近づいて距離を詰めていく

「…さあ一対一だ、来いシエーヴル、怖いのか?」ザツ…

「それをそっちが言うとは思いませんでした…さっきも言った通り怖いですよパトさん?」ザリツ…

「……………フツ!!」

バゴンツ!!!

「……………ツー!」ゴズツ!!

「アツハツ!!」メギイ!!

ゴリツ…ドゴ、…バギツ!!…グジュ…バゴオオツン!!

「……………これ、どうすればいいんだ?」

「……………これ、どうします?」

『……………分かんない(分かんない)』

気持ちが一致した瞬間である、そして時は進み一時間半ほど経った

現在

「終わらない…あの二人終わらない…」

「全く引きませんねえ二人共…なんか足埋まってきてませえん?」

「アデアさん、それ見間違いないじゃありませんよ、実際二人共埋まってきてます」

「グツ…オ、オオオオ!!!」ゴツツ!!

「イツ、タアアアアアイ!!!」ゴツリユウウウ!!!

一方その頃足止め班

——…オオオオオ!!!

——…アアアア!?

「…—今の咆哮はなに!?!」

「この奥からです!」

「この先でなにが起きているんだ…」

「続きは自分の目で」

「それをさせてくれないのは君たちだよね?」

「ですね」

「あの、あのフェリーンの人本当強いんですけど!?!杭打ちもキーの切断ブーツも効果なしってなに本当!チートだ!」ハア…ハア…

「足ちぎれそう…でも、頑張る、足止めならできるから!」

「…どうして、そこまで頑張れるの?」

「……………?頑張るからだよ?」

「…え?」

「頑張るから!頑張る!」

「あー…ごめん、フェリーンの人グーってかなり脳筋で熱血だから…

頑張って理解して!」

「……………え? (2回目)」

「理解が追いつかない…」

「追いついたら色々駄目だと思うぞケルシー、考えるな、感じる」遠い目



「そうです、駄目です」遠い目  
「何故そんなにも悟り切った目をしている…？」

### 37話

「殴るたびに硬く、なるのやめッ…てもらえませんか？」ゴンツ！

「言われ、ても、困るな」メギツ！

「です…ゴフツ…よねー」ゴリユウ！

「…そちらも、ツ…そろそろ、倒れて貰いたいが」バギヤ…

「実はもう足動かなくって…嘘だけど」

「……………」ズツ

「ぐええー…（ゴキツ）首折れたんすけど」…ガシツ…ゴツギツ

「…やはり、化け物だな、…こちらも大概か」

「こんなんは慣れてます」

そんな会話をした後同時に拳を叩きつける二人、とてもものんびりした感じが一瞬でぶち壊されるほどの衝撃と音が響き渡る

「…大尉…」

「行くな、下手に近づけば巻き込まれるぞ」

「分かってる…だが…」

「とりあえず見守りしましょう、近くに寄るだけで吹き飛びますよ本当」  
「ええ、ここでもかなりの振動ですしね、決着がつくまでのんびり見ときますしよう、今ならご飯も用意できます」

「お前らは……………何でこっちに來てのんびりしている？そちらは敵だらう!?」

「えー…だって大将同士がサシでやってんならこっちの自分達みたいな有象無象で争っても結局はあっちの勝敗じゃないですかあ、ならもう終わるまでのんびり待ちましょうやあねえ？」？異議なし／

「無駄だ、あの部隊は全員あんな感じだからな……………言ってる事はまあまあ正しいがな」

「なんですすかまあまあ正しいっていつもは変な事しか言っていないみたいなの言い方は、自分達は至っていつも真面目ですよ」

「戦場のど真ん中でも飯食べる奴らがなにが真面目だ」

「どんな過酷な状況でもご飯、睡眠、切り替えは大事ですよ分かるでしょう?」

「……………そうだな」

「そんなわけなので、ようー」

ドツ…ゴオオオン!!

すをみ…ええ？」

兵士達と会話を終え戦いを見ようと目を向けようとした瞬間真横を何か巨大で白い物が兵士達を巻き込みながら飛んできた、その吹き飛んで壁に激突した物はというと…

「……………予想、以上、だな、」

パトリオットだった

『え、……………ええ…？（困惑）』

全員、驚愕より困惑の方が多かった。

「……………ふうー…久しぶりにちよつと力込めて殴ったわ、生きてます？さ、次に逝きましょう」シユウ…ザツ…ザツ…

「え、…なにがあつたんですか隊長…ええ？」

「いやあ…」

「…（足が、動かん、腕も…駄目だな、再生させたくない）」

グーニーズ達が会話をしている時の事

「……………何故、ここまでする？、ここまでする、理由はお前には無い、だろっ？」

「この質問何回言われるんですかね…ただ生きて欲しいからですよ」

「…まだ、あるだろう」

「…何故そうお思いで？」

「この拳は、その目は、また違う事を語っている」

「戦士ってコワイ…あんまり乗せてないつもりやったんやがまだまだ未熟だなあ…」

「……………何故だ」

「何故か、何故パトさん達の計画をここまで邪魔をして生かそうとするか、理由は二つ程あります」

「……………」

「一つは、貴方がフリーさんの親だからです」

「……血は繋がってはいない」

「そうですか、で、だからなんですか？義理でもなんでも、親は親です、子に親は必要、子は親の姿を見て育ちます、フーさんを見てみて下さいよ、あんな風に育ちましたよ」

「……………」

「だけどこのご時世、親のいない子も家族を失った大中小様々な人が大量に居る、ええ、戦争犯罪病気差別その他諸々家族が目の前で死ぬのを見たも沢山いやあ…正直こんな時代大っ嫌いっすね、昔全ての生物殲滅しようとした私の気持ちも今も分かります、なんだったら今でもしそう…冗談ですよ？」

「……………」

「血は繋がっていない、義理の親確かに自分はちゃんとした親ではないと思うかもですけど、昔拾って育てた生意気な子が言ったんですよ『違っても拾ってくれて、育ててくれて良かった』いやあ…そんな事が言える子もまだ居る、そしてこんな時代を変えようと突き進む人若者達も、いいじゃないですか、パトさんも変えるために今やろうとしています、が、そろそろ止まりましょうや」

「……………」

「そろそろ止まって、親として子を、新しい時代をのんびり見てみましょうよ、ざっくり言うとな娘の花嫁姿見てゆっくり死んで下さい」

「……………私は「止まらない、ほら言った」…その夢は、きつと私が地に伏した時、叶うだろう、」

「ええ、ええ、そう言うと思った、私が言ったことは貴方にとっては少し強い風程度…いやそれ以下ですかね……………よし、一番嫌な方法で大好きな方法に決まった、覚悟キマリ」

すると突然、Cは完全に構えを解き息を吐く

「ふうー…よし」

「…っ…ッ!!」ドパァン!!

次の瞬間にはパトリオットの心臓部に先程までとは全く違う威力の打撃が襲った

「さようなら」グッ

「ッ、グウー」

ドツ…ゴオオオオオオン!!!

そしてパトリオットは吹き飛んで行った

「さて、さて、まだ行きましょう、まだ行けますね？まだ息をしていますね？なにがいいですか、刃物？アーツ？打撃？…好きなのをどうぞ希望通りやりますとも」

そう笑いながらパトリオットに向かっていくCその先に居るパトリオットは

「……………」ザクツ…

「ほうほう、立ち上がりましたね、武器も吹っ飛んだ時取りましたか流石そうでなくちゃ面白くない」

盾を持ち、武器を持ち、立ち上がった

「隊長…」

「やあ、グーニーズ君、……………今からパトリオットを殺すから手は出さんでね？周りの人達も……………ああいや、周りの兵達は寝て貰おうか」

「ああ、なんだったらグーニーズ達…あっちの方加勢してきてもいい、……………あー、正直言えば、誰も、私を、見ないで欲しい」

『了解』

そして、グーニーズ達は消え、周りの兵達達は皆突然意識を刈り取られ眠りににつき、この場にはパトリオットとCだけが残った。

「うーん…久々のこの…戦いの空気、相変わらずなんとも言えない…ああ、うん、この心臓の跳ね具合…アア…私<sub>は</sub>は生きてるのか…はあ…嫌だなあ」

「…口は、減らないのか」

「なんだっつたらもつと増えますよ、そして笑います、ええ…今はっ、笑ってませんが、ね」

「…それが本来のお前か」

「うーん…そつすね、気が緩めばひたすらにひはっ、アハハハ!!笑ってしまうような変人<sub>化け物</sub>ですよ私は！アハハハ!!でもですよ後から色々面

倒になるんすよねえ…カカツ！」

笑う、笑う、ひたすらに笑っている大声で、なにが可笑しいのかも分からず笑うただ、一つ、おかしい部分がある、ある部分は決して笑っていない……目だ目が笑っていない、そしてこちらから決して逸らさない真っ直ぐこちらの目を見ている、感情は無い、なにも感じさせない…

「…………私の目をみて、何と思ったか当てましようか、感情がない、でしよう？」

「…………ああ」

「昔からこんななんですよねー笑ってるのに笑ってない、楽しいのに楽しくないように見えるこの目、昔からなんかどっか私おかしいんでしよう、まあそんなだからこんな生きてても大丈夫なんかも、…………話すぎましたね、そろそろやりましよう！」

「…来い」

「…………楽しましよう」

一方、ロドス側

「…………困りましたね、私とマルーさん以外、限界っぽいですね」

「ぐっ、ごっほ、アネモスさんも血出てますよ」

「この程度まだまだかすり傷です、マルーさんは…腕、折れています？」

「この程度ならまだ…………まだ」

「…………降参して下さい、皆さん」

「はい？」

「…もう、ボロボロで、危険な状態です、今すぐ手当を…」

「…アネモスさん、あのセリフ、今こそいいどきですね」

「ええ、では…」

『だが断る…(グーニーズ!?)』

「マルー、酷くやられましたね、腕鈍りました？」

「あいにくぽつきりいって鈍っちゃったよ、…隊長の方は？」

「…………今パトさんと殺り合ってますガチで」

「え…マジ？」

「…………ちなみにどんな雰囲気でした？」

「……今にも笑い出しそうな、そして目に感情のない雰囲気です」

「……本気ですね」

「………とりあえず、足止めをしましょう負傷者はとりあえず回復を  
マジャレさん」

「分かりました」

「さ、また頑張りましょう」

「新顔来たね……」

「……ッ！戦闘準備！皆さん！気を抜かないでくださいね！」

第二ラウンド開始

### 38話

こんにちは皆さまお久しぶりです、覚えてますか？あ、覚えてない…そこで問題です（唐突）今話してる私は誰でしょう

「…はいッ！」ブンッ！

「！、来たよ！…飛んで！」

「ッ！」

「見事ッですネッ!!」ガッ、ブンッ！

カンッ！

「そっちはどこかのキャプテンか何かかな？盾投げてくるしね、まあそんなに面倒な剣を使い方はしないけど」

ガッ「面倒な剣の使い方とはありますがどうぞございます、盾の投げ方は隊長から教わりました後何処か別の所の人をしますね、そう言うのはうちの隊長の仕事です仕事取らないで下さい自由になると逃げますから」

「あ、うん…ごめんね？」

「何を謝っているんだ？」

「分からん」

と言うわけてこんにちは皆さまグリーンズです、剣の柄部分に紐括って振り回しながら時盾投げる事を数分やっています、隊長は今なんか色々やってるんで隊長に代わり私が色々喋ります…え？隊長あんまこういったのをしない？やったの最初らへんだけ？………よし、

「気にせず行きますか」

「グリーンズが何かまた隊長みたいな事言ってますよ」

「侵食が進んできてますね（適当）」

「結構グリーンズさんって強かったですね、相手攪乱できてますよ」

「正直今にも死にそうです、早く誰か来てくれませんか？」

「ばたんきゅ…」

「少年組はばたんきゅしてるし…僕は後もうちよいで行けるけどー」

「とりあえずこっちの手当終わったらそっちアーツで援護できますよ、あむっ」ムツシヤムシヤ



「ハンバーガー私にも下さいよ」

「ソーゴクツ：すいませんけどこれで最後です」

「そんなー：ッ！」ガンッ

「（ハンバーガーのチーズはまだいっぱいありますけど）」ガサッ：  
ムッシャ

「そのポーチなんだかいっぱい入ってますね、主人からの貰い物ですか？」

「そうです、お腹減るとアーツ操作が不安定になるので食料専用ポーチ、ステーキとかもアツアツの状態が出てきます」

「いつもの主人の謎技術ですね」

「一応私の方もこの剣と盾貰いましたね、折れず砕けず軽い、これはいい物です」

「自分は非サンクタ銃を：近距離で、緊急時しか使いませんけど」

「多分隊の人は全員何かしら貰ってますね、多分一番高価なのは少年組の杭打ちとアーツパイルバンカー 切断アーツ増幅機ですけどね」

「通常で厚さ50cmの鉄板を軽く貫く威力ある杭打ちとまだ試作段階と言って普通に上と同じぐらいの厚さを切り裂くアーツ飛ばす靴でしたっけ」

「があ、あの強い少女と戦う際威力を大幅に下げた模様、紳士ですねえ」

「私的にはもうちよっと回復要員欲しいですけど、なんです、術師で回復アーツ使えるの私だけとは」

「使えないわけではないですよ？ただ…」

『アーツ使うより直接斬る（殴る）方が簡単に回復しても怪我するので攻撃した方が楽（じゃありません？）だからなあ……………やっぱいい？』

全員考えが一致、一方ロドス側

「なんだあの脳筋どもは」

「一応敵目の前にいるの忘れてない？」

「賑やかな人達…」

「仲のいい皆さんですね…」

「ハンバーガーか…貰いにい「行くなよ?」…やつぱり駄目か…」  
「何を考えている、それで人質に取られでもしたら大幅な時間のロスになる、……………この時間が既に色々問題だな」

「あんな雑談してるけどずっと意識はこっち向いてるからね、他に抜け道とか…は無理そう、きつちり人が居るみたい」

「私の攻撃は全部あの背の高い人に…蹴り飛ばされて駄目です決定打にならない」

「さらつと言ってるが…あれを蹴り飛ばすってかなり異常だな」

「普通に私でも勝てない自信があるね……………あの二人は…しかも片方はあれより強いのか…そつかあ……………よおし!帰ったらトレーニング量増やそっかなあ!!」(若干涙目)

「ブレイズさん…元気を出してください、ファイトですよ…?」

「…ううん!!かわついいなあ!!うさぎちゃんは!!」だきつ

「え、ちよつと!やめて下さい!!持ち上げないで下さいブレイズ!!」

「目の保養になる」カシャ

「何故カメラを持ってきているドクター」

「騒がしいですねえ……………あ、副隊長さあんあれ」

アディアが指差す空には青い光と煙それを見たグーニーズは

「……………作戦終了!繰り返す!終了!!」

叫んだ

「うるさ」

「鼓膜破れるって、グーニーズ!ああなんか声小さく聞こえああ!!  
イッタアアア!!」耳押さえ

「?…」宇宙猫状態

「ああアネモスさんが!なんか凄い混乱してる!」

「ちよつとどうしてくれるんすかあ?」

そして怒られた

「い、いえ、皆に聞こえるように大声で言っただけなんです!」

『音量もうちよい下げろ阿保副隊長!このヴァカアアアカ!!』

「そこまで言います!?そこまで悪い事してないですよね俺!」素

「うるせえ！頭白くても真っ黒だ！鼓膜返せ！」

「聞こえてるじゃないですか！この脳筋バーサーク野郎！」

「ついでにご飯奢って下さい」

「いやです」

「…ふうー……………杖なんて要るかあ！」ブンツ

「あつぶな!? イッタ：ダレダ！フクタイチヨウカ!? / ……いいですよ、いつも通り拳でやり合いましょうか！」

「俺わあ関係ないんでえ、あっちいきますわあ」

「誰が正義か決めますかあ！これは生き残りをかけた戦いである！」

「戦わなければ生き残れない」

「なんかこの流れいつの日かやった気が！」

「」「」「しゃあいくぞおお!!」「」「」

「えつとお…?通つてもいいんでしようか?」

「さつきまでこつちを監視してる雰囲気完全に吹き飛んだね…しかもかなり大乱闘してるし…ちよつとまって、なんか迫撃砲の筒とか持って殴り合つてないあれ!」

どっかあああん

ウワアアア!!

マダマダア!!      ダレダタマイレッツパデナグツタノ!!

ヤロウブツコロシテクラツシヤアア!!

「しかも爆弾入り…よく生きてるなあ」

「特殊な訓練をしていますから…どうぞ、足止めの任務はあの信号弾が放たれたので足止めは終わりですご自由にどうぞ私は一足お先に主人の元に行きますので」カッ

「え…え、……………え?」混乱中

「なんなんだあの集団は…」

「唐突に終わって始まったな…先に進むか」

「今あった事は全て忘れるように」

「まあ記録に撮ってるから見ることになるけどね…」

「編集の力と言うものを知っているかブレイズ」

「あー…なかった事にするんだ、そっかあ…」

そして大喧嘩している連中を越え先に進むロドス、その先の何もな  
い広場の真ん中に視線を向ける

「熊」

「真つ白」チクチク

「……ロドス」

「ス…スですか…えーとなんも出てこねえや」チクチ…

「違う、ロドスが、来たぞ」

「あ、やつべ」パァン

次の瞬間目の前が真つ暗になった

「！………？」

がすぐにまた見えるようになり広場には

「やあどおも、久しぶりドクター君達、サンドイッチ食べる？」

「先程ぶりです」

シエーヴルとアネモスが敷き物の上でサンドイッチを食べていた

「…今沢山の人と大きな人が居「気のせいだよ」むぐ!？」

「私にもそむぐ…」

「何か見えたんならきつと幻覚でしょう」

「いや「サンドイッチ（必殺技）」ングツ…」

「ケルシー先生にも容赦なく…」

「うさぎの社長さんもいかが？」

「………いただきます」

「はいーパンどうぞ、ウチ式で自分で挟むの決めてくれ人参がすごい  
勢いで無くなってるのはごめん、一人めっちゃ食うから」

「あ、わ、分かりました…どれを挟みましよう…悩みます」

「私のおすすめはこの卵のやつです甘くて美味しいですよ」

「まあ自由に選んで下さいなパンもまだ作ってるんで」

「作りたてなのか…」

「今作ってます………クロワッサンとかも作ります？」

「作れるのか…」

「もう料理屋になった方がいいと思います、ハムツ…美味しい」

「そんな幣取れるような物は作れませんのでねえ…」

「……報告通りの人物だな」

「え、なんです、私そんな悪い事…してますねうん、そこにいるチェー  
ンソーさん殴りましたねはい、ごめんなさい」

「あはは…痛くはないんだけど、メンタルがね…」

「でもワンゲージ削れたじゃないっすか」

「……………二ゲージ目も手加減されてたって聞いて「あ、ソーセイジとか入  
りますか？マスタードとかケチャップもありますし、チリソースとか  
もありますよ」 誤魔化したよね、ねえ、今誤魔化したよね!!」

「まあまあ、ほらビールでもどうぞ」

ガツ…ゴキユゴキユゴキユ…

「ぶはあ、……美味しいなあ!!」やけくそ

「少し前の私見てるみたいだあ…」

「ブレイズ、今は作戦途中だ、そして控えろとも言った筈だが？」

「あ、」

「減給だ」

「そんなあ…」

「まあ元気出して」ビール注ぎ

「そう言いながら飲ませようとするのやめてね？」

「アツハツハ、弄りやす」

「それはどう言う事かなあ？ちよつと話し合おうか」

「お客様そういう事はちよつと困ります…」 距離取り

「待ってよ、コレ私が悪いの!?!被害者だよね!?!ちよつと誰か、誰か何か  
いってよーまっ——

次回 K「……………ここで何があった」C「な〴〵も〴〵か〴〵つ〴〵  
た〴〵」全身真っ赤

K「どこの剣士だ」 D「一瞬で血糊塗れになれる技術…」

## 39話

### とある広場

「んー…このみそしる？だっけ美味しいね」ズズツ

「知り合いの所のお味噌使ってるんで、そう言ってもらったら嬉しいですねえ今度手紙でも書こうかなあ…」

「でも主人手紙出すの下手ですよ」

「そうなんだよねえ…何初め書いたらいいかとか色々分らない？私の文章力とかが無いだけ？そうか…そういう事か」

「自問自答で解決するな」

「自問自答は得意分野です」

「自問自答が得意とは一体…」

「考えたら終わり、で、皆さまはこの後先進むんでしょう？気をつけてー」

「…：…待て、その前に聞きたい事がある」

「ヲ？」

「ここで何があった？」

「何もなかったですね」

「そこまでハッキリ嘘つかれると本当に何もなかったのか勘違いする」

「もつと迫真的に言ったほうがいいですかい？そうだなあ…なにえほ、まっゲホゲホ、喉辛いちよつと待っててあゝ…」

「のど飴どうぞ」

「ありがと「ついでにサイダーを流し込み…」最悪の組み合わせじゃまいか」

「のど飴舐めてるので大丈夫でしょう」

「そんな万能だったのか（純粹）」

「そうですそうです（適當）」

「やめろ、悪化する」

「ドクターストップ入りまーす」

「追加注文できますか？」

「……………この二人はなんだ？」

「不死(確定)旅人のシェーヴルとその…前は馬で気づいたら人になつた従者(?)のアニメス」

「聞いてもよく分からないな、……報告では心臓を貫かれようと灰になろうが蘇ると言つたとあつたな」

「最近身体凍つて粉々にされました」

「え」

「まあそれは置いといてスコーンありますけど食べます？紅茶はないけど」

「もらいます」

「即答つすね…はいどうぞ、それよりその後ろのなんすかめっちゃ重そう」

「あれすごい重かつたですよ主人」

「やっぱり？もしかしてあの部分にあるちよつとしたへこみはアニメッサン？」

「さあ…分かりませんねもしかしたらグー君かキー君かも知れませんが」

「この子の相手あの二人してたんか、頑張つたなあ」

「珍しく見てなかつたんですね主人」

「…色々あつて紙飛ばして見る体力なくてねえ、歳とつたからねえ…」

——「ドサツ」

「え、どうした？」

「……………死ん「おはよう御座います(ガバツ)」寝てたの？」

「ちよつと社長さんと少女はちよつと気を…ゴブツ」パチツ

Cの着けている仮面の端から赤い液体が流れ出す

「……………何回目だ？その吐血は、血がないからだろう？さっきの気絶は」「ドクター…今どうなっているんですか？Cさんの姿と声が見えませんそして…ケルシー先生は何を？何か…不思議な曲が聞こえて何を言っているのか」

「こつちも同じ…突然姿が消えました、ただ…そこに何か…」

「…二人に何をした？」

「ただ私の姿と関する事が聞こえなくしたただけですよ、他の普通の会話は聞こえます、見慣れてるかも知れませんがあんな見せたくないですし血とか」

そんな会話をしている間に服に付いていた血が消えていく

「主人、色々仕込み過ぎです、身体が悲鳴あげてるじゃないですか」

「大丈夫大丈夫、龍門方の術式は何個かももう解除してるし、もう少しすればいつも通り動ける」ガサゴソ

「だからと言って」

「大丈夫、私は死なない、それと約束もありますから色々言うのは後にしてくれ、……OKアネモス？」パカツ……

「……………分かりました、後で覚悟しておいて下さい」

「後からが怖いっすねえ……」ゴクツ

「………今飲んだのは？」

「んー？エネルギーを一気に回復できる薬です………うっえニツガア……よく効く薬とかってなんでこんな苦いんでしょ……うっげえ……とりあえずまあ行きますかあよっしめまいも何もかも取れた、ああそういうえばドクター君」

「なんだ？」

「コレさっき拾ったコレどーぞ」

「……これは？」

「さあ……なんか止める鍵か何かじゃないですか？ブリッジの方に行くならもつといた方がいいかもです多分」

「……貰っておく」

「さて、と、すいませんがちよつと作るものあるんで、先に進みたいのならどうぞ、また会えたら会いましょう」

「……シエーヴルさん、一つ話が……」

「……はい？はあ……確かに今無職で……」

場所変わり ロドス艦内

「ふ、ぐう……！」……ツキンガード!!

「もう少しだ……もう少しでBOSS倒せるぞ！頑張れフロストノ



「ヴァー！」

「もうちよつとです、頑張れ姐さん！」

「ゲームだからと…はあ、舐めていた、私は馬鹿か…はあ、はあ、…グツ、スクワットがこんなにもキツく感じるとはなっ！」

「運動してるつとかなり感じるゲームだからな…戦闘とかとまた違って楽しく、そして効率よく運動できるからな、疲れ方が違うんだ…」

「……無理はするな、水分も、ちゃんと取れ」

「ああ分かってるパ…パトリオット!?!」

「………静かに、外の他の者に、気づかれるそして、…パトリオットは死んだ」

「………は？いや目の前に…」

「パトリオットは、怪物は死んだ、ここに居るのは、………ただの頑固者な、男だけだ、………そう言う、設定だ」

「設定？設定と言ったな？かなり無理矢理だと自分で思っているな？あれだろう、Cだろう？そんな適当に色々したのはCだろう？なに

「落ち着け、エレーナ…我が、娘」え、んな、………すまない」

「色々、変わったか？………何があつた？」

「………私とCは、戦った…戦いと言えるか、はわからないが」

ガ、ツ!!!

「ツ!!」グツ…

「はいさ」ゴツ…バギイ!

盾を砕かれる

「…ま、だだ」ブンツ

目の前の男に武器を振るう……目の前の男の身体は半分に切り裂かれるが

「よっ」ガツ……ゴギツ!

傷は即座に修復され、腕を折られる、………源石による修復は行われないだが、無理矢理腕を動かし目の前の男に抵抗をする

「ほんつと凄い執念…執念？いやなんだろうかね…まあいいか」ガ  
シツ

…止まってはいけない、私は、進まねばならない、私は……—  
目の前が真っ白になる、………どうなっている？私は…死んだのか  
？、………まだだ、まだ私は死んではないまだだ！

「………さよなら、パトリオット、次は娘さんとちゃんと遊んであげま  
しょう」

まだ——………

………？私は…どうなった？………負けた、か？

…起きて…貴方には…まだ…

………この声は…

…起きて、まだ、あの子が…

………あの子、………ああ…だが私に…そんな資格など…

………そんな事言わないで、早く、

何かに背中を押される…次には手を引かれるような感触が伝わる

…

…待て、待ってくれ、私は…私は!!

「………待て!!……」

「あ、おはよう御座います…おはようでいいのかね…まあいいや、どう  
です？気分」

「………どういう事だ？生かしたのか？」

「いえ？キツチリ殺しましたよ？心臓大つきいつすね」

「………ならば何故生きている」

「そりやそうでしょう、生き返らせたんですから」

「………なに？」

「死人を操るアーツや儀式やは数あれど、なんも後遺症もなく代償  
もなく生き返らせる………そんな夢みたいなものあるわけない…が  
あるんですよ、ええ夢みたいな物があ、普通に色々知られたらやばい  
やつなんで内密に」

「何故それを「使ったかですか？そりやあもう簡単、まだ貴方には子がいる」……………」

「私作戦やら色々考えるの苦手で…、そもそも生存させる為に色々やってるのに殺したら意味ないじゃないですかやだー……………まあ使いたくなかった手段ですけど、あーヤダヤダ、あんな薬どしてできちゃったんだろ……………まあそんな事は置いておきまして、ここでパトリオットとか言う怪物は伝説になったわけですが、どうします？」  
「……………終わるわ」終わったんですよ、貴方の戦いは理不尽な化け物に自己満足の結果の為だけに終わらせられたんですよ貴方は、こう言えば貴方は被害者ですねえ、私は加害者いっすね悪役にはバッチリの性格してる」

「まあ、納得できなくても貴方には納得してもらいます、……………のんびり人の成長を見て、あの人たちの変えていく未来を見ましよう、きつと変えてくれますよ、色々と」

「……………C、お前も、かなりの、頑固者だな」

「いえいえ、貴方に比べたら全然ですよ、新しい名前でも考えといてください、あ、ちよつと失敬」スツ…

「……………なんだ？」

「いえ、ただ少し、貴方の身体に入り込みすぎている石を取っただけです」

「……………まだ、生きると、言っているのか」

「後100年は生きて下さいよ、私が暇になりますから……………まあ冗談ですよ、孫でも見てから死んで下さい……………すいません、ちよつと疲れたんでちよつと、人くるまで休憩、信号弾は撃ったんで、ちよつと……………しりとりでもしますか（唐突）」

「……………好きにすればいいや」

「サークル」

「……………ルビー」

「…省略して話せば、こうだ、無理矢理に、納得…従わされた」

「アイツは…帰ってきたら口に発射口突っ込んで撃ちまくってやる」

「氷像では済まさない…更に、長い苦しみを与えて…」

「ついて行きます姐さん」

「大尉、我々もCに…」

「…Cから、伝言だ、」

『?』

「また、皆で、…海に、…色々な場所へ遊びに行こう」

「…遊ぶ事しか頭に無いのかアレは」

「色々やはり変わっている、まあしかし、そうだな」

「また、集まる事ができたのなら、次は…」

「…父、さん?…一緒にゲームしないか?雪合戦でもいい」

「…やろう、負けはしない」

「ああ…フロストノヴァがこのボス倒したらな」

「クツ、！忘れていなかったか…しようがない、全力を出そう!」ヒュ

オオ…

「姐さん、アーツが」

「私達は、大丈夫、だが」

「さつむ…」カチ…

「す、すまない、スカルシユレットダー」

「き、きにするな」

「……………どうですか?」

「いやどうもこうも…私みたいな変な奴はちよつと医学知識も…足の関節外れるぐらい引っ張ってるぐらいに、なんの利益も……」

「いえ、ですから先程言った通り、シエーヴルさんの知識などは……」

「難航してるな」

「うちの主人は大体めんどくさいので」

「……………」ぶつぶつ

「け、ケルシーの方はずっと何言ってるのかな、さっきの薬のやつ少し

見て試してからああだけど…」  
「わかりません…甘くて美味しい…」 飴もらった

## 40話

「はあ…色々大変なんすね」

「貴様に分かるものか！」

「ほう、私にそんな口調で言える度胸があるのかドクター君？」

「ごめんなさい」

「あ、こつちもデカイ態度で言っつて申し訳ない」

「こちらこそ、ヘッヘッヘ」

「いやいやこちらこそ、ハッハッハ」

「ドクターとCさん…短時間であんなに仲良く…？」

「何か似ている所があるのだろう」

「つまりどつちも変人だと言う」

「それは…：…あんまり否定できないかな」

「少しは否定してくれないかブレイズ」

「私は変人つて事は自分でも否定できないからなあ…アネモツサンも変人として巻き込むからな」

「こつちに飛び火させないで下さい主人」

「ならばこつちはブレイズを…!!」

「そこで張り合わないで下さいドクター」

「いやあ愉快な所なようで、最初の選択が違えば最初ここ居たんかねえ…」

「正直来るな」

「本当なんか緑さ…：…いやケルシー先生？に嫌われてます？」

「気のせいだ、気にするな」

「あ、はい」

「しかし…まさかあそこでいきなり勧誘するとは、そちらの社長はかなり面白い方ですね」

「本当いきなりやったからびつくりしたわあ…私一応敵で無職だったのに履歴書とかも判子もなんもないのにいきなり職場決まったよやったね！ちくしょう!!」

「涙拭いて下さい主人、どうせまた旅に出たとしても私と他の人がつ

いて行きますから一人で旅にはいけませんよ」

「一人：何処か静かな森でひっそりと暮らしたい：そして時々人里降りて発展を見てまた帰りたい…」

「無理ですね」

「諦めてなるものか：なるものか！」

「勧誘は迷惑だったか？」

「うーん……………まあ私みたいのの知識が役に立つんやったら……………やり……………ます…」 ドロオ

「溶けてる…!？」

「と言うかロドスってほんとに製薬会社ですか？多分軍事企業かなんかだと思うんです」 二頭身

「製薬会社です……………身体どうなってるんですか？」

「こうなってます、と言うか社長さんもあのスー…ツ？を着たらこんな感じでしょう」

「……………そうなんですか？」

「……………ちよつと大きいから怖いけど…そんな感じかな」

「ちよつとデカかったすからねえ」

『女性に大きいなんて言わないで下さい』

「すいません」

『私は許しましょう…だがマスターが許すかは分かりませんよ？』  
「え？」

「変身するのか？」

「そういえば私見た事ないなあ…よし、ばつちこいやりましょう」

「主人、私そのスーツより背高いですよ？」

「アネモツサンはほら、その身長だからカツコいいから、それよか何故張り合おうとした？」

「そうですか…なんとなくです」

「……………スーツ？」

「…ああそういえば二人は知らなかったね…」

「待って下さい皆さん、何故変…身？をする流れになつて？」

「わた…いやぼく？うーん…わたしししやちようさんのへんしんみたく

い」裏声

「それがしもー」裏声

「主人……」

「ドクター……?」

「一思いに殺してくれ」

「上と同じく」

「馬鹿か?」

「もう婿に行けない……」

「似てるなあ……」

「まあそんな話は忘れまして、社長のスーツと戦いたいってのは本当なんですアレが作ったのなら多分……まだ解放されてない機能があるはず、てことでその機能を引き出しましょう、あ、時間がない? ちよいとお待ちを……はい」ポイツ

「え、わっ!」ビカア

突然鏡を渡される混乱中のアーミヤ、次に目にした光景は

「………また、ですかああ?!?!」ヒュン

「安心してくれ、今回は……私も居るいや、怖いな! 凄い高さだ!」

「ドクター!?!……レダさん!!」

『装着開始します』

その頃地上

「凄いなあ……あんな風に装着するんかかっこ……いや見た目可愛いめっちゃもふもふしてそう」

「……なんだ、あれは」

「私にも分かりませんよ」

「それより何故あの高さから落としましたんです?」

「………」

「どうしました?」

「社長の座標変えるの……忘れてた」

「………一ヶ月、給料なし」

「はい、お受けいたします」

数分後



「……Cさん？」

「座標変えるの忘れてました、はい」

「先程も同じ事をおっしゃって？」

「ましたねはい」

「何か：言う事はありますか？」

「申し訳ありませんでした」

『戦闘開始します』グンツ

「あ、ちがい…」

ゴオン…

「……頭突きってあんた」フラア

『頭部パーツに軽度の損害』

「石頭ですか…？」

「カルシウム摺ってますから骨強いんですよ、後仮面してるんで」

『それでは説明できない程の強度です——自動修復機能のロック解除、修復します』

「あ、新しい機能が…本当にあつたんですね…それより、この場所は…？フロストノヴァさんの時と同じ場所…ですよね？」

「YES、と、言ってもまた色々空間弄りまして…ここでの一時間は向こうの1秒になってます」

「……本当に、何者なんですか？貴方からは…今も何も感じません」  
「そんな簡単に人に色々見せる訳にはいきませんよ、人って怖いからねー、さっやりますか、ロック項目は？」

『…特殊攻撃 ジェット、翻訳そして…』

「はい」

『分裂機能、変形機能です』

「分裂…それはこう…首が」ポーン！

「うわっ」

「と、なる感じの？」

『そうですね』

「実践しないで下さい！」

「宴会か何かでやったら面白そうだねそれ！どうやってやるの？」

「あのとある一箇所に刺したら人形が飛ぶおもちゃあるじゃないですか」

「あるね」

「それと同じです」

「ああなるほどね、…こんな感じで…できないね、もうちよつと練習してみよ」

「慣れたら首外しながら喋れますよ」首無し

「マジックでこういったのがありますね」首持ちアネモス

「何故当たり前のようにできる」

「やろうと思えばなんとかできるんですよ、まあちよつと私の場合特殊らしいですけど」

『分裂機能のロックを解除』

「え、何が鍵で？」ゴンツ、ゴンツゴンツ

『先程言っていたのおもちゃのデータを元に』

「役に立ったようで何より」

『頭部をパージしますか？』

「は、はい」

バシユン！

そんな音と共にレダスーツの頭部に線が入る、そして両手で頭部を持ち上げる

「ふー…中は暑さを感じないので、あまり違和感は…皆さん？何故目を逸らして？」

「いや…なんだかな」

「二（凄い、凄く着ぐるみ感が増す…）」

「？」

「ああ所で変形とかって？」

『…兵装仕様にしますか？』

「お願いします」

『…承認、ニンジン フェイスガード』

すると取り外した頭部パーツの耳が勢いよく空中に射出される  
「飛んだなあ」

そして長く、鋭き二つの耳は内側を隠すようにピッタリと合わさり少し丸いシルエットの物体になり：付け根部分からは緑の鍔と持ち手が飛び出してくる

「っ!!」ガシッ…ブオン…

そして落ちてきたその剣をアーミヤが持つと…刀身はオレンジに染まる

『耳の無くなった頭部パーツは盾としてお使い下さい、強度は問題ありません』

「はえーすっごい、オレンジ色の剣…しかも名前はニンジン、遊び心満載だなあ」

『刀身は…色々説明は面倒なので省きますが、触ればなんでも焼き切る代物です、扱いにはお気をつけを』

「面倒つていいましたよこのAI、いい性格してるねえ」

「本当に戦闘向きの武器だなただ…」

「見た目がね…凄い」

『他パーツの変形を行います』ガシヤ…

「え、」

数分後

「わあ、凄い何アレ新手の騎士かなにか？」

「周りに飛んでいる…ドローン？強そうだな」

「かっこいいです、」

「その背中のマントかっこいいね！」

今ドクター達の目の前に立つのは…背中に青いマント（元はレダコート）周りには二機の支援ドローン（手）が飛び身体は足先まで明るいブラウンに輝く鎧（胴体足）に身を包んだオレンジ色の剣（耳）と盾（顔）を持つアーミヤの姿だった

「なんだか…力が湧いてくるようです…」

『アーツの威力が少し下がりますが…身体能力を大幅にアップし近接での戦闘に特化した兵装です、短時間ですが少しの空中での作業も行えます』

「いやあ…グーニ君達とやってる時にこれ解放されてなくてよかつ

たあ」

「ええ、正面突破でやられていましたね」

「……………じゃ試運転がてらやりますか、大丈夫、時間はたっぷりあります、この先の為に慣れていきましょ、さ、ハリーハリー」剣盾持ち

「…行きます！」チャ…ダツ！

『サポートはお任せ下さい』

## 41話

「どんな口調だったか流れだったか覚えてナイヨ！ナイアツつうい  
!!」ジユウウ：  
本当に申し訳ない

よく分からない事を言ったCにアーミヤの持つニンジンが腕をス  
パツ：とはいかず刃の部分ではなく面の部分で殴打されあたりに焼  
ける音が響き渡る

「すいません：何故か反射的に斬ってしまつて…」

「切ると言うか面の部分で殴りましたね」

「肉の焼けるいい匂いがしたな」

「タレでお召し上がり下さい」

「主人、申し訳ありませんが塩派です」パラパラ

「そつか：塩で髪がもうガツシガシよ」

「終わったらシャワーですね」

「フードしていてガシガシも何もないだろう…」

「それもそうつすね、いやあしかし：社長強かった：めっちゃ剣熱い  
もんほら見てよ盾も焦げこ：いや少し溶けてるわこれ手と融合し  
ちやつてるよ熱いと思ったよ」ベリベリッ！

「これも全てレダさんのおかげです：ちゃんと当てたのは先程の一  
撃だけで後は避けられるか防がれましたから……：無理矢理剥がし  
ませんでしたか!？」

「気のせいですよ……：まだちよつとついでる……」カリカリ：シヤラ  
ン

「斬り落とそうとするのはやめろ」

「あ、はい先生」

「……：前から：普段からこんな解決方を実行する人なんですか？」

「自分の身体はどうでもいいらしいですよ主人は」

「適当に扱い過ぎだな……」

「はい、なので普段は思い切り蹴飛ばしたり殴り飛ばしてやめさせま  
す、毎回防がれるか投げられますが」

「……：自称従者だよな？」



「おそらく…ロドスに来る後二人決めているのかと…」

「そうなのか？」

「はい、先程、グーとキーさんそして後二人程を入れる話を……アネモスさんとしまして……もちろん、アネモスさんも来ます」

「何という契約をしたんだ」

「アネモスさん曰く、Cさんを入社させる場合…いた方がとても良いという話でして…話を詳しく聞くと少し、いやかなりの脱走癖があるそうぞ」

「かなりの脱走癖…」

「はい、レユニオンに所属してから遠くへ旅へ出ようとした事が数十…何度か消えた事もあったそうですがその際の脱走は少し精神的に落ち込んでいたレユニオン兵などを連れて遊びに行っていたそうぞ…」

「……そんな時間が向こうに？」

「さっきの事を忘れたか？」

「ああ…そうか…つまりCのレユニオンでの役割は精神面などのカウンセラー、のような役割か」

「そして拠点の施設も充実させ飲食住の性能も向上つと…なかなか色々やってるね」ビール片手

「……ブレイズ？」

「あ、えつとお…あははっは？」

「……」

「うっ…だつてさあ！凄く楽しい人達なんだよ！あんな雰囲気です誘われたらもう……飲むしかないじゃんさ！」

「……」

「せめて何か言つてよ！ね「獲つたどおおお!!!」

「声でかいなあマルー君は鼓膜破れたよ」

「それは良かったです(?)」

「どうもありがとう(?)」

「だからあれほど脳死で深夜に書くなど…」

「んで、後は…グーニース君か、……うちの前衛の特に出る二人

じゃないか固定メンバーじゃまいか」

「ですね」

「どんな人居るのかなあ！楽しみだなあ！」

「マルー君どしたん？」

「さつき隊長が飲んでたお酒を二本ぐくぐくと」

「少し度数高いからなあ………軽く30は瓶ころがつってるけどこれは？」

「一つは自分です、後はアディアが飲んでますね」

「鬼並みじゃねえか」

「隊長ほどじゃあくないですよお？」

「いつもその喋り方の理由が分かった気がする」

まあなんやかんやあつてドクター達とアーミヤが分かれまして

「うーむ……あゝあゝ」ググウー

「(……こちらに背を向けて……油断しすぎじゃないか？こいつ)」

「………その人」

「！、なんだ？」

「はなっ——ほら来たよ！やっぱり!!」ドンツ！

ギイイイイン!!!

「はっ……なんだ！はなっ……!!?お、お前脚!!」

「ダイジョーブダイジョーブネ、ほらはええてえええ!!」グンツ!!

「うおおああ!!?」

「ちよつとぐらい手加減してくれても………え？無理？嘘お……」

「なにが起こってるってんだよ！何と戦ってるんだ！」

「こちらからも何も見えません！」

「この人お願いしまーす！」ポイー………サクツン

「うっ……!!大丈夫ですか!？」

「だ、いじょうぶ、身体が半分に分れただっ………けっ!!」ギリイイン

ドツ……ガアアアアアアア!!

何か地面を抉りながら吹き飛ばされていく

「あれはなんですか!？」



「うーん、実はねえ…さつき色々死者やばい事生しちゃって…それでちよつと…色々…ね？」

「はい！何も分かりませんね！」

「うん！私説明下手なんだ！ごめ——

上半身が消えた

「話の途中でやるのやめてくれませんか？」ゴロツ…

「首イ!?!」ゲシツ！

「蹴つちやったあ…まあ色々短くしていうと『お前何やっとなねん、それこじややつちやいけん事やぞ』って事で消しに来てる」

「もつとわからなくなりました！」

「怒られてるって事でもう無理やり納得して下さいー！」

「何かできる事はありますか!?!」

「ない！」

「ツ!!そんなはつきり!?!」

「あ、フェリーンの人これ鳴らしてくれませんか？」

「……………」カーン！

「死合開始ダア！」ドガツ！

「とは言ったものの強いんよなあ、……………そういえばこれ何回目でし（パン）——でしたけ戦うの？」

『13回』

「あらそんなに」ゴンツ！

『いまだ殺せず、そろそろ面倒ね貴方』ザシユ

「なら来なければ良いのでは？」

『死ぬはずの運命を捻じ曲げてその他多数の改変普通は完全に存在抹消、でもできない、この化け物ー』

「私はただの新人社員です」

「『それは嘘（です）』』」

「味方が居ないわ！どうしましょう！」

『死ぬがよい』

パン！

「——頭飛ばすの好きですよね」

『避けるから一部しか消せないだけだ』

「こわーい……社長くすいませんけど先へ行ってくださいーい、これと戦ってからいきまーす」

「え、は……分かりました、後から合流しましょう……行きましょう！」

「気をつけて〜」

『気をつけてな』

「姿も何も見えてませんよ」

『知ってるぞ？それで、いつもの問いをするが貴様はなんだ？決定していたはずの運命を捻じ曲げる事ができ、我々でも消す事ができず、そして長い時を生きながら狂わない……貴様はなんだ？』

「私に聞くな！」

『またその返しか……さあ私を消してくれ、ほら姿もお前にしてやるぞ？ほらハリーハリーハリー!!』

「自分に自分を殺させるなんて私にはできああ!!手が勝手に殴り続ける！なアア!!」 ゴンツッ！ゴンツッ！ゴンツッ！

一方ドクター達

「……外、騒がしくないか？」

「……今、上では戦闘中だそうだ」

「レユニオンの戦闘員は皆Cが片付けて移動させたんじゃないか？」

「正体不明の敵とアレが交戦中、身体を全て消し飛ばされながらも戦闘を続行しアーミヤ達は先へと進んでいる」

「理解が追いつかない事しかないんだが、なんだ？身体が消しとばされながら戦闘を続行？」

「私に聞くな」

「そうか……」

次回に続……いたらいいなあ……（おい）